

士桜のお話

黒宮魚

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

士郎と桜が魔力供給するお話。

pixiv様にて一部掲載させて頂いています。

目次

血だけじゃ足りない魔力供給	1
初めての夜	35
寝起きドツキリ	83
桜の夜	106
発情バレンタイン	132
ささやかな祝福を	163
陽だまりの下で	192
月と桜とアルコール	215
恋情と色情	241
蛇と花	268
昼休みの情事	299
茜色の教室で	311

或る夜の一幕
慰めあい

血だけじゃ足りない魔力供給

? 深夜、自室で眠っていると、部屋に近づく足音で目が覚めた。時計に目をやると午前二時。大して眠ってもいない。だが、足音が桜のものだと気付き、そんな事はどうでもよくなった。

「桜」

? 声をかけると遠慮がちに襖を開け、桜が入ってきた。

「あの……先輩……」

? 桜は言いにくそうに目を伏せて腕を握りしめている。

? 彼女が今ここに来る理由は一つ。渴いた体を癒すため。刻印虫によつて欠乏した魔力を、俺の血という形で補給するためだ。

「ああ。わかつてる。ちよつと待つてろ」

? 桜を布団の上に座るように促した後、立ち上がつて机の中を探る。確かカッターナイフがあつたはずだ。取り出したその刃を出し、自分の唇に押し当てる。ほんの少し力を入れて傷を付けた。あまり勢いはないが、しっかりと出血している。

? ——別に、唇である必要はない。血を飲ませるだけなら腕や手で充分だ。けれども

俺がそうしたの、その方が桜と触れ合えると思ったからだ。もつと深く、桜と触れたかったから。

「桜。いいぞ」

？桜の前に座ってそう言うと、彼女は少し驚いた後、

「あ……先輩、その……いいんですか……？」

？そう、おぼつかない口調で尋ねてきた。桜は俺がいきなりこんなことをしようなんて言い出したことに戸惑っている様子だ。

？それは無理もないことだった。俺たちはそういう仲間になってから日が浅いから、当然キスなんてしていない。だから、俺にも躊躇があった。

？ファーストキスをこういう形でしていいのかと。全てが終わった後にするのが正しいのではないかと。でも、今こういう時だからこそしたかった。この先、俺も桜もどうなるかわからない。もちろん、必ず桜を守ると誓ってはいる。それでも、どうしても先行きの見えないことへの不安は拭えない。

？そんな不安を打ち消すために、桜を深く感じていたい、そう思った。

「ああ、構わない。桜はイヤか？」

「いえ……そんな、ことは——」

？突然、桜の言葉が途切れた。

「桜……………」

？桜の顔を見ると、どこか虚ろな目をしていた。そしてその視線は俺の唇に吸い寄せられている。

「せんぱい……………」

？そのまま、桜はゆっくりと俺に近づいてくる。四つん這いになって、少しずつ俺との距離を詰めていく。それは己の本能に従う獣のようでありながら、妖麗で優美だ。それによって一瞬で変化した部屋の空気に、俺はただ黙って桜を待つことしかできない。

「――」

？もう、桜の顔は俺の目の前にあつた。その手が、頬に触れる。そして、桜の顔がだんだんと近づいてきて、唇と唇の間の距離が短くなっていく。

？そこで我慢が効かなくなって、桜をその身体ごと抱き寄せた。

「ん……………」

？それと同時に、唇が重なった。深くはない、互いに触れているだけの口づけ。そこからこくりこくりと喉を鳴らして血を吸われる。たったそれだけのことなのに、すぐにあの快感が襲ってきた。傷の痛みなんかすぐに消えた。それほどに気持ちが悪かった。

「ん……………んう……………」

？初めて触れた桜の唇。温かく、適度に潤ったそれは、俺の唇を溶かしてしまいかね

ない程の触感だった。

？傷口が触れているから、ということもあるのだろう。本来、痛みを感じるはずのそれは、桜の唇の感覚により、快感をより鋭敏に感じとるものへと変化している。

「んっ、ん……」

？ただ吸っているだけの桜だったが、ふと舌で傷口を舐めてきた。そのせいで頭の中がぐらりと揺れる。視界が歪んで、思わず目を閉じてしまう。でもそうやって五感を一つ消したせいで、桜の感触がより強く伝わってきた。

？柔らかな唇、濃い桜の香り、時折漏れる小さな声。その全てが俺の理性を壊していく。

「ん……せんぱい……」

？少しずつ唇の形がわからなくなる。溶け出したチョコレートのように、どこまでが自分のもので、どこからが桜のものなのか。まるで溶け合っているかのような感覚。

？それに当てられて、体勢を崩してしまった。

「あ……」

？そのまま前のめりに倒れてしまい、桜を押し倒してしまう。思わずついた左手から痛みが走る。でも今は離れてしまった唇に気をとられて、痛みなんか気にしなかった。

「は……あ……せんぱい……」

? 血と混ざり合った唾液が糸を引いている。それが伸びきらない内に、自分から唇を押し当てた。

「んっ……」

? ほんの少しの声漏れた後、桜は再び血を吸い始めた。互いの口から唾液が漏れている事を気にもとめず、ひたすら気持ちのいいその行為に没頭する。

? 唇からとはいえ、ただ血を分けているだけだ。それなのにどこかいけないコトをしているような気持ちになる。

? 少しの背徳感と陶酔感、そして沸き上がる支配欲。桜をもっと抱き締めたい。そう。桜を壊してしまうほどに。

「ん、く……せんぱい……おいし……」

? 俺が押し倒すような姿勢にも関わらず、桜は抵抗せずに俺を受け入れて、俺の血を飲んでいいる。

? 時間の感覚が曖昧だ。この行為を始めてからどれくらいたったのか。一分か、十分か。あるいはそれ以上か。

? でもそんなことは関係ない。いつまでだつてこうしていたかった。

「ん、う……」

? 快感は唇だけでなく、全身の感覚までもぼやけさせていく。それは異常だ。でもそ

れがもっと欲しい。だからより強く唇を押し付ける。桜もそれに応えるように、口を軽く開けて俺の唇に吸い付く。

? 魔力供給と呼べたその行為は、いつの間にか唇同士の愛撫へと少しづつ変わっていき、傷口からの血は既に止まっていた。でも俺も桜も唇を離さない。もう、離せなかった。

? 唇はおろか、頭の中までもおかしくなっていた。こんな姿勢で桜とキスしているんだ。まともでいられる訳がない。このままもっと。もっと桜を味わっていたい。

? 先に足りないと言ってきたのは桜の方だったのに、今は俺の方が欲しがっている。

「ん……ふ……せん、ば……い」

? お互いに、より深く唇を求めようになっていた。俺が強く押し付ける度に、桜はそれを受け入れて、甘噛みするように吸い付く。

? 甘く、溶けるようなキスだった。桜はもう血を吸ってはいないが、快感は変わらず伝わってくる。だから、理性なんてほとんど残っていないかった。桜へのほんの少しの気遣いと、後は欲望だけ。その欲望のまま、その口内へ舌を侵入させる。

「んっ、んん……っ……い」

? 桜の身体がビクリと反応する。でも俺を拒んだりはしなかった。それどころか、もっとしてほしいと言わんばかりに口を開けてくれた。そんな桜に甘えて、桜の舌に自

分のを絡ませ、桜の感触を感じる。

？ざらついた舌、熱く湿った口内、甘い唾液。これが桜なんだと確かめるように、舌でその口を犯す。

「んっ……んちゅ……う……せん、ぱ……」

？そうやって口内を貪っていると、桜も舌を動かして、俺の口へ互いの唾液で濡れたその舌を侵入させてきた。そして、さつき俺がしたように俺の口を犯し始める。少し驚いたが、それ以上に嬉しかった。さつきまで俺ばかり桜を強く求めていたから。だから桜もこんな風に求めてくれるのが嬉しい。

？そしてその嬉しさはすぐに快感へと変わっていく。舌を犯し合う、淫らな快感へ。？それは既に、性的な意味を持った接吻だった。

？ただの粘膜同士の接触なのに、どうしてこんなに頭をおかしくする。どうして、頭の中が桜だけになっていく。でもそんな疑問はどうでもいいことだ。今は桜だけ。桜との秘め事だけ考えていればいい。

「はっ……んう……ちゅう……ふ……っ……!?ふえん、ひやつ……んちゅ……う……!」

？より激しく、情熱的になっていく行為。互いの舌は、まるで別の生き物のように互いの口内を這いまわる。それが運んでくる快楽は、さつきとは比べものにならなかつた。二枚の舌が絡まり合う度に、ぞくぞくとした感覚が背中に走り、もっとこうしてい

たくなる。

？もう歯止めなんてきかない。頭の中のリミッターは、とうの昔に外されてしまった。

？触れ合う唇、絡まる舌、擦れる身体、荒い吐息。桜の感覚全てが欲望を加速させる。これだけじゃ、キスだけじゃ足りない。今抱き締めているその身体まで、全て感じたい。「は……………つ、あ……………せんぱい……………」

？唇を離して舌を引き抜く。互いの舌の間を混ざり合った唾液が糸を引いている。それが月明かりでてらついでいやらしい。

「激しい、ですね……………先輩……………」

？肩で息をしながら、おぼろげな口調で言う桜。その名残惜しげな目が潤んでいた。彼女の言うとおおり、少し激しくし過ぎてしまったと反省する。

「わ、悪い、桜……………つい、止まらなくなっちゃって……………」

「いえ、私、とつても嬉しかったです。……………それに、私も先輩と同じで夢中になっちゃいました」

？恥ずかしそうにはにかむ桜に、俺のほうが照れてしまって、何も言えなくなってしまう。このまま、キスよりも先に進もうと思っていたのに、肝心の言葉が出てこない。

？いくら桜を欲していても、桜の気持ちを無視して何も言わずにコトに及ぼうとする

なんて論外なのに。言葉を探しても、上手い具合のものが見つからない。

「あ……えつと、ずつと押し倒したままじゃ、悪いよな」

？ 挙げ句の果てに、自分の気持ちと正反対の行動をとろうとする始末。

？ だが、密着させていた身体を離そうとしたところで、桜の両腕が俺の首のうしろに回された。

「桜……？」

「待つて、下さい……先輩……まだ離れたくないです……」

？ どんくと心臓が跳ねる。桜の表情は、確かな理性を保つてはいるが、酔ったような怪しい色を孕んでいる。

？ それは俺が見たことのない、蠱惑的な色気が感じられた。ただでさえさつきスキのキスで理性を保つのが難しくなっているのに、そんな表情で「離れたくない」なんて言われたら、自分を抑えられるかどうか危うくなってしまふ。

「先輩……私、もつと欲しいです……先輩だって、同じでしょう……？」

？ その、誘惑に近い言葉に思考が止まる。視線は桜の目に向けたまま、身体が硬直する。

「さ……さく、ら……」

「私だって、とつくに歯止めがきかなくなってるんです。……それと、その……先輩も、

興奮してるん、ですよね……？」

？見透かされてる。あんなに激しくキスをしていたのだから、そんなことは桜には筒抜けだろう。でも、それさえ理解できないほどに、俺の頭は桜に魅入られていた。

「え、なんで……桜……」

「だって……先輩のが、その……」

「え……」

？その言葉でようやく我に帰った。生殖器は隠しようもないほどに反応していた。当然、密着している桜にはずつとわかっていたのだろう。

「ごご、ごめん、桜……！夢中になってたから全然気付かなくて——！」

？慌てて離れようとするが、それを桜の両腕が拒否する。俺を逃がすまいときつちりと捕らえられていて身動きがとれない。無理矢理振りほどくことは容易いが、俺にはそんなことはできなかつた。

「先輩……先輩はイヤですか……？このまま私とするのは……」

？そのまま桜は真っ直ぐに俺を見つめて問いかける。それは消え入りそうな頼りない声だった。

？それがあまりにも痛ましくて、慌てて否定する。

「そんな訳ない。好きな女の子と——桜とするのがイヤなんて、そんなはずがない。」

……でも、桜はいいのか??こんな、流されるみたいに……」

?それが一番不安だった。桜はただ俺に合わせてくれているのかもしれないと。

?そうだとしたら桜の気持ちを無視することになってしまう。そんなことはあつてはならない。

「いいんですよ、先輩」

?しかし、桜はそんな俺の懸念なんて微塵も感じさせないような笑顔で言った。

「私は先輩が好きです。……先輩も、私を好きと言ってくれました。私はそれだけでも、とっても嬉しかったです。——でもできるなら、先輩がいいって言ってくれるなら……それを、もっと——」

?確かめ合いたい、と。そう言うその顔に、俺の心配は杞憂だったのだとすぐに確信する。

「——そっか。そんな風に思ってくれてたんだな。そんなことにも気付かなくて、ごめん」

「いいえ。そんなこと、ないです」

?その言葉を交わした後、どちらからともなく口付けをした。それはお互いが伝え合った気持ちを確かめるような優しい接吻だった。

?——そうやって、俺たちの間の遠慮や躊躇は全て消え去った。唇を離れた後、自分

の着ていたシャツを脱ぎ捨てて、さつきと同じように桜の上に覆い被さった。

「桜……服、脱がすけど、いいか……?」

「はい……どうぞ、先輩……」

? 多少の躊躇いと共に、上着のボタンを外した。そして、震えそうになる手を抑えながら、その下の服をそつとめくり上げて、その素肌をさらけ出した。

「桜……」

? その美しさに思わず見とれた。汚れなんて当然なくて、触れることを躊躇させる程のきめ細かな肌。それは部屋に差し込む薄い月明かりによく映える。

? さらに、一枚の下着に包まれた双丘。まだ全て見えていないのに、それは俺の視線を釘付けにする。桜の胸は普通よりも大きいから余計だろうか。いや、好きな女の子のだったら大ききさんか関係なしにこうなってしまふ。

「あ、あの……先輩……見てばかりじゃ、恥ずかしいです……」

? その桜の声で我に帰った。桜は恥じらうように頬を染めた、艶めかしい表情をしている。何をやってるんだ、俺は。桜にそんなことを言わせるなんてどうかしてる。

「あ……悪い、桜……キレイだから、つい……」

「せ、先輩……そんな……」

? 照れたように顔を伏せる桜に、また見とれてしまいそうになるが、それじゃあいつ

までたつてもコトが進まない。

? 下着の上から両の乳房を包む。一枚の布を隔てても、その柔らかい感触はしっかりと伝わってきて、俺の情欲をかきたててくる。その胸を揉みしだくと、双丘は容易くその形を歪める。

「あ……………んっ……………」

? 小さな声が漏れる。そこには僅かだが、確かな悦楽の色がこもっていた。そのままさらに力を入れる。掌で全体を覆ったり、両の胸を内側に寄せるようにしたりして、その乳房を揉む。

? そうやって刺激を与える度に、桜は違った反応をしてくれる。それがとても可愛らしくて、もつと悦ばせたくなる。

「や……………あ、せんば……………い……………」

? その気持ちのまま、下着を上にならずにしてその全てを外気に晒す。二つの丘の頂点に立つ、薄い桃色の乳首までもが露にされた。それを何の躊躇いもなく触る。掌で胸全体を覆いながら、その突起を指で転がすように弄ぶ。

「あっ……………は、ん……………っ、ひあ……………っ……………」

? より強くなる桜の反応。それは快感に染まった声だった。桜は与えられる快樂に身を振らせながらも、俺にその身体を委ねてくれている。

? そんな桜を深く愛するように愛撫する。桜の反応を見ながら、感じる場所を探っていく。桜は俺の愛撫に、甘い声を漏らしながら快楽を拒まずに享受している。それは淫らでありながらもとても綺麗だ。

「ふあ……んっ……せんぱい……っ、あ、ん……はあっ……きもち、いい……」

? そんな桜をもっと見たい。もっと桜に気持ちよくなつて欲しかった。

? その素肌にキスを落とす。桜は一瞬身体を震わせたが、すぐに力が抜けた。手は桜の胸に這わせたまま、その身体に何度も口付けをする。最初は軽く、そこから少しずつ強くしていく。触れるだけの接触から、ちゅう、と吸うように幾度も口付ける。

? その、軽く勃起した乳首までも。

「ひあっ……!?!ふあっ、は……んっ……!?!」

? 一際強く跳ねる桜の身体。そのまま乳首を舌で舐めて愛撫する。桜の反応はさつきとは比べものにならない程のものだった。ビクン、と何度も身体を震わせて、快楽に浸っている。

? それがとても嬉しい。俺の愛撫でこんなにも気持ちよくなつてくれていることが先ほど激しく交わっていたキスのように、乳首を口に含んで舌で舐め回す。

「あつ、ん、んっ……!?!は、ん……っ、ふあ……っ、は、せん、ぱい……っ……!?!それ、いい、です……!?!」

？桜はそれが気に入ったようだった。淫らな嬌声をあげながら、身体をくねらせて反応する。さらに、桜は無意識でしているのかもしれないが、乳首を俺の口に押し当てるようにその身体を動かしていた。そうやってますます桜の快感が高まっていく。それは俺にもはつきりとわかることだった。

？そしてそんな桜を見ているうちに、嗜虐心のようなものが俺の中に芽生え始めた。もつと桜を乱れさせたい。狂わせてしまいたい、と。もう、その欲望を遮るものなどありはしない。

？口に含んだ乳首を強く吸い上げる。遠慮なんかなかった。ただ、桜が欲しかった。

「ふああっ!?せんばいっ……それ、はっ……!?だめ……っ……ああ……っ、んあっ、はあ……っ……っ……」

？そう言いつつも、桜は嫌がる素振りを見せない。それどころか、その両腕で俺を抱き締めて、強く密着させてくる。桜がそうやってしている間も、俺は桜への愛撫を止めない。きゆうう、と強く吸うのを続けた後、焦らすように舌先だけでもどかしい刺激を与える。それを何度も繰り返し返して桜の反応と感触を楽しんだ。

？そして、俺の頭は未だ触れていない場所のコトを考え始める。桜の秘部。そこを愛撫して、桜を何も考えられなくなるほどに狂わせたいと思った。

「桜……下も……」

? 胸から口を離して桜に確認する。桜の一番大事な場所まで、触れていいのかを。

? しかし桜はすぐには答えずに、恥ずかしげに視線を泳がせる。そして、意を決したように俺を見て、頬を染めて言った。

「あの……さつきから私だけ気持ちよくしてもらってるから……今度は私もしてあげたい、です……」

? それは、一緒にといいことだろうか。その提案はとっても嬉しいのだが、どうするのがいいだろう。

? このままの体勢では桜が少しやりにくいだろうし、いつそのこと桜に俺の上に乗ってもらって——

「あ……桜……っ……」

? そうやって考えてる内に桜の指が俺の股間に触れていた。

「ん……先輩の、こんなに……」

? 服の上からとはいえ、桜とキスをしていたときから既に勃起していたそれを触られ、背中にぞくぞくとした電流が走る。どんな体勢がいいかとか、そんな事はその快感で吹っ飛んでしまった。

「ちよ、ちよつと待ってくれ、桜……?!? ……えっと、服、全部脱ぐから……」

「あ……そ、そうですよね。ごめんなさい、私……」

? 真つ赤になつた顔を手で覆う桜に、俺も同じように赤面してしまふ。それを感じかける前に、桜から離れて自分の服を脱ぐ。

「桜、全部脱ぎ終わつ、た——」

? 振り向くと、そこには俺と同じように一糸纏わぬ姿になつた桜が座つていた。完全な裸になつたその姿に、俺は顔を背けるでも、押し倒すでもなく、ただ桜を見つめてしまった。

「桜……綺麗だ、凄く……」

? その言葉は自然と口から零れていた。それは、俺が本当に桜を美しいと思つたからだろう。

「あ……先輩……う、嬉しいです……」

? 先程よりもさらに顔を赤くする桜。それが堪らなくいとおしくて、抱き寄せてキスをした。桜に抵抗はなく、俺の頬に両手をそえ、彼女のほうからも深く唇を重ねてくれた。

? そのまましばらく唇を求め合つた。先のような貪るようなものではなく、ただ互いに触れ合いたいが為のもの。

? 口付けを交わしたまま、俺たちは布団の上に身体を倒した。そしてお互いの手を身体に這わせる。

? 最初は胸から。ゆっくりと、快感を与えすぎないように撫でる。それぐらいがちょうど良かった。俺たちにとっては触れて、触れられているだけで充分すぎるほどだから。

? そして、そこから少しずつ手を下へと下ろしてゆく。本当に、ただ触れているだけに近い刺激なのに、背中にぞくぞくとした感触が走る。この先にある快楽を予想してだろうか。

? でも焦りすぎないように。無闇に焦らす必要もないけれど、官能的な意味を伴わない接触も心地良かったから。

? でも、少しずつ手は下へ下へと動いている。その接触ももうじき終わりだ。

? そして、互いの指先が「そこ」へ触れた。

「ん……あつ……せんばい……つ……」

「う、あ……つ、さくらつ……」

? それだけでどうにかなってしまいそうだった。合わせていた唇もすぐに離れ、互いに嬌声を上げた。

? たかが指先なのだから快感なんて僅かだ。そもそも快感と呼べるほどのものかどうかも怪しい。それなのに、俺たちは過剰なほどに反応した。

? きつと互いのものに触れたという事実が、そうまでさせたのだろう。愛しい相手の

秘部へ触れ、触れられたことが。

？でも当然、それだけじゃ止まらない。さらに手を下ろして、自由に撫でまわせるほどの場所に到達した。

？そこへ至った瞬間、俺たちの中のかなにかが外れた。さつきまでの優しく触れるだけの接触は終わり、快樂を与え合う、いやらしい愛撫が始まった。

？桜の秘裂に這わせた指に湿った感触が伝わってくる。俺のものが勃起していたように、桜もまた、とつくにそこを反応させていた。それが俺よりも先か後かは知らないが、桜もこうやって興奮してくれていたことが嬉しかった。

？割れ目をなぞるように優しく触る。そのまま少しの力を入れると、指は容易く桜の中に入っていく。中は表面よりもずっと濡れていて、指を動かすと淫らな水音をたてながらきつく締め付けてくる。

？それとは反対に、桜の手は優しく俺のものを包み、上下にしごいてくる。指の一本一本がこすれる度に、違った形の快樂がもたらされる。その快樂で、肉棒にさらに血が集まっていく。

「あ……………ん……………はあつ……………あ……………せんぱいの……………おつきくなつた……………」

？桜からの刺激はそれほど激しいものじゃない。でも桜と互いに愛撫をしていると思うと、快樂は何倍にも膨れ上がった。さつきみたいに、桜を一方的にせめて気持ちよ

くするのも悪くなかったが、二人で一緒に快楽を共有するのは極上の悦楽だった。

? そのせいで、先端から先走りの汁が漏れ出す。桜はそれを自分の手で肉棒全体に絡ませてきた。それがいやらしい水音をたてる。

? 部屋に響いているのは互いの荒い吐息と、湿った音だけ。それだけだ。でも俺たちの与え合っている快楽は高まっていく一方で、限界も少しずつ近づいてくる。

「は……………くっ……………さくら……………」

「せんばい……………あ……………んんっ……………は……………っ……………」

? 熱くなつていく互いの声。このまま続けたらすぐ絶頂に至つてしまう。俺も、桜も。できるならすぐにでもそうなつてしまいたい。桜と一緒にいつてしまいたい。

? でもまだ。まだ桜と繋がつてない。愛撫する手を止めて、桜の中から指を引き抜く。桜も察してくれたようで、俺のものから手を離れた。

? 桜は自分から布団の上に仰向けになり、両足を開いて俺を受け入れる準備をしてくれた。そんな桜に導かれるように、その上に身体を重ねた。

「桜……………」

「先輩……………」

? そのまま、肉棒を桜の花びらにあてがう。先端が入り口に触れてぬちゃりと音をたてる。それだけでもぞつとするほどの快感。

「ん……っ……」

? ビクリと震える体。腰を動かして、ゆっくりと挿入していく。お互いに濡れているから、抵抗はほとんどない。

「は……あん……せんぱいの……入って、きて、るっ……」

? 亀頭まで飲み込んだ桜の膣は、ぎちぎちとそれを締め付ける。うめき声すら上げられないほどの快楽に、どうしても我慢できなくなつて、一思いに全てを挿入してしまった。

「あんっ……!」

? 少しの苦痛が混ざつた桜の声。

「あ……桜、痛かつた……か?」

? 心配して声をかける。苦しいからといって行つたさっきの行為を後悔した。

? それでも桜は俺に微笑みかけて言った。

「ん……大丈夫です……それよりも、わたし、先輩とひとつになれて、すごく……すごく、うれしいん、です……」

「桜……」

? 桜はその目に涙を浮かべていた。それが痛みによるものではなく、嬉しさから来るものだ、俺はなんとなく悟つた。

? 自惚れているつもりはなく、ただ本当にそう思った。俺だって、桜と同じなんだ。「ああ。俺も桜とこうなれて、本当に嬉しい。俺が桜を好きで、桜も同じ気持ちだって感じられて、すごく、嬉しいよ」

? 俺も桜と同じように、自分の素直な気持ちを伝えた。

「先輩……嬉しい、嬉しいです……私たち、同じ、なんですね……」

? そうして、互いの身体を抱き締めた。きつく、きつく、互いに痛いと感じるほどに。二人が通じ合えたことを噛み締めるように、強く抱き合った。

? しばらくそうしていたが、やがてもつと先へ進みたくなった。というより、こんな状態でずっと止まっているのは、さすがに無理がありすぎる。

「桜……動いて、いいか……?」

「はい……先輩の好きなように、どうぞ……」

? ……危なかった。今の桜の言葉は反則すぎる。しかもとても魅力的な笑顔だったからなおさら。

? 今思い留まらなかつたら、内にたまった欲望のまま、桜をどうしていたかわからない。激しくすることが全部悪いとは思わないし、交わっている内にそうなってしまう。うではあるのだが、最初からそうするのは違う気がする。

? だから最初とゆつくりと。桜の感触を確かめられるように、優しく腰を動かす。

「んっ……」

？だというのに、たった一往復だけで信じられない程の快楽が俺を襲った。そのせいで耐えられずに腰を止めそうになったが、それは堪えた。

？桜はその身体を俺に委ねてくれている。だったら、俺がちやんと悦ばせてあげなくちゃだめだ。

「あ……んっ、ん……は……せん、ぱい……」

？優しく受け入れてくれている桜の中で、遅いペースで生殖器を動かす。膣は俺の動きに合わせて形を変えて、毒のように快楽を運んでくる。その感覚だけでどうにかなりそうだった。

「さくら……っ、く、あ……」

？しかし、毒はそれだけではなかった。俺を見つめてくる桜の淫らな反応も、俺の精神を侵してきた。目はとろん、と溶けているかのような色を孕み、その口から漏れる悩ましげな声は、脳を破壊されるようだった。

？その毒が俺の理性を壊し始めた。自分のため、桜のためにと優しく動かしていた腰は、僅かにスピードを増していく。

？それに合わせて、快楽もその大きさを増す。何倍にもそれは膨れ上がり、媚薬でも飲まされたのかと錯覚するほどだ。

? いや、媚薬というより、麻薬だ。ほんの少し腰を速くするだけで、快楽が大きくなる。だから、もっと大きなものが欲しくてさらに動きが激しくなっていく。

? こんなの本当にどうかしかねない。いや、もうおかしくなっているのか。頭の中は快楽と桜だけで埋め尽くされている。

「はあっ、ん……っ、あっ、や……ん……っ……せんばいつ、あ、ん、すご、い……!?せんばい、ん、あっ……いいっ……、あっ、ん、きもち、いい、ですっ……!」

? 俺が腰を打ち付ける度にそれに応えるように桜が喘ぐ。その声でまともな思考がいや思考すらできなくなっていく。俺の肉棒と桜の花びらは、互いの液でどろどろで、まるで溶け合っているようだ。それをもっと味わおうと、さらに激しく腰を動かす。

「あ、うあ……っ、ん、はん……っ!?や、せんばいの、はげしく……なっ、んあっ……!?あんっ……あはっ、んっ、いい、いいです、せんばい……っ!」

? 熱くなっていく声。どこか甘えるようなその声は、俺の脳髓まで染み渡り意識を溶かしていく。それと同じように、桜の中もより強く俺を求める。肉棒全体を強く締め付けたら、先端や竿だけを縛ってきたりもする。

「は、あっ……は、ん……っ、ひああっ……!?せんっ、ぱあいつ……あ、あんっ、はあっ……!」

? ほんの数分も経たずに、性交は激しく、荒々しいものになっていた。ぱん、ぱん、と

肌を打ち付けて、愛欲と快楽を貪り合うように交わる。

? までもに回らなくなった舌で互いの名を呼びながら、何度も何度も腰を動かす。もうどちらのものかわからなくなった液を、互いの生殖器でぐちゅりぐちゅりと混ぜ合わせ、狂ってしまったかのように求め合った。

? 互いの理性はどこかに消し飛んで、己の本能のままに腰を打ち付け合った。それこそ、発情しきった獣のように。

「さく、ら……桜、さくらっ……!」

「せんばいっ……!? あっ、ん、すきっ……好きです……!」

? 求め合う声と溶け合う意識。このまま全部、心も体も全部桜と一つになって溶けてしまいたい。そんな感覚に陥るほどの快楽。

? でもまだ果てられない。桜がこんなにも強く俺を求めているんだから。正直、もう出してしまいたいが、それ以上にもっと桜とこうしていたいという気持ちが強かった。

? そのために歯を食いしばって、懸命に射精をこらえる。桜はそんな俺には構わずに、俺の動きに合わせて腰を動かして、より強く快楽を伝えてくる。その快楽で視界が歪む。周りの事が目に入らず、桜だけしか見えなくなっていく。

「あっ、んあっ……く……はあっ、せん……っ、ぱいっ……!? はっ、ああっ……んっ……!? もっと、おくっ……ついてっ……!? ひあっ……あっ、あは、んあ……っ!」

? 普段からは想像のつかないほど乱れた桜の姿。俺が桜をそうさせたと思うと、言い様のない支配感がこみあげてくる。でもそれは桜だけじゃない。俺だつてとつくに桜に狂わされている。こんなにも激しく桜と交わっているのに、まだ足りないと言え強く求めている。そのどろどろが狂っていないと言えらるだろうか。

「先輩、せんぱいっ……!!んっ……は……すき、だい、すき……!!あつ、あん……っ、はあつ……!!だか、らっ……もつと……!」

? 激しく、それでいて甘く溶けるような嬌声。肉体的な快楽も熱く焼けそうなほど高まっているが、それ以上に精神的な快楽が大きい。一番好きな女の子を抱いて、こんな風に何度も好きだ、と言われているのだから当たり前だ。

「桜っ……さくら……!」

? それに応えるように貫く。射精を必死にこらえながら、何度も腰を打ち付ける。その度に中から蜜が漏れ出して、互いの結合部をどろどろと濡らしていく。

「ふあつ、は、あつ、ん……っ!!は、そんなに、はげしくした、らっ……いつちやい、ます……っ!」

? もう互いに限界まで快楽は高まっていた。身体の中身までも吐き出してしまいうような感覚。でも別にそうなたつていい。桜と一緒に果ててしまえるのなら、他の事なんかどうでもよかつた。

? 桜を抱き締めて、桜とひとつになって、愛し合っているこの時がただ嬉しかったから。幸福感と言えるほど綺麗な感情ではなく、罪悪や欲望の入り雑じった複雑な気持ちだけけれど、桜を愛しいと思うこの気持ちは本物だと思った。

「はっ、せんぱっ……あっ、もうっ……!!? わたしっ、あっ……!!? いく、いつちやうっ……!!? や、せんぱ、せんぱいも、いつしよ、に……っ……!!?」

? 桜の声がその限界を伝えていた。もう終わってしまうと。そしてそれは俺も同じ。

「く……ああ、桜……っ、おれ、も……!!?」

? 桜の手足が俺に絡み付き、それと一緒に膣も俺を強く締め付けた。その瞬間何も考えられなくなつて、桜の中へ溜まっていた精を放出した。

「あ……ん……せんぱいの、わたしのなか、に……!!?」

? 桜は俺を抱き締めたまま、俺の精液を受け止めてくれている。それに甘えてどくどくと溢すように射精する。

「ふあ……ああ、せん、ぱい……!!?」

? 桜が恍惚とした表情で脱力していく。強く締め付けていた膣も、今は優しく俺を包んでいる。

「は……ああ……!!?」

? 中から溢れ出る程の精をやっと全部出し終わった。

?でも。

「あ……せんばいの、まだ……」

?まだ、生殖器は萎えていなかった。あんなにたくさん出したというのに、まだ固さを失っていない。それに、未だに桜を求める気持ちは残ったままだ。でも、それはさっきのように歯止めが効かなくなるようなものではなく、もつと桜と繋がっていたという願望だった。

「あの……先輩、もつとしますか……?」

?俺が聞く前に桜に言われた。もちろん、していいのならもつとしたい。でも桜が心配だった。さつきあんなに激しくしてしまったから、桜の身体への負担になるようならしたくない。

「でも、桜……その、大丈夫なのか?」

「私は大丈夫です。……それに、その……私も、もつと先輩とこうしていたい、ですし……」

「桜……」

?そんな甘い桜の言葉に、また劣情が昂ってしまいそうになるが、それはなんとか抑える。さつきのような激しいのは無しだ。もつと深く、もつと長く桜と繋がっていたいから。

「あ……先輩……？」

？桜を抱き締めたまま、身体を起こす。俺は座っていて、桜はその上に乗るような形。所謂、対面座位だ。この体勢なら、もつと落ち着いて桜と一つになっていられる。

「んっ、先輩、これ……」

？でも一つ欠点があった。この形だとさつき以上に桜の感触が伝わってくる。いや、それは元々わかっていたことだけれど、これはさすがに予想以上だ。身体に触れる柔らかい胸の感触、座らせた脚に伝わる弾力のある尻。そして、より深く突き入れた肉棒を包む温かい膣。全て想像以上で、生殖器はさらにその固さを増していく。

「んっ……あ、ん……っ、はあ、あ……」

？そのままゆっくりと腰を動かす。先ほどよりも緩やかな快楽。遅い動きからのもどかしさと、桜の中からの優しい愛撫。それは激しさこそないが、甘美な誘惑を伴ったものだった。

？桜の膣は、肉棒を優しく包んだまま、適度な締め付けで快感を運んでくる。引き抜くときも突き入れるときも、その動きを妨げずに、ぬるりとした感触を伝えてくる。そしてその無数の襞は、緩慢な動きでありながら確かに肉棒を責め立ててくる。

「はあっ……せんばい……ん、あ、は……わた、し……もう……あん、いき……そう、です……は、あっ……」

「え……さく、ら……う？」

？一度達したからだろうか。桜の限界は想像よりかなり早かった。そしてそれを証拠付けるように、膣の締め付けが少しづつ強くなっていく。それに伴い、俺の射精感も急激に高まっていく。

？まずい。長く続けたいと思ったのに、これじゃすぐ終わってしまふ。でも抗えない。締め付けは強烈になっていくし、一度出したせいかな俺のブレーキもきかなくなっている。

「あ……だめ、せんぱいっ……!?!い、く……っ!」

「く……さくらっ……!?!おれも、だめ、だ……!」

？甘い膣の感覚と迸る射精感のまま、桜の中にどくん、と精液を解き放った。一度出したにも関わらず、その勢いと量は先程以上だった。

「あ……せんぱい、の……いっぱい……でて……!」

「さくら……!」

？びゆくびゆくと溢れる精液を、桜は甘い吐息を漏らしながら受け止める。心地よさに絶頂の余韻に浸る桜。その身体を優しく抱きながら、精を吐き出す。

「は、あ……すす、い……せんぱいの、まだでて……!」

？——でも。これはいくらなんでも出過ぎだ。生殖器から放出される精液は、勢いを

弱めることはすれど、一向に止まる気配がない。

？とくん、とくんと、残ったものを絞り出すような射精が続く。

「あつ……さくら……それ、はっ……」

？いつの間にか桜の腰が動いていた。その動きは、未だ残っている精液を搾り取るように、優しく責め立てる。

「いいんですよ……せん、ぱい……すきなだけ、だしてください……んっ、あ……っ、わたしに、もつと……っ、ください……あ、は……」

？桜の甘い誘惑。今の俺にそれに抗う術はない。ただ、桜の望むままに吐精することしかできない。だから、俺も桜と同じように腰を動かし始めた。当然、快感はその分膨れ上がり、射精は止まらなくなっていく。

？でもそれで構わない。そんなことどうでもいい。桜がこんなに俺を求めている、俺も死ぬほど心地いい。だったらそれを止める必要なんてない。

「ふあ……せんぱい……あん、ん……っ、は……ん、あ……」

？二人の動きは緩慢だ。もたらされる快楽は、一回目よりも大きくはない。しかし、それは俺達がこの性交に溺れるには充分だった。むしろ、一度に大きな快楽が襲つてこないだけに、少しずつ深みへと落ちていくようだ。

？与えられる快感のまま、互いに軽い絶頂を何度も迎える。その度に「ぼ……ぼと精液

が溢れ、性器同士の摩擦を助ける。快楽は何度もその形を変え、少しづつだが確実にその大きさを増していく。

「あつ、は……んあ……せんぱいの……っ、どくどくって…… あ、んっ、ふあ……すこ
いつ、はっ……んっ、あつ、もつと……もつとだしてっ……せんぱいつ……」

? 過剰な量の精は、愛液と混ざり合い、中からだらしなく溢れ出る。びちゃりびちゃりといやらしい音を立てながら、二人の性器を溶かしていく。もちろん、本当に溶けているわけではない。でも快楽は、本当にそうであるかのように錯覚させる。

? それは先程の激しいキスよりも甘い甘い感覚。あれも、互いの舌がまるで溶けているかのように感じたが、これはそれ以上だ。

? 身体の内なかで最も快感を感じ取れる部分を絡め合っているのだ。その上、桜の熱い蜜と俺の生温かい精で、互いのものはどろどろになっっている。

? 性器同士の境界はあまりに曖昧だが、それを確かめる必要なんてない。確かめるのはお互いの心だけでいい。もたらされる快感に身を任せ、快楽の海の中で桜とそれを確かめ合えれば、それでいい。

「や、あんっ……せんぱい、せんぱいつ……すき……すきいつ……は、あつ……わたしの、わたしのせんぱい……っ……」

? もう、感覚はまともに機能していない。溶けるような快楽、甘い桜の声。それに酔

わされ、頭の中が真っ白になる。

？不安も、危惧も、全部どうでもいい。このまま桜と壊れてしまいたい。既に半分は壊れている。理性はとつくの昔に消えて、桜への情欲以外の感覚は精液と共に流れ出ていく。

「さくら……さくらっ……はあっ、く……」

「せんぱいっ……あ、もう、だめ……わたし、おかしく、なっちゃう……っんあ……は……」

？それは桜も同じだった。淫楽に浸った目に、とろけきった表情。きつと、俺も同じような表情をしているのだろう。

？互いに快楽を与え合い、身体を犯し合い、心を壊し合う。性器が数度擦れ合う度に、二人同時に達して、とぶとぶと膣に精液を注ぎ込む。これ以上ない、至極の快楽だった。？でも、それはいつまでも続く訳じゃない。欲望に際限はなくとも、体力となれば話は別。俺たちが互いを欲すれば欲するほど、体力はすり減っていく。それは逃れられない必然だ。

「あっ……せんぱいっ……いく、いっちゃいますっ……」

「さくら、おれ、もっ……また、でるっ……」

？それは何度目の絶頂だっただろうか。一際強い快感が襲って、俺たちは互いに腰を

止めた。性器だけじゃなく、身体も脳も飛んでしまいそうな快感。

? それを感じた瞬間、バチリと意識の電源が落とされた。それは桜も同じだったように、ぼたりと俺の身体に倒れ込んできた。表面上の意識では疲労なんて微塵も感じていなかったが、確かに身体には負担が掛かっていたのだ。身体はピクリとも動かさずに、溶け合った意識のまま、桜と繋がったまま、眠りへと落ちていく。

? そして完全に意識が消えるその瞬間、

「あいしてます……せんばい……」

? 愛しさの籠った、桜の呟きが聞こえた。

? その声に応えようとするが、ただ一言言葉を紡ぐだけの意識すら残っていないかった。

? だからせめてその代わりにと、いつのまにか重ねられていた桜の手を握りかえした。

初めての夜

「はあ……」

? 浴槽に背をもたれながら、俺は何度目かのため息を吐いた。そんなことをしても、今俺の頭を悩ませている問題は何も解決しないのだが。

? 別段、深刻な問題という訳ではない。少なくとも、数ヶ月前に行われた聖杯戦争に比べれば、問題とすら言えない程の些末なことだ。

? 桜はその身を縛っていた呪縛から解き放たれ、助かるはずのなかつた俺自身もイリヤの「奇跡」によつて命を救われた。さらに、遠坂の尽力もあつて身体を取り戻すことすらできた。

? だから、俺が今悩むことはないはずなのだが、そうもいかない。問題は俺のほうではなく、桜のほうにあつた。

? 彼女の身体は一度聖杯として覚醒した影響で、今なお「あちら」と繋がつたままになつてしまっている。そのせいで、魔力が余剰に供給されてしまうのだ。そのまま放つておけば、身体のほうが耐えきれずにパンクしてしまう。

? つまり、その余剰分を外へ逃がす必要があるわけで、そのために手っ取り早いのは

俺にそれを渡すことだ。体液の交換——つまり、性交によって。

？その必要があることを桜から告げられたのがつい一週間前のことだ。その時はお互いに気恥ずかしくなってしまうて、それ以上の話はできなかった。それに、俺の身体が自由に動かせるようになって間もなかった頃のせいもある。

？そして今日、そのことも忘れかけていた時だった。いつものように俺と桜、それに藤ねえ、ライダーと夕食をとり、桜と二人で洗い物をしている時に、唐突に桜が口にしたのだ。

「あ、あの……今夜、私の部屋に来てくれませんか……？」

？そう、顔を真っ赤に染めながら言われて、鈍感な俺でも一瞬で察した。とりあえず俺は冷静な感じを装って返答したが、心臓はバクバクと跳ねていた。正直、返答の声があらずっていたような気もするが、動揺していたのでまともに覚えていない。

？その後はお互いに無言のまま洗い物を終わらせ、桜はそそくさと風呂へ行ってしまった。その上、悶々とした気持ちのまま居間でテレビを見ていると、そんな俺にライダーが追い討ちをかけてきた。

「士郎。今夜は泊まり込みでバイトがありますので、サクラとごゆつくりどうぞ」

？……古道具屋で泊まり込みの仕事なんてあるのだろうか。なんていう突っ込みすら入れる間もなく、ライダーはあつという間に家を出ていった。おまけに「フフ……」な

んて意味深な笑みを残して。

? 藤ねえもさっさと帰ってしまい、とうとうこの家は俺と桜の二人きりになってしまった。それを意識しただけで、緊張でどうにかなりそうだった。

? その後はテレビを右から左へ聞き流し、桜が上がるなり逃げるように風呂へ直行した。

「はあ……別にこんなに緊張しなくてもいいはずなのにな……」

? もう何度目かもわからなくなつたため息を吐きながら呟いた。

? そう。何も桜とそういうことをするのは初めてじゃない。聖杯戦争中も桜に魔力を与えるために身体を重ねたのだ。

? あの時と違うのは、今度は俺が桜からもらうということだけ。それだけのはずなのに、どうしてこうも身構えてしまうのか。

? だがそんなことを考えても状況は変わらないわけで……というか、考えすぎて頭がくらくらしてきた。

「まず……のぼせてきちまった。もう上がらないと」

? 風呂で倒れて桜に迷惑をかけたらしたら、それこそ本末転倒だ。いろいろ考えるよりも、とりあえず何か行動を起こすほうがいいだろう。

?——と、そう決心して桜の部屋の前まで来たわけなのだけれど、緊張は最高潮まで達していた。早鐘を打つ鼓動が、部屋の中にいる桜にまで聞こえてるんじゃないかと思うほどだ。

「ええい……!?!俺がこんなでどうする……!」

? そんな自分がどうしようもなく情けなく感じて、そう小声で呟いて自分を奮い立たせる。そのまま勢いに任せて、ドアを二回ノックして桜に声をかけた。

「桜?!入って、いいかな……?」

? ややあつて、中で人が動く気配とともに桜が返事をした。

「あ……ど、どうぞ、先輩……」

? ごくりと唾を飲んで、ドアを開けて部屋の中に入る。部屋の電気は落とされていて薄暗い。ベッドは綺麗に整理されていて、桜はもう準備をしてくれていたようだ。

? それは桜自身を見てもわかることだった。目の前に立っている彼女は、その身を毛布で隠している。恐らくその下は下着姿か、あるいは——

「桜……えつと、魔力をもらって欲しいってコトでいいん、だよな……?」

? 確認の意味で口にする。ずっと黙ったままというのはあまりにも気まずいから、とりあえず何か言ってみたといった感じだが。

? だが、いざそれを口にしてみると、途端にこれから行うであろう行為を想像してし

まってどぎまぎしてしまう。

「は、はい……ライダーを使役してるだけだと、消費が追い付かなくて、あふれそう、なので……その……」

？その先はうつむいてしまつてよく聞き取れなかった。だがそれも仕方ないだろう。暗さに目が慣れていないせいで桜の表情は読めないが、俺と同じで桜も恥ずかしさを感じているんだろうし。

？というか、俺の方もそんな桜を見て、ますます緊張が高まつてきてしまう。

「……………」

？まずい。お互いになにも言えなくなつてしまつた。こういうのは男の俺が言うのが好ましいのだろうけど、なんて言えればいいのか。

？いきなり「それじゃあ、始めようか」つていうのは違う気がするし、だからつてこのまま押し倒すなんてのは論外だ。

？数分か、数十秒か、しばらくの間沈黙が訪れる。それを破つたのは、やはりというか桜だった。

「え、えつと……せ、先輩……その、私がしてあげます、から……ベッドに……」

？思つた以上に直球な桜の言葉に、これ以上速くならないだろうと思つていた心臓の鼓動がさらにそのスピードを増す。

? どうしてこれほど緊張するのか。正直、自分でもおかしいと思うほどだ。

「あ、ああ。わかった……」

? だが、その理由を考えていられるほど俺の頭は冷静なはずがなく、桜の言葉に従ってぎこちない動作でベッドに腰掛ける。

? すると桜は自分の身を隠していた毛布をぱさりと床へ落とした。

「桜——」

? さらにされた桜の肢体は、下着すら身に付けていなかった。俺の視線は、当然のようにそれに吸い寄せられる。

? それに気付いたのか、桜が恥ずかしそうな表情へ変化するが、そんなことで目を逸らせるような忍耐なんてあるはずもない。むしろ、そんな表情が堪らなく魅力的に感じる。

? あの時もお互いの裸くらい見ていたはずなのに、まるで初めてのように入ってしまう。それになんだか以前よりもまた成長した気がする。具体的にどこが、とは言わな
いが。

? あれから時間が経っているのだから当たり前といえはそうなのだが、俺にとっては
ついこの間のことなのだ。

? そうやって俺が勝手にどぎまぎしていると、桜がゆつくりと俺に近づいてきた。自

らの身体を隠すことすらせず、ひたひたと歩いてくるその姿に、どくんどくと心臓が跳ねる。

「ごめんなさい、先輩……すぐ、終わらせますから……」

?そして、そう言いながら桜は俺の前にしゃがみこみ、ズボンのジツパーへ手をかけた。

「……待ってくれ、桜」

?だが俺はそんな桜を制止した。

「え……せん、ばい……?」

?戸惑いと、僅かな悲しみの混じった桜の表情。だがそれを俺に悟らせまいと、すぐに取り繕うような顔に変わる。

「そ、そうですね、私とこんなことをなんて……イヤ、ですよね……」

「あ……その、違う。そういう訳じゃないんだ」

?そう。イヤなはずがない。むしろ嬉しいくらいだ。でも俺が桜を止めたのは、さっきの彼女の言葉によるものだった。

「じゃあ、どうして……」

「その、何かのために桜とそういうことをするのはイヤなんだ。……せっかく、こうやって二人だけになれたんだから、ちゃんと恋人として——桜を抱きたい」

? それはあの聖杯戦争中にはできなかったことだから。恋人という関係にこそなったが、あの時の俺たちは純粋な愛情表情として身体を重ねられてはいなかった。

? あの戦いから二人こうして帰ってこれたのだから、情を交わすのにもう理由なんて必要ないはずだ。

「先輩——」

「だからさ、桜。恋人同士としての『初めて』を、今ここで桜としたい」

? 桜の身体を抱きしめて耳元でささやく。その感触があの時と何も変わっていないことに安堵した。

? そして、変わっていないのは自らを卑下するところもだった。

『——先輩はこんなこと、イヤだろうって、わかってる、のに——』

? あの夜もそうだった。桜は俺に触れられることに罪悪感を感じている。

? 自分は汚れているから、そんな資格ないからと。桜がそう思ってしまうのは仕方ないとは思うけれど、俺はそれがとても悲しい。

? だから、そんなものは今ここで取っ払ってしまおう。理由もなく触れ合うことなんて当たり前なんだと、桜に思ってもらえるように。

「い、いいんですか……??先輩……」

? 桜はおずおずと聞いてくる。抱きしめる腕に少し力を入れて、それに答える。

「いいも何も、あとは桜が頷いてくれるだけでいいんだ」

? どうして俺は過剰な程に緊張していたのか。それがようやくわかった。

? 桜と余計な建前も理由もなく一緒に夜を過ごすことに、俺は無意識ながら気付いていたのだ。そんなことは初めてだからと、こんなにも身構えていた。

? そんなことに今になって気付くなんて、間が抜けているにも程がある。

「だから桜、いいかな。頷いてくれるか?」

? 腕を緩めて桜の顔と真っ直ぐに向き合って問いかける。

? 桜は、最初は躊躇うような表情で迷っていた様子だったが、少しすると優しげな笑みと共に答えてくれた。

「はい——嬉しいです、先輩」

? そして、桜の方から俺に唇を重ねてくれた。それがあまりにも自然な動作で、気づくのに少しかかった。

? でも、拒むことなんて当然せず、首の後ろに手を回してこちらからも唇を重ね合わせた。

「ん……っ、あ……」

? 耳元に桜の甘い声が漏れる。まだ首筋へキスをしているだけなのに、その声に含ま

れる官能的な色で、どうしても劣情が昂ってしまう。

? もう俺も服を脱いでいて、互いに裸でベッドで重なり合っている。押し倒した勢いのまま激しく唇を貪り合った後、互いの唾液で濡れた唇を桜の首へ這わせていた。

? なければなしの理性は、その声や肌に伝わる桜の温もりであっけなく消え去ってしまった。そうだ。だがそれも当然。だって桜の肌に触れるのはあの時以来なんだ。歯止めなんていつきかなくなるかわからない。

「せ、先輩……もつと——もつと、私のこと、さわって、ほしいです……っ……」

? そしてそれは桜も同じのようだった。というか、俺よりも桜の方が我慢がきいていないようにも思えた。

? 今の切ない声もそうだが、身体は熱く火照り、その荒い息遣いも先程のキスのせいだけではないだろう。

「ああ……わかつてる。俺だって、もつと桜に触れたい」

? 口付けをする場所を少し下ろしていく。首筋から鎖骨。そしてそこから、その豊満な胸へと。

? 触れるだけの甘い接触なんてすっ飛ばして、ぴんと勃ったその乳首を強く吸い上げる。

「は……っ、あ……っ!? せんっ、ぱい……!」

? 身体を弾ませ、激しい嬌声をあげる桜。それがとても嬉しげで、俺の方も同じように昂つてきてしまう。

? そのまま、もう片方の乳房に左手を這わせる。人差し指を頂点に添えて、柔らかなふくらみを手のひら全体で包む。

? 成長したのは大ききさだけではなく、感触もまた凶悪になったことを確かめながら愛撫する。柔らかいだけじゃなく、確かな熱と弾力をもつ桜の胸に触れているだけで理性が溶かされてしまう。

? 桜の方も、理性を感じさせないような反応になってきていた。その口からこぼれる悩ましげな声はとどまることを知らず、少しずつその熱を増していく。

? 特に、指や口でころころと乳首を転がしてやると、身体を震わせながら激しい声をあげてくれる。

? それで俺の方もやられてしまって、我慢できずに右手を桜の秘部へ手を伸ばした。「ひゃあつ……!?だ、だめ、せんばい……そこ、はっ……!」

? 触れた桜の陰部は、俺の想像以上に濡れていた。少し指を動かすと、ぐちゆりと音がする程だ。

? その様子に思わず声を漏らす。

「う、わ……すごい、こんなに……」

「ご、ごめんなさい……あの、きもち、よくって……」

「いや、その……謝ることないぞ。……というか、俺でこうなってくれたんだったら、その……むしろ嬉しいかな、って……」

？ 我ながら、もの凄く恥ずかしいことを言ってしまった気がする。桜も同じようで、顔を真っ赤に染めて言葉に困っているようだった。

？ でも、そんな恥ずかしくなってしまうようなやり取りですらいとおしく感じて、桜に口付けた。

？ 俺の突然の行動に驚いたのか、桜は一瞬身体を強ばらせたが、すぐに優しく俺の唇にはむ、と吸い付いてきた。それが、俺の意図を読み取ってくれてのものかはわからないが、口付けは甘く溶けるようなものだった。

「ん、は……んく……」

？ 多少の唾液と共に唇を離すと、桜は俺の唇から垂れたそれを美味しそうに飲み込んだ。

？ そのどうしようもなく色っぽい仕草に、俺の理性も限界だった。

「きやあつ!?せ、先輩……?」

？ 桜の脚の辺りまで身体をずらす。そして多少強引に両脚を開いて、桜の陰部に顔をうずめた。

「だ、だめです……!? そんなとこ……ひあつ、あ……んっ……!」

? 何か言うのを遮るようにそこを舌で舐める。途端、桜の声に強い快樂の色が混じった。

? それで嗜虐心が刺激されたのか、俺は秘部に滴る愛液をじゆる、とすすった。少し下品だったかと思ったが、桜のから漏れ出した蜜だと思おうと、そうせずにはいられなかった。

? 軽く喉で転がしてから飲み込む。少しすっぱいような味。不思議な感覚だけど、俺はそれがとても美味しく感じた。

? そのままじゆる、じゆる、と音をたてながら桜の蜜を味わう。その度に、桜は羞恥と快樂の混ざった嬌声をあげてくれる。

「あつ、ん……や、だめ……そこ、き、きたないです……っ……」

「汚くなんかない。桜のここ、凄くきれいだ」

「うう……せんぱい……」

? 桜だったら身体のだこだろうと汚いなんて思わない。頭のとつぺんから足のつま先まで、俺にとつては全て愛しいものだから。

? 桜は俺の言葉に観念したのか、強張らせていた身体の力を抜いた。

? 両手の指で割れ目をそつと開く。湿った音をたてながら、その中が少しずつ見えて

きた。

? 綺麗なピンク色をした肉がひくひくといやらしく動いている。それがまるで奥へと誘っているように見えて、欲望を抑えるのに必死だった。

? 完全にそこを開くと、微かなボディソープの香りが漂ってきた。桜はこうなることを予想してここも洗っていたんだろうか、なんてことを想像してしまう。

? だがそんなものも、隠しきれない濃い桜の香りでどこかへいった。それが俺の頭をおかしくしていく。身体全体が桜と同じように火照ってきて、理性はどんどん溶けていく。

「や……は、はずかし、い……わたし、せんぱいにせんぶ、みられて、る……」

? 口ではそう言いつつも、心無しかその言葉から嬉しげなニュアンスを感じ取った。さらに、その言葉と同時にひくついた桜の秘部に、もう歯止めなんかきかなくて、指と舌でそこを愛撫し始める。

? 陰唇の少しふくらんでいる部分。そこを覆っている皮をそつと剥いて、隠れていた陰核をあらわにする。

? そこを舌で舐めると、淫らかな声とともに桜はびくんと一際大きく身体を震わせて反応した。

「ん……桜、(こ)、気持ちいいのか……?」

「き、聞かないでください……そんなこと……」

「あ……わ、悪い、桜……」

?さすがに今の発言はアウトだった。顔を上げて確認した桜の顔は、羞恥で真っ赤に染まっていた。

?ただでさえ桜は恥ずかしくて仕方がないのに、どこを感じるか、なんて答えられる筈がない。

?そう反省して、再び愛撫を始める。今度はその小さな膣口を。

?舌先をちろり、と差し込んでみる。すると、多少の抵抗はあれど、少しずつ奥へと入っていく。

「あ……あん、した、いれ、ちゃ……は、んっ、あ……」

?挿入した舌で膣壁から染み出す愛液を受け止める。表面よりも濃い桜の味。それをもつと味わおうと、舌を一旦引き抜いて口の中へ飲み込む。

?唾液と混ぜ合わせて飲み下すと、まるで俺と桜が一つに溶け合っているかのような想像をしてしまう。少し変態的かとも思ったが、そんな妄想をしてしまうほど俺の頭もおかしくなってきたということなんだろう。

?もう一度そこへ舌を這わせる。今度は指で陰核への愛撫も行いながら。

?先程よりも激しく舌を膣内で動かしながら、陰核を人差し指と親指で優しく刺激す

る。

「あつ……は、あんつ……!?ふあ……あ、んつ……!?せんぱいつ……だ、めつ、そんなに、した、ら……あつ、わたし……っ!」

? 身体を何度も震わせながら、桜は快感で染まっていく。それと共鳴するように、きゆうう、と舌を締め付ける膣。

? その反応から、桜の絶頂に近いことは容易に見てとれた。

? ここで焦らすような真似はしない。それもまたいいかもしれないが、今はただ桜を気持ちよくしてあげたいから。

? 性交を真似るように、舌を膣内に出し入れする。じゅぶ、じゅぶ、といやらしい音が響き、同時に桜の声も熱くなっていく。

「だ、だめっ……!?せんぱい、や、わたし、いつ、ちやう……!」

? 限界まで高まった桜の声。

? そして、最後の一押しとばかりに、陰核を強くつまみながら舌を限界まで突き入れた。

「あ……っ、い、くうっ……!?あつ、ひあああつ……!」

? 絶叫にも似た声とともに、桜は激しく絶頂した。身体はびくんと強く跳ね、舌を包む膣は痛いと思うほどに締め付けていた。

? 絶頂が終わっても、その余韻が桜の身体を包んでいるようだった。熱い吐息を吐きながら、時々ぴく、と痙攣する身体。

? その様子を見て、ちゃんと気持ち良くしてやれたことへの達成感が湧き出てくる。でもまだこれで終わりじゃない。

? 一緒に気持ち良くなって、初めて終わりなんだから。

? 桜の横へぼふ、と倒れ込む。桜の顔を覗き込むと、未だ余韻が抜けていない様子だった。

「桜」

? 声をかけるとようやく桜は気がついた。

「あ……せんばい……?」

? しかし、まだ意識は朦朧としている様子だ。俺のほうを向く目は視線が定まっていない。

? だが、そうする内にだんだん意識が明瞭になってきたのか、顔がみるみる内に赤く染まっていく。

「あ……せ、先輩……私……」

? 桜は先程のことを思い出した様子で、両手で顔を覆って言った。

「うう……先輩、あんなの反則です……」

「う……ごめん。久しぶりだったから、つい……」

?とはいえ、少し度が過ぎてしまったかもしれない。途中から半分くらい理性が飛んでいったし。

「……でも、とつても気持ち良かったから、いいです」

?……こういうことを笑顔で言う桜のほうが反則だと思う。危うく押し倒そうとする自分を抑えるのに大変だった。

?でも、気持ち良くなってくれたのならいいか。

「——だから、次は私が先輩を気持ち良くしてあげますね」

「え?」

?桜の言葉の意味を理解する前に、桜に押し倒された。そして俺が何か言う前に、唇をふさいできた。

「ん、ちゅ……う、ん……は……」

?しかもやや強引に舌まで入れて。桜らしからぬ貪るようなキスに、驚きを隠せない。い。

?俺が戸惑っている間にも、桜は俺の唇の中で舌を動かしている。口内の隅々まで舐めとるように、丹念に舌が這い回る。

?そしてその舌先が俺の舌にぶつかると、否応なしに絡め取られる。すると途端に官

能的な快感が全身を襲った。

？それだけじゃない。桜が俺の上に密着した状態で乗っかっているせいで、二つの胸の感触が直接伝わってくる。

？こんなの、本当に反則だ。とどめとばかりに、桜の下腹部に当たっている俺のものは、桜が少し動く度になめらかな肌が擦れて、気持ち良くて仕方がない。

「ぶは……………つ、……………ふふ、先輩の、すっごい熱い……………」

？唇を離れた桜だが、今度は代わりにとばかりに屹立した俺のものを手で包みこんできた。そしてそのまま、上下にしこしことしごき始める。

「く……………つ、桜……………」

？突然の桜からの快感に声を漏らす。

？ただでさえ先ほどの桜の姿を見て限界なのだ。感覚が普通よりも敏感になって、より大きく快感を感じてしまう。

？正直、今ので出してしまいたいそうになっていた。寸でのところでこらえたが、このまま続けられたら我慢できる自信はない。

「さつきは先輩にいかされちゃいましたから、お返しです」

「さ、桜……………う、あつ……………!?それ、は、まずいつ……………て……………」

？桜はそう言うと、股間に顔をうずめて熱く勃起した生殖器を口に含んだ。

? さっき俺に絶頂させられたのが恥ずかしかったのか、先ほどの俺がしたように激しく口淫を始める桜。

? いや、ただ自分だけ気持ち良くなったことを不公平だと思っているのだろう。

? その気持ちは嬉しいが、いささか激し過ぎのような気がする。こんなのにすぐに出してしまう。

「くっ……!? さ、桜……そんなにしたら……すぐ、につ……!」

「んは……っ、いいですよ、だしちゃってください……ん、ちゅっ……ふ……う……」

? 桜はそう言うが、さすがにこんなに早く射精してしまったら男として情けない。俺は限界まで我慢すると決めた。

? 桜の口淫は激しさこそ伴ってはいるが、甘美な快感を伝えてくる。熱い粘膜が触れるだけで、背筋にぞくぞくとした感覚が走る。

? 桜が顔を動かす度に擦れる柔らかい唇の感触だけでも恐ろしい快感が襲う。そして、肉棒を奥まで飲み込まれ、喉に亀頭が当たると、もうそこで射精してしまいそうだ。その瞬間を想像するだけでも快感だった。

? じゅぶ、じゅぶ、と音をたてる、性交のような桜の奉仕。だが、時折べろりと舐めてくる舌が、それとは違うことを思い出させる。

? 口の動きとは全く別に這い回る舌は、獲物を絡め取る蛇を彷彿とさせる。快楽を毒

のように与え、絶頂まで導くように俺を弱らせてくる。

「ん、あむ……はっ……あ、せんぱい……ちゅ、ん……もう、でそう、なんですね……」
？桜のそのどうしようもなく淫靡な愛撫に、もう限界だった。生殖器は桜の口の中でびくびくと痙攣し、もう少し強い快感を与えられてしまえばすぐにでも射精してしまう。

「く……ああ、このまま、いいかな……桜……」

「ちゅっ……、んは……はい、ぜんぶ、のんじやいますから、どうぞ……ん、は、ふっ……」
？桜はそう言つて、再度ぱくりと肉棒をくわえ込んだ。そして先ほどよりも激しく顔を上下させる。さらに、そのぬめった舌で鈴口をちろちろと舐め回される。

？それでももう我慢ができなくなつて、じゅぶりと奥までくわえ込まれた瞬間に、どくん、と精液を吐き出した。

「ん、んんっ……！」

？桜は少し苦しそうな声を漏らしたが、口を離さずに俺の精を飲み込み始めた。

？熱い口内で精を受け止められる感触。それがあまりにも心地よくて、さらに白濁を注ぎ込む。桜はそれすらおいしそうに、こくん、こくんと喉をならして飲み下してくれる。

「桜……」

? 俺が射精を終えてからも、桜は口を離さなかった。尿道に残った精をじゆる、と吸い出してくれている。

? 桜のその丁寧な奉仕は、敏感になった生殖器には少しつらい。でも、目の前で嬉しそうにくわえている桜に、それが終わるまでこらようと思った。

「ぶ、はっ……はあ……おいしい……」

? ようやく口を離れた桜の表情は恍惚とした色に染まっていた。その顔を見て、再び情欲が昂ってきてしまう。だがそれも仕方がないことだろう。桜とこうなるのは本当に久しぶりなんだから。それに、桜とつながるまで枯れるつもりは毛頭ないのだし。

「いっぱい出ましたね、先輩」

「ああ。桜の口の中、凄く気持ちよかった」

? 上体を起こし、桜の髪を軽くかきながら答える。

「ふふっ、それなら良かったです。……でも先輩の、まだおつきいですね」

? 唾液でどろどろになった生殖器を撫でながら言う桜。その表情はどことなく嬉しそうだった。

「ああ。もつと桜が欲しくて、つながりたいって思ってるんだから当たり前だ」

? 髪を撫でていた手を桜の頬へ下ろしながら告げる。このまま二人で愛し合いたいと。

?そして、桜も俺の手に自分のを重ねながら答えてくれた。

「はい。私も同じ気持ちです。——私も、先輩とひとつになりたいです」

?俺が抱き寄せる前に、桜のほうから抱きついてきた。そして、互いに導かれるように唇を重ねた。

?少しの間、はむ、はむ、と啄み合ってから離す。でもすぐに足りなくなつて、もう一度唇を合わせた。

?今度はディープキス。遠慮なんかせずに互いの口内に舌を突き入れる。俺の出した精がまだ少し残っているのか、ねばついた感触が舌に伝わる。

?それを二人の舌で混ぜ合わせて、唾液と共に飲み込み、唇を離れた。

「最初は私が動きますから、先輩は寝てください」

?桜は、肩に手をかけて押し倒そうとする俺をそうやんわりと制した。そして、俺の胸に手をそえて、軽く体重をかけながら俺をベッドに押し倒した。

?そのまま、桜は脚を開いて俺のものの上にまたがった。二つの性器の距離は僅か。桜から滴る蜜が先端に落ちる。

「いれます、ね……先輩……」

?熱い吐息と混ざった、陶酔するような声。桜も俺と同じように、今から行う行為に興奮しているのだろう。

? 桜の手が俺のものに優しく触れる。それと同時にゆっくりと桜は腰を下ろしていき。そして、挿んだ肉棒を上に向けさせて自らの秘部へ触れさせた。

「ん……………」

? びりびりとした快感が走る。濡れた性器がこうして触れるだけでも気持ちがいい。でも、もつと快感が欲しい。もつと奥へと進んでいき、桜と完全につながりたい。

? 桜はその俺の気持ちを感じとったのか、手と腰を使って先端を膣へ侵入させ始めた。俺の胸に片手をつき、もう片方の手で肉棒をしっかりと掴みながら、腰を下ろして挿入させていく。

「あ、ん…………おつき、いつ……………」

? ずぶずぶ、と少しずつ桜の中へ導かれる。まだ浅く挿入されただけに、押し寄せてくる快楽は大き過ぎるものだった。それもそのはず、お互いのものは過剰な程に濡れている。だから、擦れ合うことで生じる快楽を妨げるものがない。

? そしてその快楽は、深くへ進んでいく程に膨れ上がっていく。それは、だんだんと桜と繋がっていくことへの喜びと合わさって、心まで快楽に染められていくようだった。

? 桜の顔は、俺のものという異物を受け止められているにも関わらず、全く苦痛の色がない。そして、唇からこぼれる吐息は甘い快感を孕んでいた。

? そうやって二人で快楽を共有しながら挿入するという行為は一分もかからなかつ

た。そしてそれが終わると同時にやってくる幸福感。桜とひとつになれただけで、何者にも替えがたいほど嬉しかった。

「は……あ、ぜんぶ……はいりましたよ……先輩……」

? 火照った顔を綻ばせて桜は言った。その幸せそうな顔に手を伸ばす。そしてその頬の曲線をなぞるようにさする。

? その行為に特別な意味はない。ただ何となく桜に触れたかっただけ。

「ああ……桜からあつたかいのが伝わってきて、なんだか凄く安心する」

「先輩……でも、あつたかいは先輩のほうが上ですよ」

「ん……そうかな。俺は桜のほうが熱く感じるよ」

「いいえ。とつてもあつくて、私、溶かされちやいそうです」

? 互いに熱いつて思つてゐることは、結局同じくらいということなんだろうか。まあ、どっちでもいいか。どつちかわからない程に、お互い興奮しているということなんだろうし。それに、今はただ、このまま桜と求め合いたい。

? 頬に触れていた手ともう片方の手をそつと首の後ろに回す。そして桜の顔を俺の顔へ引き寄せた。

「じゃあ、一緒に溶ければいい。どつちかわからなくなるくらいに」

「ふふつ、それもいいですね、先輩」

?そして、交わした言葉確かめるように唇を重ねた。この接吻だけでも溶けてしまいうような感触。ぴたりと吸い付くように重なる二つの唇は、激しく貪っているわけでもないのに快感を伝えてくる。

?それで少し我慢できなくなった。キスが終わるよりも先に、首の後ろに回していた両手を背筋の上に滑らせる。そして、その弾力のある桜の尻へ手を添えた。

?その手に軽く力を入れて柔らかい尻を掴む。豊満な乳房とはまた違った感触だけど、こちらもうこうして触っているだけで心地いい。

?それを両手で味わいながら、ゆつくりとその尻を動かす。激しくしたい気持ちは抑えて優しい動きで。それだけでも理性が溶けそうな快楽。

?少しの間そうしていると、今度は桜の方から腰を動かし始めた。唇はまだ重ねたまま、俺がさつきしたような緩やかな速度。でも、やはり自分で動かすのとは違う感覚だ。

?膣内の無数のひだは、まるで桜の意思で動いているように、生殖器に快楽を与えてくる。この遅い動きでも、油断していたらすぐに射精してしまいかねない。

?たまたま、合わせていた桜の口の中へ舌を差し込む。桜はそれにさして驚いた様子もなく、俺の舌の挿入を許した。

?性器だけじゃなく、唇でも繋がって求め合う。その一体感がたまたまなく気持ちいい。いつの間にか桜の両腕が俺の首に回されていて、俺たちは身体全体で重なり合っ

いた。

？まだ動き始めて間もないというのに、既に溶け合っているような感覚に包まれる。身体に触れる桜の感触が全て快感に変わっていく。性器や唇はもちろん、柔らかい胸や、顔にかかる髪でさえ、全て心地いい。

「ん……っ、ふ、は……せん、ぱ……あつ、ん……」

？桜も快感が高まってきたのか、抑えきれない声がキスの合間に漏れていた。それと同時に、桜の動きと接吻が少しずつ熱を増し始めた。

？それにつられて大きさを増す快感。ただでさえこの姿勢は、桜の動きが伝わりやすいからなおさらだ。でも、それが激しくなっていく程に、桜から俺を求める気持ちやが伝わってくるようで嬉しかった。

？それに応えるように、俺も少しだけ腰を動かす。今は桜が動いてくれているのだから、攻めるような激しさはいらない。だが、それだけでも生殖器同士の刺激には変化が訪れる。

？桜の膣は俺の動きに合わせて柔軟に形を変え、奥へ突き入れると、子宮の入口がこっつん、と当たって気持ちがいい。桜はそれにたえかねたのか、重ねていた唇を離した。そして俺の頭の両側に手を突いて激しく腰を振り始めた。

「はっ、ん、あん……せんぱい……ごめん、なさい、あつ、は……わたし、がまん、でき

なく、て……!」

? 荒い息を吐きながら、桜は腰を前後に動かす。それに伴って、膣もきつく締め付けながら肉棒を攻め立ててくる。

? 急に熱を増した桜の動きに、歯を食いしばって射精をこらえる。ただ突き入れているだけで快楽を与えてくる桜の中が、こんな激しく動いているのだ。伝わる快感は半端ではない。

「桜……いい、からっ……は、あ……さくらのっ、すきに、うごいて、いいから……!」
? でも互いに気持ちよくなれるのなら、激しかりうと問題ない。快楽が高まっていくのなら、それに身を任せてしまえばいい。それで絶頂してしまっても、何回でも求め合えれば構わない。

? それと何より、目の前の桜をもっと見たかった。快楽で緩んだ淫靡な表情と、本能のままに激しく動く腰。その、恥じらいを捨てて乱れている桜を見たい。

? だが、そんな桜を見ていると、知らず知らずのうちに情欲が昂ってしまう。そしてそれは桜からの快楽と合わさって、急激に射精感を引き上げてくる。

? それを紛らわそうと、桜の動きで揺れる豊満な双丘に両手を伸ばす。

「ふあっ……!?!だ、め……せんぱい……!?!いま、おっぱい、さわっちゃっ……あ、んっ、あ……っ、や、んあ……!」

?びくん、とのけ反る桜の身体。それでも手は離さない。人差し指と親指で乳首をつまみながら愛撫する。

?桜は興奮で身体が敏感になっていいのか、過剰な程の反応をしてくれる。だがその代わりに、俺が刺激を与える度に、膣が生殖器を強く締め付けてくる。

?そのせいで、元々近かつた限界はますます近づいてくる。でも、俺もタガが外れてしまったのか、胸への愛撫を止めることができない。柔らかい胸の感触も、その口から溢れる甘い声も、もつと感じていたいから。

?それに、このまま二人で達してしまうのも別に構わないと思った。俺も桜も我を忘れ、心と身体は愛欲に染まりきっている。だったらこのまま、高まつていく快樂のまま果ててしまえばいい。

「桜、く……おれ、もう……っ、いき、そうだ……!」

「は、はいっ……!?わたし、も、あんっ……もう、だめ……は、あん……だめ、ですっ……!」

?両手で包んだ胸をわしづかみにする。桜にとっては少し痛いくらいのはずだが、それすら気持ちよさそうに身体を震わせる。

?俺の方も今まで我慢してきたのを取っ払って、激しく桜を突き上げる。それを甘い感触と強い締め付けで受け止める膣。

? 互いの快樂も嬌声も限界まで高まって、もう耐えられなかった。

? 快感が最も高まった瞬間、桜の一番奥へ生殖器を突き入れて、熱くたぎった精液を解き放った。

「あつ、ふあああつ……!?!せん、ばあい……っ!」

? それと同時に、大きくその身体を反らせて、桜も絶頂を迎えた。絶頂の瞬間、強く生殖器を締め付けられて、もう一度びゆく、と射精した。

? 二人で大きな快感を得る感覚。その一瞬は、本当に心と身体がひとつに溶け合ったようだった。

「せんばい……あ……きもち、いい……」

「さく、ら……」

? 絶頂の快感の後に俺たちを包む心地のよい余韻。それを二人で共有しようと、両手を桜の背中に回して、俺の上に倒れさせた。

? 触れ合う身体から伝わる桜の温もりを感じながら、じんじんと軽く痺れる余韻に浸る。胸に顔を埋めている桜は、時々身体を痙攣させながら、甘い吐息を漏らしている。

? その心地いい抱擁のまま、余韻が抜けきるまでしばらく二人でそうしていた。

「桜……気持ち、良かったな……」

「はい……気持ちよくて、先輩と一緒にいっちゃいました……」

? 未だ朦朧とした意識のまま言葉を交わす。桜も同じ様子で、紡がれる言葉がどこもなくおぼろげだ。それでも、そこに含まれる嬉しげな色を感じ取って、ちゃんと悦ばせてやれたと実感できた。

「でも、凄いです……先輩のまだとつても固い……」

? 桜はそう言いながら軽く腰を動かした。ぬちゃりとした感覚が生殖器に伝わり、びくんと痙攣する。

「まあ……そりゃ久しぶりだし、一回じゃ足りない。まだまだ枯れてなんかいられないよ」

? さっきの交わりだけでも充分過ぎる程に気持ち良かったけれど、心も身体もまだ桜を求めている。多分、単純に俺は飢えているのだ。だからこんなにも桜が欲しい。

「……じゃあ、その……今度は先輩からしてくれませんか?」

「ん、わかった」

? 一度互いの繋がりを解く。桜がゆっくりと腰を上げて肉棒を引き抜くと、俺の出した精が桜の花びらからどろりとこぼれた。絶頂の感覚でかき消されてわからなかったが、かなりの量を出したらしい。

? 桜は自分のからこぼれたそれを指ですくうと、ぺろりと舌で舐めた。それを口の中で軽く味わってから、おいしそうに飲み下した。

?その後、桜は俺の上から降りると、俺の方に尻を向けてベッドの上で四つん這いになった。必然的に俺の目には桜の性器や、肛門までもがさらされる。その光景を前にして、昂る欲を抑えながら膝立ちになる。

?桜の尻を軽く掴み、そこへ肉棒を触れさせる。桜の呼吸で僅かに尻が揺れて擦れると、それだけで気持ちがいい。そこから少し位置をずらして、先端を入口へとあてがう。

「入れるぞ、桜……」

「はい、ください……先輩……」

?そつと腰に力を入れる。互いの体液で表面まで濡れた性器は、容易く俺のものを受け入れていく。むしろ、俺のほうが奥へと誘われていくようだ。

?それに抗うことなく挿入していく。やはり桜に入れてもらうのとは違う感触だ。あれは飲み込まれていくような感覚だったのに対し、こちらは吸い込まれていくような感覚。

?それに理性がやられないようにこらえながら奥へ突き入れていく。増していく快楽に耐えながら挿入するという行為は、多少の苦しさを伴いながらも、心地のよいものだった。

「ん……あ……先輩、の……おく、まで……きて……」

?そして桜の中からの愛撫に耐えて、肉棒を全て挿入し終えた。先ほど味わっていた

とはいえ、桜とひとつになれたことは本当に嬉しい。

? それは桜も同じなようで、色気を孕んだ息を漏らしながら身体を震わせている。こうしていると、そういう幸福感みたいなものが互いに伝わってくる。だから、このままでも充分満たされた気持ちになる。

? だが、そうは言っても俺たちは贅沢なもので、もつと大きい充足が欲しくなってしまう。でも、それを無理に遠慮する必要なんてない。今夜は二人で飽きるまで愛し合うと、桜と決めたんだ。

「桜、動くぞ」

「はい………たくさん突いて下さいね」

? そのまま腰を動かす。どうしようか少し迷ったが、最初から飛ばした。さっきの交わりで二人とも身体は慣れているし、単純にこの体位に俺が興奮しているというのもある。

? だから、躊躇いなんかなしに桜の中で激しく生殖器を突き動かす。柔軟な膣と過剰分泌される愛液で、その動きにはほとんど抵抗がない。

「あ………?!?はんっ、ふああつ………?!?せんぱいつ、あ、んっ、はげ、しい………」

? 桜の激しい嬌声には苦痛が少し含まれていたが、それよりも圧倒的に快感の色が大きい。そしてそれは、俺が膣奥を突く度に大きさを増していくように感じた。

? だから俺も遠慮なんかせずに突き上げる。高まっていく快樂なんかお構い無しに、乾いた音をたてながら何度も腰を打ち付ける。

? 桜のほうもそんな俺に応えるように尻を揺らしてくる。だが、それに合わせて形を変え、また違った快樂を与えてくる。生殖器の様々な部位を締め付けたり、吸い付くような刺激をしてきたり、その変化は多様さを見せる。

? 互いに快感を与え合う、甘い性交。それでいて獣のような激しさも帯びている。

? それに当てられて少しおかしくなったのか、俺は片手を桜の脇腹へ這わせた。しかし、途中でこのままの体勢では距離が足りないことに気付き、もう片方の手をベッドについて身体を前へ倒した。

「は、んっ……あ……え……?」

? 突然の俺の行動に驚いたのか、桜は困惑の色を示した。だが、それに構わずにその顔へ手を添わせる。そして、人差し指を桜の口へ侵入させた。

「んあ……は……ふ、ふえん、はい……!」

? さすがに桜の口からは若干の抵抗があった。だがそれも当然だ。いきなり自分の口へ指を入れられるなんて、俺でも驚く。正直、どうしてこんなことをしたのか、自分でもわからない。後ろから桜を突くという背徳的な行為に、もつといけないことをしたかったから、かもしれない。

?だが、桜はそんな俺の勝手な行為さえ、優しく受け入れてくれた。唇で指を挟み込み、口内に入った指先を柔らかな舌で舐めてくれている。

?そこから伝わる未知の快感に、ぞくぞくとした感覚を覚えた。それがもつと欲しくて、自然と指をさらに深く突き入れる。それに対しても、桜からは抵抗が全くない。むしろ、嬉々としてそれを舐め回してくるようだった。

「う、あ……さくら……」

?まるで指が性感帯になったように快感が伝わってくる。頭がぼうつとしてきて、正常な判断が出来なくなってしまう。

?いつの間にか止まってしまった腰と共に、突き入れた指を出し入れし始める。そうして俺に伝わってきたのは、未だ感じたことのない、背徳的な快樂だった。指と性器から伝わる性的な快感はもちろん、桜に指を舐めさせながら犯しているという事実さえ快感へと変わる。

?それにつられて加速していく情欲。その勢いに任せて、腰のスピードを速める。

「ふあ、は、ん……っ!?!んむっ、は、ふ……う……いー」

?俺の指をくわえながらも、抑えきれない嬌声が桜の唇から漏れる。多少苦しそうな色が混ざった声だが、今まで聞いたことのないそれに、ごりごりと強く生殖器を突き上げる。

? 性交はだんだんと激しく、危うい色を孕んでいく。四つん這いになって俺を受け止める桜と、それに覆い被さって指を舐めさせながら犯す俺。そんな、どうしようもなく淫らな交わりをしていると意識するだけでも、おかしくなってしまうそうだった。

? そして桜も、そんなふうに求めて合っているうちに理性が溶けてきたようで、俺の指への口淫が激しさを増してきた。舌で指の隅々までを舐め回しながら、しゃぶりつくように愛撫をしている。

? そのせいで、俺が桜を攻めているのに、桜からも犯されているような、奇妙な感覚に包まれる。でも、それがとても気持ちよくて、このままそれに溺れてしまいたいと思う程だ。

? いや、既に溺れているのかもしれない。桜から愛撫をされている部位だけじゃなく、桜と触れているところの全てから快楽が伝わってきている。

? そしてその感覚は、必然的に絶頂の瞬間も近付けてくる。桜の中で動く生殖器は、既にびくびくと痙攣し始めていた。

? それは桜も同じのようで、きゆうう、ときつく俺のものを締め付けている。そして何より、舌足らずに俺の名を呼ぶ声が、限界まで熱くなっていた。

「ふえっ……ふえん、ふあいつ……!ん、は……あ……わら、ひ、わらひ……っ、ひっひやう……!」

? その言葉と共に、一層締め付けの強さを増す桜の膣。その無数のひだは、射精を促すように激しく攻め立ててくる。それによってもたらされる大き過ぎる快樂に、声すら出すことができない。

? でもこれ以上無い程に、俺も桜も快感に染められている。なら、もうこのまま二人で絶頂してしまつていいだろう。互いに全身快樂漬けになつたまま、気持ちよく達してしまえばいい。

「ふえんふあいつ……ふえん、はい……っ!?ん、はっ……ふあああ……っ……ー!」

? びくん、と跳ねる桜の身体。その絶頂に導かれるように、俺も桜の中で果てた。どくん、どくん、と先ほど以上の勢いで精液を注ぐ。

? それがどうにかかなりそうな程に気持ちいい。桜と密着した状態で、一番奥で射精する。それが桜も気持ちよかつたのか、大きく身体を震わせて、再度絶頂したようだった。

「は、あ……んく……は……」

? 二人揃つて達した後のぼうつとした頭で、指先に違和感があることを感じ取つた。なんとか意識を集中させて確認してみると、まだ桜は俺の指を舐めていた。

? だが、桜はそれを無意識でしているようだった。舌や唇の動きに意思が感じられな
い。しかし、それでも相変わらず気持ちいい。

? だから、しばらくそうして指を桜の好きなようにさせていた。指先が桜の口内で溶

けているようなその感触は、絶頂の余韻に浸るにはちようど良かった。

?それから少し経って快感も抜けきった頃に、そつと桜との繋がりを解いた。さすがにずつとこの格好つていうのは、お互いに少しつらい。でも、桜の花びらから肉棒を引き抜いてからも、唇と舌で愛撫されている人差し指だけはそのままにしておいた。気持ちいいからというのももちろんあるが、こつそり覗いた桜の顔がどこか愛しげに俺の指を舐めていたからというのが大きい。

?少しの間、そんな桜の顔を横に座つて見ていたが、だんだんとその目が意識を取り戻してきた。そして、自分がずつとそうして俺の指を舐めていたことに気付くと、慌てて口を離した。

「ご……ごめんなさい、先輩!?私、ずつと先輩の指を……」

?俺の方を向いて座りながらそう謝る桜。その顔は、申し訳ないという気持ちと、恥じらいの色が混ざっていた。

「いや、いいんだ。そもそもそうさせたのは俺なんだし、その……気持ち、良かったし」
?元々は俺の身勝手な行動が原因なんだ。本当は、それを受け入れてくれた桜に感謝しなくちやいけないくらいだ。

「でも……」

?しかし、桜は俺がそう言ってもなお申し訳なげな顔をしている。

? そう罪悪感を感じることはない、俺は再度桜に言うが、それでも桜はその様子のままだった。

? そこで俺はひとつ思い付いた。

「桜。ちよつと、手、貸してくれ」

「え??はい、どうぞ……」

? 桜は突然の俺の言葉に、戸惑いながらも片手を俺に差し出した。それを俺は両手でそつと掴んだ。

? 不思議がる桜を一瞥し、俺はその人差し指を自分の口へ向けさせる。それで桜も察したのか、「あ……」と声を漏らした。

? だが、それでも桜には抵抗の色がない。それを確認してから軽く口を開け、その綺麗な指を口に含んだ。

「んっ……」

? ぴくりと震える指。それを安心させるように唇で優しく挟み込む。そしてほんの少しだけ唇を離し、もう一度唇だけでくわえる。

? そうして、何度か甘噛みのような接触をした後、舌先で挨拶するように指先に触れた。それを拒む様子が無いことを確かめてから、そつと舌を絡ませた。

「あ……先、ばい……」

? 理性と快感の間で揺れるような桜の声。それを全て飲み込むように、深く指をくわえ込んだ。

? 口内で強ばるそれをゆっくりと舐めていく。指の腹をそつとなぞるように、丹念に舌を這わせる。何度かそれを繰り返すと、桜から徐々に力が抜けていった。

? そして今度は少し激しくしていく。と言ってもほんの僅か。舌を動かすのを少し速くしただけだ。しかし、桜にとつてはそれだけではなかったようで、その目が快感に溶けていく様子が見てとれた。

? そして桜の方からも少しずつ指を動かし始めた。軽く出し入れするようなその動きに、俺もさらに舌を激しく指へ這わせる。

? それに応えるように、桜の指もその動きを増していく。自分から舌に指を絡めてきたり、激しく抜き差ししたりと、だんだんとその秘め事はディープキスに似てきた。

? だが、俺はそこで唇を離れた。これ以上は、多分俺の理性が危うい。それに、本来の目的はもう終わったのだから。

「ほら、これでおあいこだ」

「え、あ……そ、そうです、ね……」

? たどたどしい口調で言う桜。まだ先ほどの快感が抜けきっていないのかもしれない。い。

「で、でも……先輩……その、嬉しかったんですけど、私、あんなに恥ずかしいコト、してたんですね……」

「う……すまん、桜……」

？ 罪悪感払拭できたかもしれないが、代わりに羞恥をより強めてしまったような気もする。というか今の桜の言葉で、俺もかなり恥ずかしいことをしたという事実にも気が付かされてしまった。

？ それでお互い気恥ずかしくなってしまう、二人して視線を落とす。だが、それがまずかった。

「あ……」

？ その声はほぼ同時に俺たちの口からこぼれた。その原因は俺の方であった。

「先輩の……おつきく、なってます、ね……」

「あ、ああ……そう、だな……」

？ それが先ほどの舌と指の戯れのせいなのか、それとも二人で絶頂したときから既にそうだったのかはわからない。

？ 先の交わりで充分満足していたはずなのだが、身体のほうはそうではなかったようだ。しかし、その事実を知ってしまうと、心のほうも桜が欲しくなってしまう。

「え、えっと……もう一回しますか……？」

「いや、でももうたくさんしたんだし……桜だつて疲れてるだろう。」

「確かに疲れてないと言えば嘘になりますけど……で、でも……先輩だつてそのままじゃつらいでしょう……？」

？ そんな、互いに遠慮し合うやり取りを続けること数回。確かに俺だつてしたくないわけじゃないが、疲れている桜のことを思うとここで終わりにするのがいいと思う。

？ しかし桜はこういうときは結構強情で、俺はかなり押しきられそうになっていた。

「——それに、今夜は私と先輩の恋人同士としての『初めて』なんですから、二人で満足のいくまでしたいんです。心も、身体も」

？ そして、結局俺はその桜の言葉に負けた。それはまさにその通りといった言葉で、俺は何も言えなかったのだ。

「——ああ。そうだったな。それが一番大事だつて、忘れてた」

？ そのまま二人で抱き合つて口付ける。互いに何度か唇を重ね合った後、桜をそつと押し倒した。

？ 体力的にも恐らくこれで最後だ。だから、最後はお互いの顔が見えるのがいい。

？ 片手を使って桜のと自分のを触れさせると、湿った互いのものが音をたてる。ちゃんと桜のほうも受け入れられるのを確認して肉棒から手を離す。そして、両腕で桜を抱きしめた。

? そうやって密着したまま、ゆっくりと腰に力を入れて挿入していく。その時に、俺たちの間に言葉はなかった。互いの表情だけで、「ひとつになりたい」という気持ちは充分伝わったから。

? 三回目だからか、桜の花びらは驚くほど容易く俺のものを受け入れ、あつという間に奥へとたどり着いた。それと同時に、また桜へ口づけた。

? すると、桜のほうから俺の口内へ舌を侵入させてきた。軽く口を開けてそれを受け止める。そしてそれを合図にしたかのように、俺たちは腰を動かし始めた。

? ぬちゆり、ぬちゆり、と淫らな音を結合部から漏らしながら、緩慢な動きで桜と交わり合う。動きが遅いとはいえ、快楽は大きい。その上、桜と深いキスマでしているから、すぐに脳は桜で染まっていく。

「ん、ふっ……ちゅ、う……はっ……せん、ぱ……い……す、き……」

? 俺が桜の奥へ肉棒を深く挿入する度、桜はおかえしにとばかりに熱く舌を絡ませてくる。そうやって互いを強く求め合う交わりがたまらなく心地いい。

? そうして自然と腰の動きは速くなっていく。でも、求めるのは快楽だけではなく、愛情もだ。こうやって桜と身体を重ねていると、身体だけじゃなく心もつながっているような感覚になる。そしてつながった心は快楽でひとつに溶け合っていく。そこから伝わる桜の気持ちは、俺は欲しい。

?俺のその気持ちに、桜も強く応えてくれる。それは、俺と重ねている唇だったり、「好き」という言葉だったり、様々だ。

?でもどんな形であれ、俺はその全てが愛しく思える。そしてそれと同時に、それをもっと欲しくなってより強く桜を求めてしまう。そうやって、性交は自然と激しさを増していく。

?そうすると、俺の口内で響く桜の嬌声か熱くなっていく。それをもっと聞きたくて、少しの名残惜しさと共に唇を離れた。

「ん、はっ……せんぱい……っ、は、あ、あん、すきっ……大好き、先輩……っ」

?途端、あふれだすように俺の耳に届く桜の声。それに急かされるように、肌と肌が激しくぶつかり合う。

?その荒々しい性交に酔わされ、俺たちの目は互いのことしか映さなくなっていく。「桜」「先輩」と、幾度も名を呼び合って、互いに相手の心を自分に染め上げる。その、満たし、満たされる感覚が、おかしくなるほど気持ちよくて、どうしようもなく嬉しかった。

「先輩……!!?あ、ふあ、んっ……せんぱいっ……!!?もつと……あつ、もつ、と……!!?わたし、をっ……!!」

?もう、快楽は限界近くまで上がりきり、俺も桜もすぐにも絶頂してしまいそう

だった。でも、まだ足りない、もう少し、とこらえながら求め合う。

？射精を我慢するのはかなりきつい、麻痺しかけている感覚は、それすら快感に感じてしまう。繋がった生殖器からは互いの体液がだらしなくこぼれ、俺たちの交わりの激しさを物語っていた。

？でも、与えられる刺激が全て快楽へ変わっていくようになった俺たちに、そんなことはどうでもよかった。互いの頭にあることは、もう相手のことだけだった。

「せんばい……!?あ、ひあつ、は……つ、あ、わた、し、もう……!?あ、あんっ……もう、いっちやい、ます……!」

「さく、ら……つ、く、おれも、だか、ら……いっしょ、に……!」

？とはいえ、そうしているのも限界はある。いくらこのまま愛し合っていたいと思っても、こんなに激しくしているのだから終わりはやってきてしまう。

？でも、ここまで来たらそれに無理に抗おうとはしない。再度桜と唇を合わせ、貪るように舌と腰を動かす。ぐちゅぐちゅと、口と生殖器から淫らかな音をさせながら、互いに快楽を高めていく。

「んっ、ん——!」

？そして、互いに導かれるように果て、ぎゅう、と締め付ける桜の中へたまりにたまつた白濁を解き放った。桜の奥へ生殖器を突き入れて、何の遠慮もなく精を注ぐ。

? 勢いは前よりは弱い。しかし、量はそれ以上だ。三回も出したというのに、その量には俺も驚いた。

? それを桜は俺の身体を優しく抱きしめながら受け止めてくれている。それに甘えるように、とくん、とくん、と何度も短い射精を繰り返す。それは、抱き合いながら交わしているキスと合わさり、甘い甘い幸福感を運んでくる。

? それに二人で浸りながら、長い長い絶頂にしばらく身体を任せていた。

「先輩、ありがとうございます」

? 俺の腕の中で桜が不意にそう口にした。そこには控えめながらも、確かな親愛が込められていた。

? お互い快感が抜けきった後、俺たちは一緒にベッドに入っていた。今夜はこのまま二人で眠りたいと、言葉にせずともわかっていたから。

「私、知りませんでした。こんな風に先輩と触れ合うことが、あんなに……幸せだなんて」

? そのままの姿勢で桜は続ける。しかし、言葉とは裏腹に、その口調はどこか憂いを帯びていた。

? でも、その理由はちゃんとわかっている。桜は自らの罪の意識から、自分が幸福を

感じることに躊躇いを持っている。いや、躊躇いというよりも、もつと強い、そうであつてはいけないという、強迫観念のようなものだ。

?それを払拭することは、俺にはできない。それに、それは桜が長い時間をかけて向き合つていくものだから。

「——そつか。そうだったんなら、俺も嬉しい。桜が幸せになつてくれるのが、俺にとつての何よりの幸せだから」

?だから、俺にできるのはそう言つてやることだけだ。桜の幸せを、俺は本当に願つていふ。それで桜の罪の意識が消える訳ではないけれど、少しでも桜自身が幸せになろうと思つてくれたらいいと、俺は思う。

「先輩……嬉しいです。そんな風に、思つてもらつて……」

?未だその言葉に陰りを残しながらも、桜は言う。そして、今度は顔を上げ、俺の目を見ながら確かな声で続けた。

「だから……だから、いいですか……??また、こうやつて先輩に触れても、いいですか……?」

「ああ。いいに決まつてる。俺だつて、桜に触れたいんだから」

?その目を真つ直ぐ見つめ返しながら答える。桜は俺の言葉に、それを確かめるように目を閉じた。そして、今度は控えめに、だけど確かな笑みを浮かべて言った。

「ありがとう、ございます……大好きです、先輩……」

「——ああ。俺も好きだ。桜」

？　そう言葉を交わすと同時に唇を合わせる。触れたのはほんの僅かの間だけだ。それでも、確かにお互いの気持ちは伝わった。

？　それで俺も桜も満たされて、共に眠りについた。

寝起きドツキリ

「おはようございます、先輩」

? ぼやけた頭に不意に聞きなれた声が聞こえた。誰かはすぐにわかる。約二年前から毎日のように、ここ最近は何日聞いてきた声だから当然。俺の後輩であり、家族であり、恋人である、他の誰でもない、桜の声だ。

? こうして彼女に起こされるのも、半分日常化したことだ。あんまりこうやって起こしてもらうなんて、先輩としてどうかとも思うのだが、好きな女の子の声で一日が始まるっていう嬉しさは、なかなか手放しにくい。その場所は様々で、土蔵や今みたいに俺の部屋だったり、あるいは桜の部屋だったり。

「ん……ああ、おはよ、桜……」

? 目はまだ閉じたまま、頭を覚醒させながら答える。すぐに目を開けて桜の顔を見たもののだが、頭がぼんやりしているとそれすらおぼろげに見えてしまうのだ。だから、まずは意識を明瞭にしてからだ。

? そして、ようやくまともに機能し始めた感覚が、心地のよい温もりを伝えてきた。最近では段々と朝が冷え込むようになってきたので、その温かさには若干の違和感を覚え

る。

？だが、それが桜から伝わるものだとすぐに気付いた。身体に触れる気持ちのよい感触や、鼻をくすぐる香りが、桜と一緒に眠ったときのものと同じだったのだ。

？……ということとは、桜は今俺と添い寝でもしてるんだらうか。そう思い浮かべると、それだけでどきりとしてしまう。いや、そんなの今更という感じではあるのだが、桜は普段そういう大胆なことはあまりしないのだ。

？まあでも、最近バイトを再び始めたりして色々忙しく、桜との時間が足りていなかったようにも思う。それを考えると桜のこの行動も仕方がないと言えるかもしれない。

？それは少し悪いことをしたな、と考えながら、俺は半覚醒のまま目を開けた。

「……何やってるんだ、桜」

「何って、先輩を襲ってるんです」

？そうして俺の目に飛び込んできたのは、隣で布団に入っている桜なんて生易しいものではなく、俺の上にまたがって性器を挿入した桜の姿だった。

？下半身は脚に引っかけた下着が一枚、上は一応寝巻きを身に付けていた。裸ではないのだが、中途半端に肌が見えているというその格好は、ある意味裸よりも淫靡に見える。

?一瞬、夢でも見ているのかと思ったが、それにしても桜の感触がリアル過ぎる。特に、生殖器に伝わる温もりと、それによって生じる快感は現実そのものだ。

「いや、襲ってるって……なんでさ」

「最近、全然していなかったの、久しぶりに先輩としたいなと思ひまして」

?確かにそれは事実だろうけど、こうやって朝から俺を襲う理由にはならないだろう。したいのだったら、いつかののように部屋にきて欲しい、とか言ってくれればいいのだし。

?別に、こうされるのがイヤな訳ではないからいいのだけれど、桜らしからぬこの行動の意図が知りたかった。

「それに、いつもは先輩に気持ちよくしてもらってばっかりですから、たまには最初から最後まで私がしてあげたいんです」

?そういうえば、思い起こしてみると、桜の言う通りのような気がする。始めは桜に口や手でもらっても、結局は俺が桜を攻めて終わっている。桜に任せるとか言つて上で動いてもらつておいて、最終的には俺だけが桜を突き上げていたなんてこともあった。

?それでも桜は満足そうにしてくれていたのだが、ずっと攻められつ放しという事実を思うところがあつたのだろうか。

「……なるほど。理由はわかった。でも桜、俺を襲うにしても、この時間はまずいんじゃないのか？」

「朝はいつも起きてすぐに二人で朝食を作り、その途中で藤ねえや遠坂が家にやってくる。こんな時間に二人でしていたら、真つ最中を目撃される、なんてこともあるかもしれない。」

「藤ねえはまだいいかもしれないが、あのあかいあくまに見られたらしばらくからかわれる羽目になるだろう。」

「それは大丈夫ですよ、先輩。時計を見てみてください。」

「？そう桜に言われるがまま、枕元に置いてある時計に目をやる。時計の針が示すのは午前四時。おまけに今日は俺も桜も一日特に用事はない。」

「そうだな、確かにこれなら問題ない」

「はい、ですから私に襲われてくれませんか??先輩」

「?ぐちゅ、と腰を動かしつつ、微笑みながら桜は言った。」

「桜。逆に聞くけど、俺がお前からの誘いを断ると思うのか？」

「いいえ、きつと先輩は応じてくれると思つてましたけど……その、本当は少し、不安でした」

「ばか、そんな心配なんてするな。俺は桜が好きだし、こうやって桜とするのも好きだ。」

それに、こんな風に桜からしてくれるの、俺は凄く嬉しかったよ」

？とはいえ、最近桜とそういう時間を作ってなかったのは、素直に俺の落ち度だ。桜がこういう行動をとるに至ったのは、寂しさもあつたはずだろうし。

？だからその詫びに、今日は桜に全部任せよう。

「ありがとうございます、先輩……それじゃあ改めて——先輩を襲っちゃいますね」

？満面の笑みで嬉しげに言う桜に、俺も笑つて答えた。

？……ただひとつだけ心配がある。桜が俺に口や手でしてくれる奉仕は、どうにかなりそうな程に気持ちがいい。そんなことを好き勝手にされるのを想像すると、少しだけ怖くなった。

？だが、そんな一抹の不安も、その後に交わした激しいキスでどこかへ吹っ飛んでいった。その口付けも程々に、唇を離れたあと桜は一度俺との繋がりをほどいた。

？ただ、その時妙なものが見えた。俺のものを引き抜いた桜の花びらからこぼれた液に、僅かに白いものが混じっていたような気がした。まだ起きたてだから見間違えかもしれないが、そうじゃなかったら、俺は既に一度桜に搾られたということになる。それを桜に尋ねようか迷つたが、知らないほうがいいような気がしたのでやめておいた。

「最初は手でしてあげますね」

?桜はそう言つて俺の隣へ横たわると、屹立した俺のものをそつと包んだ。しかし、そのまましごき始めると思つたら、不意に俺の頭の横へ顔を寄せてきた。

「それと、先輩のお耳も犯してあげます」

?そして否応なしに俺の耳をはむ、と口に含んだ。それと同時に始まる性器への手淫。性器を滑る桜の手は、そう速いスピードではないが、耳への愛撫と合わさつて大きな快感を伝えてくる。

「う……桜っ、それ……す、う……」

?そのあまりの気持ちよさに、身体を痙攣させてうめき声を漏らしてしまふ。桜は俺のその反応が嬉しかったのか、愛撫を激しくし始めた。

?だが、それは性器のほうではなく、耳のほうだった。入り口のあたりを唇で挟んだり、キスをしたりするだけだったのが、穴へ舌を侵入させてきた。

?その快感にぞくぞくと背筋に電流が走る。耳の穴をぐちよぐちよと舌で犯される感覚が、未知の快感を運んでくる。また、快感はそれだけではなく、耳を舐められる時の淫らな水音や、桜の湿った吐息の感触も、俺の脳を溶かしていく。

?しかし、それとは反対に、性器への愛撫は優しいものだった。もちろん、一番感じるところを刺激されているのだから、気持ちいいのは確かなのだが、射精を促されるほど激しくはない。

? 桜が今している手淫は、俺を焦らすような、そんな感覚だ。多分、桜はわかってやっているのだろう。どうすれば俺が気持ちいいのかを桜は知っているのだから、焦らすなんて簡単だ。射精をギリギリで我慢するのも結構大変だが、こうして焦らされるのもきついものがある。

? だが、その足りない快楽を耳舐めが補ってくれる。好きな女の子に口と舌で耳を犯されているという事実が、背徳的な快感に変わる。しかし、それは精神的なものが大きい。いくら熱く耳を愛撫されても、それだけで射精してしまう訳ではないのだ。よつほど溜まっているのなら話は別かもしれないが。

「ん、は……先輩、どうですか……?? 気持ち、いいですか……?」

? ? 口を離して桜はそう聞いてきた。桜にされている時点で気持ちよくないはずなのだが、こういうことはお互い初めてだから、桜も不安に思ったのだろうか。

「ん……気持ちいい、ぞ……す……でも桜、こんなの、どこで覚えたんだ……?」

「ええと、その……ラ——い、いや、自分で考えたんです、先輩、こういうの気持ちいいかな、って……」

? 「ラ——」とは何だろうか。いや、大体予想はつくけど、ここではあえて追及しないでおう。後で直接本人に聞けばいい。

「そ、それより先輩、そろそろ、もう少し激しくしてあげますね」

「うん、頼んだ」

? 桜は再度耳へしやぶりつくと、そちらの愛撫はそのままに、性器を少し速くしごき始めた。増したスピードは僅かだが、快感は数倍に膨れ上がる。

? さらに桜はその手の動き自体にも変化をさせてきた。人差し指を先端に這わせ、くりくりと撫でるように動かし始めた。その快感に思わず腰が跳ねる。性器の中でも最も敏感な部分を竿と共に刺激される快感は、先ほどとは全く違った。

? 龟头だけへの刺激ならば射精してしまうことはないのだが、竿をしごかれている状態だと、射精感 は 性器の中に少しづつ溜まっていく。その上、耳舐めまでされているとなれば、この遅い動きのままでも出してしまいかねない。

「ん……ちゅ、ちゅ、う……は……」

? そして、桜は耳への愛撫も段々と激しくし始めた。口を大きく開けて俺の耳全体を覆い、舌で激しく舐め回す。耳の凹凸を丁寧になぞったり、穴の深くへ舌をねじ込んできたりと、まるで片耳を桜に食べられているようだった。

? 耳から与えられるその快感は、徐々に全身へと染み渡っていく。もちろん、手淫をされている生殖器も例外ではない。それによって桜からの愛撫に感覚が敏感になっていき、少しずつ射精への欲求も高まってきてしまう。

? それは桜もわかることだったようで、手の動きが射精を促すそれへと変わってきて

た。竿を掌全体で包んで激しく上下させつつ、亀頭に添えた人差し指で優しく撫で回される。

? そんないやらしい愛撫に、否応なしに射精感を引き上げられる。性器は桜の手の中で軽く痙攣し、腰も少し浮いてきた。

「ちゅ、ぢゆる、う……あ……先輩の、びくびくして……もう、いっちゃうんですか……？」

「う、ああ……そろそろ、まずい、かな……」

「じゃあ、もつと激しくしちゃいますから、好きなきに私の手の中に出しちゃってくださいよ」

? 囁くように桜は言つて、その言葉通りにしゅこしゅここと射精に向けて俺のものをしごき始めた。その瞬間に俺を襲ったあまりの快感に、のけ反りそうになる。

? それはなんとかこらえたが、桜が耳を舐めたり、性器を擦る度に、何度も身体を反応させてしまう。桜はそうやって俺が反応するほど、嬉しそうに俺への攻めを強くしてくる。

? さらに、そうやっているうちに桜も熱が入ってきたのか、俺に自らの身体を密着させてきた。脚と脚を絡ませ、脇腹の辺りにその豊満な胸を押し付けてくる。

? 桜の肉付きの良い身体を押し当てられ、勝手に俺の情欲はかきたてられる。それと

同時に高まる射精感。このまま耳を犯されながら、柔らかい桜の手を白く汚してしまいたい。

「さくらっ……もう、出る……！」

「ぢゅう……っ、んちゅ……ぷは……はい、先輩の精液、私にください……！」

？桜の舌が耳の奥深くに入れられるのと同時に、その手が精を搾り取るように強く性を締め付けた。その桜の誘いに促されるまま、どく、と精液を吐き出した。

？堰を切ったようにあふれる白濁。それが桜の綺麗な手を汚していく。桜はそんなの構わないとばかりに、射精中も俺のものをしごき続ける。それに導かれ、どくん、どくん、と幾度となく桜の手の中で精を放った。

「す……い……先輩の、いっぱい出ます……！」

？大きな快感の波が去ってからも、とくとくと緩やかな射精が続いていた。そしてそれを促すように、耳に浅いキスをしながら、桜は優しく俺のものをしごいてくれる。そして最後にとぶん、と勢いよく精液を吹き出して、射精は終わった。

？桜は俺のものからそつと手を離すと、そこについた精を丁寧に舐めとる。まるでそれを生クリームかのように、桜はおいしそうに飲み込んでくれる。

「先輩、気持ち良かったですか？」

「ああ。すごく良かった。耳を舐められるのも、少し驚いたけど気持ち良かったよ」

? 一通り桜が精を舐め終わった後、二人で布団で横になりながらそう言葉を交わす。桜はその間、いとおしそうに俺のものを撫でていた。その手の中の生殖器は、未だに固さを保っている。

「なら、良かったです。……でも、まだまだいっぱい気持ちよくしてあげますからね」

? 桜はそう言うのと、俺の股間の前に移動し、俺に脚を開くよう促した。桜は俺の脚の間に座ると、今度は腰を浮かせるように言ってきた。それに従って腰を上げると、桜はその下に正座した膝を滑り込ませた。

? そのまま口でするのかと予想したが、桜は自らの寝巻きのボタンを外し始めた。上から順にひとつずつ、焦らすように自らの肌をさらしていく。

? そして全てのボタンを外し終わると、桜は肩をはだけさせてその綺麗な素肌を俺の目にさらした。最初からうすうす気付いてはいたが、桜は下着を身に付けていなかった。

? 必然的に、その美しい形の乳房が俺の目に映る。何度も見ているとはいえ、やはり桜は綺麗だ。みずみずしい肌も、その恥ずかしげな表情も、すべて魅力にあふれている。「次はおっぱいで先輩の、気持ちよくしちゃいますね」

? しばらく桜の姿に見とれていたが、その言葉で現実に戻された。桜は二つの胸をそれぞれ自らの手で支えながら、その谷間に俺のものを挟んだ。

? その、桜の豊満な胸に自分のものが埋もれているという光景に、ごくりと唾を飲む。桜もこの行為に緊張しているのか、触れている胸から心臓の鼓動が伝わってくる。

「え、えっと……ぱいずり、っっていうんですよね、これ……初めてですけど、頑張ります」
? 自分を奮い立たせるように桜は言って、両手でゆっくりと胸を上下に動かし始めた。先の手淫によって肉棒が濡れているため、スムーズに乳房が擦り合わさられる。

? その摩擦によって、柔らかな快感が性器を包み込んだ。口とも、膣内とも違う感触。こうして性器が触れていると、手で触ったり揉んだりする時よりも、鋭敏にそれを感じ取れる。

? 確かな熱と弾力をもったそれが生殖器と擦れるだけで、心地の良い快感がもたらされる。桜が自身のの上を持ち上げると、その豊かな胸の中へ性器がすっぽりと飲み込まれてしまう。まるで桜の胸に溶かされるような感覚。

? そうやってしばらくその甘い快楽を味わっていたが、不意に桜が顔を性器へと寄せてきた。そのまま口で亀頭を愛撫するのかと思ったが、桜は性器へ自らの唾液を落とし始めた。それは谷間へ少しずつ溜まっていき、俺の精液と混ざり合う。

? それによって性器と肌の滑りがよくなり、自然と胸の動きは速さを増していく。そうすると、当然生じる快楽は大きくなる。しかし、それは射精感を高めてくるような激しいものではなく、感覚ごと俺を溶かしてくるような甘美な快感だった。

「先輩……ごめんなさい、ちよつと我慢できなくて……先輩の、食べちゃいますね……」
?しかし、桜はそうして俺のものを挟んでいるうちに興奮してきたのか、熱い吐息混じりにそう言った。そして、俺がそれに反応する前に先端をぱくりと口に含んだ。

?それと同時に訪れる痺れるような快感。既に敏感になつていた亀頭に桜の柔らかな唇が触れるだけで気持ちいい。そして、ぬめつた舌で舐められると、腰が抜けそうな快感が襲ってくる。

?桜が亀頭を口に含んだ、ただそれだけなのに、快感は大きくその色を変えた。胸の動きはそれほど速いわけではないにも関わらず、口での愛撫と合わさると、強く射精を促してくる。

?口からの強い快感と、胸からの甘い快樂。そんな、二つの全く違う刺激にさらされ、俺の脳はみるみるうちに淫樂で溶けていく。

「は、む……ん、んっ……ちゅ……は……先輩……すっごい気持ち良さそうな顔してます……」

?そのせいで表情まで緩んでいたらしい。それを想像すると少し恥ずかしくなつたが、そんな体裁なんかを気にしている余裕はない。それに、桜にだったらそういう顔を見られてもいいとも思つた。

?桜はそんな俺をもつと気持ちよくさせようと、胸を上下させる速さを激しくしてき

た。しかもそれだけではなく、二つの乳房の動きを左右交互にさせてきた。

? それによつて、快楽はさらにその形を変えてくる。さざなみのように優しかったものが、津波のようになって睾丸に溜まった精液を押しだそうとしてくる。

? しかしそれでも、二つの乳房に埋もれた生殖器が溶けていくような感覚だけは変わらなかった。桜の柔らかな感触が為せる技だろうか。

? その谷間に挟まれながら、淫らな水音と共に激しく愛撫される。それが俺の脳髓を犯しながら、生殖器を快楽に染め上げる。

「ん、あむ……っ、はっ……ちゅ……ふえん、はい……」

? 段々と熱を帯びていく桜の奉仕。特に口での愛撫は、先端の形がわからなくなってしまうほどに激しかった。さらに、竿への刺激も決して弱くはなく、ずりゆずりゆときつく締め付けながら擦り上げてくる。もう、生殖器の中で桜の感覚で染まっていない場所はなく、本当に桜に食べられているようだ。

? 桜のほうもかなりその行為に夢中になっている様子で、俺のものを愛撫するその表情が嬉しげだった。おいしそうに亀頭を口に含みながら、肉棒を包む胸の動きに緩急をつけて俺を悦ばせようとしてくれている。

? 生殖器全体を快楽に浸されながら、そんな光景まで見せられて、俺の限界は強制的に近付いてくる。頭の中はもう、溶けるような感触の中で果てることだけでいっぱい

だ。

？考えられることはそれだけ。溜まった熱い白濁を、桜の胸に思い切り射精してしま
うことだけだ。

「さくら……もう、だして……いいかな……」

「ん、ぶは……はい、いいですよ、私のおっぱいに、たくさん出してください……」

？桜も俺と同じで、胸に出して欲しいと思っていたのか、口を離して胸だけで愛撫を
始めた。いや、もしかしたら俺の意思を汲み取ってくれたのかもしれないが、それを考
えていられる程今の俺の頭はまともじゃない。

？桜は俺を射精させようと、容赦なく胸を上下させてくる。両手でぎゅつと胸を押し
付けて、まるで膣内のように強く生殖器が締め付けられる。

？それによって否応なしに引き上げられる射精感。精液は尿道を限界まで上つてき
て、あと僅かで出口に到達してしまいそうだ。

？そして最後の一押しとばかりに、桜はこれ以上ないほど速く胸を動かす。それが俺
の肌とぶつかり合い、まるで激しく腰を打ち付けているときのような乾いた音をたて
る。

？その激しい桜の愛撫に、とうとう俺も耐えられなかった。

「きやつ……!?あは……先輩の、でた……」

?桜の胸の中で勢いよく吹き出す白い精液。それが桜の顔や胸を汚す。しかし、桜はそれを嬉しそうに受け止めながら、優しく胸を揺らす。

?そんな桜に甘えて、躊躇うことなく桜の胸に精液を吐き出す。びく、びく、と何度も性器を痙攣させて、溶けるような快楽に浸ったまま射精し続けた。

?そうしてほとんどの精を出し終わった後、残ったものが緩やかに流れ出る。桜はそれを、亀頭に口をつけて優しく吸い出し始めた。

?そこから伝わるびりびりした快感。多少のくすぐったさも混ざったそれに流されるまま、桜の口内にとろとろと精を注いだ。

「ん、は……先輩の、おいしいです……」

?俺の出したものを全て飲み下し、桜は顔を恍惚とした色に染めて言った。その表情は、こびりついた白濁と合わさって、おさまったはずの俺の情欲をかきたてる。

「桜……」

「はい、先ば……んむっ……!?!」

?それで我慢できずに、身体を起こして桜の唇を奪った。段階なんて無視して、強引に舌をねじ込ませる。舌や歯茎まで口内の隅々を犯し、桜の力が抜けた頃にそつと舌を絡ませた。

?桜もそれにすぐ順応し、舌を俺のほうへと突き出してきた。それを受け止め、互い

の口の間で濃厚に絡ませ合う。戯れるようにつつき合ったり、激しく貪り合ったり、満足のいくまで舌と舌での愛撫を楽しんでから唇を離した。

「は……………つ、あ……………ふふ、我慢できなくなっちゃったんですか??先輩」

「いや……………あんなコト桜にされて、我慢しろってほうが無理だ」

「じゃあ……………ちゃんと責任取らないと、ですね」

? 桜はそう言うのと、脚を俺の腰の下から引き抜き、その上にまたがった。そうすると自然と俺の目にさらされる、桜の花びら。その様子から、俺を攻めているだけで桜も興奮していたことがわかった。

「最後は私の中で気持ち良くなってください、先輩」

? その言葉を合図にしたかのように、桜は生殖器同士の接合を始めた。入り口と先端がそつと触れ合うと、それだけで互いの身体に快感が走る。

? それに身体を震わせながらも、桜はゆつくりと俺のものを飲み込んでいく。桜の花びらもうどろどろになっっているから、挿入は容易い。桜が腰を下ろす動作には、まったく抵抗がなかった。

「ん……………つ、先輩……………このまま、動きます、ね……………」

? 全てを挿入しきって間もなく、桜は腰を動かし始めた。布団に手を突き、上下に生殖器を出し入れされる。それは、動き始めにしてはやや激しいものだった。桜も我慢の

限界だったのかもしれない。

?さらに、桜は俺の腕を掴むと、掌を自らの乳房に触れさせた。その感触に、桜の中でびくん、と生殖器が反応する。

?それを、高ぶる情欲のまま愛撫する。でも、今は桜に任せると決めているのだから、激しくはしない。掌全体で包みこんで、撫でるように触れる。俺はそれだけでも満足だし、桜もそれが気持ちよさそうだった。

「あ、あん……っ、先輩……は、んっ、先輩の手、あつたかい……」

?俺の腕を掴んでいた桜の手が、俺の手に重ねられる。そして、桜のほうから俺の手を動かしてくる。その動きに任せて、桜の胸の形を歪める。

?円を描くようなその動きが桜は気持ち良かったのか、生殖器を抜き差しするその動きが熱くなり始めた。ぐちゅ、ぐちゅ、と生殖器の中で互いの液がかき混ぜられて、いやらしい音が響く。

?それと同時に高まる快樂に、こっちも腰を動かしたくなるが、それはこらえる。獣のように激しく求め合う性交も好きだが、こうして桜の望むままに快樂を与えられるこの交わりも、それとは別の良さがあった。

?桜が俺を気持ち良くさせようとする気持ちが、快感と共に伝わってくる。それに応えるように、胸に這わせた手に少しだけ力を込める。桜はその刺激に対して心地よさげ

に身体を震わせてくれる。それだけでも充分嬉しかった。

「はあ、んっ、先輩、あっ……きもちい、いっ……」

? 少しずつ桜の声から理性が抜けていき、代わりに快感の色が混ざり始める。そしてその色が強くなるほど、桜の動きも激しさを増していく。互いの肌がぶつかる音が大きくなっていくのも、それを証拠付けていた。

? さらに、結合部からもれた互いの淫水がその音と混じり、ぱちゅ、ぱちゅ、と淫らな音をたてる。それは、桜の口から漏れる甘い嬌声と共に、俺の脳を壊してくる。

? 既に目は桜のことが見えなくなって、気が付けばとっくに俺は桜に溺れていた。でも、溺れているようだが何だろうが、お互いに気持ち良くなれるならどうだっていいだろう。何より、そうして俺が快感に染まっているのが、桜は嬉しそうだった。

「先輩……あ、はっ、あん、すきっ、せんぱい……っ、ふあ、あ……すき、です……っ」

? そして桜のほうも、かなり快感に溶けてきているようだった。その悩ましげな声が見え、舌足らずになり、腰の動きも自分の本能のままに動かしているようだった。

? そうやって、二人で淫らに狂っていくのがたまらなく心地いい。馬鹿になったみたいに「好き」と言い合いながら、快楽の海に溺れていく。

「さくら、く、あっ……桜……俺、もう、いく……っ」

「はっ、あん、あ、せんぱい、わたし、ひあっ、は……わたし、も、です……っ」

?そして、気付いた時にはもうすぐそこに絶頂の瞬間が迫ってきていた。しかし、もうとつづくに後戻りできないところまで来てしまつて、それを止めようとすら思えなかつた。

?それに、桜も同じように限界を迎えようとしている。それならば、このまま共に果ててしまえばいい。淫楽の海で溺れたまま、二人で飛んでいくほど気持ちよくなつてしまえばいい。

「桜、いく、出るっ……さくらっ……!」

「せんぱいつ、あ、あんっ、ふあああつ……!」

?そして、どちらが導いた訳でもなく、俺たちは共に絶頂した。びくびく、と激しく身体を痙攣させて、熱く焼けそうな声をあげながら。

?そして桜の一番奥へ、残っていた精を全て解き放つた。亀頭を思い切り押し付けて、一滴残らず注ぐように射精する。

?桜はそこをおかえしとばかりに、身体を倒して俺に口付けてくれた。そのまま優しく唇を啄み合う。時折軽く舌を絡ませながら、甘いキスを交わす。

?そうやって、溶けてしまいそうな快感に二人で包まれながら、抱き合いながら俺たちはしばらく余韻に浸っていた。

「……結局、私も気持ちよくなっちゃいました」

? 赤く染まった顔を布団で隠しながら、恥ずかしそうに桜は言った。

「別にいいじゃないか。ああして桜にしてもらうのも良かったけど、やっぱり二人で一緒っていうのが俺が一番好きだよ」

? 頭の後ろに回した手で軽く髪を撫でながら言う。

? 今は既に繋がりを解いて共に布団に入っている。服はお互いに半脱ぎのままだが、こうして抱き合っていれば充分暖かい。

「はい、そう言ってもらえると助かります……」

? 未だに顔は赤いが、目はこちらをしつかりと見ながら桜はそう答えた。

? その言葉に満足して、もう一度くしゃりと髪を撫でる。桜はそれに気持ちよさそうに目を細める。

? 可愛らしいその反応を見ながら桜に一つ提案をする。

「なあ、桜。このまま、二人で寝たいんだけど、いいかな」

? 実は今、かなり眠い。桜だけ残して一人で寝ないようにと頑張っているのだが、気を抜けばすぐに眠りに落ちてしまいそうだ。している真つ最中は全然眠くなかったのだが、終わってしまうと途端に眠気が襲ってきてしまう。

「あ、実は私もそうしたいな、って思ってたんです」

? 若干の照れを見せながら桜は言った。

? 桜がそう答えてくれるのは大体予想できていた。何故なら桜は今日、俺よりも確実に早起きなのだから。もしかしたら昨晚に早寝をしていたりもするのかもしれないが、それにしても休日こんな早起きは少しきついだらう。

「じゃあ、二度寝しようか、桜」

「はい、先輩。おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

? 軽い口付けをしてから共に目を閉じる。途端に襲ってくる強烈な眠気。それを身を任せて、俺たちは心地いい眠りについた。

「おっはよー!!」

? ……という訳にはいかなかった。

? 玄関が開く音と共に響いてきたのは、他の誰でもない、藤ねえの声だった。

「しまった。藤ねえがいるのを忘れてた」

? さっきまでの眠気が嘘だったかのように、一瞬で脳までもが覚醒した。それは桜も同じで、俺とほぼ同時に目をぱちりと開け、困ったような笑みを浮かべながら言った。

「眠れなくなっちゃいましたね、先輩」

「ああ。仕方ない——よし、起きるぞ、桜」

「はい、藤村先生を待たせちゃ悪いですもんね」

？そんな風に軽く言葉を交わしながら布団から出て、お互いに急いで服を着る。ついでに顔や身体についた汗なんかを拭いて、二人で台所へ向かった。

桜の夜

? その日は、特段変わったことがあつた訳ではなかつた。いつもと同じように、朝起きてみんなと朝食をとり、学校へ行って授業を受ける。そして弓道部での活動を終え、またみんなと夕食を囲んでからお風呂に入つて床に就く。

? でも、そんな一日の流れに変化は無くても、今日という日そのものには少し思うところがあつた。一年前の今日は、先輩が私だけの正義の味方になると誓つてくれた日なのだ。隠していたこと、黙っていたことを全て知つてなお、私を守ると抱き締めてくれた日。

? ——それともう一つ。先輩と私が初めて交つた日。だからだろうか。私は今、先輩のことを欲しがつていた。

? 別に、あの夜のように身体がうずいている訳ではないのだけれど、どうしてもあの時のことを思い出してしまう。ちょうど今のような、日付が変わるか変わらないかくらいの時間だった。

? この気持ちを静めるのは簡単。今から先輩の部屋に行つて、抱いてほしいと伝えればいい。きっと先輩は応じてくれるだろう。

?でも、安易にそれを行動に移すのは、少し躊躇われた。別に、恥ずかしい訳ではない。いや、それが全く無いといえれば嘘になるのだけれど。

?その理由は、単純に明日に響くとまずいからだ。私は明日も学校があるし、先輩もバイトが入っていると云っていた。そして何より、私たちは昨晚も身体を重ねたばかりだった。

?さすがに二日連続というのは、身体に負担がかかるだろう。私は別にいいけれど、先輩にそれを強いるのはイヤだった。

?でも、先輩は鍛えているから平気だろうかなんて、自分の都合のいいように考えたりもしてしまう。その上、そうして迷っているだけでも、先輩を求める気持ちは高まっていく一方で、身体の方まで火照ってきてしまう。

?そうやって毛布の中で身体を丸めて悩むこと数分。先輩の部屋に行くのはやめた。やはり、自分のエゴを通すことより、先輩の身体を優先した方がいい。今度、お互いに余裕があるときにすれば済むことなのだし。

?しかし、そう決めたのはいいが、高まった心と身体はそう簡単には収められない。だから、そちらだけは別の方法で落ち着かせる。

「ん……………」

?片手を脚の間に這わせ、指先でほんの少しそこを圧迫する。それだけで快感に身体

が震えてしまう。それと同時に伝わるべたついた感覚。

「濡れてる……」

？先輩との行為を思い出しただけで、そこはいやらしく反応していた。そして、その事実を知ってしまうと、余計にその気持ちは加速してしまう。

？考えるより先に、自然と指先は動く。寝巻きの上からだというのに、敏感になった感覚は快感をはつきりと伝えてくる。指の腹で割れ目をなぞるだけで、全身にぞくぞくとした感覚が走る。そして、さらに強く力を入れてそこを刺激すると、身体を電流が突き抜ける。

？それで私の中のスイッチが入ってしまった。横にして丸めていた身体を仰向けにして、もう片方の手を唇まで持つてくる。その指の一本に、軽く唇で吸い付く。まるで、先輩と口付けをしているかのように。

？いつもは先輩が激しく唇を求めてくれるけど、今は私だけだから思い切り吸い付く。何度も唇を離しては、少し角度を変えて再びしゃぶりつく。

？そうして段々と指が唾液で濡れていき、感触が本当の唇のようになっていく。そのせいで、私は余計にその行為に没頭してしまう。

「ん、せん……ぱい……」

？頭は少しずつぼうつとしてきて、無心で指と唇を擦り合わせていた。でも、次第に

それだけでは足りなくなってきた、私はそれよりもっと先へ進んでいく。

? 指先をこちらへ向けるように角度を変えて、口内にそれを侵入させる。それと同時に私の方も、それを迎え入れるように唇を開ける。そして、第一関節が入りきった辺りで、舌を指に触れさせた。

? そのまま、デーブキスのようにそれらを絡ませる。先輩の舌の動きを真似て、口内を犯すように舌と触れ合わせる。でもそれだけじゃ物足りないことに気付いて、さらにもう一本の指を口内へ入れた。

? それでもやっぱ先輩の感触とは異なる。だからそれを補うように、お留守になつていた片手を胸へ触れさせた。それを掌で覆って、多少乱雑に揉みしだく。

「あ……………」

? その気持ちよさに、勝手に声が漏れる。まるで、先輩に激しく唇を貪られながら愛撫されているよう。それがもっと欲しくて、寝巻きのボタンを外し始めた。

? はやる気持ちを抑えて、ひとつひとつゆっくりと外していく。先輩も、いつもこうやって優しく私の服を脱がせてくれる。

? そして全部外し終えてから、ぱさりとそれをはだけさせて、下着の上から乳房を包んだ。私の手では先輩のように全てを覆うことはできないけど、それでも気持ちがいい。

? わしづかみにして揉んでみたり、乱暴に手を動かしてみたり、好き勝手に自分の胸の形を歪める。そうしていると、その激しい手の動きで下着が段々とずれてくる。それがわずらわしく感じて、口に入れていた手を後ろに回してホックを外した。そして、胸に這わせた手で下着を剥いで、身体の横に置いた。

? それによつてタガが外れたように、私はさらに胸への愛撫を激しくし始めた。両手で二つの乳房を包んで、何かを搾り出すように手を動かす。そして、人差し指と親指で丘の頂上にあるものをつまんだ。

「は、あ……っ、せん、ば……い……」

? びくん、と大きく身体が跳ねる。やっぱり性感帯への刺激は快樂が大きい。

? そのまま指で乳首への愛撫を続ける。先輩のようになりくりと転がしてみると、それだけで本当に先輩にしてもらっているような感覚。時折強くつまんでみると、少しの痛みと混ざった快感が身体を突き抜けて気持ちいい。

? そうやって胸を弄びながら、腰と脚を使って下にはいているものも脱ぐ。少し手こずったが、何とか足首の辺りまで降ろせた。でも、この先は手を使わないと難しそうだ。
? 名残惜しさもそこそこに、片手を胸から離して脚に引つ掛かった寝巻きを脱がせた。その後、その手を胸には戻さずにいやらしく湿った陰部に触れさせた。

「んんっ……い……」

? 先の行為で敏感になっていたのか、思った以上の快感が私を襲った。下着は既に愛液で濡れていて、先輩のを受け入れることぐらいは容易い状態。要するに、出来上がってしまっている。

? もうここまで来たら止めることなんてできない。最初の内は下着の上から弄ろうなんて考えはどこかへ行き、乱雑にそれも脱ぎ捨てた。

? そして、覆うものが何も無くなったそこへ指を這わせた。もう片方の手は胸を触ったまま、はしたなくひくくついている割れ目へ中指を侵入させる。

「は……あ……あ、先輩、んっ、はあ……っ、せん、ばい……」

? 「先輩」と言葉にするだけで、熱い生殖器が挿入されているような感覚だ。その感覚を損なわないように、先輩のやり方と同じように優しく指を突き入れていく。

? 不意に蘇る、あの夜のこと。ちゃんとした段階も理由も省略して、半ば強引に先輩と交わったあの夜。私は罪悪感に苛まれながらも、先輩とひとつになつていく喜びを感じていた。

? その感覚が、今のこの行為と重なる。私だけが動いて、先輩の熱いもので自分の中を割っていく感覚だ。先輩の意思を無視することへの罪悪感ですら、その行為の中で快感に変わっていく。

「ん、んあ、あ……はっ……」

? そんな妄想をしていると、いつの間にか指は全て中へ入りきっていた。どれくらい時間がかかったのか、我を忘れていた自分にはわからない。

? でもそんなことはどうだっていい。今、私の頭の中にあるものは、気持ちよくなりたいたいという欲望だけだった。

? その欲望に従い、突き入れた指を動かす。ぬるりと軽く指を引き抜き、再びゆつくりと差し込む。激しく抜き差ししたいけれど、そうしてしまつたらすぐに達してしまふ。

? だから、最初は焦らすように優しい動きで性器を刺激する。それに、先輩との行為を妄想しながらの自慰だから、このままでも充分なほど気持ちがいい。

「せんばい……っ、あ、は、あん……んっ、ふあ……」

? その快感で知らず知らずのうちに、口からこぼれるはしたない声は、淫らな色と熱を帯びてくる。でもそれに気を使っているほどの余裕なんてない。

? ともに機能しなくなった頭は、どうすれば自分が快樂を得られるかだけを考え続けている。そうして、指を動かす速度を速めると同時に、さらに薬指もそこへ入り込ませた。もうぐつしよりと濡れていたから、挿入は容易かった。

? そのまま二本の指で再び出し入れを始める。過剰分泌される愛液で、その動きは滑らかだ。それによって、勝手にその速さを増し、生じる快樂は大きくなっていく。

「あつ……あ、は……んっ、ひあ……あ……っ……」

? 私の頭はその快樂によつて酔わされ、ますますその淫らな行為に没頭してしまふ。大した時間もたたずに抜き差しは激しくなり、じゅぶじゅぶといやらしい水音が響き始める。

? 性交時と似たその音で、私はすっかり先輩との交わりの妄想の中に溺れていた。何度も何度も熱い生殖器で膣奥を突かれて、先輩に激しく犯される妄想。

? それが余計に快樂を加速させる。全身が性感帯のようになつて、ベッドと擦れる感触でさえ気持ちがいい。胸を触る手を動かせば、それだけで快感に震えてしまふ。

「せんばい……あ、あんっ、ん、は、あ……せんばいつ……」

? 高まつていく快樂に身体はびくびくと痙攣し、絶頂はすぐそこまで来ていた。そして、私の心も同じように果てることを求めていた。

? それを促すように、遠慮なく指を出し入れする。乳房を包む手も、それを手伝うように激しく揉みしだく。

? そうやつて私は自分で自分を追い込んでいく。だけれど、既に私は妄想の中。先輩が激しく腰を振つて、私をいかせようとしてくれるようにしか感じられなくなつていた。

? そして、妄想と自慰によつて快感に染まつていくことも、もう限界だった。身体の

中に溜まった快樂は、もう容量いっぱいになってしまっている。

? だから、後はそれがあふれただけ。心と身体が弾けるような感覚で果ててしまうだけだ。

「あ、ひああつ……!?せん、ぱいつ……!」

? ベッドが軽く軋む程に身体を跳ねさせながら、私は絶頂した。その瞬間、きゅん、と膣が反応するのがわかった。

? もし先輩のが入っていたら、今ので射精してくれたかもしれない。そんなことを頭の片隅で思いながら、私は全身の力を抜き、そのまま絶頂の後の余韻に身を任せた。

? でも、何か足りない。実際に先輩とした訳ではないのだからそれは当たり前なのだけれど、普通ならもっと満たされた気分になってもいいはずなのに。

? だが、先輩と恋人同士になる前に一人で慰めていた頃の虚しさとも違う。そもそもあれは、叶わないことを妄想していたことからくるものだった。

? でも、本当は理由なんてわかっている。私が本当に欲しいのは、先輩との性交で得られる快樂ではなく、先輩の温もりなのだ。だから、いくら気持ちよくなるうとも足りないと思ってしまう。

? そんなこと、最初からわかっていた。でも、それを自覚してしまつたら、この気持ちを静める方法が先輩と身体を重ねることだけだと悟ってしまう。だからそれを紛ら

わすように一人で慰めたのだけれど――

「先輩……」

? その結果、先輩を求める気持ちが強くなったただけだった。しかも、下手に快樂を得たせいで、身体まで昂つている。

? どうすればいいんだろう。もう一回する? いや、きつと結果は同じだろう。疲れ果てて眠ってしまう程まですれば話は別だけど、さすがにそこまでするのは躊躇われた。

「はあ……」

? ため息と共に、一つの答えに行き着く。結局、先輩の部屋に行くしかない。それに、やっぱり今日は先輩のそばにいたい。

? 身体を起こして、ベッドの周りに落ちていた寝巻きをはき、私は先輩の部屋に向かった。

? 未だに外は雨が降っている。あの日は私達が家に帰ってくる頃には止んでいたのだけれど。でも、この雨音が私の足音を消してくれているから、今は都合が良かった。

? そんなことを思いながら、先輩の部屋への廊下を歩く。そういえば、今日はなんて言つて誘えばいいだろう。ストレートに抱いて欲しいと言えばいいだろうか。それとも、魔力をもらつて欲しいという口実でもいいかもしれない。

?——ああ、いやそれはダメだ。切羽詰まって仕方ない時ならともかく、方便でその理由を使うのはよくない。

『ちゃんと恋人同士として——』

? そう言っていた先輩の意思を無視してしまう。

? だから、ちゃんと正直に——

「桜?」

? 不意に呼び止められ、思考を停止させた。顔を上げると、いつの間にか先輩が目の前にいた。

「あ……先輩……」

? 私が言えることじゃないけれど、こんな時間にどうしたんだろうか。今は午前一時頃で、先輩はとつくに床に就いていたはずだ。

「どうしたんだ??こんな時間に」

「あ、えつと……お手洗いにいくこうかと……」

? さすがにここで本題を切り出すことはできず、適当な嘘で誤魔化した。でもこれは少し失敗だ。このまま言葉通りにお手洗いに行って、その後先輩の部屋に行くというのは不自然だ。だからといって、先の言葉を訂正して本当のことを言うのもなんだか気恥ずかしい。

「桜、トイレはこつちじゃなくて、反対の方向だぞ?」

「え、あ……」

? 訂正だ。少し失敗ではなく、大失敗だ。焦ったせいで墓穴を掘ってしまった。さすがにこれは誤魔化せない。

? それに、よく考えたら私が歩いていた方向には先輩の部屋しかない。ここで先輩と会ってしまった時点で、私がどこに用があるのかは明白だった。

? 私がその考えに至ったとほぼ同時に、先輩も察したような表情に変わった。

「あ……えっと、俺の部屋に来ようとしてたん、だよな……?」

? その言葉に返事は出来ず、こくりと小さく頷くのが精一杯だった。

? こんな時間に女性が男性の部屋に赴く目的なんて、他人が見ても簡単にわかることだ。その事実がお互いの間に気まずい沈黙をもたらす。

「あのさ、桜。その……俺も、桜の部屋に行こうかと思つてたんだ」

「え……?」

? 数秒間続いたそれを破り、先輩が放った言葉は、私の予想外のものだった。

? そして、わき上がる淡い期待。それを胸に抱きながら、恐る恐る聞いてみる。

「あ、あの……それは、どうして……」

「それは……何となくあの夜のことを思い出して、桜が欲しくなったんだ。昨日も桜と

したからどうしようか迷ったんだけど、結局——んぐっ!？」

？それを聞いて、どうしても我慢できなかった。元々昂っていた心と身体は、先輩の言葉で弾けてしまい、たまらず先輩に抱きついて唇を奪った。先輩が私と同じ気持ちだったというだけで、嬉しくてしようがなかった。

？私の突然の行動で驚き、固まったままの唇を強引に開いて、口の奥へ舌をねじ込んだ。いつもとは反対に、私先輩の口内を貪る。先輩の熱を感じられるように、頭の後ろに回した両手で強く引き寄せて、口の奥まで舌を入り込ませた。

？そして、先輩を深く味わうように何の遠慮もなく口を犯す。先輩のを包みこむように唇を触れ合わせ、中に入れた舌で先輩の唾液をじゅるじゅるとする。

？溜まっていた気持ちは私の想像以上に多く、その行為に歯止めなんて効かなかった。本当なら、ここで先輩を押し倒してしまいたいくらいなのだけれど、さすがにそれはほんの僅かに残った理性がせき止めた。

？でも、それもいつ決壊してしまうかわからない。だから、僅かに頭が冷静になったタイミングで唇を離れた。二人の間を唾液が糸を引いている。それが重力に引つ張られて落ちていくのが少しもつたいなかった。

「さ、桜……」

「ごめんなさい、先輩……でも私、先輩が私と同じこと考えてたんだ、って思ったら……」

嬉しくて……」

「え……じゃあ、桜も……？」

「はい……私もあの夜のことを思い出してたんです。……それで、先輩が欲しくなつて……」

「？ やつと正直な気持ちを言えた。順序は逆になつてしまつたけど、何も言えないままよりはいい。」

「？ あとは先輩が応じてくれるかだけれど、そんなことは考えなくてもわかる。先輩だつて同じなんだから。」

「？ それがお互いにわかつたからか、私たちはそれ以上言葉を交わさなかつた。その代わりに一度だけ浅い口付けを交わし、二人で手を繋いで先輩の部屋に向かつた。」

「せん、ばい……ん、う……」

「ん……さくら……」

「？ 部屋に入つて障子を閉めるなり、私たちは引き寄せ合うように唇を重ねた。座ることすらせず立つたまま、互いの背中に腕を回して、きつく抱き合いながら二つの唇を擦り合わせる。」

「？ 私もさつき激しく先輩を求めたおかげで落ち着いたのか、貪るような口付けにはな

らなかつた。それは先輩も同じで、優しく私の唇に重ね合わせてくれる。

?でも、優しいのはあくまで唇だけの話。抱きしめる強さはお互いに痛いくらいだし、先輩はじりじりと私に体重をかけてきて、しまいには部屋の壁に押し付けられた。

?でもそれは全然イヤじゃない。そうやって先輩に強く求めてもらえるのは、とても嬉しいことだから。

?そして私もそのお返しにと、先輩の侵入を誘うように軽く口を開けた。私のその唇の動きに先輩はすぐに反応して、何の躊躇いもなしに舌を入れてきた。

?それを迎え入れるように、控えめに舌を触れさせた。先輩はそれに応じて、軽く舌先でつつくように触れてくれる。

?そうやって戯れるように、また焦らすようにつつき合った後、私の方が我慢できなくなつて、先輩の舌に絡み付いた。それによって生じる快感に身体が震える。

「ん、う、は……あ、ちゅ……」

?それがもつと欲しいと、さらに深く舌を触れあわせようとする前に、今度は先輩の方が求めてくれた。私に強く唇を押し付けて、舌だけではなく私の口内全てを舐めとるように先輩が這い回る。

?その愛撫は、それ自体がまるで媚薬のようになって、私の理性を溶かしてくる。そして溶け出したそれは油のようになって、心の中の情欲を激しく燃え上がらせる。

？恥じらいや、順序なんかどうでもよくなって、私は先輩を抱きしめていた手の片方をゆつくりと動かし始めた。背中から腰の辺りまで下ろして、そこからだんだんとお腹側へ回ってくる。そして、するするとズボンのところまで手を下ろすと、熱くて固い膨らみにたどり着いた。

？それが気持ち良かったのか、それともただ単に驚いただけなのか、先輩は身体を僅かに震わせて反応してくれた。それが嬉しくて、掌でその膨らみを優しく撫で回す。上下に擦ったり、弧を描くようにしたり、はたまた悪戯心で軽く圧迫してみたり。

？そうして、半分楽しむように先輩のを弄んでいると、私の首に回されていた先輩の左手が離れた。そして、なんだろうと思っていると、その手が私の胸を包んだ。

「んっ……ん、んあ……は、ちゅ、う、う……っ……」

？その刺激に今度は私の方が身体を反応させてしまう。元々敏感になっていたせいで、特に力を入れられた訳でもないのに、必要以上の快感に包まれた。

？しかも、たった今気付いたのだけれど、下着を身につけるのを忘れてきていた。だから、先輩の手と私の肌を隔てているのは、薄い寝巻き一枚だけだ。それが余計に快感を伝えてくる。

？そして、私がノーブラであることは先輩にだってわかつているだろう。恥ずかしいけれど、そんな感情でどぎまぎする間もなく、先輩が強く愛撫を始めたことで頭の中は

一瞬で快樂に染まった。

? その愛撫は、やり始めにしては少し激しい。先輩もかなり興奮してくれているのかもしれない。掌で覆つて揉むのはもちろん、乳首をつまんだりして強い快感を与えてくれる。

? そのお返しに、私もより先輩を気持ちよくしたい。一旦膨らみを撫でるのを止めて、ズボンのジツパーに手をかける。そして一息に下ろしきり、その中で苦しそうにしていた先輩のものを掴んだ。

? 包んだ掌の中で、熱い生殖器がどくどくと脈打っている。その様子に、先輩も私と同じくらいに興奮してくれていることが、文字通り手に取るようにわかった。

? そんな先輩を悦ばせたくて、激しく上下にしごく。それは快感を与えるための動きではなく、射精してもらうためのものに近い。でも、加減ができるほど私はもう冷静じゃない。

? 最初からどうかしていた心を何とか留めているのも、もう限界だ。それを促すように、先輩も激しく私を気持ちよくしてくれる。

? そうして先輩と私の二人で求め合ううちに、私たちの心は繋がりを欲しがり始めた。こうしてただ二人で気持ちよくなるのもいいけれど、本当に欲しいのは温もりなのだから。

「ん、は……桜……もう、入れているかな……」

「はい……私も、先輩のが欲しくてたまらないです……」

？一旦手と唇の愛撫を止め、荒い呼吸をしながらお互いの気持ちを確認する。そして触れていた手を離して、ひとつになる準備を始めた。

？先輩はズボンのベルトを外して、下着ごとそれを脱いだ。そしてあらわになる先輩のものを傍目に、私は先輩に背を向けて壁に手をついた。そのまま、挿入をねだるように尻を先輩へ突き出す。

？先輩は私の尻に両手で触れて、軽く撫で回してきた。まだ一枚の布が間にあるけれど、温かい先輩の手で触られるだけで気持ちがいい。

？……ちよつと待ってください。一枚の布??私はまだ寝巻きなのだから二枚あるはず——

「あれ、桜、下着は？」

「え……」

？先輩に言われてようやく気付いた。上だけでなく下まで身につけるのを忘れていた。いくら先輩が欲しいことだけで頭がいっぱいになっていたとはいえ、さすがにこれは間が抜けている。

「あ……そ、その、早く先輩と繋がりがたくって……」

「そ、そっか……」

? 迷ったが、そんな理由でお茶を濁した。本当ではないけど、全く嘘という訳でもない。一人で慰めていたから、と正直に言うよりはマシだ。

? 少し怪しまれたかもしれないが、一応先輩は納得してくれたようだった。

「……じゃあ、桜。脱がすぞ」

「は、はい、先輩……」

? そんなやり取りもそこそこに、先輩はゆっくりと私の寝巻きを脱がせてくれた。そして、先輩は再び両手で私の尻を包んで、濡れた陰部へ生殖器をあてがった。

? あんな嘘で誤魔化したけれど、その濡れ具合でバレたかもしれない。でも、先輩にだったら知られてもいいかな、と思いながら、それが挿入されるのを待った。

「桜、いくぞ……」

「はい、先輩の、ください……」

? そして、先輩は軽く力を入れて私の中へゆっくりと先端を押し込んできた。ぷくりと膨らんだ亀頭で入り口を拡げられると、背中にぞくぞくとした快感が走る。

? そして開かれた入り口へ、熱いものがずぶずぶと挿入されていく。その、先輩に割かれていくような感覚だけでもどうにかなくなってしまいそうだ。

? 快感ももちろんあるが、先輩とひとつになつていく事実だけで頭が溶けてしまうほ

ど嬉しい。

「ん、んあ、あ、先輩……っ、は、あ……」

? 自分で慰めていたせい、私の中はかなりほぐれていて、いつもより滑らかに先輩の生殖器の挿入を許している。だから、そのことによる苦痛は皆無で、快感だけが私の身体に染み込んでいく。

? そして、あっけなく先輩のものは私の奥へたどり着いた。その先端に、私の子宮口がキスしているのが、自分でもわかった。それほどに私は先輩を欲しがっている。

? それが先輩にも伝わったのか、それとも先輩が我慢できなかったのか、腰が優しく動き始めた。それでも、初めから愛欲で染まった私の心と身体には、それだけで大きな快感だった。

? 名残惜しさをもたらしながら引き抜かれると、すぐさまその虚脱を無くすように一番奥へ挿入される。そして、それが繰り返されるほどに、満ち足りた感覚と快感が増していく。

「は、あんっ、先輩……先輩、あ、んっ、ふあ……」

? それでも食欲な私はまだ足りない、と先輩を求めてしまう。「先輩」と何度も口にして、先輩を悦ばせようと尻を上下に揺らす。

? そうすると、先輩も気持ちよさそうな声を漏らしながら、より強く私を求めてくる。

その大きな手で尻を鷲掴みにされ、突き上げるように生殖器を抜き差しされる。

? そして、時折私に応えるように「桜」と名前を呼んでくれる。それだけで嬉しさに身が震えてしまう。そんな風に、身体だけじゃなくて、心でも求め合う感覚がたまらない。

「桜……っ、さくら、ぐ、う、さくら、好きだ……っ!」

「先輩……あ、あっ、ひあ、はいっ……私も、好きです……!」

? 求め合う声が互いの理性をどろどろに溶かしていく。先輩は激しく犯すように私に腰を打ち付け、私は膣の形を変動させるように尻を動かす。

? 私たちの性交は、既に荒々しいものへ変わり果てていた。盛りをついた獣のように、快楽を求めて乱れ狂う。

? 先輩が激しく奥へ生殖器を挿入する度に、恥じらいなんか捨てて淫らな声を上げる。そうすることですらも気持ち良かった。

? でも、求めるのは快楽だけじゃない。それはあくまでスパイスに過ぎない。私が、先輩が欲しいのは互いの体温と、好きという気持ちだけだ。

? それを得るために手っ取り早いのがセックスというだけ。そしてそれが熱く激しくなるほど、互いの気持ち根深く伝わってくる。だから私たちは強く求め合うのだ。

? でも、今日という日も手伝ってか性交は必要以上の熱を持っていた。既にラストス

パートとばかりに快楽を貪り合い、お互いに絶頂が近付いていた。

「あつ、んは、はあつ……!?!せんばいつ、わた、し、あつ……もう、だめ……っ!」

「ああつ、おれ、も……もう限界、だ……!」

?でも、私たちはとづくに引き返せないとこまで来ていた。先輩を悦ばせようと揺らしていた腰は、いつしか自分が快楽を得るための動きに変わり、もう私の意思でそれを止めることはできない。そして、膣の中で暴れる先輩のものは、射精寸前とばかりに膨らんでいた。

?その限界の状態の互いの生殖器を、私たちはぐちゅぐちゅと絡み合わせるように求める。少し早いけれど、このまま二人で果ててしまいたいから。

「あつ、いく、いくっ……!?!せんばいつ……!」

「く、さく、らあ……っ!」

?そして二人で一緒に声を上げながら、私たちは共に絶頂した。私は自分から先輩のものを迎えるに行くように尻を押し付け、先輩は私の一番奥でどくん、と果ててくれた。

?そのまま先輩は、子宮に直接注ぐように生殖器を押し付けて射精し続けてくれた。それがあまりにも気持ちよくて、私はもう一度軽い絶頂を迎えた。

?でも、そのせいで身体を支えていた力が抜けてしまい、倒れそうになってしまう。それを先輩が途中で気付いて、両手を私の前に回して支えてくれた。

?でも先輩も力が入らないようで、二人で前に倒れそうになる。そこで先輩は私を抱えたまま後ろへ何とか座り込んだ。私に痛みが来ないように気遣ってくれたから、代わりに先輩が少し痛そうだった。

?でも、座った先が布団の上だったからか、先輩は特に痛がる様子もなく、そのまま私の中へ精液を注いでくれている。だから、私もそれに甘えて、先輩に身体を預けて余韻に浸った。

?私がそうしている間も、先輩はとくとくと優しく射精を続け、お腹に回した手で時折いとおしそうにそこを撫でてくれる。

?しかし、しばらくそうしていると先輩が不意に耳元で囁いた。

「……桜、ごめん。俺、我慢できない」

「え、せんばい……?」

?私その言葉の意味を考えるよりも先に、先輩は再び腰を動かし始めた。生殖器の先からはまだ緩やかに射精が続いているにも関わらず。

?そして、絶頂したばかりで敏感になっている私は、否応なしに快樂によがってしまった。

「あ……ふあ、あん……だ、だめです……せん、ばい……ひあ、あ……」

?先輩の動き自体は優しい。けれど、この体位で深く挿入された生殖器と、さらに奥

で射精される快感で、過剰なほどに感じてしまう。

?さらに、先輩はお腹に回した両手を上へ這わせて、私の乳房を愛撫し始めた。しかもいきなり乳首を攻めて、快感を強く与えてくる。

?それによつて高まる快感で、ブレーキなんて全く効かなかった。

「ひあ、あ、ああつ……!?せんぱいつ……いく……いー」

?そのまま私は再び絶頂した。しかも先ほどより激しい快感に襲われて、大きく身体を震わせながら。

?そしてそれに比例するように強く先輩のものを締め付けた。そのせいで緩やかだった射精が、急に勢いを増した。奥に生殖器を押し付けられたまま、びゆくびゆくと注がれる。

?そのあまりの勢いと量に、私の中へ入りきらない精液がごぼりとあふれ出した。それでも構わずに、先輩は吐精を続けながら腰をゆつくりと動かす。

?それで私もおかしくなつてしまつて、自分からも腰を動かし始めた。

「う、あ……さく、ら……つ……」

「あん……せんぱい……は、ふあ、あ……」

?必然的に膨れ上がる快感。理性はいつの間にか消し飛んでいて、それを止めることなんて到底不可能だ。

？私にできるのは、かさを増していく愛欲の海に溺れていくことだけ。我を忘れてしまふ程のそれに飲み込まれるのは少し怖いけれど、先輩と一緒にだつたら別に構わないと思つた。

？それを促すように、私の中へ熱い精が遠慮なく注がれる。膣内は精液で満たされて、少し動くだけでもいやらしい水音が響く。私たちの交わりは激しさこそ少ないものの、その代わりに深く、濃厚だ。

？それがアルコールのようになって私たちを酔わせていく。時間の感覚は曖昧で、身体の限界なんかまるでわからない。残っているのは気持ちいいという感覚と、好きという感情だけ。

「は……………あ、せんぱい……………すき……………ん、あ、はっ……………あんっ、先輩、愛して、ますっ……………」
？でも、そうやって壊れてしまふように気持ちのいい時間も終わりはやってきてしまふ。私も、先輩も身体の方が限界だつた。

？何の前触れもなく、私たちは布団に倒れ込んでしまった。意識はまだ明瞭なのに、身体が動かない。まだ先輩とこうしていたいという気持ちだけが健在だ。

？それでも何とか身体を動かかそうとしていると、後ろから先輩が絞り出すような声で言つた。

「……………悪い、桜……………もう……………」

?それでやっと私の頭は冷静になった。これ以上先輩に無理をさせちゃダメだ。

?そしてそれに気付くと同時に、意識がだんだんと薄れてきた。

「はい……私も、です……」

?それに、もう充分満たされた。あとはこのまま先輩と眠りにつけばそれで満足だ。

?「おやすみなさい」と言えないのが少し残念だけど、この温もりに包まれたまま眠れるのならそれくらいはいいだろう。

?そうやって、私たちはひとつになったまま深い眠りについた。

発情バレンタイン

「はあ……うぷっ……」

? ため息と共にむせそうになりながら、俺は浴槽に寄りかかった。そんなことをしても、今俺の頭を悩ませている問題は何も解決しないのだが。

? 別段、深刻な問題というわけではない。ただ、チョコレートの食べ過ぎで胃もたれしているだけだ。

? そう。今日はバレンタインデー。俺は朝からそこそこの数のチョコを貰っていたのだ。

? 朝、家に来た藤ねえから渡されたのを皮切りに、遠坂、ライダー、バイト先のネコさんからまでもチョコを受け取っていたのだった。

? もちろん、チョコをくれるのはとてもありがたいことなのだが、問題はその後。一つや二つならいいのだが、多くなつてくるとさすがに胃にダメージが来る。

? 明日に回せばいいのかもしれないが、なんとなく今日の内に全て食べなければいけない気がして、ついさつき食べ終えたところだ。

? まあしかし、びつくりする程多いわけでもなし、少し休めばこれぐらいなら平気だ。

むしろ、本当の問題は別にある。

？本命である桜からまだチョコを貰っていないことだ。一応俺たちは恋人同士なのだからと、前日から結構楽しみにしていたのだが、桜はそんな素振りすら見せない。

？もしかして忘れているのかもと心配になってくる程だ。でも、テレビなんかが好きりにバレンタインの話題を放送していたし、嫌でも今日のこと意識させられるはずだ。

？もしや、わざと夜になるまで待つていたんだらうか。だとしたらバレンタインのチョコレートというのは――

「……なに考えてんだ、俺」

？一瞬だけ頭をよぎった不埒な考えを払拭するように、ぱしやりと顔にお湯をかけた。そもそも、色々考えたところでどうにかなるわけではない。

？今日桜から貰えなかったとしても、それで俺と桜の仲が何か変わるなんてことはない。だから、いつもと同じように今日の残りを過ごせばいい。

？でももしも貰えたのなら、そのときは精一杯感謝しながら頂こう。

？いつもよりゆっくりとお湯につかり、胃の調子も落ち着いてきたところで俺は風呂から上がった。そして、そのあと何となく居間に行ったが何も無かったので、桜の部屋

に行きたい気持ちを抑えつつ自室に戻ってきた。

? 障子を閉め、部屋の照明を点けて畳の上に座り込む。気晴らしに魔術の鍛練でもしようかと、俺は机の引き出しに手を伸ばした。ハンカチか何かが入っていたはずだ。

「……………」

? しかし、その直前に机の上に何かが置いてあることに気が付いた。近付いてそれを見てみると、それは薄い長方形の箱だった。

? 箱の色は鮮やかな赤色で、そこに控えめに薄紅色のリボンが結ばれている。そしてそのリボンに挟まっている白色の小さな紙には、『Happy Valentine』の文字が綺麗に刻まれている。

? 間違いない。これは桜からのバレンタインチョコレートだ。この時間、他にチョコをくれる女性はいないし、この箱の飾りすぎない装飾も桜らしさが出ている。

? ちゃんと桜から貰えたことへの安堵が押し寄せると同時に、言葉にし難い嬉しさが込み上がってきた。こういう、物を贈ることだけが気持ちを伝える方法ではないが、やはりそういうことをしてもらえると、自分たちが恋人同士なんだと実感できる。

「ありがとう、桜」

? そう一人呟いて、それを手に取った。本当は直接感謝の気持ちを伝えたいところだが、わざわざこんな渡し方をしたことは、きつと手渡すのが恥ずかしかったのだろ

う。

？だからここでは一人で頂いて、後日二人の時にそれとなくお礼を言えばいい。そう思いながら、綺麗に結われたリボンに手をかけた。

？破かないように、それをそつとほどこいていく。結び目を外し、十字に巻かれたそれを取つたら、軽くたたんで机におく。ついでに挟まれていた紙も。

？そうして結わえるものが無くなったフタを外すと、ハートの形をしたチョコレートが一つ中に入っていた。大きさはそれほどではないが、決して小さいわけでもない。食べるのにちょうど良い大きさだ。

？チョココの表面は美しい艶が出ており、可愛らしい装飾も施されている。チョココ自体にリボンを結ぶようにホワイトチョコレートで綺麗な線が描かれ、端のほうには桃色の線で櫻の花びらがあしらわれている。

？そして、チョコレートの横にはささやかなメッセージカードが添えられていた。

『日頃の感謝を込めて、バレンタインチョコというものを作ってみました。もし良ければ食べて頂けると嬉しいです』

？桜らしい、控えめな言葉。それでも確かな親愛が込められている。それに感謝しつつ、手作りのそのチョコレートを手に取る。

「いただきます」

? そうして、挨拶をしてから食べ始めた。軽くチョコにかぶり付いて、ぱきりと折る。そして口の中に入ったそれをゆっくりと味わうように転がす。

? 苦味は少なく抑えられ、甘味と程よいバランスがとれている。さらに、カカオの良いい香りもそれを引き立てている。そんな風にじっくり味わいながら舐めていると、すぐに口の中へ入れたチョコは無くなってしまった。

? だから次はもう少し多くかじる。その味を再びゆっくり感じながら、しみじみと考える。桜の料理の腕は本当に上手くなった。しかも、こんな風にお菓子まで作れるようになって。そんなことを思っていると、またもやすぐに食べ終わってしまった。

? さらに、このチョコレートはそこまでの大きさではないから、あと一口で終わりだ。少し名残惜しいけれど、それをばくりと口に含んだ。

? その最後の欠片には、わざと残しておいた桜の飾りがある。別に特別な気持ちがあつた訳でもないが、なんとなく最後に食べたかった。

? そしてそれを先ほどよりもさらにじっくりと味わって食べる。それを何度も口の中で転がす。長い時間味わえるようにと、必要以上の接触はしないように。それをチョコが溶けてなくなるまで繰り返した。

「(こちそうさまでした)」

? そして、手を合わせて食後の挨拶をする。あつという間の食事だったけれど、十分

に満たされた。腹だけではなく、心も。

? だから今日はその気持ちのまま布団に入ろう。そう思って俺は立ち上がろうと――

「あれ……?」

? できなかつた。身体に全く力が入らない。何かの勘違いかと思つてもう一度立ち上がろうとしたが、やはり無理だ。

? 一瞬、ライダーの石化の魔眼かと思つたが、あれはだんだんと動けなくなっていくもの。しかし、これは突然全く動けなくなつた。

? じゃあ、これは一体何が原因だ。今日は特別何らかの魔術に触れたりはしていない。変わったことと言えば、チョコレートをたくさん貰つたこと――

「あ……」

? まさか、食べたチョコの内のどれかに何が入っていたのか?

? しかし、それを考える前に俺の思考は塗りつぶされ、意識は闇へと消えていった。

「あ、気が付きましたか??先輩」

? 次に意識が戻つたとき、目の前に桜の顔があつた。

「うわっ!? さ、桜!」

? それに驚いて思わず情けない声を上げてしまう。それでも後ろに飛び退くのは何とかこらえたが。

? いつの間に桜は俺の部屋に来たんだ。いや、そもそもここは俺の部屋なんだろう。それを確認しようとするが、視界がぼやけていてよくわからない。

? わかるのは目の前で普段通りの服を着た桜が優しく微笑んでいることだけだ。そして、その口がゆつくりと動く。

「先輩、ここは私の部屋ですよ」

? 俺が状況を把握できないことを最初から知っていたかのように、桜は言った。そう言われて辺りを見渡すと、確かに桜の部屋の雰囲気がある。照明は完全には落とされていないが、スタンドの電気が一つ点いているだけぐらいには薄暗い。

? そして、尻の辺りには桜のベッドの柔らかい感触。推測だが、俺たちは隣同士でベッドに腰かけて顔だけ向き合っているのだろう。

「で、でもどうしてここに……さつきまで部屋にいたはずなんだけど……」

? しかし、そうすると浮かんでくる当然の疑問を口にする。部屋で倒れた俺をここまで運んできたんだろうか。

「先輩は自分でここに来たんです」

「え?! いや、俺にそんな覚えはないぞ」

？俺が最後に覚えているのは、自室でチョコを食べ終えたことだけだ。そこで意識が無くなって、気付いたらここにいた。

？いや、ちよつと待て。桜からのチョコを食べた後に気を失って、いつの間にか桜の部屋に來ている。そして、明らかに何か知っている素振りの桜。これはまさか――

「桜。お前、あのチョココレートに何か入れたか？」

「はい。その……ちよつとした催眠効果のある薬を、少しだけ入れさせてもらいました」
？それで全てに合点がいった。それなら俺が自分でここに来た、という桜の言葉にも納得がいく。

？いやしかし、桜はちよつとした催眠効果と言ったが、結構な効き目ではなからうか。確かに効果時間で言えばほんの二、三分程なんだろうが、その間だけでも俺の意識は完全に消されていたことには驚きだ。

？そんな風に勝手に感心していた俺だったが、ひとつ重要な疑問が思い浮かんだ。

「なるほど。訳はわかったんだが……桜。どうしてこんなことをしたんだ？」

「それはもちろん……先輩に食べて欲しいものがあるからです」

？桜は俺の問いに、僅かに頬を朱に染めて答えた。その様子にどきりとする。強くはないが、僅かな色香を帯びたその表情に。

？風呂場で一瞬だけ考えた、下劣な想像が思い起こされる。そんな不純な期待を抱き

ながら、俺は桜に聞いてみる。

「さ、桜……それって……」

「はい、先輩の目の前にあるものです」

？桜は優しく微笑んだまま、俺の言葉を待っていたかのように答えた。

？俺の目の前にあるもの。それは桜しかない。つまり、桜からの本当のバレンタインチョココレートとは、桜自身ということだ。

？ごくりと唾を飲み込んで、桜の頬にゆつくりと手を伸ばす。しかしその手が触れる前に、桜は俺を制止するように自らの手をそれに重ねた。

「先輩、こつちじゃなくて、そつちです」

「え？」

？そう言っつて、桜は手に取った俺の手を横へ向けた。それに従ってそちらへ顔を向けると、イスが置いてあった。

？桜の部屋にいつももある、洋風の木製のものだ。その上には白いクロスが敷かれ、そこへ小皿に乗ったチョココレートが数個置いてあった。

？一口で食べられる大ききで、球体の形をしている。そして表面にはココアパウダーがまぶしてある。所謂、トリユフというものだ。

「こつちが本命のバレンタインチョココレートです」

? 不意にそう言われ、桜に視線を戻した。そこでやつと気付いた。俺は顔だけ桜に向けて、身体はイスの方を向いていた。確かに目の前と言えばそうだ。

? さっきの自分の行動が恥ずかしい。だが桜の表情から、わざと紛らわしい言い方をしたのではとも思ってしまう。

「な、なるほど。これ、トリユフチョコレートだろ??こんなものも作ってたなんて知らなかったよ」

「はい。先輩に喜んでもらいたくて、ちよつと頑張っちゃいました。……それと、先輩?? さっきは何を想像したんですか?」

「う……」

? 無理矢理チョコの話題に変えたがダメだった。桜は動揺している俺に、愉しそうな表情を浮かべている。

? これは絶対にわざとだ。ちよつと悔しいが、その反面そんな桜も可愛いとも思ってしまう。

「そ、それより桜。溶けるといけないから、チョコレートひとつ頂くぞ」

? 適当な答えも思い付かず、半ば強引に話を切ってチョコに手を伸ばした。溶けるとか言ったが、冬場じゃあ溶けないだろうと自分でも突っ込みながら。

「あ、ちよつと待ってください。私が、その……食べさせてあげますから……」

? その一言に、俺は全身の動きを止めた。そのままぎこちない動きで桜の方に向き直る。

? 桜はそんな俺に構わずに、俺と入れ替わるようにチヨコへ手を伸ばす。そしてその一つを手にとって、俺と同じように向き直った。

? さすがに桜も恥じらいが残るようで、先程よりも赤く頬を染めている。それで俺もやけに緊張してしまう。

? ここはどうするのがいいんだろうか。「食べさせる」と言うのだから、口を開けるべきなのか。それとも桜が「あーん」と、魅惑的な言葉を言うのを待つべきか。

? しかし、桜が取った行動は俺の予想とは反対のものだった。

「ん……」

? 桜は手に持ったチヨコを俺に差し出したりはせず、逆に自らの口にくわえた。口内には入れず、唇だけではむ、とそれを挟みこんでいる。

? そして、俺の方へ少しだけ顔を上げてそつと目を閉じた。まるで、口付けを誘うかのように。

「や、桜……」

? その行動の意図するところはわかった。そして俺がどうするべきかも。

? でも、だからといってそれをすぐに行動に移すことは出来なかった。別に、キスを

することに躊躇いがある訳じゃない。俺と桜はもう数え切れないほど口付けを交わしているのだから。

?でも、こんな形は初めてだ。互いの唇を合わせながら何かを食べるなんて。しかも、これは桜からの想いが込められたバレンタインチョコレート。

?そんな、ある意味キスよりも恥ずかしい行為に緊張しないはずがない。

?だが、そんな風に尻込みしていても何も解決しない。チョコだつて溶けてしまふし、何より桜に失礼だ。

?俺は覚悟を決めて、壊れ物でも扱うかのように桜の両肩に手をかけた。そして、だんだんと顔を近づけていく。心臓はぼくぼくと跳ねて、視線はチョコ——というよりも桜の唇に釘付けた。

?こんなの、まるで桜とファーストキスをするみたいだ。そんなことを考えている内に、桜との距離は一センチもない程まで短くなっていた。

?そして、軽く口を開けてチョコに恐る恐る触れてみた。傍目にはキスしているように見えるだろうが、まだ桜の唇とは僅かに離れている。

?少しの照れがそうさせたのだが、いざそこまで進むとそんなものはすぐに消えた。チョコを中ほどまで口内へ入れ、控えめに唇に触れる。

?それだけでぴりぴりとした快感が全身に走った。桜とは何度も口付けを交わして

いるのに、触れる度に新鮮な感覚に包まれる。

? その上、キスと同時にチョコを二人で食べるという、未だ経験したことのない行為も伴つてのもの。そのせいで、抱えていた羞恥や躊躇いは一瞬でどこかに行った。

「ん……っ」

? 肩に置いていた手の片方を頭の後ろへ回して、少しだけ桜を引き寄せた。それによつて唇同士がより密着し、チョコレートは完全に互いの口内に入った。

? それを少しだけ舐めてみると、その甘美な味が伝わってくる。最初に貰ったものよりも強い甘さだ。少し過剰なほどの甘さだが、この行為によつてとろけ始めた脳にはちょうど良いものだった。

「ん、う……」

? 桜から軽くチョコを押されるような感覚。どうやら、桜も俺と同じように味わい始めたようだった。

? それで俺も僅かに残っていた躊躇が無くなり、本格的にチョコを舐め始めた。舌先だけの接触から、触れさせる面積を広くし、より深く甘い味を感じる。

? それでも若干の加減はする。まだチョコレートの数はあるとはいえ、おいしいからと遠慮せずに舐めたらすぐに無くなってしまふ。

? せっかくの桜からのバレンタインチョコレートなのだから、二人でゆっくりと味わ

いたい。それを桜も理解しているのか、静かにそれを味わっているようだった。

「んっ、は……んむ……」

? それでも、キスの方は段々と遠慮が無くなってくる。桜は俺の首へ両手を回し、強く自分に密着させてきた。俺もそれに応えるように、肩にかけていた片手を腰へ回して桜を抱き締めた。

? そうして抱き合ったまま、二人で一つのチョコを味わう。チョコというよりも、相手自身のことを舐めるように舌でゆつくりとそれを溶かしていく。そうして溶けだしたそれは、舌でじつくりと堪能した後には飲み下す。

? そうしている内に、俺の意識はみるみるうちにその行為へ没頭していく。愛情表現と食事が混ざった、そのどこか危うい秘め事に。

? まるで、チョコレートと共に理性まで溶かされるかのようだ。しかし、それとは反対に感覚は敏感になっていく。触れ合う唇がやけに気持ち良くて、服を着たままだというのに身体が擦れるだけで快感に震えてしまう。

「んっ、んあ、あ……う……」

? しかし、そうやっているとチョコは段々と小さくなってきてしまう。元々小さなチョコだし、それを二人で舐め合っているのだから当たり前だけど、名残惜しは感じてしまう。

? たがそんな気持ちも、チョコが小さくなることによつて起こつた刺激でどこかへ行つた。

「んんっ……!」

? チョコレートは互いに味を楽しむためだけではなく、口内を隔てる壁の役割もしていたのだ。しかしそれが溶けて小さくなり、隙間ができてしまった。

? それによつてチョコを舐めるために動いていた互いの舌が触れ合うのは、ごく自然なことだった。そんなこと、予想できて当然だったはずだが、夢中になつていたことで全く意識の外にあつた。

? そのせいで、突然の快感に強い反応をしてしまう。身体は激しく震え、口から漏れる声は一気に快感で染まつた。

? だが、それで俺たちが止まるようなことはなかつた。むしろ、無意識に留めていた欲望が堰を切つたように流れ出してしまった。

? 驚いて止まっていた舌をすぐに動かし始め、桜の舌とチョコを存分に味わう。最初から甘いチョコはもちろんだが、そこから溶けたもので甘く染められた桜の舌は、ある意味チョコよりも甘く感じる。

? それをもつと味わいたかつたが、既に小さくなつていたチョコはあつという間に無くなつてしまった。それでも唇は離さない。互いの口内にはまだ甘い誘惑が残つたま

まだから。

？それを貪り合うように舐め合う。それは既にディープキスと何ら変わらない行為だった。いつもと違って「味わう」ことを目的としている分、より激しさがあつたかもしれない。

「んっ、は……あ……」

？そして、その味がいつもとほぼ同じものに戻つたあたりで、俺たちは唇を離した。その間に黒く染まつた唾液が橋を架けている。それを桜は指ですくって自らの口へ入れた。

「んくっ……先輩、チョコレート、美味しいですか？」

「ああ。あんまりにも美味しくて、酔いそうなくらいだ」

「じゃあ、もつといっぱい食べて、二人でとろとろに酔つてしましましょう？」

？いつもより強い誘惑の色を孕んだ桜の言葉と表情。吐息に含まれる甘つたるい匂いも手伝い、俺はその言葉に逆らう気持ちなんて微塵も抱かなかつた。

？俺は桜に軽く返事をして、ベッドの上へ座つた。そして、桜も俺の意図をすぐに読み取り、俺の上にまたがつた。

？先程よりも密着した姿勢。そのまま互いに両腕を首の後ろへ回し、ごく自然の流れのように口付けを交わした。二度、三度と唇を触れ合わせてから離す。

「今度は俺の方が食べさせるよ」

? そう言うってから、小皿の上のチョコに手を伸ばす。その内の適当な一つを手に取り自分の顔まで持つてきて、軽く唇にくわえた。そして、先ほどの桜と同じように口付けを待つ。さすがに目を閉じるのは恥ずかしさがあったてできなかったが。

「それじゃあ……いただきます、先輩」

? 微笑みながら桜は言うて、すぐに目を閉じつつ顔を近づけてきた。それと同時に俺も目を閉じた。

? そして重なる二つの唇。今度は先程よりも深い。チョコはすぐに互いの口内へ飲み込まれ、二枚の舌がそれを舐め回す。

? 甘味に染まった舌の味を知ってしまった俺たちは、早くそれが欲しくてチョコをちようど良い大きさになるまで溶かした。そして、空いた隙間ですぐに互いの舌を触れ合わせる。まだそれほど大きな隙間ではないから、舌先でつつき合う程度の接触しか許されない。

? それでも甘いチョコと桜の味は十分過ぎるほどに伝わってくる。それと、何故かわからないが舌の感覚が敏感になっているせいで、最初に味わったときよりもその感触がとても気持ちいい。

? チョココと混ぜた唾液は信じられないほど甘い蜜となり、美味なのはもちろん、快

感にすら感じられる。それが脳まで侵し始めて、その行為はどんどんエスカレートしていく。

「ちゅ……っ、ん、あ……」

？互いの間で舐め合うっていたチョコを、軽く舌で押し送って桜の口を送り込んだ。桜はそれに少し戸惑った様子だったが、なんとなく俺の考えを察してくれたのか、素直にそれを受け入れた。

？そして、桜は少しの間それを味わった後、今度はさつきと逆に俺の口内へそれを返してきた。それを優しく受け止める。その時に、悪戯心でちよつとだけ桜の舌を舐めながら。

？そうして受け取ったチョコを自分の口内で味わう。舌で舐めたり、軽く転がしてみたり。そうすると、桜の味に染められてより甘くなったチョコが味わえる。

？先程のように、甘くなった舌を味わうのも良かったが、逆に互いの味を纏ったチョコを味わうのも別の良さがあった。まるで、交換日記でもしているかのように、少しずつ互いに染まっていくチョコレートをやり取りすることが。

「ん……ふあ、あ、ちゅ……んっ……」

？いつもより数倍甘い口付け。アルコールの気配すら漂うその行為に、俺たちは溺れるように没頭していく。甘く染まった口内は理性を壊し、鼻をくすぐる香りは優しい毒

のようだ。

? 少し前から既に性的な色を孕んでいた秘め事に、俺たちの我慢が効かなくなるのはほぼ同時だった。

「は……あ、先輩、服……もう、邪魔、ですよね……」

「ああ……脱ごうか……桜……」

? チョコを一気に舐め終えて、唇を離しながら言葉を交わす。俺も桜も荒い呼吸で、まるで発情してしまったかのようなうだ。

? いや、事実そうなっている。先程から、身体が擦れるだけでびくんびくんといやらしく反応して、既にひとつひとつになって交わっているみたいだ。

? 姿勢はそのまま、何かに急かされるように上半身に着ているものを脱ぐ。下も脱ぎたいが、そうすると一度桜と離れなきやいけない。それがイヤだった。普段ならそれくらい我慢できるはずなのに、俺たちはそれすらできなかつた。

? 正直、こんなの異常だ。必要以上に興奮していることも、やけに身体が敏感なもの。これはまるで――

「あのさ、桜……」

? 俺は先に脱ぎ終わり、下着を外そうとしている桜に話しかける。

「はい、何ですか……??先輩……」

「お前、こつちのチョコレートにも何か入れたか……？」

？ 明らかにこの行為を始めてから身体がおかしい。ただ初めてのシチュエーションだからでは済まされないほどの違和感だ。

「え、えつと……はい、その……感覚を敏感にして、性的興奮を誘発させる薬を……」

「桜、それってつまり……」

「は、はい……簡単に言つて、媚薬です」

？ 先程の蠱惑的な表情とは打つて変わり、不安げな色に顔を染めながら桜は答えた。その様子から、どうやら桜はその事実を俺に知られたくなかつたようだった。

「あ、あの……イヤ、でしたか……？」

「まさか。イヤなんてあるもんか。桜が俺のためにしてくれたコトは何だつて嬉しいよ」

？ ぼん、と頭に手を置きながら答える。自分にいまいち自身が持てないところはいつもと同じだな、と思いつつながら。

「良かった……ありがとうございませう、先輩……」

？ ほつ、と安堵の息を吐く桜。その言葉に答える代わりに、頭に置いた手で桜を引き寄せて口付けた。

？ 触れた唇をちろりと舐めると、そこにもチョコの味が残っている。そのせいで、ほ

んの少しのキスにしようと思っただけは止められなくなってしまう。

？ 先程と同じように桜を両腕で抱き締めて、唇同士濃厚な愛撫を再開する。桜もすぐに順応して、優しく俺の唇を受け入れた。

「は……ん、う、んは……ちゅ……」

？ 媚薬が入っていると知ったからか、接吻はより激しいものになっていた。擦りつけるように唇を触れ合わせ、二枚の舌は蛇のように深く絡まり合う。

？ さらに、敏感になった感覚のせいで、触れている桜の身体がとても気持ちいい。その柔らかい胸もちろんだが、背中に回された腕でさえ、まるで性器を愛撫されているのかと錯覚するほどの快感だ。

「んは……先輩……あの、私……もう、我慢できない、です……」

？ 不意に桜が唇を離して、肩で息をしながらそう言ってきた。そして、俺がその言葉の意味を理解する前に、桜は俺のズボンのジッパーへ手をかけた。

？ そしてそれを一気に下までおろして、その中で既に勃起していた生殖器に触れた。突然の性器への刺激で、情けない声を漏らしてしまう。

？ いつもより数倍以上に膨らんだ快感だ。危うく今ので射精してしまいかねなかった。

「せんぱい……もう、入れて、いいです、よね……」

? その、ひどく酔ったような桜の切ない声で我に返った。桜はもう辛抱たまらないといった表情で、俺のものの上にまたがった。

? そして自らのスカートの中へ手を入れて、もう片方の手も使って生殖器同士を触れさせた。恐らく、下着を脱ぐのもわずらわしくて、性器が見えるように下着をずらしたのだろう。

? 触れた桜の花びらは、一度も触れていないのにも関わらず、愛液が洪水のようにあふれ出ていた。スカートのせいで見えないが、それでもはつきりとわかる程だ。

「んっ、ん、あ……あ……」

? 桜はその濡れた自らの性器へ、俺のものを挿入させ始めた。あまりにも濡れているため、ぐじゅぐじゅといやらしい水音とともに、驚くほど容易く俺たちはひとつになっ
ていく。

? そして、それと同時に全身を突き抜けるような快感が俺を襲った。当然だ。桜の手が触れただけでどうしようもないほど気持ちいいのだから、快樂しか与えてこない桜の腔に挿入した時点で出してしまってもおかしくなくらいだ。

? でもそれは歯を食いしばってこらえる。いつもなら一度出してももう一度するのくらい大丈夫なのだが、今は射精してしまつたらあまりの快感に全ての精液を出してしまふだろう。

「先輩……全部、入りました、よ……」

「ああ……桜、悪いんだけど、もう動いてくれない、か……う？」

「？本当なら、膣をならすためにもう少し間をおいた方がいいのだが、俺の方がもう我慢できない。」

「はい……いいですよ……私も、気持ちよくなりたくて、もう……」

「？そしてそれは桜も同じだった。桜は俺にそう言うなり、すぐに腰を動かし始めた。ぐちゅ、ぐちゅ、と淫らな音をたてながら、いやらしく反応している生殖器同士を擦り合わせる。」

「？さすがにまだ動きは優しいが、与えられる快楽は既に絶頂寸前のそれに近い。きちんと手綱を握っていないと、すぐにこの気持ちいい時間が終わってしまう。」

「あ……んっ、は……あっ、ひあ……せん、ぱい……」

「？歯を食いしばって声すら出せない俺と違い、桜は遠慮せずにその可愛い嬌声を上げている。もう桜も全身快楽で染まり、恥じらいすら捨てて乱れている。」

「？腰だけでなく全身をくねらせながら、淫らな動きで俺に快楽を与えてくる。桜はもう我慢できないと言っていたが、その動き自体は俺を悦ばせるためのものだ。」

「？桜自身もつと気持ちよくなりたいたいならば、遠慮せずに激しく腰を振っているだろう。それでも桜はそうしない。激しくしすぎれば、すぐに俺が射精してしまうことを理

解しているから、ちょうど良い速さで奉仕してくれている。

？それは嬉しいが、桜にももつと気持ちよくなって欲しい。だから、俺は傍らに置いてあるチョコに手を伸ばした。そしてその一つをひよい、と取って口にくわえる。そのままそれを押し付けるように桜に口付けた。

「んっ……………」

？驚いている桜には構わず、その口内へチョコを押し入れた。そしてそれを溶かすように舌で舐め回す。時折、つまみ食いでもするかのように桜の口内も味わいながら。

？俺がわざわざ桜の口内でチョコを舐めるのには、ちゃんと理由があった。こうすれば、互いの口の間で舐め合ったり、口内を行き来させるよりも、より多く桜にチョコを味わってもらえるからだ。

？そして、そこには当然媚薬も含まれる。そうすれば、俺よりも桜の方が感度が上がって、より気持ちよくなってくれるはずだ。

？最初は桜の様子に特別な変化はなかったが、半分くらい舐め終えたあたりで、キスの合間に漏れる声が熱を帯びてきた。そして完全に口内に甘さと媚薬が溶けきった頃には、先程とは比べものにならない程に桜は快樂によがっていた。

「あっ……………はあっ、あん……………!?せん、ぱ……………いつ、や、あ……………っ、わたし……………!?いつちやう……………っ、や、ひとり、でっ……………いつちやい、ます……………!」

?だが、俺の想像以上に桜は感じていた。まだ腰の動きは遅いのに、桜の中はその言葉通りに絶頂寸前の反応をしている。俺の性器も共に絶頂させようと、きつく締め付けてくる。

?普段ならここで一緒に果ててしまいたいが、今はできない。だからその代わりにと、顔を桜の胸へ埋める。そして片方の手と口を使って、桜の動きで揺れるその乳房を愛撫し始めた。

?這わせた手は全体をわしづかみにして激しく揉みしだき、もう片方の胸の突起を口に含んで強く吸い上げる。桜はその刺激に、火傷しそうな程熱い声とびくん、びくん、と身体を跳ねさせて反応してくれる。その桜の様子に、もう限界だと俺にも簡単にわかった。

「だ、だめ……っ!?せんばい……っ、あっ、あ……!?わたし、いくっ……!?ひあっ、あ、ふあああっ!」

?大きく身体をのけ反らせると共に、生殖器をぎゅうう、と締め付けながら、桜は激しく絶頂した。思わず射精しそうになったが、なんとかこらえた。

?桜の心地よさげな絶頂と共に俺も果てていれば心底気持ち良かっただろうが、チョコレートはまだ一つだけ残っている。それを食べ終えるまで、この性交は終えられない。自分のためというよりも、今日のために準備してくれた桜のために。

「せんばい……あの……また、うごき、ますね……」

？まだ絶頂の余韻が抜けきつていないはずの桜が、不意にそう口にした。今動くのは、敏感になってるせいであらうはずだ。

「え……あ、無理しなくていいんだぞ、桜……」

「いえ……無理じゃ、ないですよ??わたし、大丈夫です。……それに、今日は先輩に喜んでももらいたくてこうしたんですから、ちゃんと、最後まで先輩に気持ちよくなって欲しいんです……」

「そ……そっか、じゃあ、桜に任せるよ」

「はい、いっぱい気持ち良くなってくださいね」

？控えめに微笑んで、桜は再び腰を動かし始めた。そして俺も最後のチヨコを口にくわえた。

？そのまま引き寄せ合うように唇を重ねる。それと同時に互いの口に飲み込まれるチヨコ。それを二人で愛撫するように舐め合う。

？その舌使いは先程よりもかなり激しい。それもそのはず。チヨコを舐めれば舐めるほど互いの感度は上がり、もたらされる快楽も強くなっていく。もう俺も躊躇いなんて皆無で、ただ桜と快楽に溺れてしまうことで頭がいっぱいだ。

「ちゅ……っ、は……あ……あ……ん、う……!」

? 一分と経たずに口付けも腰の動きも激しさを増してきた。桜と繋がっている部分の両方から、淫らな音が際限なくあふれでる。

? それに比例するように快楽は膨れ上がっていく。口で溶かされた媚薬で鋭敏になる感度と、ひたすら快楽だけを与えてくる桜の膣。

? 理性なんてとつくに忘却して、心と身体は快感を得るための働きしかできない。舌は桜のチョコと舌を貪欲に求め、いつの間にか動いていた腰で膣の感覚を深く味わおうとする。

「せんぱいっ……ひあつ、は、あんっ、せん、ぱい……!? あつ、わたし、もう、せんぱいのこと、しか……かんがえられない……!」

? そうしている内にチョコは全て溶けて、互いの身体は媚薬でおかしくなっていた。普段の性交の数倍以上に乱れて、すぐに限界は近くなってくる。

? 悪化していく行為に、部屋の空気まで甘く染められていく。桜の濃い香りと、媚薬の混ざった甘い毒のような匂い。

? それが思考すら侵していく。チョコレートだけじゃ足りなくて、目の前の桜も食べたい。だから、無意識に加減していた腰の動きを段々と速めていく。

「ふあっ……!? だめっ、あ、あんっ、や、そんなに、したら……また、いつちやいます……!」

?ダメと言われても、それで止まれる程の理性なんかもうない。むしろ、そんな風に快樂によがる桜をもっと見たくて、より激しく桜を突き上げてしまおう。

?それでも桜は嬉しげに甘い声をあげてくれる。それに甘えるように、最後の枷も外して激しく桜を食る。

「あつ、だめ……!?ふあつ、や、だめです……!?わたし、あ、あつ……!?ひあつ、ひあああ!」

?二度目の桜の絶頂。一度目よりも熱い声を上げながら、俺を強く抱き締めて果ててくれた。

?でも俺は腰を止めない。もう止められなかった。高まる快樂は留まることを知らずに、さらに強く桜を求めろと俺を責め立ててくるようだった。

「ひあつ、せんばい、だめ……っ、わたし、もう、いつてる、いつてます、から……っ!」
?それに従って、何度も桜の奥にごりごりと生殖器を押し付ける。ぶつかる互いの肌は、ぱちゅぱちゅといやらしい音をたてる。

?それで俺ももう限界がきた。暴発寸前の精液を留めておくことに、もうたえきれなかった。

「さくら、もう、でるっ……!」

「は、はい……っ!?ください、せんばいのせいえき、ぜんぶ、わたしに……!」

? 膣の一番奥へ生殖器を思い切り突き上げ、溜まっていたものを全て解放した。どく、どくと何度も大きく脈を打ち、子宮へ直接精液を注ぎ込む。

「は……………あ……………あつ、あ……………でてる……………せんばいのあつつの、いっぱい、でて……………る……………」

? 桜は心地よさげに息を吐きながら、陶酔したような様子で俺を受け止めてくれている。そこへ遠慮なく精を流し入れる。

? 勢いが無くなってからも、とくんとくんと緩やかな射精が続く。最後の一滴まで桜に受け止めて欲しくて、桜の身体を優しく抱き締めながら。

? 俺たちは、その射精が終わるまでその姿勢で心地よさに浸っていた。

? 余韻もほどほどに抜けた後、俺たちは繋がったままベッドに倒れこんでいた。本当なら結合を解いてもいいのだが、感覚が敏感になりすぎているせいで、そうしたくてもできないのだ。

「桜、ありがとう」

? そのままの姿勢で、素直な気持ちをお口ににする。それに対して、桜は俺の胸に埋めたい顔をこちらに向けて答えた。

「いえ……………喜んでもらえたなら良かったです」

? 疲れているのか、その声がどこか力ない。でも、表情はちゃんと嬉しげな色で染まっていた。

? そんな桜の髪を撫でてやりたいが、今はできないのが少しもどかしい。だからその代わりにと、一つ約束をする。

「ああ。桜からのプレゼント、凄く嬉しかったからちゃんとホワイトデーにはお返しをしなきゃな」

「そ、そんな……いいんです、今日のは私が好きでやったことですよ……」

? しかし桜はそんな風に視線をそらして遠慮をする。

「あのな、桜。こんなに凝ったことをしてもらって何のお返しもしないなんて、俺、すごく失礼な奴になっちまうぞ?」

「え、あ……」

「だから、ちゃんとお礼させてくれ。それでも俺はお前の……こ、恋人なんだから」

? 未だに恋人と言うことに慣れない。そのせいで何となくしまりの無い言葉になつてしまった。

? それでも桜は俺の言葉に嬉しげに答えた。

「はい———ありがとうございます、先輩。お礼、楽しみにしていますね」

? その屈託の無い笑顔に、俺も自然と頬が緩む。そんな風に優しいやり取りに満足し

て、俺たちは一緒に目を閉じた。

？そして、どちらからともなく「おやすみ」と口にして、緩やかに夢の中へ落ちていった。

ささやかな祝福を

? 包丁がまな板を叩く音が規則正しく台所に響く。朝方特有の寒さと薄暗さが辺りを包み、手元を照らすのは小さな明かりだけだ。

? 切り終わった長ネギを端へ寄せ、隅に置いてあつた油揚げに手を伸ばす。それを再び包丁で切っていく。再び一定のリズムを刻む音が始まる。

? 俺の耳に届くのはその音だけ。普段ならば、隣で野菜を洗う音だったり聞こえるのだが、今はない。

? それもそのはず、今朝はいつも一緒に料理をしている桜がいないのだ。別に、どこかに出掛けている訳ではなく、まだ時間が早いから起きていないだけだ。

? だから今は一人で静かに朝食を作っているのだが、いつもとは違って心が弾んでいて。それにはちゃんと理由がある。そしてその理由は、俺がこうして一人で台所に立っている理由とも共通していた。

? 今日には三月二日。

? ——俺の一番大切な女の子、桜の誕生日だ。

「お、おはようございますつ、先輩」

? 慌ただしい足音をたてながら、桜が居間へやってきた。

? 焦った様子の朝の挨拶に、持っていたフライパンを置いて振り向きながら答える。

「ああ、おはよう。桜」

「ごめんなさい、先輩!? 朝ごはん、先輩一人に作らせてしまつて……」

「別に謝ることないぞ。俺が勝手に早起きしただけなんだからさ」

? 今の時間は午前六時近く。桜が起きる時間としてはいつもと同じだ。寝坊したわけでもなし、桜が謝る道理はない。

? それでも真面目な桜はこういう時、自分に非があるように感じてしまうのだ。

「い、いえ、今からでもお手伝いします、先輩!」

? そう言つて、桜はそそくさと台所へと入つてくる。いつの間にかエプロンを着けていて、手伝う気満々といったところだ。

「いや、本当にいいんだつて。もうほとんど作り終わつて、後は皿に盛り付けるぐらいしかやることないし……」

「でしたら、それを私がやります。先輩に全部任せてしまったんですから、それくらいはやらせて下さい」

? ぐつと拳を握つて、気合いの入つた様子で桜は言った。そして俺の返答を待つこと

なく、俺の横を通り過ぎて準備を始めようとする。

「ま、待ってって、桜。今日は朝メシ食うヤツは他にいないんだから、ゆっくりしてろって

——」

「え??他に食べる人がいないって……」

「あ……」

? そんな桜を焦って止めようとしたせいで、つい口が滑った。

? 案の定、桜は皿を取りだそうとしていた手を止めて、俺に向き直った。

? 一瞬、誤魔化すべきか迷ったが、いずれわかることなのだからとやめた。

「ああ、えつと……うん。今朝はみんな来ないんだ」

「え……それは、どうしてですか??みんな何か用事があるとか……」

「いや、違う。俺が頼んだんだ。今朝は俺と桜の二人にしてくれって」

「え、えつと……せ、先輩、それってもしかして……」

? 桜も薄々感付いたのだろう。僅かな期待の籠った眼差しを俺に向けて、その理由を確かめようとしている。

? 俺はそれにすぐには答えず、桜に背を向けて台所の隅に置いてあった細長い箱を手にとった。そして桜の方へ向き直り、少しの緊張と共に小綺麗にラッピングされたその箱を差し出した。

「——桜。誕生日おめでとう。これ、ささやかだけど俺からのプレゼントだ」

？俺がそう言った後、桜は少しの間俺とプレゼントを交互に見ていた。その表情は、何が起こったのかわからずに戸惑っている様子だ。

？だが、少しすると状況を飲み込めてきたようで、たどたどしい口調で確認するように言った。

「あ、あの……いいんですか……？私なんか、こんな……」

？そう言う桜の顔は、嬉しさと不安が混ざった、複雑な色をしている。それを安心させようと、出来るだけ優しく答える。

「私なんか、なんて言うな。好きな女の子の誕生日を祝うなんて当たり前だ。だから桜、どうか受け取って欲しい」

「先輩……」

？桜は俺の言葉に、ほんの少しだけ躊躇うような表情を見せた。それは、俺からの祝福に応じていいのか否か迷っている様子だ。

？しかし、ややあって桜は自分の中で何かを決めたようにそつと目を閉じた。それがどんな決断なのか少しの不安はあるが、俺は桜の口からそれが語られるのを待つ。

？そして互いに無言の時間がほんの少し流れた後、桜はまぶたをゆつくりと開けた。

「——はい、ありがとうございます。とても……とつても嬉しいです、先輩！」

? そうして、ぱつと櫻の花が咲くように屈託のない笑顔を見せながら、桜は素直な感謝の気持ち伝えてくれた。

「自分からみんなに頼んでおいて言うのもアレだけど、二人だけっていうのもなんだか寂しいな」

「そうですね。いつもがちよつと賑やか過ぎるくらいですから、余計にそう思っちゃいます」

? 隣に座って一緒に朝食を取っている桜は、少し困ったような顔で答えた。

? その首には、先程俺がプレゼントしたネックレスがかけられている。派手なものではなく、銀色のチェーンに櫻の花びらがあしらわれているもの。

? そんな見た目からもわかる通り、それほど高価なものではない。あんまり高いものだとは遠慮してしまうだろうし、何より金銭的な問題があった。

? それでも桜はとも喜んでくれた。「一生大事にします」なんてことを満面の笑みで言われて、こつちの方が照れてしまったくらいだ。

? その後は、結局桜に押し切られて二人でテーブルに料理を並べて、そして今談笑しながら朝食を食べている。

「……でも、たまにはこういうのもいいですね」

「え？」

？桜は一度箸を持つ手を止めて、呟くように言った。その顔は正面を向いているから、俺にはよく読めない。

？そのまま、きよんとしている俺に、桜は俺の方を向かないまま続けた。

「だって、今朝だけはいつもと違って私だけが先輩とお話できるじゃないですか」

「ん……まあ、そうだな。いつもは藤ねえがバカみたいなこと言ったり、遠坂がからかってきたりするから、ずっと桜と二人で話すつてことは無いよな」

？桜の言葉には特に深い意味も無いと思つて、ぱく、と焼き鮭を口に放り込みながら答える。

？だが、その認識は間違いだつた。桜は突然こちらを向いて、少し怒つたような口調で言つた。

「そうですよ！藤村先生はいいとして、先輩はいつも姉さんと仲良さそうにしてるんですから！」

「さ、桜？」

？ずい、と身を乗り出してくる桜。それに驚いて固まっている俺には構わず、桜は畳み掛けるように続ける。

「姉さんが何か言うとお先輩はすぐに言い返して、それをまた姉さんがからかって、つてこ

との繰り返しで私と先輩がお話する時間なんてほとんどないですよ？」

「そ、それは、すまない……」

？桜がなぜこんななまくし立ててくるのか、いまいち掴めないまま流されるように謝る。

？すると、桜はさつきまでの勢いは鳴りを潜めてポツリと言った。

「……だから私、姉さんにちよつと嫉妬しちゃいます」

？そうして桜はまた正面を向いてしまった。その表情は少し赤く染まっていた。

？そこまで言われて、ようやく俺にも桜が怒っている理由がわかった。本当、自分でも少し呆れるくらいに鈍感だ。

「……悪い。俺たち、恋人同士なのに桜にそんな風に思わせるなんて、それはダメだよな。これからは、なるべくそうならないようにする」

「はい、そうしてもらえると嬉しいです……」

？桜は再びこちらを向いて、少し恥ずかしそうな口調でそう答えた。その反応を見て、怒ったりしても結局いつもの桜だと安心する。

？だがその反面、桜も以前と変わったとも感じる。俺の家に来初めの頃はもちろん、それから少し経った頃もこんな風に素直な気持ちを言うことは多くなかった。

？それが今では、少しずつだけどころして正直に話してくれている。学校の方でも

段々と社交的になってきていると、遠坂も話していた。

？その変化が俺は素直に嬉しかった。だがその分少し怖くなったりもしたのだが、そんな部分も含めて全部桜だ。

？そうして、何となくいい雰囲気になったところで、俺はいつ切り出すべきか迷っていた話題を出すことにした。

「それじゃあ、桜。今日は二人でデートしようかと思ってるんだけど、いいかな」

「デートですか??はい、いいですよ」

？あれ。もう少しびびくりするかと思ったのだが、桜はさも普通のことのように返事をした。

？今まで俺たちはそういうことをしてないから、桜は驚くものだと思っていたのだが。

？だが、僅かな無言の時間が流れた後、突然桜が声をあげた。

「ええっ?!?で、で、でーとですか!?!」

？だが、そこまで驚くとは予想していなかった。テレビのニュースキャスターの声すらかき消すそれに、少したじろいでしまった。

「あ、ああ。さすがにプレゼントがそのネックレスだけっていうのもアレだし、二人でどこか行くのはどうかなって思ったんだけど……もしかして、イヤだったか?」

「そ、そんな、イヤなんてことありえせん！」

？ 凄いい勢いで首を振りながら、全力で否定する桜。そして、ふと目を反らしたかと思うと、ぼそりと付け加えた。

「……でも、その……心の準備が全然出来ていなかったというか……突然今日、で、デートに行くなんて言われたら、びつくりしちゃいます……」

「う……それは悪かった。でも前日に言ったらサプライズにならないかなって思ってた」

？ 正直、そこは迷ったところだった。さすがにここまで驚かれるとは思っていなかったが、前もって伝えておいた方がいいというのは理解していたから。

？ でも桜を驚かせたいという気持ちもあつたから、結局は秘密にしておいた。そのおかげで、うろたえている可愛い桜を見ることができたから、この選択も悪くなかつたんじゃないだろうか。

「確かにそれはそうですけど……」

？ 「うう……」と唸りながら桜は軽く頭を抱える。どうやら、桜にとつてデートというものは俺の想像以上に緊張するものらしい。俺たちは既にキスや、それ以上のことを普通に行っているのだからデートなんて今更という感じなんだけれど。

？ いや、でもデートをするって普通の恋人らしいことだ。そういう意味ならば、桜が

ここまで緊張するのもわかる気がする。

「……はい、わかりました。せつかくの先輩からのお誘いなんですから断る訳にはいきません。私、デート頑張ります！」

？俺がそんなことを考えていると、桜は意を決したように強気で言った。ちよつと無理しているようにも見えるけど、とりあえず桜が応じてくれたことに安堵した。

「うん、ありがとう。桜」

？と、デートに行くことが決定したのはいいのだが、その後桜はずつと緊張しっぱなしだった。朝食を食べている間、俺が何か話しかけてもまともな返答が返ってこなかった。

？そうしてぎこちない朝食の時間が終わると、桜は「支度をしてきますっ」と言い残して自室へ駆けていった。それを見送った後、俺の方も準備を始めた。

「お、お待たせしました、先輩」

「おかえり、桜。早かったな」

？桜が身支度を終えて再び居間にやってくるまでには、二十分もかからなかった。いつもの桜の私服に、洒落たシヨルダーバッグ。それと、あまり濃くはないが化粧もして

いる。

「?しかし早いのはいいのだが、言い出しつぺの俺がまだ準備を終えていない。片付けや昼食のための弁当を作ったりしていたら、あつという間に時間が過ぎてしまった。」

「じゃ、俺も支度してくるよ。バスの時間もまだまだ余裕あるし、桜はゆつくりしててくれ」

「はい。えつと、バスってことは新都に行くんですか?」

「うん。あそこの大きなデパートなら色々見て回れるからいいかなってさ。それとも、桜は他に行きたいところはあるか??せつかくだから桜の好きなどころに行くのが一番いいと思うんだけど……」

「い、いえ……今日は先輩にお任せします」

「ん、わかった。それじゃ、着替えてくる」

??そう言つてエプロンを脱いでから居間を後にする。

?やはり、行く場所を最初から決めておいて正解だった。最善は桜のしたいようにすることなのだけれど、彼女はそういったことに対する望みを持っていない。

『桜はさ。この戦いが終わったら、何かしたいことはあるか?』

『えつと……ちよつと思ひ付かないです』

??そう言つて困つたように笑う桜を思い出す。控えめなその性格のせいではなく、自

分のしたいことを桜はそもそも知らないのだ。

? だから、少しずつでいいからそういうことを桜に教えてやりたいと思った。そうしたら、いつか桜も自分のために笑えるだろうと。

「よし、それじゃあ行こうか」

「は、はいっ」

? 桜と一緒に歩くのに相応しい格好に着替えて、居間で座っていた彼女に声をかける。桜はびつくりした様子で即座に立ち上がった。

? それに苦笑しつつも、その緊張はデート中にゆつくりと解いていけばいいと思いつながら、桜と一緒に玄関へ向かった。

? ……なんて、呑気なことを考えていたのだが、現実はそう甘くはなかった。

? 家を出てバス停へ行き、そこから乗ったバスに揺られながら新都へ向かうまでの間、桜はガチガチに固まってしまっていた。

「桜、あのさ、そんなに緊張しなくていいんだぞ?」

? バスを降りて、駅前停留所からデパートへの人通りの多い道を歩きながら、そつと声をかける。

「は、はい……ごめんなさい、その、先輩との初めてのデートだからちゃんとしなきゃって思うと、どうしても身体が固まってしまつて……」

？桜は自らの表情を隠すように、少し下を向いて言った。

「ん……そつか。でも桜。最初から完璧なデートなんてできないんだから、変に気を使わないでいつもの桜でいいと思うんだ」

「そう、ですか……？」

「うん。それに、そうしてくれた方が俺は嬉しいよ」

「……はい、わかりました。それでも緊張はしちゃいますけど、努力してみますね」

？少し考えるような仕草をした後、桜は控えめに微笑みながらそう答えた。

？しかし桜にそう言ったのはいいものの、本当は俺だつてかなり緊張しているのだ。

桜をリードしなくちゃ格好つかないと、精一杯虚勢を張っているだけだ。

？正直、化粧のせいでいつもよりも大人っぽい桜の雰囲気や、緊張を隠す時の何気ない仕草なんかで、俺の方がどきどきしているんじゃないかとも思う。

？それを悟られないように、桜ときこちなくも笑顔で会話をしながら、ゆつくりとデパートへ向かった。

「桜、何か見たいものあるか？」

? 様々な店が並ぶフロアを歩きながら、隣の桜に聞く。

? デパートに着く頃には、桜は段々といつもの様子に戻ってきていた。それでも時々デートをしていることを意識すると、口調がたどたどしくなってしまうのだが、それはまあ仕方ないだろう。

「ええつと……そうですね……」

? 桜は辺りのたくさんの店を見渡しながら少し考えてから、その内の一つを指差した。

「じゃあ、あそこのお洋服店なんてどうでしょうか?」

「うん、いいんじゃないか?」

? 桜が指差したのは、小洒落たブティックだった。その隣には、より高価な物を取り揃えていそうな店があったが、それを選ばなかったのは俺の財布への遠慮からだろうか。

? そうして店員さんからの「いらっしやいませ」に軽く会釈をしながら、二人でその店へ入ってみる。

「わあ……いろんなお洋服がありますね、先輩」

? 店内には、万人向けで無難なものから、少し際どいものまで、様々な種類の服が揃えられていた。桜は目を輝かせながらそれらを眺めている。

? そんな桜がとても可愛いらしくて、ついどきりとしてしまう。

「そ、そうだな。桜に似合いそうなのもたくさんあるし、色々見てみようか」

「はい、先輩！」

? そうして嬉しそうに返事をする桜と一緒に、俺たちはゆつくりと店内を回り始めた。

? しかし、洋風選びは思ったより難航した。ただ単純に服を眺めている時は良かったのだが、試着してみようとなった時に困ってしまった。

? 桜はあんまり着飾る方ではないし、俺も女の子の服を選ぶセンスなんて持ち合わせていない。要するに、どれを選んでいいのかわからないのだ。

? だが、そうして二人して困っていると、店員さんの一人が俺たちに声をかけてくれた。

「何かお探しですか？」

「ああ、はい。彼女に似合う服を探しているんですけど、どれが良いのかわからなくて……」

「でしたら、私の方でいくつか選んで差し上げましょうか？」

? その提案は俺たちにとって、渡りに船といったものだった。桜に同意をとった後、

俺はもちろんそれにうなずいた。

?するとまずは試着室に案内されて、普段どういったものを着ているのかなどを聞かれた。そしてしばらくするといくつかの種類のものを見繕ってくれた。

「えつと、じゃあ着替えてきますね、先輩」

?桜はそれらを受け取って試着室のカーテンを閉めた。

?そうして桜はその服をひとつひとつ試着していった。桜が普段着ているものと似た系統のものや、装飾の多いやや派手なもの、さらに露出度の高い攻めたもの。

?全て趣向の違うものだが、どれも桜に似合うものばかりだった。元々桜は綺麗だから何を着ても似合うのだろうとわかっていたけれど、やはり実際に着てもらおうと桜の違った魅力が感じられて、俺も楽しかった。

「先輩、これはどうでしょうか……?」

?そして最後に桜が着たのは、白いシンプルなワンピースだった。今までのもの比べると、地味な印象も受ける。

「あ……そ、それ凄く似合ってるぞ、桜」

?でも、俺はそれがさっきまでのどの服よりも桜に似合っていると感じた。装飾が無い分、桜本来の魅力がより際立つからだろうか。

「あ、ありがとうございます、先輩。実は私もこれ、とてもいいなと思ってたんです」
「じゃあ、これ買おうか。すいません、これ頂けますか？」

「ちよ、ちよつと待つてください、先輩! 確かに素敵なお服ですけど、その、結構お値段が……」

「ん?? 財布のことなら心配ないぞ。俺、今日のために貯金してたからさ」

「そ、そうなんですか？」

「うん、だから買おう。桜だって欲しいだろう？」

「? それでもなお渋る桜。節約志向な桜には少し贅沢だと感じてしまうのだろう。確かに決して安いとは言えない値段だが、誕生日だからそれくらいいいだろう。確

「? だから俺は桜をやや強引に押しきって、そのまま購入した。」

「先輩、良かったんでしょうか……私の服なのに先輩のお金を使わせてしまって……」

「? 会計を済ませて店から出た後、桜は申し訳なさそうにそう口にした。」

「いいんだよ、桜。どうしても言うなら、これも誕生日プレゼントだと思ってくれればいい」

「で、でも、もうこのネックレスを頂きましたし……」

「? 桜は首元にかけられたそれを軽く触りながら言った。」

「? そんな桜を納得させるため、少し恥ずかしいが俺の素直な気持ちを言うことにし

た。

「あー……その、俺がそれを買ったのはさ、桜が気に入ったからってのももちろんだけど、それを着た桜を俺が見たいからってというのが一番っていうか……」

「せ、先輩……」

？桜も恥ずかしかったのか、表情を隠して顔を伏せてしまった。

？それでも、確かな親愛を込めて桜は言ってくれた。

「……でも、先輩がそう言ってくれるなら、私、ありがたく着させて頂きます」

「——うん、ありがとう」

？それから約一時間、俺たちはゆっくりと店内を見て回った。たまに照れくさくなるようなやり取りもして、付き合いたてみたいだなとも思ったりしながら。

？それでも桜はかなりいつも通りの調子に戻っていた。というより、いつもよりちよつと元気なくらいだった。自分の好きなものを見つけた時なんかは特に。俺の方も、そんな桜を見ているのが楽しかった。

？そうして昼の時間が近くなり、公園にでも行こうという話になった。そこで桜が提案したのは、冬木大橋の下の公園だった。

「ごめんなさい、ちよつと戻る事になってしまつて……」

「いや、いいんだ。ここなら眺めもいいし、弁当食べるのにはもってこいだ」

？老若男女、色々な人で賑わう公園内を歩きながら言葉を交わす。

？そうして、川がよく見える場所のベンチを見つけて、二人で腰掛けた。二人の間に適度なスペースを空けて、そこへバッグから取り出した弁当箱を置く。

？ここまでは歩いて来たからお互いに腹ペコだ。そそくさと風呂敷をほどいて、弁当箱のふたを開けた。

「あ……おにぎり、ですか？」

「ああ、うん。その、何となくこれがいいかな、って思ってたさ。桜は他ののが良かったか？」
「い、いえ、そんなことないです。先輩が作ったものはどれもおいしくて大好きです
ら」

「そ、そうか。それはありがたい。……じゃあ、腹も減ったし食べようか」

？ちよつと照れくさくなってしまつて、俺は少し強引に話題を変えた。

「はい、いただきます、先輩」

「うん、いただきます」

？お互いに手を合わせて挨拶をする。そして、いくつかある内の一つを手を取つてかぶり付いた。

「やつぱりおいしいです。先輩のおにぎり」

? 一口目を飲み込んだ桜は、二口目を口に含む前にそう呟いた。それは俺に向けての言葉ではなく、自然と口からこぼれたように聞こえた。

? だから俺はそれには答えずに、そのまま食べ続けた。桜も結構空腹だったようで、俺たちの間にしばらく会話はなく、黙々と食べ続けていた。

? しかし、おにぎりの残りが少なくなつた頃、桜がふと口にした。

「先輩。これは単純な興味から聞くんですけど……」

? 桜は食べかけのおにぎりを見つめたまま、一呼吸置いてから続けた。

「今日はどうしておにぎりにしようと思つたんですか?」

? 目はこちらを見ていないが、その声は真剣だった。だから、俺は誤魔化したりせずに答えることにした。

「そうだな——桜は覚えてるかな。桜が俺の家に来て間もない頃にさ、初めて桜に教えたのがおにぎりだったから……何となくそれを思い出して、今日はこうしたんだ」

? 昔を懐かしむように目を閉じて桜に答える。もう随分前のことだけれど、俺はよく覚えていた。

「——やつぱり、そうだったんですね」

? ふと桜にそう言われて、俺は目を開けてその顔を見た。

? 桜の表情は、嬉しげに優しい笑みを浮かべている。

「やつぱり……つて、桜、覚えてるのか？」

「はい、もちろん。忘れるはずありません」

？桜はとん、と背もたれに身体を預け、空を見上げながら優しい口調で続ける。

「最初はちよつとバカにしてる、つて思いました」

？それを言われてちよつと罪悪感を抱いた。あの時も、もしかしたらそう思われてると心配していたから。

？でも桜はそれすら楽しい思い出のように、目を閉じて言葉を続ける。

「でも、私が作ったおにぎりを先輩に食べてもらつて、私、また先輩に自分の作ったものを食べて欲しいって、思えるようになったんです」

？そうして俺の方へ向いて、ぱつ、と笑顔を咲かせて言った。

「——だから、先輩。それを覚えてくれていて、本当にありがとうございます」

？それが本当に幸せそうだったから、俺は少しの間何も言えなくなつてしまった。

？でも、俺の方も言わなきゃいけないこともあることを思い出した。

「いや、感謝するのは俺もだ。あれは俺にとつても大切な思い出だからさ。それを桜も覚えていたのが凄く嬉しい」

？そうやつてお互いの気持ちを告げた後、俺たちは何だか笑つてしまった。嬉しさと、よくわからない可笑しさ。

? そうして一通り笑い合った後、俺たちは何気ない会話を交わしながらゆつくりと残りのおにぎりを味わった。

「おかえりなさい、 土郎、 サクラ。 早かったですね」

? 夕方近く、 予定よりも少し早く家に帰って来た俺たちを出迎えてくれたのはライダーだった。

? あの後、 二人で映画館へ行ったりして、 普通の恋人らしいデートをして俺たちは帰ってきた。 本当はもう少し遅くなるはずだったのだが、 一つ予定を変更したために帰る時刻が早まったのだ。

「ん、 ただいま」

「ただいま。 出迎えありがとう、 ライダー」

「いえ。 主を出迎えるのは当然の役目です」

? 礼儀正しくライダーは答える。

? しかし、 魔眼殺しの向こうの瞳はいつもより優しげに見えた。

「ライダー、 遠坂はもう来てるのか?」

「ええ、 今は料理を作っている最中です」

? 靴を脱いで床上がりながら言葉を交わす。

?ライダーに言われて少し感覚を研ぎ澄ますと、いい匂いとあわただしく調理をする音が聞こえてきた。

「え??姉さん来てるの?」

「もちろん。妹の誕生日ですから、はりきって台所に立っていますよ」

?桜はそれに驚きつつも、どこか嬉しげだった。

?そうして居間へ向かおうとする直前、不意にライダーが言った。

「サクラ」

「ん、なに??ライダー」

?振り向いた桜に、ライダーは優しく表情を綻ばせて告げた。

「——サクラ。誕生日おめでとうござります」

?そして、いつの間にか持っていたのか、装飾の施された小さめの箱を桜に差し出した。

?桜は俺の時のように戸惑った様子だったが、今度はそれを素直に受け取った。そしてライダーへ真つ正面に向き直って、嬉しそうに微笑んだ。

「——ありがとう、ライダー。私、とっても嬉しいよ」

「えつ??ちよつと、あなた達もう帰ってきたの?」

?俺たちが居間へやってくると、包丁を持つ手を止めて遠坂は驚いた様子でそう言っ

た。

「ああ、悪い。ちよつと予定が変わつてさ」

「なに、どうしたの……つて、あ、いいわ。大体わかつたから」

？ 遠坂は俺が両手に下げていた買い物袋を見て、やれやれといった顔で言った。

？ 当初の予定では、映画館の後に商店街の喫茶店でゆっくりしようと思つていたのだが、桜がその隣でセール中の店に興味を持ったのだ。そこで予定を変えて、二人で買い物しながら帰つてきた。

「姉さん、私もお手伝いしますね」

「え?? そんな、いいわよ。今日はあなたの誕生日なんだから座つてなさい」

？ 桜はいつの間にか台所へいた。その身には既にエプロンを身に付けている。

？ それに何だか既視感を覚えてつ、俺も桜に続いて台所へ向かう。

「別にいいんじゃないか?? 桜は好きでやろうとしてるんだから」

？ かけてあつた自分のエプロンを着ながら遠坂に言う。

「はい、お願いします、姉さん。私、姉さんと一緒にお料理するので、大好きなんですから」

「そ、そう……?? なら、お、お願いしようかしら……」

？ 素直な桜の言葉に、遠坂は結構簡単に折れた。それに苦笑しながら、俺も台所に入った。

「ちよつと、何笑つてんのよ士郎」

「いや、別に何でもない。それよりもほら、桜と一緒に料理するんだろ?」

「そうですよ、姉さん。何か手伝えること、教えて下さい」

「う……そ、そうね。それじゃあ——」

? そうして、俺と桜と遠坂の三人で料理を始めた。元々遠坂が作る予定だった分とは別に、俺たちも色々買ってきたせいで、かなりの量だった。

? でも、俺はそこまで多くの作業には関わらなかつた。というのも、遠坂と桜の二人が本当に楽しそうだったからだ。だから、俺は空いた鍋や野菜を洗う程度の役割に留めておいた。

? そうして料理も出来る頃に藤ねえがケーキと共にやってきて、いつもの賑やかな衛宮邸の様子になった。

? そうやってみんなが揃ったところで、一人一人が桜に祝いの言葉を告げた。ライダーは静かに、藤ねえはやかましく、遠坂は若干の照れと一緒に、もちろん俺だって、みんなで桜の誕生日を祝った。

? 桜はそれを受けて、こらえきれずに泣いてしまった。でも、もちろんそれは嬉しさからくる涙だ。それでも、精一杯は微笑んで、

「——ありがとうございます。私、本当に——本当に嬉しいです——!」

? そう俺たちに告げてくれた。

? 賑やか過ぎる程の騒ぎも終わり、みんなも帰った頃。風呂から上がった俺は、今日のことを思い出しながら就寝の準備をしていた。

「先輩、入ってもいいですか?」

? 不意に桜の声が聞こえて顔をあげると、障子の向こうにその姿があった。

「ん??いいぞ。入ってくれ」

「はい、失礼します」

? そう言つてゆつくりと障子を開けて桜は入ってきた。

「桜——」

? そして桜は、昼間買った白いワンピースを着ていた。桜は少し照れた様子だが、やはりよく似合っている。

「それ、着てくれたんだな。——うん、やっぱり凄く綺麗だ」

「ありがとうございます、先輩。先輩にこれを頂いて、本当に良かったです」

? 頬は赤いままだが、優しく微笑んで桜はそう言った。

「先輩、その……今日は本当にありがとうございます」

? そしてそのまま桜はそう言つて礼儀正しくぺこりとお辞儀をした。

「そ、そんな、別にそこまで礼を言われる程のことじゃない」
「いいえ、そんなことありません」

? 桜は顔を上げてそう言うと、ゆつくりとこちらへ歩いて来た。そして布団の上に正座して俺と向かいあう。

「今日はたくさんのものをもらいましたから。ライダーから、藤村先生から、姉さんから、そして——先輩から」

? 桜は目を閉じて、さらに続ける。

「私が絶対にもらえなかったと思っていたものを、本当にたくさん頂きました。だから先輩——」

? ? そこで桜は一呼吸置いて、そつと目を開けた。そしてちらりと俺の方を見て言った。

「私——先輩のこと、愛しています」

「さく——」

? ? そのまま桜は俺に口付けた。頬に両手を添えて、優しく唇が重ね合わされる。

? ? そして、その甘い接触がほんの少し続いた後、桜はそつと唇を離れた。

「先輩……私、誕生日のプレゼント、もう一つだけ欲しいものがあるんです」

? ? まだ互いの息がかかるぐらいの距離のまま、桜は言う。

「ああ……それは？」

「もちろん——先輩です。今ここで、先輩が欲しいです」

？ ？ ？ そうしてもう一度唇を重ね合わせる。今度は俺の方からも桜を求めた。

？ ？ ？ そしてそのキスはさつきと違って長く、深いものだ。そのまま俺は桜に押し倒されて、さらに激しく唇を求め合った。

「は……ああつ、せん、ぱい……んっ、ふあ……あ、すき、大好き、です……っ」

？ 薄暗い部屋の中、月明かりに照らされた桜が俺の上で乱れている。でも、その姿は淫靡さよりも美しさの方が圧倒的に勝っていた。

？ いつもよりも多く「好き」や「愛してます」と甘い言葉をこぼしながら、その全てを俺の前でさらしている。それに応えるため、俺も馬鹿みたいに何度も愛の言葉を桜へ告げる。

「ああ……っ、さくらっ、すきだ……誰より、桜のこと……っ」

？ 互いの腰がぱちゅ、ぱちゅ、といやらしく音をたてて、性交は段々と終わりに向かっていく。もう俺も桜も何度も絶頂して、身体も心も限界まで愛欲で染まりきっていた。

「ひあっ……せんぱい……っ、わたし、あんっ、ふああっ……わたし、もうっ……」

「いい、ぞ……っ、さくら、また、いっしょに……っ」

? 桜の身体を抱き寄せて互いに抱き合いながら、激しく腰を打ち付け合う。とつくに限界を越えて身体を染めていた快楽は、精神まで侵すほどに高まっていく。

「あつ……せんぱい、せんぱいっ……!? いく、わたし、あ、あつ、ふあああああつ！」

? そしてそれがお互いに弾けて、これまでで一番激しく俺たちは絶頂した。きゆうう、と俺を求めるように膣に締め付けられ、それに抗うことなく精液を解き放った。

「さくら……この、まま、全部、だすから、な……」

「はい……一滴のこらず、そそいでください、ね……」

? 身体の方はもう限界で、朦朧とした意識で舌足らずな言葉を交わす。その間も、どく、どく、とこぼれる精液で桜の中が白く染まっていく。

? そのまま俺たちは、甘い吐息を漏らしながら絶頂の余韻に溶け合っていく。それが、互いの気持ち伝わっていくようで嬉しかった。

? だから、二人でそのまま目を閉じた。この、幸せな状態のまま眠りたい。そう、言葉にせずともわかっていたから。

「せんぱい……あいしています……」

「ああ……おれも、あいしてる、さくら……」

? そして、「おやすみ」の代わりに愛を伝え合う。それでこれ以上ないほどに満たされて、二人で共に静かに眠りに落ちていった。

陽だまりの下で

「ふう……こんなもんか」

? 洗濯物の最後の一枚を竿にかけて、一つ息を吐きながら呟いた。空からは三月の暖かい日差しが降り注ぎ、夕方辺りには乾きそうに思えた。

? 今日バイトは休みで、遠坂も時計塔へ発つ準備があるらしく、魔術の修行もなし。しかし平日であることが災いして、桜は学校でライダーはバイトだ。

? だからいつも桜に任せきりにしてしまっている家事をしていたのだが、それもたつた今終わってしまった。突然雨でも降ってくれば洗濯物を取り込むという仕事ができののだが、それはそれで困るし、そもそも空は雲一つない青空だ。

? そんなことを考えながら、外履きを脱いで縁側に上がる。

「あ……つと」

? ぼうつとしていたせいで、そこで日に当たらせておいた桜の布団を踏んでしまった。

? しかし、そこで俺はその足をどけなきゃいけないはずなのに、少し固まってしまった。

?このままここに倒れたらとても心地いいんじゃないだろうか。そんな考えが頭をよぎる。

「……悪い、桜」

?そして俺はその誘惑にあっさりと負けた。そのまま身体の力を抜いて柔らかいその布団に倒れ込んだ。

?途端に、ふわりとした感触に包まれる。知らず知らずの内に疲れが溜まっていたのか、自然とまぶたが落ちる。

?そしてとどめとばかりに、日光の匂いと混ざった桜の優しい香りが鼻腔をくすぐる。それがもつと欲しいと、俺は無意識に布団に顔を埋めた。

?そうすると、より濃くその感覚が伝わってきて、まるで桜に抱き締められているのかと錯覚する。どこか安心するその感覚は、俺には新鮮だった。

?思い返してみると、普段は俺の方が桜を抱き締めることばかりだ。桜のことを守ると誓っているのだから当然だが、たまには逆というのも悪くない。今度桜に直接頼んで

——いや、それはさすがに恥ずかしいからやめだ。

?そんなことを考えている内に、意識は眠りに沈んでいく。桜が家に帰って来るまではまだかなり時間があるから少しくらいはいいだろう。

?そうして俺は暖かい陽だまりに包まれながら眠りに落ちていった。

「せんぼく……」

?心地の良い眠りの中で、これまた心地の良い声が聞こえた。普通、深い眠りの途中で起こされるっていうのは少なからず不快感を覚えるはずなのに、不思議とその声にしんなものはなかった。

?それも当然。それが桜の声だったからだ。好きな女の子の声なのだから、心地良いと感じるのは当たり前だ。

?だがしかし、今その声が聞こえるってことは、俺は桜が帰ってくる時間まで呑気に昼寝していたということになる。それはいくらなんでも寝すぎだ。

?夕飯の支度、洗濯物の取り込み、やることはいっぱいある。そう思い、眠気を振り切って目を開けた。

「きやつ、先輩！」

「うわつ、桜！」

?しかし桜は俺の思った以上に近くにいた。具体的には顔は俺の目の前にあり、まるでキスをする直前のような状態。

?それに驚いて二人そろってがばりと身体を起こしたが、目を開けた瞬間は本当に口付ける寸前といった感じだった。

「す、すみません、起こしてしまって……」

「いや、いいんだ。むしろ助かった。夕飯の準備しなくちゃだよな……って、あれ？」

「ふと気が付くと、辺りはまだ明るい。体感だが、俺がここで寝始めた時とあまり変わっていないように見える。」

「あ、それはまだ大丈夫です。まだお昼ですから」

「なるほどな……桜がいるからもう夕方になってるのかと——いや、ちよつと待て。桜、学校はどうしたんだ？」

「この時間、桜はまだ学校で授業を受けている最中のはずだ。行事などがあるわけでもなし、桜がこんなに早く帰ってくるのはおかしい。」

「あ……その、早退、してきましたんです」

「早退って……具合悪いのか??だったら部屋で休もう。すぐに身体にいいもの作ってやるから——」

「ちよ、ちよつと待って下さい、先輩……!」

「立ち上がろうとする俺を、桜は慌てた様子で制止してきた。」

「ん、どうした?」

「その、具合が悪い訳ではないんですけど……えつと……その……」

「?言いづらいことなのか、桜は視線を反らして言い淀んだ。」

「違うのか?? だったらもしかしてズル休みでも——」

「ち、違いますっ、私そんなことしませんっ」

? 冗談のつもりだったが、桜は少し怒った様子で否定した。

「悪い悪い。桜はそんなことしないってわかってるよ。それで、どうしたんだ?」

「は、はい……その、魔力の方が危なくて、先輩にもらってもらわないと……」

「あ……そ、そうなのか……」

? なるほど。それは確かに早退してこなくてはいけないだろう。それに、先程言い淀んでいた理由にも納得がいく。

「ん……?? でも桜、それは昨日とか、遅くても今朝には危なそうだ、って気付いてたんじゃないか?」

? 桜はまだ未熟とはいえ魔術師だ。元々才能がある上に、ライダーや遠坂の手ほどきを受けていることもあって、少なくとも俺なんかよりは数段上の実力は持っている。

? 自分の中の魔力量くらいはわかるはずだ。事実、今まで桜は危険な状態になる前にちゃんと俺に報告してくれていた。

「それは……はい、すいません、本当はわかってました。今日そのまま学校に行くのは少し危ないって」

「だったらどうして言わなかったんだ?? 俺は今日一日暇だったんだし、言ってくれば

もらってやることくらい問題なかったんだから」

？俺に今日予定が無いのは桜も知っていたことだ。特に桜が遠慮する理由はない。

「ごめんなさい……でも先輩、最近色々無理していたように見えました。この前の私の誕生日だって、準備のためにアルバイトをいつもより多めに入れてましたよね？」

「う……まあ、そうだな……」

「ですから、久しぶりに一日くらいはゆつくりして欲しかったです。……だから、その、さつきも先輩が寝ている間にこっそり済ませようかと……」

？桜は顔を伏せて制服のスカートを軽く握りながらそう言った。

？確かに言われてみればそうだ。ここ最近はゆつくり休んでいる日はほとんど無かった。桜が気を使うのは無理もない。

「確かにそうだな。桜の言う通りだ。無理させちまってごめんな」

？桜の頭に手を置いて、その髪を優しく撫でる。

「い、いえ……私の方こそ、せっかくの先輩のお休みを邪魔することになってしまったごめんなさい……」

？しかし桜は顔を上げずにしゅんとした様子でそう言った。桜が謝る理由は無いのに。

「別に邪魔されたなんて思ってないよ。あんまりにも暇で困ってたくらいだしさ、する

「ことができたってのはいいことだ」

「そう、ですか？」

「うん。それに、その……昼間誰もいない家で桜とできるなんて、滅多にないだろ？」

「え……?? あ……は、はい、そういえば、そうです、ね……」

「急に話題がそっちの方向に変わったことに、桜ははつとした様子で顔を上げた。しかしそれは一瞬で、またすぐに俺から視線を反らした。」

「でも桜のその仕草の理由は、先程までの申し訳なさとは違うだろう。桜は口元を隠すように片手を添えて、視線を庭の方へと泳がせている。」

「えっと、どっちの部屋でするのがいいかな。桜はどうしたい？」

「? そんな桜の仕草や、昼間にすることへの緊張で俺も若干固くなってしまいそうになる。それを隠すために、桜へそう聞いた。」

「そ、そうですね……えっと……」

「? 桜は恥ずかしそうな表情で少し考えた後、顔はやや下を向けたまま上目遣いでおずおずとした様子で言った。」

「あの、先輩。ひとつわがままを言ってもいいですか？」

「ん、いいぞ。なんだ？」

「ん……あ……先輩、なんだか、手つき……いやらしいです……あん……っ……」

？暖かい春の日差しに桜の可愛らしい声が溶ける。しかし、そこには官能的な色こそ伴っているものの、不思議といやらしくは感じなかった。制服姿のままの桜とこんなことをしているのにも関わらず。

？それも、今こうして二人で横たわっている場所が先程と同じ縁側だからだろうか。俺は制服とブラウスのボタンを外したその隙間から見え隠れする素肌へと片手を伸ばして、下着の上から桜の胸を包んでいる。

？柔らかな布団と、少しだけ開けたガラス戸から吹き込む優しい風。それが俺たちの周りを穏やかな雰囲気で包む。

？こうやってここでしたい、というのが桜の「わがまま」だった。

「あ……悪い。なんか、桜の胸が大きくなったような気がして、確かめようかなくて……」
？首筋に口付けながら、軽い力で豊満な乳房を愛撫する。桜はそれに恥ずかしそうにしながらも、甘い声を口からこぼしてくれる。

「あ……ごめんなさい……」

「ん……どうして謝るんだ？」

？桜の言葉に、俺は首筋から唇を離してその顔を覗きこんだ。桜は俺から気まずそうに視線を反らして、片手で自らの胸を軽く隠すように言った。

「だって、その……あんまり大きいのは、好きじゃないですよね……？」

「いや、別にそんなことないぞ。好きな子のなんだから、大きさが何だって俺は好きだよ」

？片手でそのしなやかな髪をかきながら優しく答える。

？しかしそうは言ったものの、大きくなつて嫌いになることはなくても、困ることはあつたりする。以前からそうだったが、桜がかがんだりした時とか、ちよつと激しい動きをした時なんかは目にのやり場に困るのだ。それと、この前のデートの時に桜へ向けられる周りの視線が俺は少しイヤだった。桜はキレイだから仕方がないとはいえ、それに少なからず反応してしまうのは男の性か。

「そうですか……？」

「うん、だから桜は気にしなくていいんだ。……それに、大きい方が触つてて気持ちいい」

「そ、そんな……ふあんっ！」

？桜のその恥じらいも、負い目も全てかき消すように、少し強くそこを両手で包み込んだ。軽い痙攣と、甘い声で可愛らしい反応をする桜。

？場所が場所だから、桜にあまり大きい声は上げさせられない。だからいつもより優しい刺激を与えていたのだが、そんな反応を見せられると、どうも抑えが効かなくなつ

てしまう。

「桜、下着外すぞ」

「ん……はい……」

？桜は俺の言葉に、外しやすいよう軽く背中を持ち上げてくれた。そこに両手を滑り込ませて、ホックを外す。もうこうすることも随分と慣れたものだが、最初の頃は戸惑っていたことを思い出した。見かねた桜が恥ずかしがりながらも親切に教えてくれたことを思い出すと、今でも少し情けなくなる。

？その照れを隠すように、外した下着をたたんで少し遠くに置く。しかし、再び視線を桜に戻した時に、俺は固まってしまった。

？上気して、色気を強く孕んだ表情。口からは甘い吐息がこぼれて、まるで触って欲しいとねだっているようにも見える。

？そして何より扇情的なのはその格好だ。はだけた制服と緩んだりボン。そこから覗く白くて美しい素肌。その豊満な乳房は、最後の布までどかさされて、全てが俺の目にさらされている。

？見慣れた制服姿なのに、少しそれを乱しただけで、こうも印象が変わるものなのか。「あ、あの、先輩……??どうしたんですか?」

「あ……すまん、ちよっと見蕩れてた。明るいところで、っていうの初めてだからかな」

「ん……そうですね。……私はちよつと恥ずかしいですけど……」

? 自分から提案しておきながら、そんなことを桜は言う。そんな桜を少しいじめたくなって、俺はその胸に顔を埋めた。

? ぽふ、と優しく受け止められる。それに甘えるように、舌をその突起に触れさせた。「あ……っ、や、ちく、び……だ、め……」

? びく、びく、と僅かに、それでも確かに反応する桜の身体。まだ接触は控えめなものだが、恥じらいからか桜はいつもより感じているようだった。

? それが嬉しくて、舐めているだけでは足りずにそれを口に含んだ。

「ふあっ……!?!先輩……っ、そんな、なめちゃ……あっ……」

? 羞恥と快楽が混ざった桜の声。ちらりと盗み見た赤い桜の顔は、明るさでいつもよりはつきり見える。

? そんな桜をもつと快感に染めたくて、片手の指と舌先で乳首をくりくりと転がす。すると、桜は何度も身体を震わせて淫らな声を上げてくれる。

? 声を押し殺すように口元に手を当てながらも、唇の隙間から滑り落ちるように喘ぎ声漏れていた。気持ちよくなってくれているのは確かだけど、まだ幾分か恥じらいが残っているようだった。

? 俺はそれをなんだかもう少し見たくくなって、空いていた片手を桜の下腹部に触れさ

せた。

「んっ……せんば……い……」

? 俺の意図を感じ取ったのか、桜は僅かではあるものの明確な反応を示した。それに応えるように、なめらかな素肌の上でゆっくりと手を滑らせる。

? そしてやがてスカートにたどり着き、さらにそこを通り過ぎて膝へ。そうしたら今度は折り返し。でもさつきとは違って、スカートの中へと手を入り込ませる。

? 桜はそれに「あ……」と声を漏らした。そこにはそれとない期待の色が混じっていた。

? それに導かれるように、するすると手を移動させていく。他の誰にも触れられない、秘密の場所へと。柔らかい太ももの感触を確かめながら、少しずつ。

? そして、俺の手は脚の付け根までたどり着いた。「そこ」にはほんの少し指を伸ばせば触れられる距離。

? でも。

「あ……え……う……」

? そこには指先で触れることすらせず、そこを通り過ぎて反対の脚に触れた。戸惑う桜には構わず、今度は下へ手をずらしていく。そして膝まで来たら折り返し。再び桜の脚の付け根へと。でもやはり「そこ」には触れないで、また反対の脚へ移動して同じこ

とを。

？ そんな、少し子供じみた悪戯心でその戯れをスカートの中で繰り返す。それは快樂は伴わないものだったが、俺の手が「そこ」に近付く度に、桜の声に扇情的な色合いが混じる。

？ しばらくそうやって桜の反応を楽しんでいたが、我慢できなくなったのか、桜は切なげな声で言った。

「あ、あのつ……先輩、そこ、触ってください……っ」

「ん……?? 『そこ』 って、どこだ?? 桜」

？ もちろんわかっているが、あえて聞く。普段はこんなことしないのだが、明るいとこころだからか、桜の恥ずかしい顔が見たかった。

「……先輩、いじわるです……」

「はは、悪い。……でも、桜の口から聞きたい。桜、どこを触って欲しい?」

？ 桜はそれで観念したのか、羞恥で顔を真っ赤に染めながらも俺に答えてくれた。

「うう……そ、その……私の……お、おまんこ、先輩に触って、気持ちよくして欲しい、です……」

「——うん、わかった。言ってくれてありがとうとな、桜」

「もうっ!? 本当に恥ずかしいんですから——ひゃあっ!」

?ここまで来たらもう焦らすような真似はしない。軽く湿った布を横にずらして、指を桜の花びらに触れさせる。

?胸への愛撫と先の焦らしのせいかわ、もうどろどろに濡れていた。その入り口を開いて、中指を中へ入り込ませた。大した力を入れなくても、桜の膣は指を奥へ奥へと導いていく。

?そうして根元までそれが飲み込まれたら、軽く引き抜いてから再び挿入する。

「あつ……ひあつ、は、んっ……せん、ぱ……っ……」

?浅く指を抜き差しする度、その快感で桜はびくん、びくん、と強い反応を見せてくれる。焦らしたせいか、桜の身体はいつもより敏感になっていようだった。

?時々、ほんの戯れにと激しく指を出し入れさせると、快楽に染まりきった嬌声を上げてくれる。そのせいで俺も段々と歯止めが効かなくなってきた、次第にその速さが増してしまう。

?さらに、一本だけでは飽き足らずに、人差し指もそこへ挿入した。中指をきつく締め付けていた膣口は、にゆるりと容易くもう一つの異物を受け止める。

?そうして挿入した二本の指で、激しく桜の性器を愛撫する。抜き差しをするのはもちろんのこと、時折指を折り曲げてぎらついた天井にも刺激を与える。

「ふあ、あ……それ、すご……い、あん……せんぱい、きもち、いい……ひあ、あ、ん……」

?もはや桜は、表情や声からすらも恥じらいは消し飛んで、ただただ与えられる淫楽に浸っている。目は焦点が定まらない様子で、その淫らな声は俺のことを酔わせることさえするようだった。

?いつの間にか、俺の手は指だけでなく掌までも桜の蜜で濡れ、その行為の激しさを物語っていた。でももう加減はできない。それに、今手の動きを緩めたら、また桜を焦らすことになってしまう。あれだけいじわるをしたのだから、ちゃんと満足させなくちゃだめだ。

「せ、せんばい……っ、わた、し、ふあつ、あ、や……っ、わたし、もう、いく……んむっ!」

?桜の絶頂を手伝うように、その唇を奪った。そして強引に舌を滑り込ませ、熱くぬめった桜の舌と触れ合わせる。

?その感触を確かめるように数度つついた後、まだ驚いて固まったままのそれと自分のを絡み合わせた。その瞬間、挿入した指で桜の膣がひくついたことを感じ取った。

?それをもっとと促すように、舌で激しく桜を貪り始める。歯茎などに舌を這わせることはせず、ただひたすら桜の舌を愛撫する。

?深く絡ませたまま、舌の隅々まで犯すように濃厚に桜を味わう。その快感に耐えられなくなったのか、時折舌が逃げようとするが、それは許さない。今はただ、桜をいか

せてやりたかった。

? 絡めた舌と突き入れた指で貪欲に桜を求める。そうしていくうちに、桜の反応が絶頂寸前のそれに変わっていく。キスの端から漏れる声は切なげな色を帯びて、指を包む膣はきゅんきゅんと強く締め付ける。

? それに応えるように、激しく指を抜き差しする。じゅぶ、じゅぶ、と淫らな音が響くほどに。

「ん、んんっ——!」

? そうして、びくびく、と激しい痙攣と共に桜は絶頂した。口の中には気持ち良さそうな声が響き、膣は指を逃がすまいと強く締め付けていた。

? まだその絶頂が続いている間、桜がそれに気持ちよく浸れるようにと、俺は出来るだけ優しい刺激を与えていた。突き入れた指は動かさずに桜の中に入れてままにして、絡めた舌は張り詰めた力をほぐすように甘い接触を重ねる。

? そしてその余韻もそこそこ抜けた後、俺は舌と指を桜から引き抜いた。その時桜の蜜が糸を引き、まるで離れないで欲しいとねだっているようにも思えた。

「ふあ……先輩、すごかった、です……」

? とろん、と溶けた目のまま、まだおぼつかない口調。

「そっか、それなら良かった」

「はい……でも、その、ああいうことを言わせるのは、い、いけないと思いますっ」
「ん?? 『ああいうこと』って、何だ?? 桜」

「先輩っ!」

「うっ……すまん、ふざけすぎた」

? 軽く頬を膨らませて、割と本気で怒った様子の桜に、反射的に謝る。

? ある程度冷静になった今なら、ちよつとどうかしていたんじゃないかとも反省する。

? でも、普段の数倍恥ずかしがる桜を見られたことは、なかなか貴重な体験かもしれない。

「それじゃあ、先輩。お詫びに……っていうのは何だかへんですけど、ひとつお願いを聞いてくれますか?」

「うん?? いいぞ、なんだ?」

? 言いたいことは大体わかっている。そもそも、この流れならひとつしかないだろう。しかし、だからと言ってそれをこちらから言うような無粋な真似はしない。

「先輩とひとつになりたいです。二人でつながって、一緒にいっぱいいっぱい、気持ちよくなりたいです」

「ああ、そうだな。俺もそうしたい」

? そつと口付けを交わす。二つの柔らかいものが触れ合うだけで気持ちがいい。

? でも深いキスはまだまだ。名残惜しさと共に唇を離す。

「桜。下着脱がしていいか?」

「はい、お願いします」

? 脚の辺りにまで移動して、スカートの中に手を入れる。そして両手で下着をするするとゆっくりと脱がす。スカートの中はなるべく見ないように。別に今更そんなことどうだつていいような気もするが、桜が制服姿の状態だからかなんだか躊躇ってしまった。

? 脱がし終わったそれを、軽くたたんでブラジャーの近くに置く。そのあと、俺も下着を脱ぎ始めた。ベルトを外して、下着ごと下ろしたら再びたたんで脇に置く。

? そうしてお互いに準備ができたところで、俺たちは布団の上で重なり合った。桜は仰向けのまま軽く脚を開き、そこに導かれるままに俺がその上に覆い被さる。

? そして、握った肉棒をスカートの中へ入れて、桜の濡れた陰部と触れ合わせた。その快感で、お互いの身体がぶるりと震える。

? そして、ゆっくりと力を入れて挿入していく。桜の中は一度絶頂したおかげですでにとろとろだから、しようと思えばすぐに入る。

? でもそうはしない。桜が痛みを感じるから、というのもあるが、こうしてゆっくり

と膣の感触を確かめながら挿入するのも、とても気持ちがいいからだ。

？それは、中で生殖器を抜き差しするのは違う快感。あれは絶え間のない快感に心と身体が侵されるものだが、これは段々と快感で染まっていくもの。

「んっ……は、あ、あ……先輩の、き、て……」

？そうしているうち、あつという間に最奥までたどり着いた。こつん、と少しだけ子宮を押す感覚がたまらなく気持ちいい。これだけでも射精してしまいそうなほど。それでは桜が満足できないからそんなことはしないが。

「先輩……うぐい、て……ほしい、です……」

「ああ……っ、おれ、も……」

？いつも以上に濡れ、ほぐれている桜の中。そんな状態で止まったままなのは、お互いに無理があった。

？ぬぶぶ、とカリの辺りまで引き抜いて、再びゆっくりと挿入する。そんな僅かな動きだが、桜の無数のひだが大きな快楽を伝えてくる。

？愛液と先走りでびたりと吸い付くそのせいで、生殖器同士はまるで溶け合っているかのよう。その感覚を味わいながら、優しく腰を動かす。

「あ……あつ、は、せん、ぱい……いい、です……すっ、く……」

？一度達して感度が上がっている桜は、この遅い動きでも十分に感じてくれている。

しかし、それは桜だけじゃなく、俺もだ。

? 溶けたような感覚のせいかな、それとも真つ昼間で制服姿の桜としているというシチュエーションのせいかわからないが、とにかく俺もいつもより感じてしまっている。

? だからこれ以上早い動きはできない。桜もこの動きでも十分満足するような表情をしてくれているし、今日はこのまま最後までしよう。

「あ、あの……先輩……っ」

? そんな中、不意に桜が僅かに理性の入った声を上げた。

「ん……どうした??桜」

「きす、して、ください……先、ぱ……っ、ん、む……う、ちゅ……」

? 桜がその言葉を言い終わる前に、唇で塞ぐ。桜は話している途中だったから、俺が舌を侵入させるのは容易かった。

? そして挿入させるなり、すぐに桜の舌を捕まえて、何の遠慮もなく絡めとる。桜もすぐに俺に応えるように自分のものを突きだしてきた。

? ぴちやり、ぴちやり、と湿った音をたてながら、二人で互いの舌を愛し合う。そこに激しさはあまり伴っていない。それは、俺たちが欲しているものが、快樂よりも熱や感触といったものだからだろう。

? そうして、舌同士、生殖器同士で優しく求め合う。でも、もう少し繋がりがたくて、俺

私たちは両手も重ね合わせて、ぎゅっと握った。

「んっ、せん、ぱ……いい、ちゅ、ん、んっ、も、う……」

?でも、そうやって全身で重なって繋がりが合ったことで、精神の方に限界がきてしまった。身体の奥からぞくぞくと絶頂がのぼってきているのがわかった。俺も、桜も。

「ん、は……ああ、おれも、だ……」

「せんぱい、この、まま……あつ、ん、いつしよ、に……」

?それに返事をする代わりに、再び口付ける。そしてより深く舌を絡ませ合い、唾液と唾液を混ぜ合わせる。そうすると生殖器と同じように、舌でさえも溶けているような感覚に包まれる。

?そうやって快楽と温もりを求め合ううちに、生殖器の中でふつつと沸き上がる射精感。そして、そんな俺と同じように桜の膺も射精を促すように、締め付け、擦り上げてくる。

?それに耐えるのも、もう限界だった。一番快感が高まった瞬間、俺は桜の一番奥でとぶん、と射精した。

?そして、それによって桜も同時に絶頂してくれたようだった。

?そのまま、いつもよりも長い絶頂に二人で身を委ねる。俺は弱い勢いで、とく、とく、と精を注ぎこみ、桜はその度に心地よさげに身体を痙攣させる。絡め合う舌は先端

だけで軽くつつき合い、甘い感覚を共有する。

? 暖かい日差しも合わせり、優しく、心地の良いその時間に、二人でしばらく浸っていた。

「あ……学校、行かないきゃ……」

? 繋がりを解いた後も、三十分程二人とも言葉も交わさずに横たわり、せいぜい吐息が漏れる程度の時間が続いていたが、隣で寝ていた桜は突然思い出したように口にした。

「え??今から行っても部活に出るくらいしか——ってそうか、桜はもう部長だもんな」

「はい、体調を崩してる訳でもありませんし、休んでいたら部長として面目がたちませんから」

「まあ確かにそうだな……でも、今日くらいはいいんじゃないか?」

? 桜はある意味体調を崩していたとも言えるのだから、別に行かなくてもいいのではないかと俺は思う。それに、桜は部長として十分頑張っていると、遠坂やこの間に会った美綴から聞いている。

「そう、ですか?」

「うん。だって今ので疲れただろ??弓道部だって桜はいつも真面目にやってるんだか

ら、一日くらいは問題ないと思うぞ」

? 桜はそれに少し考える仕草をした後、うなずいてくれた。

「じゃあ、先輩。もう少しだけ、ここで一緒にいてくれますか?」

「ああ、いいよ。あつたかくて気持ちいいもんな」

「はい。でも、あんまり気持ちよくて寝ないように頑張らないとですけどね」

? 少し困った微笑みを浮かべる桜。俺はその髪に手を伸ばす。

「別に眠つても構わないぞ。夕方になつたら俺が起こすから」

「それなら……お言葉に甘えてちよつとだけお昼寝、しちやいます」

「ああ、おやすみ、桜」

「はい、おやすみなさい、先輩」

? ゆっくりとそのまぶたが落ちる。俺は頭に置いた手で優しく撫でながら、陽だまりに桜の寝息が溶けるまで見守っていた。

月と桜とアルコール

? 九月。夏の暑さも薄まって、気持ちの良い夜だった。

? 虫の音と涼しい風が吹く縁側は、風呂上がりに心地いい。

「涼しいですね、先輩」

? 隣に座っている桜がふと呟く。それに振り向くと、桜は吹き込んでくるそよ風に目を細めていた。

「ああ。すっかり夏も終わりだな」

「ええ。——ライダーもそう思うでしょ?」

? そう言つて桜は俺とは反対側にいる、彼女のサーヴァントの方へ顔を向けた。

「そうですね」

? と、ライダーは少し考えるように、コップに注いだ酒で唇を湿らせる。

「夏が終わるのはいささか寂しいものですが、こうして季節が移ろうのを感じるのもなかなか良いものですね」

? そう、彼女は穏やかな笑みと共に言った。聖杯戦争以来、ライダーもこういう柔らかな一面も多く見せるようになった。

「なんか意外だな。ライダーがそういうこと言うの」

「似合いませんでしたか?」

「いや、そうじゃないよ。ただ、ちよつと珍しいなつてさ」

「うん、とても素敵だと思うわ。ライダー」

?と、桜も楽しそうにそう言った。

?それに照れたのか、ライダーはまた酒を一口飲み、

「まあ、先日読んだ小説の引用ですが。——そう言つて頂けると嬉しいです」

?と優しく答えた。

?それからしばらく、その穏やかな時間が続いた。そして、ライダーのコップが空になった頃だった。

「時にサクラ」

?とくどくと一升瓶から二杯目を注ぎながら、ライダーがぼつりと言つた。

「ん、なあに??ライダー」

「サクラは士郎のことを名前で呼ばないのですか?」

「ええっ!?!」

?突然のことに驚いて、持っていたお茶をこぼしそうになる桜。

?そんな桜にはお構い無しに、涼しい顔でライダーは続ける。

「二人が現在ののような仲になって久しいですし、プライベートでは名前で呼んでも良い頃合いと思ったのですが——」

「で、でもその、まだ私たちは学生だし、名前で呼ぶのはまだ失礼かなって……えっと……」

？あたふたとした様子で捲し立てる桜を見て、俺も少し考えてみる。

？桜が家に来るようになってからずっと「先輩」と呼ばれているから、それ以外の呼び方なんて考えたこともなかった。

？名前呼び——例えば「土郎さん」という感じならどんなイメージだろうか。

『——土郎さん、起きて下さい。朝ですよ？』

『朝ごはんできましたよ。土郎さん』

？——そんな朝が待っているんだろうか。

「っ……」

？ぼつ、と顔が赤くなるのが自分でもわかった。

？なんていうか、これじゃまるで夫婦みたいだ。桜があんなに慌てるのもわかる。当の桜もまだライダーに向かって色々と言っているし。

「どうやら、まだこういう話是不躰だったようですね。申し訳ありません、サクラ」

「いや、えっと、そんなことは……無いん、だけどね……」

?ごによごによとしてゐる桜の顔はもう真つ赤だった。

「それでは、私はそろそろ失礼します」

?と、飲みかけのコップを残して立ち上がるライダー。

「えっ」

?思わず口に出てしまった。今この状態で桜と二人つきりというのは、些か困る。

「せつかくの良い夜なのに、これ以上二人の邪魔をする訳にはいきませんので」

?なんてことを言つて、ライダーはすうつと霊体化してしまった。

「……」

?そして取り残された俺と桜。さっきの件で互いにどこか気まずい。

「あの、先輩……」

?とりあえず落ち着こうとお茶をすすつてゐると、桜が呟くように言った。

「先輩はその、私に名前と呼ばれるのは、どう、ですか……う?」

「えつと、そうだな……」

?確かにいきなり名前呼びなんて、驚くしどぎまぎするで大変だろうけど――

「そう呼んでくれると、俺は嬉しいかな」

?もちろん、今すぐでなくて良い。いつかそんな風に呼ばれるようになったなら、そ

れは幸せなことだ。

「そつ、そう、ですか……」

? 桜はそう言ったつきり、黙ってしまった。そしてなにやらもじもじとし始め、それが終わったかと思うと、今度は急にこっちの方に顔を向けた。

「あつ、あのっ!」

「はっ、はい」

? びつくりして「はい」とか言ってしまった。

? 桜は、恥ずかしいのか顔を赤くして「うう……」と唸っている。

? それが少し続いたあと、桜は震えた声で口を開いた。

「し……」

「しっ。」

「しろうさんっ!」

? ……数秒、固まった。俺も桜が見つめ合って硬直してるその光景は、それはそれは奇妙だっただろう。

「ご、ごめんなさい……その、まだすごく恥ずかしくて、上手く言えなくて……」

? ようやくまともになってきた頭が、少しずつ状況を把握し始める。

? 今桜は俺のことを「土郎さん」と呼んだ、で合っているだろうか。でも、どうして今急に??確かに名前呼びの話をしていたところだったが――

「で、でもそのつ、ちゃんと自然に呼べるように頑張りますから……!」

? ……そうか。今の桜の言葉でわかった。

? 俺はさつき「そう呼んでくれると、俺は嬉しいかな」と言ってしまった。これじゃ今日、今からそう呼んでくれと言っているようなものじゃないか。

「あ……その、さ。悪い、桜。別に今からそう呼んでくれて訳じゃないんだ」

「え……?」

「さつきののは、もしそう呼ばれることがあれば嬉しいって意味でさ、いつかでいいし、無理なら呼ばなくても構わないんだ」

「あ……そ、そう、だったんですか」

? ほっと、安堵の息を吐く桜。

「すみません、私、早とちりしてしまって……うう……恥ずかしい……」

? よほど堪えたのか、桜はうつむいて悶えている。

「ま、まあ、俺も言葉足らずでごめん。ほら、お茶でも飲んで落ち着けよ」

「はい、そうします……」

? 桜は側に置いてあるコップを手に取り、ぐびぐびと飲み始めた。

? そんなに急いで飲んだらむせるんじゃないかな。そんな俺の心配もよそに、コップの中の透明な液体はあつという間に無くなった。

「ん?」

? あれ。桜が飲んだのはお茶だよな。じゃあ透明な液体っていうのはなんだ。
「ちよつ!!?桜、それライダーの酒だ!」

「えっ!?!」

? 桜は驚いた顔でコップから口を離した。

「あ、本当です。なんだか味が変わるなあと思ってたんですけど……」

? 多分恥ずかしさのせいだとは思いますが、さすがにちよつと抜けてないか。

? まあ、桜が飲むさまを見ていて気づかない俺も俺だが。

「……でも、おいしいです。これ」

「え??あ、そうか?」

「ええ。藤村先生がおいしいって言うのもわかる気がします」

「ん、そっか。でも、藤ねえみたいにくぐくぐ飲むようにはなっちゃダメだぞ?」

「ふふ、わかっています」

? あの飲みっぷりを思い出したのか、桜は楽しそうに笑った。

「あの、先輩」

「ん?」

「お酒、まだありますよね」

?桜は傍らに置いてある酒瓶を見て言った。

「ん、ああ。ライダーが持つてきた一升瓶か。ライダー一杯しか飲まなかったもんな」

?なかなか良い酒だから明日の料理に使えばいいな、なんてことを考えながら答える。

?ああ、でも多分ライダーのものだから勝手に使う訳にはいかないか。寝る前にでも台所に戻しておこう。

?だが、俺がそんなことを思っていると、桜が少し恥ずかしそうに言った。

「これ、飲んじゃいませんか?」

?何故か。年齢的に良くないだろう、とか、ライダーの酒を勝手に飲むのはまずい、とか言つて断らなくちゃいけないところなのに。

?どうしてか、俺は肯定してしまったのだった。

「せーんぱい」

?やっぱりダメだと言つた方が良かったのかもしれない。

?肩に寄りかかった桜を見て、そんなことを思つた。

「なんだ??桜」

「ふふつ、なんでもありません。先輩のことが呼びたくつて」

? そう言つて桜はくすくすと笑う。このやり取りも三回目だ。

? 桜はあまり酒に強くないようで、大して飲んでいないのにもう酔っている。

? おかげでさつきからやけに距離が近い。こんなに積極的な桜なんて初めてだ。俺も少し酒が入つてゐるせいかな、そこまで緊張しないのが救いか。

「先輩、先輩」

「ん?? 今度はどうした?」

? またか、なんて内心で思いながら、酒を口に運ぶ。

「好きです。先輩のこと、大好きです」

? 思わず酒を吹きそうになつた。

「……急にそういうことを言うのはよしてくれないか」

? いつも桜は「好き」とか言うのを恥ずかしがるから、余計に衝撃が大きかつた。そう言われるのはもちろん嬉しいが、心臓に良くない。

? 本当、飲んでいいなんて言うんじゃないか。

「あー、先輩照れてます。ふふ、可愛いです」

「う……桜にそんなこと言われるのはなんか変な感じだな」

「いつもは先輩に言われてますから、お返しです」

? えへへ、とはにかむ桜。その可愛らしい顔に、何も言えなくなつてしまつた。

? 桜はそんな俺に構わず、何杯目かの酒を飲み干した。

「あ」

? 空のコップに酒を注ごうとしている桜が不意に声を上げた。

「ん?? どうした?」

「お酒、終わっちゃいました」

? 空になった一升瓶を見て、桜は少し残念そうな顔をした。

「先輩、この後、どうしますか?」

? もう時間も遅いし、もう寝よう。そう言おうとして、振り向いたが、そこで思わず固まった。

? さつき俺に寄りかかっていたせいとか、白いワンピースが少しずれて肩が露出していい。さらに、少し傾いた顔は酒のせいで赤く火照りを見せ、その目は酔いにとろけてい

る。
? そんな、色気を隠す素振りすらない無防備な桜の姿に、俺の目線は釘付けだった。

「あー、先輩の目線、なんだかいやらしいです」

? 見透かされてる。それやあそうだ。あんな姿を見せられて、普通にしろって方が無理だ。

「——もう、先輩のえっち」

?さすがに我慢の限界だった。

?俺は桜の両肩をつかんで、そのまま引き寄せて唇を奪った。

「んっ——」

?くぐもつた桜の声が漏れるが、そんなことは構わない。今はただ、目の前の桜が愛しくて仕方がなかった。

?唇だけの触れ合いじゃまるで足りなくて、すぐに深いキスに切り替わった。無遠慮に桜の口内に舌を挿入して、その感触を味わう。

?温かくてぬめつた感覚と、舌同士が擦れる快感。それは、きつと酒瓶十本よりも俺を酔わせるほどのもの。

?事実、俺はどんどんその行為に没頭していった。アルコールの刺激的な感覚の混じった、桜の口内と舌を犯すその行為に。

「んっ、んうっ……!」

?そしてようやく、その桜の苦しげな声でようやく我に返った。

「っは——」

?唇を離すと、混じって溶け合った唾液が橋をかける。それが月明かりでいやらしく銀色にてらついていた。

「ん……先輩のきす、すごく気持ちいいです……」

? 甘ったるい声で言う桜の表情は、熱く火照つていている。

「桜……もう、止まれないからな」

「ええ、私もさっきのキスで、もう……」

? 酒気を含んだ俺と桜の声は、どうしようもない情欲を伝え合っていた。互いの身体を、心を欲していると。二人で愛し合いたいと。

? ばたん。桜の部屋のドアを閉めたその音が合図だった。

? 桜の身体を抱き締めて、そのままベッドに押し倒した。

「せんば——んんっ!」

? 開きかけのその唇を奪う。さっきと同じように、自分の舌を桜の中に侵入させた。

? でも、さっきと違って、桜の方も舌を突き出してきた。それを互いの口の間で受け止める。そうして、そのまま欲望のままに絡ませ合った。

? 酒のせいか、桜の動きはいつもよりも積極的で、俺の舌に深く絡み付いてきた。熱くぬめつたもの同士が擦れると、それだけでぞくぞくとした快感が俺たちを包む。

「んううっ!」

? その快感に歯止めなんて効かなくて、たまらず桜の舌を吸い上げる。桜は驚いて声を上げたが、それと同時に両手を俺の首に回してきた。

? その反応に、もう遠慮なんていらないと悟った。俺は口の中に入れた桜の舌を好き勝手に味わい始めた

? 唇で桜の舌を逃げられないように捕まえて、舌先から全部その舌をなめ回す。その快感に桜の舌が時々逃げようとするが、それは許さない。

? そのせいか、桜はキスの端から悩ましげな声を漏らし、時々びくん、と身体を震わせている。その反応に、桜の舌を自分の思うままに犯している、という背徳感が沸き上がってくる。

「ふは……っ、は、あ……ふあ……」

? しかし、さすがに息が限界で、桜のを解放した。

「せん、ばい……はっ、あ……きす、すこい、です……」

? 乱れた呼吸と、快感に溶けた瞳。その桜の姿に、情欲は収まるどころか、膨れ上がっていく一方だ。

? 俺は一旦シャツを脱いでから、再び桜に覆い被さった。そうして今度は両手でその胸を包んだ。

「や、あ……せんばい……っ!」

? 一際強く跳ねる身体。興奮で敏感になっているのか、嬌声もいつもより大きい。

? それが一層俺の欲望を掻き立てる。その気持ちに任せて、豊満な乳房を愛撫する。

? ワンピースの上からだ、その感触は十分過ぎるほどに伝わってくる。少し力を入れるだけでも、指がずぶぶ、と沈み込んでしまうほどの柔らかさ。そして強く揉みしだくと、その弾力が手のひら全体に伝わってきて気持ちが良い。

「あつ、ん……は、あつ、せんばい、もつと、おっぱいさわってください……っ」

? 俺はその言葉に頷くと、ワンピースの紐をほどき、スカートをたくしあげた。そしてそこから手を入れて、下着の上から両胸を包んだ。

? でもその感触じゃ足りなくて、俺は手を桜の背中に手を回した。

「桜、背中少し上げて」

? 耳元で囁く。それがくすぐったいのか、桜は少し身を震わせた。

「んっ、はい……」

? ホックを外して、ブラジャーを抜き取る。そうしたら再び胸への愛撫を始める。でも今度はさつきと違って直接だから、柔らかな胸の感覚が全部伝わってくる。

? そんなものに我慢なんかできるわけがなくて、俺はさつきよりも強く刺激を与え始めた。片方の手で乳首をくりくりと転がして、もう片方はぐにゅぐにゅとその形を歪める。

「ふあんっ!? や、あんっ、せんば、あ、す……いっ……」

? より熱を増す桜の嬌声。俺が手や指を少し動かしてやるだけで、身体を震わせて感

じてくれる。

? その反応をもっと見たくて、俺は桜の首筋に顔を埋めて、舌をそこへ這わせた。

「ひゃんっ!」

? 驚きと快感が混ざった桜の声。でもそんなの構わずに、さらに舌を動かす。そうすると、びくん、びくんと何度も桜の身体が痙攣する。

「だっ、だめ……ですっ、それ、ぞくぞくっつて、して……!」

? だめと言われても今さらそんなこと無理だ。それどころか、そんな桜の反応が可愛くて仕方がない。

? 舐めるだけなんて止めて、唇で吸ったり、甘噛みしたりと、より強く愛撫をする。そうすると、胸からの快感も合わさり、桜の反応はさらに激しくなっていくた。

「んっ……!ん、あっ、せん、ばい……きもち、いいっ……」

? でも、そんな風に昇っているのは桜だけじゃない。俺だつてそうだ。こんなに乱れている桜を間近で見て、触れているんだから、興奮なんて最高潮に達している。

? 俺は一度桜から手と唇を離した。

「桜——もう、桜とひとつになりたい」

「はい……私も、ほしくてほしくて、切ない、です——」

? 桜は一度ベッドから降りると、ベッドの端に手をつけてその臀部をこちらへ向け

た。さつき俺がたくしあげたせいで、可愛らしい下着が全て俺の目に晒されている。

?俺はその光景に、昂る欲望を押さえながらズボンと下着を脱いだ。

「桜……下着、脱がせるからな」

「は……」

?そして俺はその言葉通り、下着に手をかけて膝の当たりまで下ろした。すると、桜は自ら片足を上げて下着から引き抜いた。

?そうして互いの性の象徴が露になった。

「せん、ばい、ください……っ、せんばいの、欲しくて——」

?切なげな桜の声。その声で俺も限界だった。

「ん……っ」

?桜の柔らかい尻に両手を添える。そして、自分のものの先端を入り口へと触れさせ
た。

?そこから伝わる、桜の熱と濡れた感触。それはどうしようもない桜の情欲だった。

「入れる、ぞ……」

「ん、はい……ふあっ……!」

?桜の返事なんか待たないで、挿入を始める。とろとろに濡れた肉を掻き分けて、肉棒を突き入れていく。

?そして、入れたところから伝わってくる、桜の膣の感触。濡れたものが擦れると、無数のひだが肉棒を愛撫して容赦ない快楽が俺を襲った。

?それに抗うように奥へ奥へと進んでいく。突き入れていく度に違う快感が襲ってきて、どうにかなくなってしまいそうだ。

「んっ、あ、あ……っ、せんぱいの、おくに……き、て……っ」

?そうして、やつと最後まで挿入し終えた。最奥までたどり着いた先端が、桜の子宮口に触れている。

?それが桜とひとつになっているという実感を伝えてきて、甘い幸福感に包まれた。

「桜……我慢できない、から、もう動くから、な……」

「は、い……激しくして、いいですから、ね……」

?俺はその言葉に甘えて、腰を動かし始めた。遠慮なんかもうできないから、最初から激しく桜の中で抜き差しをする。尻の肉を鷲掴みにして、欲望のままに腰を振って桜の膣を味わう。

「あっ、や……っ、あっ、はあっ、んあっ!?あ、すごっ……せんぱいの……いっぱい、きて……っ!」

?そして、俺の動きに合わせて桜がいやらしい声を上げる。そこには恥じらいなんか無くて、あふれ出てくるその可愛い声を全部俺に聞かせてくれている。

? その声と、腰を打ち付ける音が混ざったものが、部屋を淫らな空間へと変えていく。そしてそれは俺と桜の情欲をどんどんと加速させ、その行為へ溺れるように没頭させられてしまう。

? でも、それで良い。このまま二人でおかしくなるほど愛し合っていたい。頭の中はその気持ちでいっぱいだ。

「んっ、あつ、ふあっ?!? せんぱいつ、もつと、してっ……?!? わたしのこと……もつとはげしく……っ!」

? アルコールのせいとか、桜はいつもの数倍は乱れて、自分の欲望を全部俺にさらけ出している。だったら俺ももつと応えたい。

? 俺は両手を尻から腰に移動させて、がっしりと掴んだ。そしてそのまま桜の身体を自分の好きなように揺らす。引き抜くときは前へと揺らし、突き入れるときは強く自分の腰へと引き寄せた。

? それが、先ほどとは比べ物にならないほどの快楽を生む。腰をしつかり握っているせいか、肉棒を締め付ける強さがいつもより増し、射精感をどんどん引き上げてくる。

? それに加えて、桜の身体を自分の好きなように動かしているという背徳感がたまるなく気持ちいい。

「やんっ、あ、うあつ、は、あんっ?!? あ、きもち、いいっ、ですっ……?!? わたし、こわれ

ちやい、そう、で……!?せんばいつ、だい、すき——大好きです……っ!」

?その言葉は、さらに俺の気持ちを昂らせていく。桜に「好き」と言われるだけで、これ以上無いほど嬉しいんだ。それを性交中に言われてしまえば、理性なんかどこかに吹きとんで、桜のことしか考えられなくなってしまう。

「さくらっ!?く、あ……桜——好きだっ……!?さくら、さく、らあっ……!」

「ふあっ、あん、あっ!?あ、うれ、しいっ……!?わたしも、だいすき……っ、あいして、ます……!」

?もう、声も、心も、身体も限界ギリギリまで高まっていた。舌足らずに互いの名前を呼びながら、何度も気持ちいを伝え合う。擦れ合う生殖器は、快楽で染まりきって今にも爆発してしまいそうなほど。

?もう今にも終わってしまう。だから俺は、両手を桜のお腹へ回して抱き寄せた。

「桜っ、さくら……!?もう、限界、だ……!」

「は、い……!?わたし、も、イっちゃい、そう、ですっ……!」

?そのまま、桜の身体を抱き締めながら腰を桜へと打ち付ける。ぱん、ぱん、と乾いた音が絶え間なく響いて、俺たちの快楽は絶頂に向かって昇っていく。

?そして、もう欲望をとどめるのも限界になったその瞬間、一際桜の深いところまで生殖器を突き入れた。

「う、あ、桜——!? できる……っ!」

「ふあああっ!? せん、ばあい……!」

? どくん、と大きく脈を打つ感覚。そのまま、俺たち二人は張りつめた力を解放した。

「あ、あ、は——で、てる、せんばい、の……」

? ごぼごぼとあふれ出る大量の精液。絶頂して軽く痙攣している桜の膣へ、余すことなく注ぎ入れる。

? 桜はそれが気持ちいいのか、抱き締めたその身体がびくん、びくんと反応している。

その動きが生殖器に伝わって心地良い。

「ん……あ、先輩、きもち、良かったです……」

? そうして射精が終わった頃、甘い吐息と共に桜が呟いた。

「ああ……俺も、どうかしそうなくらい、気持ちよかったよ……」

? でも、どうしてか、俺はまだ足りていなかった。気持ちは桜とたくさん愛し合ったからあふれるくらいに満たされたけど、身体の方はまだまだ欲しがっていた。

「先輩……あの、先輩の……まだかちかち、ですね……」

「ん……そう、だな……」

? それに気付いた桜が、どことなく嬉しそうに言う。

「あのさ、桜。もつと、桜のこと欲しい。……いい、かな」

「はい、もちろん良いですよ……私も、本当はまだ足りなくて……」

？少し恥ずかしそうに桜は言う。

？ だつたら、ここで終わりにする理由は無い。満足のいくまで二人で愛し合うだけだ。

「先輩……このまま、また好きなようにしてください——」

？ 甘えるような桜の誘惑の言葉。

？ それがスイツチになって、俺は再び腰を振り始めた。いった直後で敏感だから、あまり激しい動きはできない。

？ だからその代わりにと、後ろからその両胸を愛撫する。

「あつ、せんばいので、おっぱい、に……っ」

？ それに気持ち良さそうに身体を震わせる桜。

？ その反応を楽しみながら、後ろから桜の性器をぱん、ぱん、と突く。桜の中は、愛液と精液でさつきよりもどろどろになっていて、動かす度にその感触が絡み付いてくるようだ。

「んっ、は、あつ、ひあつ……せんばい、あ、とつても、いい、ですっ……」

？ 性器と乳房、二ヶ所から伝わる快感で、遅い動きでも桜は気持ち良さそうにしてくれている。

? 俺はそんな桜をもつと悦ばせてやりたくて、腰の動きを少し速めた。時間が立つて性器も刺激に耐えられるようになってきたし、俺自身ももつと快感が欲しかった。

? さらに俺は、抱き締めていた桜の身体をベッドへ押し倒した。

「ひやつ!?!せんば——あつ!?!ん、あつ、やつ、く、は——すご、いつ……い」

? そうしてそのまま、激しく腰を振り始めた。後ろから覆い被さり、桜の尻に容赦なく腰を叩きつける。抜き差しを何度もしたせい、混ざり合った液が漏れだし、それがいやらしい水音を立てる。

? さすがに少し苦しいのか、その声に苦痛が混ざり始めるが、もうそれに構ってなんかいられない。ただ自分の欲望のままに生殖器を抜き差しすることしかできなかつた。

「あつ、あんつ、せんばいつ!?!あ、それつ、もつと、シてください……い」

? でも、桜はそう言つて嬉しそうに尻を揺らしてきた。そんなことをされたら、もう何も考えられなくなってしまう。

? 無意識に加減するための枷が外れてしまい、さらに激しく桜の身体に欲望をぶつける。肌と肌がぶつかり合う音の間隔がさっきの性交よりも短くなり、互いの快楽は限界なんかとつくに越えて高まってしまふ。

? それは、獣の交尾よりもいやらしい交わりだった。理性なんか欠片もない、本能だけの性交。

「あつ、あ、せんばいつ、わたし、またいきそう、で——あつ、やんつ、ふあつ!?だめつ、だめです——!」

? そんなことをしていれば、絶頂なんかすぐに訪れてしまう。

? 互いの生殖器はびくびくと反応して、快樂が破裂する寸前だ。

「あつ、あ、あ、あつ——!?イ、くつ——!」

? きゆうう、と締め付ける桜の中。激しい桜の絶頂に、俺も同時に射精した。びゅくんと溜まりに溜まった熱い欲望が桜の中へあふれ出す。

? でも、俺はそれに構わずに腰を振り続ける。

「あつ、や………っ!?せんばいの、でてる、のに……い!」

? その快感で、勢いを弱めることなく桜の中へ精が注ぎ込まれる。それが堪らなかつたようで、桜の身体がびくんと跳ねて再び絶頂を迎えたようだった。

「は——あ」

? だが、しばらくそうしているうちに腰の動きも弱くなつていき、次第に射精の勢いも弱まってきた。

? そうして最後に、勢いよくどぶんと精液があふれてその勢いを止めた。それで力が抜けてしまつて、思わず桜の身体の上に倒れこんだ。

「ん………っ、あ、先輩、気持ち良かった、ですか——?」

「ああ……全部からっぽになるくらい、良かったよ——桜は？」

「ええ……わたしも、とつても気持ちよ——」

?そこで唐突に言葉が途切れた。

「桜？」

?声をかけても返事がない。あわてて桜の顔を覗きこむと、桜は可愛い寝息を立てていた。

「あ……眠っちゃったのか」

?ようやくく頭の方も冷静になってきて、さすがにやり過ぎたことを反省した。酒のせいで俺も桜もちよつとどうかしていた。

?そう思いつつ、俺はつながりをほどこいて、桜の身体をベッドへちやんと寝かせた。俺も体力が限界だったから、少し狭いが桜の隣に入って共に毛布を被った。

「おやすみ、桜」

「……う」

?翌朝、目が覚めた俺を襲ったのは、強い酒気と頭痛だった。

?とりあえず身体を起こすと、隣に桜がいることに気付く。それに互いに服を着ていないことも。

「えっ……と、昨日は……」

? 頭痛と酒のせいかな、眠る直前の記憶が曖昧だ。でも、かすかな記憶と俺たちの状況でその、そういうコトをしたのは思い出せた。

「……朝飯の準備しないとな」

? 時計を見ると、そろそろ藤ねえがやってくる時間だった。

? 桜を起こさないように、そつと布団から出る。

「んっ……」

? その時、桜の声が耳に聞こえた。起こしてしまったか、と思い振りむく。

「……なんだ、寝言か」

? 覗きこんだ桜の顔は、可愛い寝顔のままだ。そのさまに思わず頬が緩む。そうして、寝息をたてている桜の髪をそつと撫でた。

?

「ん……しろう、さん……」

「っ——!」

? ——不意打ちはやめてくれないか、桜。

? 声を我慢するのに必死だった。

「まったく……」

? まあ、すごく嬉しかったからいいか。

? いつか、こんな風に何気なく名前で呼んでくれる時が来たらこれ以上ないくらい幸せなんだろう、と。そんなことを思いながら、俺は桜の寝顔をしばらく見ていた。

恋情と色情

? 最近私と先輩は、いわゆる「ご無沙汰」だ。しばらく夜の営みというものをしていない。しかし、冷めたとか飽きたとか、そういったネガティブな理由ではない。

? 今は十二月。この時期はなにかと忙しい。それに加えて、ついこの間までテスト期間で、私も先輩も勉強に時間を使っていた。

? さらに幸か不幸か、二人とも魔力の方も安定していて、そのためにする、ということもなかった。

? だからなんというかその、要するに溜まっているのだ。

? 別に私たちは性欲旺盛というわけでもないけど、お互いの身体のために定期的に交わっていた。だからなのか、急にしなくなると、どうしても欲求が高まってしまふ。

? でも今日はその欲求を解放できると思っていた。テスト期間も終わった休日。藤村先生はテストの採点作業で不在で、ライダーも気を使ってくれたのか、朝から出掛けている。

? だから今は先輩と二人きり。

? なのだけど――

「はあ……」

? ふと、手をとめてため息ひとつ。

? 当の先輩は今、土蔵の中で魔術の修練に励んでいる。テスト期間のせいであまり時間が割けなかったからと、今朝から張り切っている。

? そんな、頑張っている先輩を誘惑するなんて失礼なことなど到底できず、私も自室で修練をしていた。

? でも、煩惱にまみれて集中なんかろくにできない。そんな自分がとてもはしたなく感じて嫌になる。

「先輩……」

? ぼす、とベッドに寝転んで布団をかぶる。

「ちよつとだけ、なら……」

? いいよね、と。一つ自分に言い訳をして、片手を脚の間へ伸ばす。

「あ……んっ……」

? ぴくん、と小さな快感がそこから頭のとっぺんまで突き抜ける。でも、しばらくそれを味わっていないかった私の身体には、大きすぎる快樂だった。

? だめだ。こんなのちよつとで終えるなんて無理だ。でも、ここで止めるのはもつと無理。

「は……ん……」

? スカートのの中に入れて手で、下着の上から秘部に触れる。そこは、はしたなく漏れだしたものが、割れ目の部分を濡らしていた。

? そこを爪でかりかりといじる。とたんに、ぞくりとした気持ちよさが駆け巡り、恥ずかしい声が漏れてしまう。でも、今それを聞くのは私しかない。だから遠慮なんかせずにそのいやらしいところを弄ぶ。

? さらに、もう片方の手を使って服の上から胸を鷲掴みにした。そしてそのままぐにゅぐにゅと乱雑に揉みしだく。

「や、ん、先輩……っ」

? 先輩に上に乗られて、優しく愛撫されている私を妄想する。いたわるようにそつと触れられて、時折ぎゅつと強く掴んでくれる。そんな風に、先輩にしてみらっていると想像すると、どうしようもなく気持ちよくなってしまふ。

? でも、それと同じくらいにこみ上げてくる切なさ。先輩に触れてもらいたい、愛してもらいたいと。

? そんなもどかしさを打ち消すために、性器を慰める手を下着の中へと——
「桜?!! いるか?」

? ノックの音と共に部屋の外から先輩の声。

?驚いてがばりと身体を起こす。もしかしてさつきのはしたない声を聞かれたしまったのだろうか。

「桜??いないのか?」

「は、はい、います!」

?良かった。多分聞かれていない。それに安堵しつつ返事をした。

「そっか、良かった。入ってもいいか?」

「はい、どうぞ」

?がちやりとドアが開いて先輩が入ってきた。

「あ……桜、もしかして寝てたか?」

?机の近くの椅子に座りながら、先輩はそう聞いてきた。

「え??いえ——」

?あ、そうか。私、今布団に入ってるんだから、先輩がそう思うのも当たり前だ。

「あ、そ、そうです。ちよつとだけお昼寝をしました。でも、ついさつき起きたところ
です」

「ん、そっか。起こしちゃったと思ったけど、それなら良かった」

?ははは、と笑う先輩を見て、少しの後ろめたさを感じる。ついさつきまで、先輩との行為の妄想に耽っていたことが申し訳ない。

? それに加えて、下手に昂った状態で中断してしまったから、先輩の顔を見るだけで身体が疼いてしまう。

「桜、大丈夫か?? 顔赤いぞ?」

「えっ?? そ、そうですか?」

「うん。もしかして熱でもあるんじゃない?」

? どき、と心臓が跳ねる。さつきあんなことしてたんだから、身体はずっと火照りっぱなしだ。しかも、先輩と一緒にいるから、鼓動はどくどくと早鐘をうっている。

? このままじゃ、いくら鈍い先輩といえどもバレてしまう。

「だ、大丈夫ですよ!?! ほら、もうすぐお昼なんですから、台所に行きましょう!」

「え?? あ、ああ、そうだな」

? ?すこし怪訝な顔をされたが、一応納得してくれたみたいだった。でもまだ心配なのか、

「じゃあ、俺は先に行ってるからさ、桜はゆっくり来な」

? ?と、優しく言つて先輩は立ち上がった。

「はい、ありがとうございます、先輩」

? 私の言葉にうん、とうなずくと先輩は背を向けた。

? その時、心の奥底がずきん、とした。さつきまで、というか今だって、先輩のこと

が欲しくて欲しくてたまらないのだ。その先輩が目の前にいるのに、出て行ってしまふのがたまらなく嫌だった。でも、恥じらいとか、いやらしい娘に見られるんじゃないかという不安とかが邪魔をする。

? そんな、色んな感情が混ざって訳がわからなくなる。そうして気が付けば、私は布団を飛び出して先輩に抱きついていていた。

「さ、桜……?」

? 私に後ろから抱きつかれて、困惑した様子の先輩。

「先輩……」

? でも、私はそれに構う余裕なんか無かった。今は自分の気持ちを伝えることで一杯だ。

「私……我慢、してたんです」

? 躊躇は、抱きついた瞬間から既に消えていた。だから、自分の内にあるものをそのまま言葉にして口に出す。

「ずっと先輩に……触れて、無かったから……私、欲しく、なって……」

? そうやって言葉にするたび、どんどん気持ちは加速していく。ずきずきと下腹部が疼いてきて、今すぐにでも先輩に押し倒して欲しい。そうしてそのまま、二人で思うがままに愛し合いたい。

「それで私、我慢できなくて、一人で……慰めてたんです」

？もう、恥じらう気持ちなんか微塵も残っていないかった。ありのままを伝えて、私の気持ちを先輩に知って欲しかった。

「でも先輩の顔見たら、身体が疼いて……先輩に、触れて欲しくて……仕方がなくなつて——」

「桜……」

？さすがのように、ぎゅつ、と先輩のことを強く抱き締める。

？後ろから抱きついているから、先輩がどんな顔をしているのかわからない。あんなことを聞かされて、いやらしい娘だと思つているかもしれない。それが不安で、怖かった。

？でも、次の先輩の一言は優しいものだった。

「そつか。ごめんな、桜」

「え——」

？気付いた時には、ふわり、と先輩の感触が身体を包んでいた。少し経つて、ようやく自分が先輩に抱き締められていることを理解する。

「俺、桜がそんなに我慢していることに、全然気付いてやれなかった」

？胸に埋めた頭をなだめるように優しく撫でられる。それがすつと身体の強張りを

解いていく。

「いい、いえ、いいんです……私の勝手なわがままなんです、から……」

「いいわけあるか。桜が我慢してることくらい、ちゃんと察してやらなくちゃいけなかったのに、ほんとにごめんな、桜」

？その言葉に何か言おうと顔を上げると、開きかけの唇を塞がれた。何日かぶりに触れた、柔らかな先輩の感触。その甘い感覚に当てられて、全部どうでもよくなってくる。恥ずかしさとか、申し訳なさとか、そんな感情が全て溶かされていく。

「は——」

？そうして、少しの名残惜しさを残して、二つのものが離される。

？ほんと、先輩はずるい。こんな風に口づけされたら、もっと先輩のことが欲しくなってしまうに決まっている。

「先輩……なら、ちゃんと責任とって……私のこと、愛して、ください——」

「ああ——今までできなかつたぶん、桜がもういいって言うまでするからな」

？最初は私からすることに決めた。大した理由ではない。私が言うまで気付いてくれなかつた先輩に、ちよつとした仕返しがあっただけの、見当違いで勝手な理由。

？先輩にはベッドに腰かけてもらって、私はその目の前に立って服を脱ぎ始めた。

「先輩……ちやんと、私のこと見て下さい、ね……」

？まず上着から。一つ、一つとボタンを外して、はらりとほだけて床に落とす。次はその下のシャツ。ゆっくりと、先輩に見せつけるように、少しずつ素肌をさらしながら脱ぐ。

？それをぱさりと脱ぎ捨てると、先輩の視線がより熱っぽいものへと変わる。そしてそれはうすい布一枚になった、私の胸に集中している。

「桜、綺麗だ……」

？ぼつ、と自分の頬が赤くなるのがわかった。見て欲しいと言ったのは私だし、そんな風に言ってくれるのは嬉しいけど、やっぱりちよつと恥ずかしい。

？でも、やはりそれ以上にもっと私に釘付けになってほしいという気持ちの方が強かった。

？今度はスカートのファスナーに手をかけた。その瞬間、先輩の目に期待のこもったものを感じ取った。それにどきどきしながらも、ファスナーを降ろしていく。

？そして降ろしきったら、両手でするすると緩やかにスカートを下へと落とす。先輩に少しずつ私の身体を見せて、いやらしく焦らしながら。

？そして完全にそれを降ろしきり、私の身体を先輩の視線から守っているものは、白いブラジャーとショーツだけ。

？緊張でどくどくと心臓が鳴っている。そしてそれは先輩も同じなのか、ごく、と唾を飲むのが私からもわかった。

？それに応えるために、今度は乳房を先輩に晒すことに決めた。両手で下着の上から両胸を包み、軽く持ち上げて見せる。

？これはさすがにかなり恥ずかしい。こんな風に、淫らに自分の身体を見せつけるなんて初めてだ。

？そんな気持ちを飲み込みつつ、さらに手を動かす。持ち上げるだけじゃなく、つかんでほんの少し揺らしてみたりと、先輩の情欲を煽る。

？事実、先輩はずっと私に熱い視線を向けている。その上、先輩の雄の象徴は、ズボンの上からわかるくらいに反応していた。

？だから、これ以上焦らすのは止めた。私は胸を掴んだ手を、ゆっくりと上に持ち上げていく。それをずっと続けていると、重力に耐えきれなくなった乳房が、ぶるんとブラから外れて外気にさらされる。

？そうして、その、中途半端に下着の外れた格好のまま、ひたひたと先輩に近寄っていく。それで先輩も、はっとした様子でシャツを脱ぎ捨てた。

「先輩の身体……たくましい、です……」

？ぎゅっ、と正面から先輩に抱きつく。そしてその首筋にキスを落とす。

「さく、ら……」

?くすぐったそうに、ぶる、と先輩の身体が震える。それが嬉しくて、またひとつ、ちゅ、と口づけ。それを何度も繰り返す。自分の肢体を先輩に強く押し付けながら、親愛の気持ちを含めて。

?それをしばらく続けていると、先輩の身体がもどかしそうに身じろぎをし始めた。だから私は、少しずつ口づけをする場所を下へ移動させていく。さらに、首の後ろに回していた両手で、先輩の胸板をさわさわと撫で回す。

「う……桜……」

?首筋から鎖骨、胸や腹筋まで、何度も何度も唇で奉仕する。そして、身体を撫でていた手の片方を、先輩の股間へ触れさせた。すると、ズボンの下の先輩のものがびく、と反応した。

「あ……先輩の、苦しそうです……出して、あげますね……」

?ズボンのファスナーに手をかけ、一気に降ろしきる。そして、その下の下着をくいと下へ引つ張る。そうすると、興奮で大きく膨張した先輩のものが、びん、と勢いよく顔を出した。

?さらに、膝立ちになって先輩の性器を目の前にすると、隠しきれない雄の匂いが伝わってくる。それが私の雌の本能を刺激して、きゅん、とあそこが疼く。

「おつきい……先輩の、素敵……」

? その言葉に反応して、先輩のが小さく跳ねる。目の前でそんなものを見て、たまらずにその先端へと口づけた。

? もちろん一回じや止まれない。ちゆく、と触れて、離して、そうしたらまた唇を押し付けて、と。幾度も先輩のものとのキスを繰り返す。

? それは当然、先端だけには留まらない。口づける場所をどんどん変えていき、竿の部分や玉が入っている袋まで、先輩のものを深く愛するように奉仕する。

? そうしている内に、そろそろ私のほうも我慢できなくなってきた。口づけているこの固いものから、熱い欲望を吐き出して欲しいと、私のことを汚して欲しいと。

「先輩……たくさん、舐めてあげますね……」

? 両手で熱い肉棒をそつと包んで、亀頭をぱく、と口に含む。気持ちいいのか、今度小さな声もあげながら反応してくれた。

? それに応えるように、しゅつ、と両手を性器に滑らせる。それと同時に、口に含んだものを舌でそつと舐める。そうすると、先輩は私にもわかるくらい、気持ち良さそうに伝えてくれた。その身体をぶるりと震わせて、切なそうな声が漏れていた。

「んっ……あむ、は、先輩……いきたくなったら……ん、ちゅ、いつでも、いいですからね……」

? しゅつ、しゅつ、と両手で先輩のものを優しくしごく。その度に、先輩のがびくびく震えて可愛らしい。そんな反応をされると、もつともつと気持ち良くなつて欲しくなつてしまふ。

? 口での奉仕も、舌で舐め回すだけじゃなくて、唇をすぼめたりして強い快感を与える。すると、私の唇と先輩の亀頭が擦れて、ちゅぱちゅぱとした水音が響いて、部屋がいやらしい空間に変わっていく。

? でも、そんな淫らな行為をしていると、奉仕している側の私まで昂つてきてしまふ。本当は服を脱いでいるときから、秘部を慰めて欲しくてたまらなかつただけど、さすがに我慢も限界だった。

? しごいている片方の手を離して、ショーツの濡れた部分にあてがった。その瞬間、全身をあまりの快感が突き抜けて、びくりと反応してしまった。先輩のを舐めてる内にとんどん敏感になつていたらしい。

? でも、下着の上からじゃ全然足りない。その下に指を突つ込んで、そのままぐちゅぐちゅと弄り始めた。

「さく、ら……悪い、もう少し、激しくしてもらえるか……?」

「んは……はい、いいですよ……んっ、ふ……」

? 先輩の言葉に従つて、手の動きを速くする。それと一緒に自分を慰める指も、さら

に激しく膣内をかき回す。そうやって、先輩と二人で気持ち良くなっているという感覚が、とても嬉しかった。

? そうしていると、口に咥えた先端から、ぴゆる、と先走りが漏れだしてきた。それが嬉しくて、ちゅくん、と鈴口から吸い上げる。

? こくん、と飲み込んだそれは、たった一滴ほどにも関わらず、私の情欲を激しく燃え上がらせた。もう加減なんか効かなくて、思い切り竿をしごきあげる。手を亀頭まで滑らせて、私の唾液まで絡めながら、いやらしい手淫で先輩への奉仕をする。

? すると、快感に押し出されるように、とぶとぶと先走りがあふれでてくる。それが、先輩が気持ち良くなってくれているのを感じ取れて、悦んで全てを飲み下す。

? そうして次第に、どんどん先走りの量も勢いも増してきて、生殖器全体もびくびくと何度も跳ねるようになってきた。それは紛れもなく、絶頂が近いことの合図だった。

「さ、さくらっ……もう、でそ、うだ……!」

? それに対する返事の代わりに、咥えたまま先輩に微笑みかける。そうしている間も、淫らな水音と共に、絶頂寸前の先輩のものをしごき続ける。

? 私がそれを続けられ続けるほど、性器の痙攣は激しくなっていき、私が包んでいる竿の中を精液が上ってきているのがわかった。

「さくら……!?!桜っ、で、る……!」

? その言葉と共に、先輩のものが一際強く跳ねた。その瞬間、私は先輩のものから口を離して、ぎゅつと強く肉棒を締め付けた。

? それと同時に、びゅくん、と先端から熱く滾ったものが放出された。

「は——あ、先輩、の……いっぱあい……」

? 溜まっていたのか、大量の精がどく、どく、と吹き出される。それが私の顔や身体に飛び散って、どろどろに汚していく。それがたまらなく嬉しくて私も軽くイッた。

? だからもつとそれが欲しくて、射精中でも構わずにしごき続ける。すると先輩も気持ち良さげに吐息を漏らしながら、精を吐き出してくれる。

「さく、ら……ぜんぜん、止まら、な……」

? 私がしゅこつ、と手を動かす度に、どぶん、どぶん、と白濁が溢れて、私を白く染め上げる。久方ぶりの先輩の精液を浴びるのが、たまらない甘美な気持ちを私に与えて、達したのにも関わらず、あそこを弄る指さえ止めることができない。その間も、先輩は遠慮なく精液を吹き出して、快感に浸っている。

? そうして二人で快楽に震えていると、不意に先輩が口を開いた。

「さくら……ごめん、口の中に入れても、いいか……?」

「ん……ええ、もちろん……」

? しごく手を止めて、まだ緩やかに精が流れる先輩のものを口に含んだ。すると、先

輩は私の頭をそつと掴むと、ずぶん、と奥まで押し込んできた。

「ん……………っ！」

?そしてそのまま、上下に私の頭を動かし始めた。そのせいで、唇と竿が擦れ合つてじゅぷじゅぷと激しい水音が響く。

「ん……………!?!んぐつ……………んっ……………!」

?思わず、驚いて呻き声を上げてしまう。それでも先輩は私に構わずに、私の口を使つて自身のものをしごき続けている。

?先輩らしくない少し乱暴な行為だけど、こんな風に強く求められる感覚がたまらない。それに、こうやって道具みたいに扱われることが、ぞくぞくとした興奮を運んでくる。

「桜、さく、らあ……………っ！」

?その熱い声と共に、喉奥へ性器を突き入れられて、二度目の精を注がれる。そうして溢れ出したものが、奥へとびちやりびちやりと当たつて、むせそうになる。

?でもなんとか我慢。せっかく先輩が気持ち良くなつてくれているんだから、最後まで受け止めてあげたい。それに、こうして白濁を遠慮なく注がれるのが、まるで先輩に乱暴に犯されているみたいでどうにかかなりそうだった。

「んっ……………んくっ、ん……………」

? そうして、ようやく先輩の興奮もおさまってきたみたいで、注がれる精の勢いも量も減ってきた。それでも、残り一滴までも欲しくて、こくんこくんと白濁を飲み込み込み続ける。

? 先輩もそんな私の気持ちを察してくれたのか、優しく私の頭を撫でながら、最後まで口の中へと注いでくれた。

「ん、はっ、あ……ふ……」

? 先輩のものから口を離すと、むわ、と濃い雄の匂いが溢れ出した。そのあまりの濃度に、くらりとする。

? ……だめだ、こんなの。さっき先輩のを啜えながら自分で慰めていったというのに、またすぐに欲望が湧き出てくる。やっぱり、先輩のものじゃないと満足なんかできない。溜まっている今ならば、なおさら。

「先輩——!」

? 立ち上がってすぐさま、先輩の上に乗って抱きつく。その勢いそのまま唇を奪った。もう止まることなんかできない。先輩とひとつになりたい。その純粋な生殖本能しか、今の私には残っていないかった。

? 強引に唇をこじ開けて、乱暴に舌をねじ込む。お互いの歯がぶつかることも気にせず、二人の液が混じった舌を絡ませる。

?とにかく、先輩と繋がっていたかった。だから、貪欲に、またはすぎるように、先輩の舌と性交でもするかのように、いやらしいディープキスを続けた。

「は——っ……先輩、せんぱいの、もう、欲しくて、欲しくて……だめ、なんです……っ」
?そうして、唇を離して最初に出た言葉がそれだった。もう、自分で自分が制御できない。私はとつくに、発情した一匹の雌になっていた。

「ああ、俺だつて……そんなに興奮してる桜を見せられて、とつくに、限界だ……!」
?そのまま、どさり、とベッドに押し倒された。下から見上げた先輩の目には、雄の欲望がぎらぎらと宿っている。そのせいで、膣がきゆう、となつて切なくなる。当然だ。そんなもので直視されて、反応しない方がおかしい。

「はい……先輩、シて、ください——私のこと、犯してください——!」
?そこからは、私たちはただの獣だ。快楽と愛情を求めて、いやらしく交尾をするケダモノ。

?先輩は私のショーツのクロッチをずらすと、自らのものの先端を押し当ててきた。その男根は、さつき出したばかりなのに、まだかちかちに固いままだ。

?それがずぷりと押し入ってくる。私の性欲と興奮で満たされた秘所に、情欲で滾った生殖器が、足りないものを埋めるように挿入されていく。

「ん、んあ、あ、は……おつき、い……っ」

?先輩のものが僅かに擦れるだけでいきそうになる。散々焦らされ、我慢していたせいで、あまりにも感覚が敏感になっていっているせいだ。今すぐにでも、この大きなもので何度も貫いて欲しい。

?それは先輩も同じだったみたいで、中程まで入れたところでいきなりずぶんと奥まで突き入れられた。

「ひあつ、あ、あん……!」

?そのあまりの快感に、びくびくと痙攣してしまふ。まるで、頭のとっぺんまで貫かれたような快樂。そのせいで、否応なしに膣がきゅつ、と締まる。

「桜、今イった?」

「は、はい……だ、だって、わたしもう……」

?我慢できなくて、と。そう言う前に、ぱんつ、と奥まで一突きされる。

?それがあまりにも気持ち良くて、声にならないものが漏れる。でも先輩はそんな私には構わず、私に覆い被さって腰を振り始めた。

「ふあつ!!ん、あつ、あ、はっ——!」

?挿入して間もないというのに、その動きはとても激しく野生的だ。当然、そんなことをされたら、身体の痙攣も、いやらしい嬌声も止められない。ほんの僅かな先輩の動きだけで、私は快感に墮とされてしまった。

?でも、先輩にそうして墮とされるのなら本望だ。このまま、どこまでも情欲と愛情に溺れてしまいたい。

?そんな私の気持ちをさらに煽るように、先輩が何度も腰を振って膣奥を突かれる。中の肉壁を擦られる感覚と、子宮口を容赦なく責められる感覚で、気が狂ってしまいうだ。

?それに、先輩に抱き締められているから、愛されている、求められていると感じられて幸福感に全身が包まれていく。

「あ、やんつ、は、うあ……!?!?せん、ぱい、あつ、きもち、いい……!?!?んつ、あんつ、ひああ……!」

??そうやって先輩に強く欲してもらえるのがたまらなく嬉しい。でも、私が先輩を求める気持ちは際限無く湧き出てくる。

?私も先輩と同じように、首の後ろに腕を回して先輩をぎゅつと抱き締めた。さらに手だけでなく脚も。激しく私を犯すその腰の後ろに脚を回し、がちりと膣へと押し付ける。

?それによって挿入がさらに深くなって、快樂がぎちぎちに膨れ上がっていく。先輩もそれが気持ち良いのか、中で暴れる肉棒がびくびくと痙攣しだした。

?そろそろ先輩の絶頂が近いのかもしれない。だからそれを促すように、私も腰を振

り始めた。先輩の動きに合わせて、突き入れられるものを迎えにいくように、ぐつと腰を押し付ける。

「あ、ぐ……!!? さくら、それ、やば、い……!」

?先輩の顔が、快感に襲われて苦しそうな表情に変わる。その様子に、射精が近付いていることは明白だった。

?それと同時に、私の興奮も頂点に向かっていく。早く、その欲望で熱せられた白濁を注いで欲しい、と。私の中を真っ白に染め上げて欲しい、と。

?そして先輩の腰の動きも、快楽を貪るだけの激しいものに変わる。ばん、ばん、と乾いた音が絶え間なく響いて、何度も性器が抜き差しされる。

「あつ、あ——せんばいっ!? や、すご、い……わたし、もう——!? イく、イっちゃう——!」

「さくらっ!!? 桜、でる、さくらあつ!」

?互いにぎゅうう、と思いつき腰を押し付け合う。そうして先輩のものから、子宮口を犯すように、びゅくんつ、と欲望が吐き出された。

「あつ——あ、あ、は……ん、せん、ば——」

?龟头から何の遠慮もなく精液を注がれる。先輩のものがどくん、どくん、と脈を打って、性器の奥から精が送り出されているのがわかる。

? その甘い感覚があまりにも気持ち良い。だから自然と脚が動いて、先輩の臀部をぎゅつと自分に押し付けてしまう。

? そうしてさらに奥へ突き入れられるのが先輩は気持ち良かったみたいで、射精の勢いが一気に増した。その白濁が塊になって、子宮の奥まで届いているのがわかる。

「は、あ——さくら、まだ、出るっ……」

「ん、あ、はい、どう、ぞ……すきなだけ、いい、ですよ——」

? 先輩は少しだけ引き抜くと、ぱちゅん、とまた腰を私に叩きつけた。その勢いで、まだ残っている白濁がどぶんとこぼれ出る。

「っ——!?! あ——」

? あまりに突然だったから、溢れ出るものをこらえられずにまたイった。でも先輩はさらにそれを続ける。少しだけ腰を引いて、そして打ち付けた勢いのままに精液の塊を放出させて。少しだけ休んだらまたそれを繰り返す。

「あ——ふ、あ——す、(っ)……」

? 奥に出される度にくぐぐくと脚が震えて絶頂する。何度も先輩にイかされて、何も考えられなくなる。膣内と一緒に、脳内まで真っ白に染め上げられているみたいだった。

「ん……あ、ぜんぶ、でしたん、ですね……」

?どれくらいの時間が経ったのか、いつの間にか先輩の腰の動きは止まっていた。お腹の中がじんわりと温かくて、とつても満たされた感覚。

「ああ……桜、ごめん、少し、出しすぎた……」

「いえ……いいんです……わたし、すごく幸せ、です……」

?優しいな笑みと一緒に、そつと髪を撫でられる。そのままそつと口づけ。深いものじゃなくて、唇だけで啄み合うバードキス。

「あの、先輩……」

「ん……どうした?」

?唇を愛し合いながら言葉を交わす。

「まだ、できますか……?」

?本当は聞くまでもない。まだ中に入れたままの先輩のものは、全然萎えていない。むしろ、切なそうに時々びくん、と震えている。

「ああ、平気だよ——桜だって、まだ足りてないんだろ……?」

「はい……その、ごめんなさい……はしたなくて……」

「しばらくしてなかったんだから、仕方ないだろう。……それに、俺だってまだ満足してないんだ」

?先輩はそう言うと、身体を起こして私の腰を掴んだ。それは紛れもない、性交の意

思表示だった。

? そしてそのまま、先輩は腰を動かし始めた。さすがに先輩も性欲がおさまってきたのか、あまり速くはない。でも、いったばかりで敏感な私には、十分すぎるほどに気持ちが良い。一度先輩のものが擦れる度に、快楽に全身が震える。

「んっ、あ……あんっ……は……はあっ、きもちいい……せんぱい、すき……だいすきっ、ふあ、あん……せん、ぱい……」

? ぬぶん、ぬぶん、と優しい抜き差し。それが甘い幸福感を運んできて、とろけてしまいそうだ。このまま先輩と求め合つて、心も、身体でさえもひとつに溶けてしまったかった。

? でもそれは叶わないから、代わりに何度も互いの気持ちを伝え合う。そうやって、二人で足りない心を満たしたくて、私たちは強く愛し合う。

「あ、あの、せんぱい……おっぱい、さわって、欲しい、で……すっ」

? ああ、という返事と共に、ふにゆん、と両胸を包み込まれる。やつぱり、自分の手よりも、大好きな先輩の手で触られる方が何倍も気持ちがいい。

? そして、その手で好きなように形を歪められる。ぎゅつと掴まれたり、上下にゆさゆさと揺らされたり、先輩のなすがままに弄ばれると、どうしようもなく興奮する。

? そうして愛撫されたまま、生殖器のほうもたくさん求められる。また昂ってきたの

か、その動きもだんだん速くなってきた。

「んっ、ん、あんっ、あ、せんばい……あ、はげ、し……っ……」

?再び、ふっふつと快楽が昇ってきた。このまま続けられれば、限界まで高まったそれが弾けて絶頂してしまう。でも、それでいい。私はもう、このまま先輩とイってしまいたかった。

?だからもつと快感を得ようと、私は先輩の手に自分のを重ねた。そしてその指を動かして、先輩の指で私の乳首をつまませた。っん、と突き抜けるような気持ち良さ。先輩は私がおもつと欲しいとわかってくれたみたいで、こりこりとそれを愛撫してくれる。

「や、ん、あつ、せんばい、あ、わたし……っ、もうすこ、しで……」

「ん……おれ、も……いき、そう、だ……」

?その言葉を皮切りに、先輩は生殖器を激しく抜き差しし始めた。そしてそこから漏れだした互いの淫らかな液で、ぱちゅぱちゅと卑猥な音をたてる。

?それと同時に、急激に絶頂を引き上げられていく。あそこの快楽がぐっぐつと煮えたつて、すぐにでもイってしまいそう。それは先輩も同じで、快楽にこらえる表情で私のことを悦ばせてくれている。

?だから、このまま二人で快楽に溶けてしまおう。

「せんばいつ、せんばい……あ、あの、おっぱい……わたしの、おっぱいに、だして、ほしい、です……!」

「く、あ……ああ、いい、ぞ……せんぶ、桜の胸に、だから、なっ……!」

? ラストスパートとばかりに激しく腰を打ち付けられる、でも、そんなことをされて、私は全然もたなかった。

「あつ、やつ、あつ——!? ふああつ!」

? どくんつ、と大きな快樂が全身を襲つて、いやらしく絶頂した。そしてその瞬間、ぬぶん、と先輩のものを引き抜かれて、馬乗りにされた。

? そうしてそのまま、私の胸にめがけて、思い切り射精された。

「ふあつ!? あん——あ、あつつ、い……!」

? びゆるるつ、と熱い白濁が一本の塊になつて、私の胸に大量に注がれる。それは一回では終わらず、どくんどくんと何度も脈打つて、私の胸を白く汚す。

? 先輩も私に精液をかけるのが興奮するのか、熱い吐息を漏らしながら、自らの欲望を全て私にぶつけてくれている。

? そうやって、先輩で染まっていくのがたまらなくうれしい。まるで、私が先輩に征服されてるみたいで、しばらく放心状態だった。

「んっ……む、ふ……う……」

? くちゆくちゆと先輩と唇を触れ合わせる。ベッドの中、二人で横になって、事後の余韻を楽しんでいた。

「桜。さっきので満足、できたかな」

「ええ、もうお腹いっぱいになるまでしてもらいましたから。先輩、ありがとうございますました」

? 少し照れくさそうにしながらも、先輩は満足そうに頷いて私にキスを――

? ——ぎゅるる、と。とつても恥ずかしい音がした。ぼんっ、と爆発しそうなほど顔が真っ赤になるのがわかった。

「あー……その、そういうえばもう昼、だよな。そろそろ食べようか」

「は、はい……」

? 最後の最後でやらかしてしまった。その後、お台所に行くまでずっと顔は真っ赤なままだった。

蛇と花

目が覚めると、ベッドの上だった。身体を起こして辺りを見ると、薄暗い照明が照らす部屋に俺はいた。雰囲気はどこことなくラブホテルというものに近い感じがした。

「ん……あ、これ、夢か……」

思考がぼんやりしていて、どこか現実感のない感覚。確か前にもこんなことがあったような——。考えようとしても頭が働かない。夢の中だからなのか、それとも部屋に漂う甘ったるい匂いのせいかわからないが、なんだかくらくらする。

「士郎」

「え？」

不意に声がして視線を前に戻すと、そこにはいつの間にか長髪の美女が座っていた。

「ラ、ライダー。いつの間にそこに……っっていうかここは……?」

「さあ……私にもよくわかりません」

ふむ、と考えるような仕草をするライダーの姿に目が行く。というのも、今のライダーの格好がいつもとまったく違うのだ。

家にいる時の私服でも、聖杯戦争の時のものでもない。普段と同じなのはその魔眼を

封じている眼鏡だけで、その肢体に纏っているものは薄いキャミソール一枚だけ。しかも、かなり薄いものらしく、その豊満な胸の真ん中に薄い桃色が透けてしまっている。

その光景に、思わず息を呑む。普段ライダーのこんな色気を感じさせるような格好なんて見ないし、その上部屋の感じが扇情的な雰囲気醸し出しているから、鼓動がどくどくと速まってしまふ。

「まあ、そんなことはどうでも良いのです。……それよりも」

ライダーはそう言つて、四つん這いで俺に近寄つてきた。そのせいで、先ほどから見えていた胸の谷間がより露骨に俺の目に晒される。慌てて顔を背けるが、そんな俺の耳元にライダーが顔を近づけ囁く。

「土郎？　先ほどからどこを見ていますか？」

その、砂糖菓子のように甘い声に、背筋がぞくりとする。しかもこんな至近距離で息遣いまで直に感じるから、なおさら。

「な、なにも見てないよ……」

そんな、誘惑するようなライダーの態度に、返す言葉には説得力なんか微塵もなかった。

「そうですか？」

その声色のままライダーは言う、そつと俺の片手を掴んで自らの胸元へ引き寄せて

きた。

「ら、ライ——」

静止の言葉が出る前に、柔らかな感触が手の平に伝わる。大した力を込められている訳でもないのに、ずぶりと乳房に手が沈み込む。まるで包み込まれるような感覚。

「……見ていたように思えたのですが」

耳から全身に毒でも流し込むような、艶めかしいライダーの声。

「し、仕方ないだろ……っていうか、そもそもなんでそんな格好してるんだよつ」

慌てて離れようとするが、身体に全然力が入らない。そんな俺とは対照的に、ライダーは楽しみに俺の手を胸にぐりぐりと押し当てながら言葉を続ける。

「ええ——仕方がないのです。貴方は些か鈍いですから、少々露骨な真似をしなければ——このような“誘い”にも気付いてさえくれないでしょう？」

「な——」

言い返そうとしてライダーのほうに向き直ったのが悪かった。ライダーはそれを待ち構えていたかのように、即座に俺の唇を奪ってきた。そしてあつという間に舌を俺の口内に滑り込ませ、獲物を捕らえるように舌を絡めとられる。

ぞくん、と全身に快感が走る。ライダーの舌が俺の舌に触れた瞬間、感覚が一気に敏感にされた。大して深く触れ合わせた訳でもない。にもかかわらず、まるで激しく舌を

貪り合っているときのような、身体を震わせるほどの快楽。

だが、そんなものは序の口だった。ライダーのその長い舌で、口の中を隅々まで犯される。甘い唾液を毒のように口腔に染み込ませるように、舌だけじゃなくて歯茎までもすべて舐めとられる。そうして口内全体を甘い毒漬けにされたあと、ライダーはお待ちかねとばかりに舌を蹂躪し始めた。

唾液まみれのものを深くまで絡め合わせて、じゆるじゆると俺のを吸われる。そのあまりの快感に、びくんと身体が跳ねる。それは、まるで俺の理性ごと吸い取られるような行為だった。

いや、実際そうなっている。キスされたときにはまだ残っていた抵抗しようとする意思が、今はもうほとんど残っていない。そしてその代わりに、頭の中はライダーの舌と唇の感覚で埋まっていく。

くちゆくちゆといやらしい音を立てながら、ただ一方的に快楽を送り込まれるだけの接吻。口内だけを浸していたその快楽は、次第に身体全体にまで広がっていく。全身が快楽を欲しがるように火照り、俺の雄の象徴にはどんだん血が集まっていく。

「は——ふふ……土郎、こゝ、固くなってますよ?」

「う……ライ、ダーっ……」

ちゅほん、と舌を引き抜かれて、ズボンの上からさすさすと膨らんだ部分を撫でられ

る。いきなりそんなことをされて、情けない声を上げてしまう。布が間にあるというのに、まるで直接舌で舐められたような気持ちよさ。

「ライダー、まずい……っつて……」

いくら夢の中とはいえ、さすがにライダーとそういうことをするのは良くない。けど、まるで金縛りにかかったように身体の自由がきかない。

「む……やはり私だけでは抵抗があるようですね」

「え……?」

意識が混濁してきて、ライダーが言ったことの意味を理解することすらままならない。いつの間にか着ていた服が全部消えていて、俺は全裸にされていた。そしてそれは目の前で妖麗な笑みを浮かべているライダーも同様で、美しい素肌がすべて俺の目に晒されている。

そんな状況を前にして混乱していると、突然俺の背中にどこか覚えのある重みがのしかかってきた。

「せーんぱい」

聞きなれた声。しかしその声色は普段とは違い、明らかな誘惑の色が見て取れる甘ったるい声だった。

「さ、桜?」

振り向くと、そこには頬を赤く染めた桜の顔があった。

「どうしてここに——んっ……！」

さつきライダーにされたのと同じように、いきなり口づけをされる。でもライダーのような深いキスではなく、唇同士の甘いキスだ。だが意識がぼやけてきている俺にとつては、それだけでも強い刺激だった。

熟れた果実のような桜の唇で、何度も唇を優しく啄まれる。そうされる内に、お互いの唇の境界がだんだんと曖昧になっていく。

それは触覚ごと溶け合っていくような感覚。桜に唇を愛撫される快感も、桜が俺に奉仕する感覚も、全てが混ざり合って流れ込んでくる。

「んっ、ちゅ……せんば、い……」

うつすら目を開けると、最初から目を開けていたのか、桜のとろんとした瞳と視線が絡まる。桜は微笑むように目を細めると、まるで挨拶といわんばかりに唇をぺろりと舐めてきた。

そして緩みきつた唇の間に、熱くぬめつた舌を挿入される。もう理性もほとんどろかさされた俺は、それを拒むことすらできない。むしろ、俺も自分の方から桜の舌を迎えにいった。

さつきはライダー。そして今度は桜。そんな二人の美女にキスの快感を流し込まれ

て、平気でいられる訳がなかった。とつくの昔に、もつとその快感を欲しがっていたんだ。唇をこすり合わせて、舌を一つに溶かしあうような、そんな唇同士濡れた戯れを。だから俺はその欲望に身を任せて、桜と二人でその行為に没頭した。

そうしているうちに、他のどうでもいいことはするりと頭から抜け落ちていく。ライダーにそばでこんないやらしいキスを見られていることも、どうして桜とライダーが二人して俺に迫ってきているのかも、全部。

「ん、は——せんばい……先輩のキス、素敵です……」

さんざん口内を犯しあつたあと、どちらからか唇を離す。二人とも口のまわりはどちらのものかもわからない唾液にまみれて、むわりとした湿り気で軽く酔いそうになる。

「ふふ……さすが、二人のキスはとてもお熱いですね。見ているこちらまで興奮してしまいます」

「ん……もう、恥ずかしいよ、ライダー」

ぺろぺろと俺の口の周りの唾液を舐めとりながら桜が言う。だがどこかまんざらでもなさそうだった。

「先輩？ ライダーも我慢できないみたいですし、そろそろ……しませんか？」

まだお互いの吐息を感じられるほどの距離で、桜が甘い誘惑を囁きかける。夢の中だからなのか、普段と違う積極的な桜。そこから逃げるようにライダーに視線を移すが、

そちらもそちらで、

「ほら、桜もこう言っていますよ？ それとも、士郎は私と桜だけでは不満ですか？」

なんてことを言ってきた、もう逃げ場なんてなかった。それに俺の方ももう限界だった。二人にいやらしいキスをされて、興奮は高まって仕方がないというのに、身体への刺激は何一つない。さつきから下腹部で反り返る俺のものは快楽を求めてびくびくと震えている。

「わっ、わかったよ。……正直、俺だって我慢なんかできない——二人としたくて、たまらない」

本当は、したくてたまらない、なんてレベルじゃない。二人を押し倒して、その身体を隅から隅まで貪り尽くしたい。そんな、激しい欲望が胸の中に渦巻いている。

「ふふ……では早速始めましょうか。三人でたっぷり楽しみましょうね」

ライダーはそう言うと、妖しげな微笑みを浮かべた。それはまるで、獲物を前に舌なめずりをする蛇のようだ。

「まずは先輩のこと、気持ちよくしてあげます。もう先輩のここ——こんなにおつききになって……はやく楽にしてあげますね」

桜は後ろから俺に密着したまま、脇の下から両手を伸ばして俺のものを握った。桜も服を着ていないらしく、背中に柔らかな双丘の感触が直接伝わる。

「あ……先輩の、びくびくしてる——ふふ、可愛いです」

桜はくすぐすと楽しそうに笑うと、そのしなやかな指で性器を上下にしごき始めた。まだ最初だからか、あまり力が入っておらず、いたわるような優しい手淫。手の平全体で生殖器を包み込まれて、根元からカリの部分まで撫でるように桜の手が滑る。

「うあつ——さく、ら……」

でも、興奮がどんどん昇り詰めている俺にとっては、思わずのけぞってしまふ程の快感。そんな俺の反応が嬉しかったのか、桜がちゅ、と首筋にキスを落としてきた。それがかくすぐったくて、ぶるりと身体が震える。

それと同時に与えられる、性器への心地よい刺激。しゅっ、しゅっ、と桜の指と俺の肉棒がこすれる音と共に、ずきずきと痺れるような快樂がこみあがってくる。優しく、甘やかすような動きにも関わらず、その動作ひとつひとつを鋭敏に感じ取れる。まるで、身体中の触覚機能が股間に集まっているかのようだ。

「土郎……とても気持ちよさそうですね」

その声で、ライダーが目の前にいることを思い出す。ライダーは俺がこうして桜に奉仕されているのを愛おしそうに見ていた。

「では私も——」

ライダーの両手が、包み込むように頬に触れる。そして指先がつう、と少しずつ頬を

伝つて下へ滑つていく。頬から首筋。鎖骨から胸へと。そして、乳首まで来たところでその動きが止まった。

「私は……を……いじつてあげましょう」

その言葉と同時に、添えられた指にきゅつと突起をつままれた。途端、針のような鋭い快感が全身を突き抜けた。

そしてそのまま、こね回すように乳首を弄ばれる。そこから伝わる快感は、まるで水の波紋のように全身にじんわりと広がっていく。それは桜の手淫とともに、下腹部に快楽を少しずつ蓄積させてくる。

「士郎……こうされるの、いかがですか？」

「い、いかがつて……つ、あ……それ、は……」

「気持ちいいん、ですよね——？ だつて先輩の、どんどんおつきくなつてます……ん……そろそろ、もつと激しく扱いてあげます、ね——」

桜が耳元で興奮の混じつた熱い吐息混じりに囁く。そしてその言葉通りに、優しくかつた手の動きが急にその速さを増した。それだけではない。桜はただ上下に性器を擦るのではなく、軽く手を捻りながら搾り取るような動きで俺のものを扱いてきた。

ぞくん、と鳥肌まで立ちそうな快楽。それは先ほどまでの溶かすような快楽とは全く違う、精液を強制的に搾り取つてくるような強烈なものだった。

「それでは私も……もつと、気持ちよくしてあげましょう」

「え——うあつ……！」

ちゆく、と片方の乳首がライダーの唇に吸われる。急に快感の形が変わったことに、痙攣となつて身体が反応してしまふ。さらに、その刺激に慣れる前に今度はその長い舌で先端だけをちろちろと舐められる。その、まるで焦らされるような動きがぞくぞくとした快感を運んできてたまらない。

「ん……ちゆ、ふふ——士郎、ん、もうすっかり固くなつてしまいましたね……ん、ふ、ちゆ……う……」

気付くと、桜に扱かれている性器の先端に、包み込むような感触があつた。そちらに目をやると、ライダーの空いた片手に軽く亀頭を触られていた。桜の激しい手淫とは対照的に、手の平全体で包み込んでさわさわと撫でるように刺激される。

しかしそれは、乳首にも竿にもいやらしい快楽を流し込まれている俺にとつては、それだけでもたまらない快感だつた。さんざん二人に奉仕されて、全身の感度が上がっているのに、そんな敏感なところを触られて気持ちよくないはずがない。

「ん、ちゆつ……ふ、う……しろう……んつ、可愛いですよ……ん、は……」

「先輩……はあ、あ……先輩の——すてき……」

まさに夢心地だつた。二人の美女にこんな丹念に愛情を込めて奉仕されている。

前からはライダーに、後ろからは桜に。あまりに現実感のない光景。夢だとわかっていてもそう思ってしまうほどだ。それなのに、感じる快感だけは現実そのもの。いや、それ以上にさえ感じられる。

そんな状態だから、気付けばもう快感の頂点はすぐそこまで来ていた。生殖器の中でぐつぐつと煮え滾った欲望が、すぐにでも外へ放出されたがっているのがわかる。それがライダーの愛撫でさらに凝縮され、桜の手淫で出口へと昇り詰めていく。

「ん……土郎、そろそろイキそう、ですか？」

「う……っ、ああ……」

「じゃあ、交代ですね」

桜はそう言うと、絶頂寸前の俺のものから手を離れた。唐突な寸止めに、快感を欲しがるように生殖器がびくびくと痙攣する。

「ごめんなさい、先輩。——でも次はライダーがしてあげますから、安心してください」

その言葉にライダーの方を向くと、軽く微笑む彼女と目が合った。ライダーは

「では、失礼します——」

と言つてかがんで、俺の陰部に顔をうずめた。

「ふふ……土郎の、触つてもいけないのにこんなにびくびくして……いやらしいですね」

「う……だつて、しょうがないだろ……」

「ええ、わかっていますよ。ちよつとからかっただけです」

ライダーはくすぐくすと笑うと、まるで挨拶とばかりに目の前のものの先端に口づけた。ぴり、とくすぐつたい感じがそこから全身に伝わる。

「それでは士郎の——いただきますね……ん……」

軽く息を吐くような声とともに、ライダーがその口を開ける。生暖かい吐息があたつて、ぞくりと身震いしてしまう。そしてすぐに、ぱくりとそのぬめつた口に亀頭が飲み込まれた。

「は——う、あつ……!」

まだほんの僅かな部分しか口内に入っていないのにも関わらず、思わず射精してしまふ。いそうなほどの快感が襲った。ライダーはその状態のまま軽く目を細めた。まるで、「どうですか」と言わんばかりの表情。

そして当然それだけじゃ止まらない。ライダーはなんの躊躇もなく、くぶぶ、とその口の中に根元まで咥えこんだ。途端、ぞつとするほどの快感が全身を包み、声にならないものがこぼれ出る。

「先輩——我慢しないで、いつでもライダーの口に出しちゃっていいですからね……」

桜は耳元でそう囁くと再びわきの下から俺の正面に手を回すと、さつきライダーがしていたように俺の乳首を弄び始める。そんなことをされたら、桜に言われるまでもなく

我慢なんかできるはずもない。というか、すでにほぼ限界ぎりぎりだ。

既にライダーは顔を上下に激しく動かして、射精を強く促してくる。ずぶ、と奥まで啜えこまれる度に亀頭に喉奥の感触が伝わってきて、そのまま射精してしまいそうなど。さらにそれを煽るように、長い舌で執拗に先端を舐められる。

「あ……う、つ、は——らい、だーっ……！ そんな、につ、したら……！」

ライダーは口淫を続けたまま、嬉しそうに笑みを浮かべた。「どうぞ、このまま」とでも言わんばかりのその表情に、射精感がどくどくと昇ってくる。もう、すぐにでも終わってしまう。

しかしその射精感を、まだこの天国のような快感を味わっていたという、贅沢な欲がそれをせき止める。そうやってせり上がる精をこらえる感覚ですら気持ちがいい。

「先輩——いいんですよ？ そのまま一番奥にあっついの出しちゃいましょう——？」

だが、その桜のたった一言で最後のかせはあっけなく外されてしまった。その言葉が耳に届いた瞬間、押しとどめていた白濁が急激に昇ってきた。

そしてとどめとばかりに、ライダーは啜えている俺のものを思い切り吸い上げてきた。じゅるる、と卑猥な音が響き、俺の快感は一番てっぺんまで達した。

「く、あ——！ライダーっ、で、る——っ！」

ライダーは俺の絶頂をわかっていたのか、射精の瞬間に一番奥まで性器を啜えこんで

くれた。そして押し入れられた喉奥を犯すように、精を思い切り吐き出した。

「ん——！」

うめき声、というよりはどこか嬉しそうな声を漏らして、ライダーは俺の射精を受け止めてくれた。それに甘えて、俺は全身の力を抜いて射精の快感に浸った。

その間も二人は俺への愛撫を続けてくれていた。桜は後ろから乳首を弄びながら首筋に甘い口づけを。ライダーは俺の射精を受け止めながらも舌をいやらしく竿に絡めて精を搾り取ってくる。

「んっ……ふ、んう……」

暖かい口内で精を無遠慮に放出する感覚。それが意識がとろけるほど心地いい。少しライダーの舌で擦り上げられるだけで、生殖器の奥から熱いものがあふれ出る。その精が尿道をこすって吐き出される快感がたまらない。

「んっ……先輩……好きだけど、ライダーのお口に出してあげてくださいね」

そんなの言われるまでもない。というか、止めたくても止められない。既にさんざん口内に射精したというのに、それが止まる気配も萎える気配もない。むしろ、ライダーに搾り取られるように奥からどんどん精液があふれてきて、勢いは増してきている気さえする。

そしてライダーは俺がそうして大量の白濁を放出しているにもかかわらず、時折俺に

微笑みかけながら優しく飲み込み続けている。だからそのまま快樂に身を委ねた。後ろの桜に身体を預けながら、射精が終わるまでの間そうやって際限のない快樂に浸っていた。

「んっ……は——」

どれくらい時間がたったのか、やっと吐精が終わり、ライダーが俺のものから口を離した。

「士郎の——とつても濃いですね……酔ってしまいそうです」

恍惚とした色に顔を染めてライダーは言った。そしてその中には、僅かな誘惑の気も含まれていた。まだこんなものじゃないでしょう？ と、そんな挑発めいた色を孕んでいる。

「でも先輩——まだ足りないですよね？」

そして、俺の気持ちを見透かしたように桜の甘い言葉が耳元で響く。

「ええ——だって士郎のこゝ、まだこんなに固いまま……」

ライダーは不意に俺の耳元まで近寄ると、声をひそめて囁いた。

「もつと——私たちのこと……汚したいのではありませんか？」

そのむせかえる程の色香を含んだ声色にぞくりとする。まるで神経を直接撫でられ

たような感覚。さらに桜が反対の耳から追い打ちをかける。

「先輩……先輩の好きなようにしていいんですよ——？ 私たちのこと、たくさん可愛がってください」

それでついに、かちりと頭の中のスイッチが切り替わった。理性を保っているのももう限界だった。

「ん……ちよつと恥ずかしいですね、これ……」

「ええ。ですが、こういうのも倒錯的で興奮しませんか？」

眼前には、二人分の引き締まった美しい尻がいやらしく突き出されている。そのあまりに淫靡な光景に、軽い恐怖さえ抱く。四つん這いになった二人は、こちらに紅く火照った顔を向けていた。その表情は期待に満ちていて、俺の情欲をより一層加速させる。

その昂る心を抑えながら、両手でそつと壊れ物を扱うみたい二人の臀部に触れてみる。すると、嬉し気にびくんと両の身体が震える。手の平には興奮で燃えるような熱が伝わってきて、その情欲が手に取るようにわかった。それに誘われるように、屹立した俺のものがびくんと反応する。

そのまま撫でまわすと、共鳴するように二人がいじらしげに身じろぎするのが可愛ら

しい。

「んっ……せん、ぱい……焦らさないで、ください……っ」

荒い吐息とともに切なげな声を漏らす桜。その目は少しだけ潤んでいた。

「士郎、先にサクラに挿れてあげてください……私はそのあとで良いですから」

「ん……わかった」

位置をずらして桜の尻を前にする。我慢できないのか、僅かに震えるその腰を両手で掴む。そしてずい、と腰を突き出して、性器の先端を弾力のあるその尻に触れさせた。その快感にお互いの身体が小さく跳ねる。

そのまま軽く竿を擦りつけてみると、ぞくぞくと気持ちがいい。でも、もつと桜と触れあいたい。その尻の肉の間の、いやらしい液が滴る蜜壺へと入っていきたい。

そこへ誘われるままに、腰を動かして先端を入り口にあてがう。情欲にまみれた二人の性の象徴が、ぬちゃりと淫らな音を立てる。

「ん……せんぱい、いれ、て……っ」

桜は、もうたまらないといった声と表情だった。そして挿入をねだるように尻をくねらせてくる。

「ああ……いく、ぞ……」

その誘惑にこらえきれなくなった俺は、その秘裂にゆっくりと侵入する。桜の色情で

とろけたその秘所は、快感を欲しがる俺のものを容易く受け入れてくれた。熱い膣壁に生殖器が入っていくほど、二つの肉が溶け合って気持ちがいい。

そうしてしばらくもしない内に、俺と桜の身体はぴつたりと繋がった。敏感な先端が桜の子宮口に当たって、まるでさらに奥へと誘われているかのよう。

「は、あん……せんぱいの、あつつい……とけちやいそう、っ……先輩……わたし、もう我慢できない、ですっ——」

「っ……ああ、わかっている……おれも、もう——。さくら、俺、加減できないからな……っ」

桜の返事を待つことなく、腰を引いて乱暴に打ち付けた。もう耐えきれなくて、とにかく目の前のきれいなその体を貪りたかった。

「ふあんっ！ は——あんっ……い！」

でも桜はそんな俺の欲望に、嬉し気な嬌声で応えてくれた。そんな反応をされ、余計に胸のうちの欲望は激しく燃え上がる。

そのまま躊躇なく桜の尻に腰を叩きつける。ぱん、と肌がぶつかり合う音とともに、汗と淫らな二人の体液がはじけ飛ぶ。そうして桜を犯すほど、中の生殖器がこすれてたまらなく気持ちいい。桜の息遣いと俺の動きで暖かい膣壁が包み込むように擦り上げてきて、痛みとも思えるようなずきずきとした快感が生殖器に溜まっていく。

「あんっ——！ やん、ひあ、あっ……す……っ！ せんばい、のっ、はげし……いっ……！」

さらに、桜のその乱れきった姿も、俺の興奮に拍車をかける。固く勃起したもので奥を突く度に、快楽に押し出されるようにその口からいやらしい声が漏れて、もつと狂わせてしまいたくなる。

その欲望に突き動かされるように、勝手により激しく腰を振るようになってしまう。俺にそうして強く身体を揺さぶられて、桜の反応はより淫らなものに変わっていく。そのきれいな髪は激しい動きで振り乱され、時折こちらに向ける顔は快楽でとろけきつて、もつと、と切なげな声を漏らしてくる。

「あっ……い……せんば、い、ふあ、あん……っ、もつ、とお——！ もつと、犯してっ——！ せんばいっ……！」

そして俺の動きに応えるように、桜も腰を上下に動かして俺を悦ばせてくる。その動きが俺の腰振りと合わさって、中の生殖器が膣のひだに激しく扱かれる。それはまるで早く射精してと促すような刺激だった。睾丸の中に溜まった快感を吐き出させようと、ぐちゅぐちゅと絡みついてくる。

射精感は急激に引き上げられてきて、このまま腰を振り続けたらすぐに出してしまおう。正直このまま桜と共に果ててしまいたい。でも俺は、そこで腰の動きをとめた。

「あ……え……、せん、ばい……？」

急に動きをとめた俺に、桜は戸惑いの色があった。そして俺のほうに振り向いたその目には、名残惜し気な涙が浮かんでいる。

「ごめん、桜……でも、ライダーにもちゃんとしてあげなくちゃだから、さ」

「あ……そうですよ、私夢中になっちゃって……ごめんね、ライダー」

「いえ、あの……良いのですか？ お二人で最後まで楽しんでからでも、私がかまわないのですが——」

ライダーは少し困ったような顔をこちらに向けた。

「俺がそうしたいだけなんだからいいんだ。それに、ライダーも言うてだろ？ 三人でしようって」

「うん、遠慮しないでいいのよ、ライダー」

ライダーは考えるように間を空けたが、

「——では、お言葉に甘えることにしましょう。ありがとうございます、サクラ、士郎」と言つて微笑んだ。

「……じゃあ、いくぞ、ライダー」

「ん……ええ、お好きなようにして頂いて構いませんからね」

桜の時と同じように、ライダーの腰を挿んでそこへ性器をあてがった。中へと誘惑するようにひくつくライダーの秘所は、桜と同じか、それ以上に濡れそぼっていた。それもそのはず、ライダーは俺と桜が交わっている時から、どこかうらやましそうな顔で身じろぎをしていた。

「んっ………土郎………っ」

腰に力をいれてゆっくりと挿入する。快感に驚くようにその身体が震えて可愛らしい。

熱い蜜でとろけたライダーの性器は、まるで俺のものを吸い込んでいくように受け入れてくれる。そして挿入したところは、容赦なくライダーの膣が締め付けてくる。

「っ………ライ、ダーっ………いー」

その快感に耐えきれなくなった俺は、強引に腰をその尻へ押し付けた。その勢いで、乾いた音と一緒に互いの液がはじけ飛ぶ。

「あ………っ！」

「わる、い………ライダー、痛かった、か？」

「いいえ………問題ありません。………それより、土郎、もう我慢できないのではありませんか？」

その言葉とともに、くちゅ、ライダーはその尻を揺らした。その快感に、はちきれそ

うな肉棒が大きく痙攣する。

「ほら、すごい反応……このまま、士郎のお好きなようにどうぞ——」

そんなことを言われて我慢できるはずも無かった。ライダーの言葉に突き動かされるままに、腰を引いて打ち付ける。そして勢いを止めることなく、その生殖器の抜き差しをくり返す。

「んっ……… あ、んっ、あ……ん、ふふ……士郎、んっ、きもち、いいですよ……あつ、は、ん………！」

俺のその欲望に、ライダーも艶めかしい嬌声で応えてくれる。本能のまま喘いでいた桜とはまた違って、ライダーはまだ落ち着いた感じが残っていた。そのおかげか、言葉の端々から漏れる甘い声がより引き立って聞こえる。

それがもつと聞きたい。その思い出、さらに強く乱暴にその尻に腰を叩きつける。すると、それに悦ぶみたいにライダーの膣がきゅつと締まるのがわかった。奥に突き入れて軽く引き抜く時に、逃がすまいと絡みついてくるのが気持ちいい。そのまま竿の中に溜まった白濁までも吐き出してしまいたいほど。

「は、んっ、あんっ………！　しろ、う………！　そんな、らんぼう、に………ん、あつ、だ、め………っ！」

そしてライダーの嬌声もより野性的なものへと変わっていく。普段は物静かな彼女

を、俺がこんなに淫らに狂わせていると思うと、おかしくなりそうなほど興奮する。

そしてそれと同時に、射精感もどんどん高まっていく。当然だ。桜としていた時から出したいと思っていたのに、ライダーとまでこんな激しく交わったらいついってもおかしくない。

でも、まだ終わりにしたくない。この、俺まで狂ってしまいそうな二人の感触をもつと味わっていたかった。

「あっ………んっ、はあ——あ………しろっ——」

焦らすようになってしまつて申し訳ないと思いつつも、俺は腰の動きを止めて愛液の滴る蜜壺から性器を引き抜いた。

そして再び、もじもじと切なそうにしている桜の方へ。

「あ………せんば——あうっ………！」

そして興奮で火照る尻を鷲掴みにして、桜の秘部へと挿入した。そして何のためらいもなく、また桜のことを犯し始めた。

——その後は、意識まで二人と溶け合うような時間だった。ただ雄の本能のままに二人のことを貪った。容赦なく肌と肌を打ち付けあって、射精しそうになったら引き抜いてもう片方へ突き入れて。それを何度も何度も繰り返した。

でも、さすがにそれも限界がきた。ライダーと交わっている最中、耐えきれないほど

の射精感が昇ってきた。それはここで腰を止めても、そのまま零れ落ちるように出してしまふほどのもの。

だから、俺はさらに腰の動きを早めた。もうとつづくに快楽は限界を超えて溜まつていったんだ。いい加減、それを出してしまいたかった。

「う、つく……ライダー、も、でそ……う、だ——！」

「ん、あ……っ！ ええ、いい、ですよ……っ、そのまま——！」

そのライダーの言葉で、もう我慢できなくなつてしまった。俺は掴んでいる尻に爪を立てて、思い切り奥へと生殖器を突き入れた。

その動きに共鳴するようにライダーの膣も反応して、精液を搾り取るように締め付けてきた。そしてそれに導かれるまま、一番奥へと白濁を打ち出した。

「んっ——！ あ、は……で、て……います、よ……しろうのあついの……っ、すごい、いきおい……」

うっとりとした声でライダーの身体が脱力していく。それを犯すように、白濁液が放出される。気持ちいいのか、出している間もライダーの膣が反応して軽く締め付けてくるのが心地いい。それに促され、びゅくびゅくと精子があふれ出てくる。いくら出しても足りなくて、竿も全然萎えない。

「は——あ、ライダー……っ」

どれくらいの間がかかったのか、やっと吐精が終わって、ゆつくりと性器を引き抜く。その時、ライダーが少し身体をふるわせて、その動きでぬるん、と肉棒が一気に抜けた。急に強く擦られて、残った精がどくん、と吹き出される。

それがライダーの身体まで飛んで、尻や背中を汚す。

「士郎——たくさん出しましたね……気持ちよかったですよ——」

でもライダーは、そういつて満足そうに微笑んだ。

だが、俺の方はまだ足りなかった。もちろん、ライダーとの性交はこれ以上ないくらい気持ちよかったけれど、俺の心と身体はもっとたくさんのお楽しみを欲しがっていた。

だから俺は、再度桜の方へと身体をずらした。そしてその腰を掴むと、びくんとした痙攣と共に、

「あ——先輩、私にも、出してくれるん、ですか……？」

と期待のこもった声で聞いてきた。

「当たり前だ。二人のうちどつちかだけなんて不公平だ」

「あ……ありがとうございます、先輩。……じゃあ、お願いします、わたし……もう、切なくて……」

こくりとうなずいて、ずい、と腰を突き出して挿入する。桜のはもちろん、俺のも精液と愛液でどろどろで、入れるだけで気持ちがいい。

そしてまだ全部入りきらない内に抜き差しを始めた。俺もそうだが、桜のほうがかもう我慢ができないといった感じだった。身体は俺が少し性器を動かすだけでびくびくと痙攣しているし、膣の締め付けは、入れてるだけで射精してしまいそうなほど。

「んっ、あん……！ やっ、あ、は……！ せんばい、あっ、すご……っ、あっ、だめっ、そんなにしたら、イっちゃいます……！」

でも、こんな風に二人とも限界の状態じや、絶頂なんかすぐに来てしまう。桜はさっきまで散々焦らされていたし、俺も出したばかりで感度が上がっているのだ。

「さく、ら……！ おれも……っ、また、いきそう、だ……！」

それでも休むことなく互いに腰を打ち付けあう。どろどろの互いのものが擦れるのがたまらなく気持ちがよくて、絶頂が昇ってくるのもお構いなしに腰を振る。そのせいで、桜の締め付けはどんどん強くなってきた、残っている精液が全部搾り取られそうな感覚。

「せんばいつ、あ、あっ、いく、いっちゃいますっ……！」

そして、互いの快感が一番高まったその瞬間、亀頭を子宮口に思い切り押し付けて射精した。

「あっ……！ あ、は……んっ……あ……！」

びゆくん、と白濁が勢いよく桜の子宮口を撃ち抜いた。そしてその勢いを失わないま

ま、奥から際限なく欲望があふれてくる。

気持ちよすぎて、失神してしまいそうな絶頂。亀頭の先から精を吐き出して、桜の中を真っ白に染めていく感覚でおかしくなりそうだった。

「ん……はあつ……あ、すごい、い、せんぱいのあつっいの……どンドン、でて、きて……おかしく、なりそう——」

そういつて嬉しげに身体を震わせる桜。その身体に全部受け止めて欲しくて、俺の身体の中身まで撃ち出すようにぎゅう、と腰を押し付ける。それに押し出されて、どくん、どくん、と短い射精が何度も繰り返される。

「あ……せんぱい、せんぶ、でちやいました、ね……」

そうしてようやく長い絶頂が終わった。そして肉棒を引き抜くと、桜の秘部からつう、と糸が引いていた。

そうして引き抜いたものを汗で濡れる尻の割れ目に軽く擦りつけると、どぶん、と最後に残ったものが吐き出された。ぱた、と白濁が桜の身体にかかって、ライダーと同じように中も外も俺の精で汚してしまった。

「は……あ——」

脱力して、ぼす、と後ろに座り込むと、二人の尻が目に入る。割れ目からは奥まで出した精液がだらしなくこぼれ出て、身体にかけたものがその美しい肌をどろりとつたつ

ていた。

その光景を前にして、背徳感と征服感がこみ上がってくる。自分が二人をこうしてしまったという事実には、くらりとするほどだ。

「あ、あれ……」

そう思った瞬間、ばたん、と倒れこんでしまった。そこでようやく、自分の体力が限界なことに気づいた。

自分の意思とは関係なく、だんだんと意識が遠のいていく。そして電源が完全に落ちる直前に、視界に誰かが映りこんでいることに気付く。

「おやすみなさい、先輩」

「良い夢を、士郎」

目が覚めると朝になっていた。軽い倦怠感が全身を包んでいて、身体を起こすのが大変だった。

「……」

なんとなくぼーっとすること十秒。すると見た夢のことがだんだんとよみがえってきた。

「……ど、どうしてあんな」

途端に恥ずかしさと罪悪感がこみ上がってくる。夢の中とはいえ、あんなに好き放題してしまったのが、二人にすごく申し訳ない。その上、ライダーにまで手を出してしまったことへの罪悪感がすごい。

「はあ……」

……とりあえず起きよう。ここで色々考えたところで何にもならないんだし。朝食の準備もある。

と、ふと顔を上げたとき、障子が少し空いていることに気が付く。そしてその間から誰かが覗き込んでいる気がして、目を凝らしてみる。

「士郎、おはようございませう」

魔眼殺しをかけた瞳と目が合った。

「ん……おはよ、ライダー」

「桜がもうすぐ朝食ができるよ」

「あ……もうそんな時間なのか。わかった。すぐ行くよ」

「はい。では私はこれで」

と、俺がそこから目を離す直前、ライダーは俺を見て妖しく笑った気がした。だが、再び視線を戻したときにはもうライダーはいなくなっていた。

気のせい——だったのだろうか。でもあの、獲物を前にしたようなあの瞳は、夢で見

たものと同じだったような。

……あれ。もしかして俺が見たのは夢じゃなかったのでは――

昼休みの情事

ある昼休みのことだった。桜が教室に俺を呼びに来たのは、お弁当と一緒に食べようといういつもの用件ではなかった。

「先輩、あの……魔力、が」

顔を真っ赤に染めて申し訳なさそうにする桜を見て、俺はその手を引っ張って足早に教室から連れ出した。

とりあえずあまり人気のない場所にある空き教室まで来た。中に入って扉を閉める。念のために鍵もかけた。

「あの、すみません、先輩……お昼近くくらいから急にこうなっちゃって……」

桜は片腕を握りしめながら顔を曇らせる。急いでここまで来たせいもあるが、呼吸が少し乱れていて苦しそうな様子。

「いや、桜が謝ることない。仕方がないことなんだからさ。それよりあんまり時間もないし、その、なんだ……」

そこで桜と目があう。どこか気恥ずかしくて、互いに目をそらす。

「は、はい……………えっと、します、か……………」

「あ、ああ……………」

と言ったものの、互いに視線も合わさないまま数秒。恥ずかしさというよりは、学校で行為に及ぶことへの抵抗感。

でもいつまでもそうしている訳にはいかないと、二人ともおずおずとお互いの背中に手を回す。そして、こつん、と額を触れ合わせて見つめあった。

「やっぱり学校だと、なんというかその……………緊張するな」

「ん……………そうですね。なんだかいつもより、すごく、どきどきします」

そういつて恥ずかしそうにはにかむ桜。それがたまらなく可愛らしくて、どくんと心臓が跳ねる。

「桜……………キス、していいか？」

「は、はい、私も……………したいです」

片手で顎をくい、と上げる。それで桜も悟って、目を閉じて少し大きめに口を開けた。それは、明らかに深い口付けを誘っていた。

「桜……………」

そしてそんな誘惑に耐えられるはずもなく、興奮で軽く震えるその唇に自らのものを重ね合わせた。そして唾液で濡れた舌を中へ突き入れると、桜の温かい舌先とぶつかっ

た。

「ん……っ」

そのまま舌先同士で戯れるように、接触を重ねる。ちろちろと舐めあうだけで、桜と繋がれている感じがして幸福感に包まれる。それに、先端だけの愛撫だから、焦らしかつていない。興奮して仕方がない。

そうして少しもしないうちにもつと桜が欲しくなつて、顔ごと引き寄せて深く繋がった。興奮で敏感になつた濡れた二枚のものが絡まつて心地がいい。先端だけですら溶けてしまうほど気持ちがいいんだから、こんな濃厚なディープキスをして平気でいられる訳がない。

「ん、ひゃっ……！…せん、ば……ん、むっ……！…」

我慢できずに、桜の胸を無遠慮に揉みしだく。驚いて一瞬唇が離れたが、キスの快感ももつと感じていた俺は、強引に唇を捕まえる。そんな身勝手な俺にも、桜は抵抗なんかしないで身を任せてくれた。

そんな桜に甘えて、両手で好きなように桜の乳房を弄ぶ。軽く揉むだけで確かな弾力が跳ね返つてきて情欲をかきたてる、女の感触。制服の上からだというのに、その柔らかな感触が手の平全体に伝わって気持ちがいい。

それと一緒に熱く湿つた口内まで味わっているんだから、制服の下の俺の生殖器はそ

の固さを主張し始めるのも無理もなかった。そして、そんな風に興奮しているのは俺だけじゃなかった。

「ん、あ……先輩……っ、あの、おっぱい、直接、触ってください……っ」

口を離して荒い吐息混じりに言う桜。目は切なきで潤んでいて、その表情は興奮の熱で溶けていた。

俺は桜の言葉にうなずきながら、制服のボタンに手をかけた。はやる気持ちを抑えて、一つ一つそれを外していく。でも、目の前の桜の情欲があふれ出るような息遣いや、徐々にあらわになる素肌に、興奮はどんどん昇り詰めてきてしまう。

そして、ブラウスに手をかけたあたりで我慢できなくなつて、のこりは隙間から手を入れられるくらいまでやや乱暴に外した。そして押し入るようにブラウスの下へ両手を突っ込んで、ブラごと両の胸を包んだ。

「あ、んっ……っ……」

気持ちよさげに桜の身体が反応する。でもまだ足りない。俺と桜を隔てる一枚の布の下へと手を滑り込ませて、ぎゅっ、と乳房を強くつかんだ。

「ふあっ！ あ、は……先輩、きもち、いっ……もつと、さわつて、わたしのおっぱい、いじめてください……」

その言葉にしたがつて、胸への愛撫を続ける。すでに理性が溶けかかっている俺は、

優しくしようなんて考えられなくて、自分でもどうしているかわからないくらいめっちゃくちゃに桜の胸を犯す。

それでも桜は何度も嬉しそうに身を震わせて、可愛い声を上げてくれる。学校だからさすがに声を抑えてはいるが、それが余計に興奮をかきたてられてしまう。必死に声を押し殺している桜の身体を、自分の欲望のまま弄んでいることに。

「ん……あ、ふ、んんっ……あっ、せん、ばあい……っ……いい、です、っあ……もつと……っ……」

愛撫を続ければ続けるほど、桜の反応はより大きくなって、小さな口から零れる声は欲しがるように色香を孕んでいく。俺を見つめてくるその表情は、瞳は快感に潤んで、半開きの口からは果実から滴る蜜のように唾液がこぼれていた。

「あ、せん……ば、い……っ、あ、きす、して……は、あ、っ、わたし、せつなくて、だめなん、です……っ」

そういうと桜は俺の返事を待つことなく、すぐるように舌を突き出してきた。その、もう欲しくてたまらないといった様子に、俺よりの桜のほうが興奮しているみたいだった。

でも俺だってもう完全にそういう気分になってしまっている。唾液でいやらしくてらつく舌に誘われるまま、自分のも同じように突き出した。

くちゅ、と濡れたもの同士が触れ合う。その快感で、発情状態の互いの身体は過剰なくらいに跳ねた。でもそんなこと構わずに舌同士の愛撫を始めた。

「んっ、ん……ふえん、ふあ……ん、ふ、う……っ」

色欲で濡れた二枚の舌でペロペロと舐めあう。それは、淫楽に狂った互いの身体を慰めあうような行為だった。でもそんなじや全然足りなくて、心も身体もどんどん昂つてきてしまう。

そして抑えきれない性欲に突き動かされるまま、制服の中に入れた手で桜の乳房をぐにゅぐにゅと揉みしだく。俺の乱暴な愛撫に、双丘は容易くその形を歪めて、乳首を少しつまむだけで桜の身体がびくんといやらしく痙攣する。

二人とも身体は完全に発情して、獣の本能が隠しきれなくなってきた。俺は制服の下から激しく存在を主張する肉棒を、無意識に桜の太ももに擦りつけてしまっているし、桜はさつきからずつと秘部を慰めるように腰をくねらせている。

「ん、は——あ、せん、ばい……」

そして、いい加減限界が来た。桜と繋がって犯し合いたいという欲望が抑えられなくなって、舌を離す。その濡れたものの間を、お互いの名残惜さを代弁するかのようには唾液の橋がかかっていた。

「っ……桜、いれ、たい——もう、我慢できない……っ」

「は、い……っ、わたしも、先輩のがほしいっ、です……先輩に、いっぱいして欲しい……っ、です……」

桜は後ろを向くと、近くにあった机に手をつけてこちらに尻を突き出してきた。背を向けた桜は肩で息を吐いて、スカートに守られた尻が上下に揺れるのが扇情的だった。

その光景に息を呑みながら、制服のベルトを緩めて膨張した肉棒を外気に晒した。そして桜のスカートの下に手を滑り込ませて、ショーツの上から軽く撫でまわす。

「んっ……」

快感とじれったさが混ざった桜の声が漏れる。

俺は下着に手をかけて、一気に太もものあたりまで脱がせた。そしてスカートを少しだけたくし上げ、その下の素肌に性器を触れさせた。それだけで大きな快感が全身に走ってしまう。

そのまま軽く擦るとぞくぞくと気持ちがよくて、ずっとそうしてもいいくらいだ。一瞬だけ、そうやって桜の尻に擦りつけて射精する妄想をしまつて、どくん、と生殖器が脈動する。

そこから腰を動かして割れ目へと狙いを定める。そして桜の腰を掴んで引き寄せ、互いの生殖器を触れ合わせた。

「桜、すごい濡れてる……」

そこは、全く触れていなかったのにも関わらず、もう桜の情欲でどろどろに溶けていた。

「だ、だって、先輩にあんなえっちなこと、されたら……っ、こうなっちゃうに決まっていますっ……」

そして桜は、すぐに入れてと言わんばかりに尻をぐりぐりと俺のものに押し付けてきた。

「う……っ、く、す、すまん」

「もう……。じゃあ、先輩——入れて、ください……わたし、これ以上焦らされたら、おかしくなっちゃいそうです——っ」

ああ、と返事をして腰に力を入れる。そして奥まで一息に性器を挿入した。

「あんっ！」

大きくその身体が痙攣する。それと同時に性器を包む膣もぎゅう、と強く締め付けられ、危うく射精するところだった。

そして快感が収まってから、すぐに腰を振り始めた。スカートの上からがっしり腰を挿んで、そこへ本能のままに腰を叩きつける。

「んっ……ん、っあっ、ふ……あん……！　せん、ぱ、す……！」

性器を奥へ挿入する度、押し殺した喘ぎ声が桜の口から漏れる。それが一層俺の興奮を誘う。もつと、抑えられないくらい桜のことを快樂で浸したかった。

その思いで、性器を突き入れるのと同時に、掴んだ腰を思いきり引き寄せる。ずぶり、刺すように桜の子宮口まで肉棒が押し入って気持ちがいい。桜もそれが気持ちいいのか、奥へ入れるたびに媚肉がきゅん、と反応して挿入された異物を締め付けてくる。

「や、あんっ、せん、ぱ……！ はげ、しっ、んっ、だめ……！ こえ、おさえられな——んんっ……！」

だめと言われても、加減なんかできない。むしろ逆だ。そんな風に必死に我慢している桜を見ると、もつといじめたくなってしまう。

腰を掴んでいる手の片方をスカートの中に入れて、むき出しになっている肉芽をきゅう、とつまんだ。

「ひゃう……っ！ だめ……っ、あ、んっ、ほんと、に……こえ、でちゃう……！」

切なげに桜が声を上げるが、桜への愛撫はやめない。つまむだけじゃなくて、指の腹で撫でたりもしながら桜の一番敏感なところを弄ぶ。そうすると共鳴するように膣内が締まって気持ちいい。

そして、そんな風に快樂がぎっしりと詰まった肉壺に出し入れをしているのだから、射精感はだんだんと昇ってきてしまう。睾丸の中では快感で大量に作られた精子が、外

へ出ようとしてうずいて仕方がない。

「あ……っ、やん、ん、ふあ……！　せんば、わたし、んっ……あ、いっちゃい、そう……！　ん、あ、せんばい、の、きもち、よすぎ、て……も、だめ——！」

その声と共に、急に締め付けが増す。それは桜の言葉通り、絶頂が近いことを意味していた。そしてそれに促されるまま、俺もどくどくと精液が尿道を昇ってくる。

俺はラストスパートとばかりに、桜に覆いかぶさって体重ごと激しく腰を振る。さらに両手を桜の胸へもってきて、下から乱暴に揉みしだく。

「あっ！　ん、あ……！　だめ、いく、わたし、イっちゃう……！」

雄と雌が重なり合いながら腰を振って、ばんばんと肉がぶつかり合ういやらしい音が響く。俺たちの性交はただの獣の交尾になり果てていた。本来勉強に励むはずの場所で、こんな淫らな行為に没頭している。

でもさすがに限界がきた。性器の抜き差しを繰り返して、お互いに快感が頂点に達したときに桜の中へ白濁を解き放った。

「あっ——！　あ、ん……あは、あ……せんば、い、の……あっつ、い……」

無遠慮に吐き出される白濁液を、嬉しげに受け入れる桜。悦ぶように膣の肉が痙攣して、熱い欲望をどくどく搾り取られる。

さらに、意識してのことかわからないが、桜は腰を優しく動かして精を奥から押し上

げてきた。それによって、睪丸でうづく精子がびゆるびゆると吐き出される。まるで身体の中身全部を吸い上げられているよう。

「さくら、あ、ぐ……まだ、で、る……つ、桜のなか、おかしく、なりそうだ……」

「あ、ん……は、い……つ、あ、せんぶ、だし、て……つ、は……ん、あついの、せんぶ、ほしいです……」

その言葉のまま、とくとくと温かいものをそそぎ入れる。少し勢いが弱まっても、すぐに奥からあふれてきて、どぶんとあふれ出る長い射精。

それでもしばらくするとさすがに射精量も減ってきた。俺は残ったものを絞りだそうと、浅く腰を引いてからずぶ、と突き入れた。でもそれがまずかった。愛液と精液でとろけた膣内は想像以上に気持ちがよくて、また大きな射精感が昇ってきた。

「つ……い……さく、ら、また、でる……つ……」

でもそれをせき止めることなんかできなかつた。せり上がる欲望のまま、二回目の精を桜に放った。

「あつ……い……は、せんば……つ、ずい、い……まだ、こん、な……たくさん……」

びゆるるつ、と一本の塊になった白濁が途切れることなく先端から放出される。そのあまりの快楽に、なすすべもなくただ身を任せるしかできない。大量の精液が尿道を擦ってでていく感覚がたまらなく気持ちよくて、口をだらしなく開けたまま声を出すこ

とすらできなかつた。

「あ……とまっちゃい、ました、ね……」

そうして呆然としている内にいつの間にか射精は終わっていた。あまりの量を出したせいか、身体全体が重い。でも二人ですごく気持ちよくなれたから、それ以上の幸福感が身体を包んでいる。

「桜、悪い……この後授業あるのに、こんなに……」

「いえ……気にしないでください。もともと私のお願いだつたんですから。……それに、こんなにいっぱい出しちゃうくらい、私で気持ちよくなつてくれたんですから、その……とつても嬉しいですよ」

上気した顔を優しくほころばせて桜は言った。それが愛おしくて、その唇に——と。

「あ」

お楽しみはここまで、と言うようにチャイムがなった。

「やば……桜、すぐ戻ろう」

「は、はいっ」

俺たちは急いで後始末をしてから大急ぎで教室に向かった。

茜色の教室で

「まず……もうこんな時間か」

俺は沈み始めた陽が差し込む廊下を急いでいた。ちよつとした頼み事を引き受けていたのだが、思っていたより時間がかかってしまった。

今日は桜の部活が無く、もともと一緒に帰ろうと約束をしていたのに、結構な時間待たせてしまっている。学校内にはもうほとんど生徒はいなくなってしまった。

「悪い、桜。遅くなっちゃった」

教室のドアを開ける。窓際の席に座っている桜は、橙色に染まるグラウンドを眺めていた。

「あ、先輩。頼み事、終わったんですね」

「ああ。ちよつと——」

「頼まれたこと以上のことまで引き受けちゃった、ですよね？」

「う……」

お見通しだった。言おうと思っていたことをそのまんま桜にいわれてしまった。

「うん、全くその通りだ。さすが桜」

「先輩のことですから、これくらいわかっちゃいます。ずっと一緒にいるんですから」
「ああ、これじゃ隠し事も簡単にできないな」

「ええ、先輩のことならなんでも見破ってみせます」

ふふん、と誇らしげに胸を張る桜。

それを見ながら、ふと思う。桜は最近ずいぶんと明るくなった。元々俺や藤ねえの前ではよく笑う子だったが、近頃は俺たち以外の前でもよく笑っているのを見かける。

「桜」

だから、なんとなく。その変化が嬉しくて。

「あ……先輩？」

する、と髪を梳くように桜の頭に手を回す。少しの驚きで、その瞳がわずかに揺れる。でもすぐに俺の意図を察して、瞼を閉じて軽く顔を上げた。

「ん……」

柔らかな唇をそつと塞ぐ。そして、ほんの挨拶とばかりに甘く啄んでから唇を離れた。

「んっ——ふふっ」

桜は目を開けると、満足そうに笑った。

最近の時折、こんな風に誰もいない教室なんかで桜と唇をかわすようになった。理由

は特にない。強いて言うならば、お互いにこういう恋人らしい行為に慣れてきたことか。

こういうことに恥じらいを覚えていた桜も、進んでキスに応じてくれる。桜の方から口付けを求めてくれる時もあるくらいだ。

でも、今日はもう少しだけ――

「せ、先輩っ?」

頭に回していた手を背中におろして抱き寄せる。するりと腕の中に収まった桜がうろたえるのが可愛らしい。

「桜……ここ、いいかな」

「えっ、こ、ここ、ですか……?」

ちらりと顔を盗み見ると、桜は頬を朱にそめて戸惑っていた。

多少は恋人らしい行為に慣れたとはいえ、情事となるとさすがにまだまだ。誘うときも誘われる時も、気恥ずかしさが残る。それが学校ならなおさら。

「うん。桜はイヤか?」

「そ、それは……。もう、その聞き方はずるいです、先輩」

「はは、悪い。でも、イヤとは言わないんだな」

「だ、だって、イヤなわけ、ないじゃないですか」

そういつて桜は、もじもじとしながらも上目遣いで俺を見つめてくる。その仕草に、不覚にも俺のほうまで照れてしまった。

それをごまかすように、桜のひたいにひとつキスを落とす。

「うん、ありがとう、桜」

「もう……でも、あんまり長い時間はダメですからね？」

桜は少しだけ困ったような表情を俺に向けながら言った。それは「しょうがないですね」と言いたげな顔だったが、どこか嬉しそうな色も含んでいた。

そうしてもう一度桜の顔を引き寄せて口付けた。今度はデープキス。お互いに舌を突き出して、しばらくの間唇と舌同士の愛撫を楽しんだ。

「ん……先輩、もうこんなにおつきくして——えっちなんですから」

机に後ろ手をつけて立っている俺の前にしゃがみこんだ桜が、制服の上から股間のふくらみをさする。それは愛おしむような優しい動きだったが、俺にとってはまるで焦らされているみたいで興奮が高まってしまう。

「あ……またおつきくなりましたね……苦しそうですね、だしてあげます」

慣れた手つきでジッパを下ろすと、中から興奮でいきり立つ肉棒を外気にさらした。そして挨拶するように先端へ口付けた。それに反応して性器がびくと跳ねる。

「あは——先輩の、すごい元気です……たくさん気持ちよくしてあげますね」

桜はまるで暴れる獣をなだめるように、片手で竿を包んだ。そして再び亀頭へとキスを落とされる。でも今度はさつきみたいな触れるだけのものじゃない。唇を軽く開けて、ぱくりと口に含まれる。

「つ……桜、気持ち、いいつ……」

桜は俺の言葉に嬉しそうに目を細めると、啜えているものへの愛撫を始めた。押さえつけるように先端を口に含まれたまま、竿を包む手をしゅこしゅここと動かされる。その、雄を墮落させる快感に、思わず声が漏れる。

落ち着いた場所じゃないからなのか、その動きはいつもより激しい。興奮を煽るようなゆったりとしたものではなく、射精を促すようないやらしい手淫。

「んっ……ふえんふあい……ちゅ、ん、く……ふ……」

さらに桜はそのまま口に含んだ先端を舌でぺろぺろと舐めてきた。その痺れるような刺激に、肉棒の根元に煮えたぎるような感覚が集まってくる。睾丸の中で白い欲望が急激に作られていくのが自分でもわかるくらいだ。

そしてそれを外へと誘導するかのようになり、竿を包む手が上下運動を続ける。それで我慢しきないものが、先走り汗となつてあふれ出る。桜はそれをまるでジュースでも飲むかのように、こくこくと飲み下す。

「ん……っ、ふふ、おいしいです、ちゅ、んっ……もつと、だしていいですからね……」
そんなの、言われるまでもない。桜にこんな風に奉仕されているんだから、イヤでも漏れ出してしまふ。桜の白い指が膨張したものの上を滑るたびに、快感に押し出された液がびゆるん、と飛び出る。

そしてそれを柔らかな唇で余すことなく受け止められる。時折、自分から迎えに行くように亀頭を奥まで咥えこまれて、さらに大量の先走りを放出してしまう。

「んっ、ん、ちゅ、ん、う……先輩……ん、ふっ……」

だんだんと桜の口淫が熱を帯びてくる。竿を擦る動きはどんどん早くなって、桜の唾液と合わさっていやらしい音が響く。その動きで桜の髪が揺れて、淫らでありながらも美しかった。

そうしている内に、先走りだけじゃなく精液まで昇ってきてしまう。このまま、桜の口の中へ白濁を出してしまいたいという欲で頭がいつぱいになる。

「桜……そろ、そろ……」

「ん、ふ……はい、出してください、先輩の熱いの、いつぱい飲みたいです……」

桜はにこりと微笑むと、口を軽く開いて再び俺のものを咥えこんだ。そして精子を搾り取るような激しい動きで竿を抜きあげてきた。ぐちゅぐちゅと卑猥な水音が響いて、一層俺の射精欲を掻き立てる。

一分もしないうちに熱く滾つたものが竿の中をどくんどくと昇ってきて、桜の口内を白く汚したいということしか考えられなくなる。桜も俺の気持ちを感じ取ったのか、まるで「好きなようにどうぞ」と言うように啜えたまま俺に微笑みかけてきた。

「っ…………… さくら、でる……………っ！」

それで我慢できなくなった。桜の頭を両手でがっしりと掴んで、そこへ思い切り射精した。

「んっ…………… う、んく……………」

射精の勢いに流されるように、腰を突き出して喉奥まで性器を突き入れる。そして一番奥で精を放つのが、腰が抜けそうなほど気持ちがいい。その快感に押し出されて、俺の意思とは無関係に精液がびゅくびゅくと放出される。

「ん、ふ…………… う、んっ…………… つく…………… おいし……………」

桜はあふれる精を嫌な顔一つせず飲み下してくれる。それどころか、もつと欲しいとばかりに両手を俺の腰に回してぎゅつと抱きしめてきた。

そんな桜の頭を撫でながら、あふれ出る快樂のままに吐精する。時折桜の舌に龟头を舐められるのが心地よくて、いつまでもそうしていたい。

「ん、は——あ…………… あ、いっぱいでしたね…………… 先輩。とつても濃くて、おいしかったですよ——」

恍惚とした色に顔を染めた桜は、俺を見上げてそう言った。口の端からは入りきらなかった精が少し垂れていて、それが桜の顔を淫らに彩っていた。

「でも——まだ先輩のこんなに固くて……もっと思ったんですね、先輩」

唾液と精液でいやらしくてらつく生殖器を撫でながら桜は言う。

「ああ、だって桜がまだ気持ちよくなつてない。俺だけ満足して終わりなんて不公平だろ？」

「先輩……。じゃあ、ちよつとだけ、先輩に甘えちゃいます」

「せ、先輩……ほんとにこの格好でするんですか……？」

机の上に座った桜が、羞恥に顔を真っ赤に染めている。それが夕日の赤と重なって綺麗だった。

桜はどんなふうにするかは俺に任せると言った。だから俺は「机の上に座って足を開いてほしい」といったのだが、ちよつと行き過ぎた注文だったかもしれない。

目の前の桜はショーツはもう脱いで片足に引っかけているが、恥ずかしくてまだ足は閉じたままだ。

「でも、『好きにしてください』って言ったのは桜だぞ？」

「それはそうですけど……だって、脚開いたら、あ、あそこ丸見えじゃないですか……」

「うん。でも俺は桜の恥ずかしいところ、見たい」

「うう……先輩……わ、わかりました……。で、でもあんまりじつと見ないでください
ね」

桜はそこで観念して、ゆっくりと脚を開いた。恥ずかしくて俺の方を直視できないのか、桜は頬を朱に染めてうつむいている。

そして、開いた脚の間にある桜の秘密の場所は、まるで蜂蜜のような桜の情欲が滴っていた。それが早く入れてと誘っているみたいで、膨張した肉棒が激しく反応してしま
う。

「桜……桜のここ、もうとろとろだな……」

「も、もうっ！ あんまり見ないでって言ったじゃないですかっ」

「ん……悪い。でも、桜のこんな姿、見るなってほうが無理だ」

「そ、そんなこと言われても、私……」

俺の言葉に、桜はまた顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。その様子にさすがに
ちよつといじめすぎてしまったと反省する。

だから。

「ごめんな、桜。ちよつとぶざけすぎた。……だからそろそろ、桜のここに——」

「——はい。ください、私を——抱いてください」

その言葉にうなずき、桜の秘部に狙いを定める。そして身体を優しく抱きながら、二つの陰部を触れさせた。こうするだけで、その先にある快樂までを想像してしまつて、期待からお互いの身体がいやらしく震える。

そして、神聖な場所を犯すようにゆつくりと性器を突き入れていく。ひくつく桜の中は、挿入された異物に悦んでいるみたいに愛撫してきて、ただ入れているだけでも射精してしまいそうだった。

「あ、っん……は、あ……おつきいっ……」

奥へ入れるたびに、目の前の桜が可愛く喘いで俺の情欲を誘う。それが膣からの快感と重なつて、入れている性器にますます血が集まつていく。それと同時に感度まで上がつてしまつて、既に射精欲がせり上がつてきてしまう。

「あっ……は、あ、先輩の、また、おおきくなつて……ん、あ、きもち、いい……」

まだ挿入している最中にも関わらず、もうお互いに快感に溺れかけてしまつていても、もつと二人でそれに溺れてしまいたい。繋がつたまま何度も腰を打ち付けて、そのまま気持ちよく果ててしまいたい。

「っ……桜——はいつた、から……っ」

「は、い——いい、ですよ……先輩の好きのように、わたしのこと犯してください……っ」
その言葉が引き金になつて、桜の奥まで撃ち抜くように腰を叩きつけた。そしてその

勢いを緩めることなく、桜に何度も腰を振り続ける。

「ふあつ！ あつ、あ、んつ、や……！ あんつ、んあつ……せん、ぱ、い……！」

俺の乱暴な抜き差しに、桜は嬉しそうな喘ぎ声を上げる。そんなものを、切なさに染まった表情で見つめられながら聞かされて、情欲は激しく燃え上がる。もつと桜を貫いて、もつとその嬌声を聞きたい。

「あつ——ん、やあつ……！ せん、ぱ……つ、おっぱい、さわつちや、あ、ん……だ、め、かんじちやい、ます……つ！」

制服の上から両手で桜の乳房を鷲掴みにする。すると桜の顔は容易く快楽に溶けた。俺を見つめ返してくる瞳は愛欲が溢れてくるみたいに潤んで、開いた唇は快感に負けて閉じることさえままならない。

でも、そんな風に快楽になされるがままの表情とは反対に、桜の膣は俺を激しく攻め立ててくる。奥へ入れるたび、逃がすまいと言わんばかりにきつい締め付けがきて、そのまま射精してしまいたくなる。

「あつ、あんつ！ んあ、う、あ……つ！ せん、ぱ、こし、はげしすぎ……！ んつ、あつ、こんな、の……すぐ、イっっちゃいます……！」

その桜の言葉通り、桜の膣が精液をねだるように強く締め付けてくる。それに促されるまま射精してしまいたい、それ以上にもつと桜のことを味わっていたい。目の前で

快樂に犯されている桜を見ていたかった。

「あつ、あ、だめっ……！　ほんと、に、もういつちやう——！　せん、ぱいつ、いく、あ、んんっ……！」

押し殺した嬌声と共に、桜は絶頂を迎えた。全身ががくがくと痙攣して、桜の身体全体が快樂に悦んでいるみたいだった。

でも、俺はまだ腰を振るのをやめない。むしろ、桜が達する前よりもさらに激しい動きで桜を貫く。

「あつ、や、ふあ、んっ！　だめっ——わたし、もう、いつて、ます、からあ……っ！　あ、んっ！　わたし、こわれ、ちやう……！」

桜は溢れてくる快樂に溺れかけたように声を上げる。でも今更止められる訳がなかった。それに桜だって、もつと俺を求めるみたいに激しく締め付けてくる。

その桜の本能に出来るように、ぱんぱんと音を立てて桜を犯す。結合部からは二人の体液が混じったものがぐちゅぐちゅと溢れてきて、時折その水音が肌がぶつかる音と重なる。

「さくら、く、桜……！　俺も、もう、いく……！」

「は、い……！　だしてっ……！　わたし、に……せんぶ、だして、ください……！」

そして、絶頂している桜の中で抜き差しをしているのも、すぐに限界が来た。桜と愛

し合う快樂にいつの間にか俺も溺れていて、精が昇ってくるのは当然だった。

「桜……！ さく、らあ……！」

「つあ——！ せん、ぱあい……！」

そして、一番深くまで繋がった瞬間、二人で腰を思い切り押し付けて絶頂した。限界まで凝縮された白濁が、勢いよく桜の子宮にそそがれていく。

全身から力が抜けていき、それが射精の勢いに加わっていくみたいで気持ちがいい。どくんどくと先端から精液が飛び出っていて、それが鈴口とこすれあう感覚がたまらない。

「は——あ、ああ……せんぱ……あつつい……あ、なか、せんぱいので、あふれちゃい、そう……です……」

桜は絶頂の余韻と中で精を受け止める感覚に浸るように、呆然とした表情をしている。それはとても満たされた顔で、思わず抱きしめてちゅ、とキスをした。

それが嬉しかったのか、桜の中が一瞬きゅつと締まった。それで、一気に奥から精が溢れてきた。

「つ……さく、ら……」

びゅくん、と大きな塊を吐き出すみたいな射精。それが最後だったみたいで、そこで先端からのものは止まった。

「は——さくら、抜く、ぞ……」

「ん……はい……」

ぬるん、と引き抜くと、奥から愛液と混ざった精子がこぼれ出てきた。

「あ……すごい、先輩、たくさん出しましたね……」

桜は愛おしそうに割れ目をなぞると、零れたものをすくって口に含んだ。

「あ……悪い、その格好の桜、すごく可愛かったからさ、つい……」

「いいんです、私もなんというか、すごく興奮しましたから——って、あれ、先輩？ 先

輩、それ……」

桜にならって俺も視線を落とす。

「先輩、すごいですね、まだおつきいなんて……」

ふふ、と楽しそうに笑う桜。

「あ……ごめん、桜。でも、もう時間がマズイし……それに、十分すぎるくらい満足したから、もういいんだ」

桜に夢中で気付かなかったが、日はもうほとんど沈んでしまっている。いい加減帰らないと行けない時間だ。

「あ、そうですね。それに、あんまり遅くなると藤村先生に悪いですしね」

「うん、帰ろうか、桜」

桜ははい、と返事をして机から降りた。そして、二人で後片付けをしてもう帰ろうというとき、桜は不意に俺のほうを向いて言った。

「じゃあ、先輩。今日の夜に、また続きをしましょうね」

或る夜の一幕

「じゃあ、桜。電気消すぞ」

私のはい、という返事と共にぱちりと部屋の明かりが消える。二人しかいないこの部屋を静寂と薄い月明かりだけが支配する。

「うー、さむさむ」

軽く腕を擦りながら、先輩が足早に私の入っている布団へとやってくる。軽く毛布をめくってそれを迎え入れた。

「ん、ありがとな、桜」

そうして二人で横になって布団をかぶる。柔らかい毛布の感触と、肩から伝わる先輩のぬくもりが心地よい。最近はずもちらつく季節だけれど、こうして先輩といればその体温だけで寒さなんて吹き飛んでしまう。

最近はず、こうして先輩の部屋で寝床を共にするようになった。建前上は一人だと寒いからという理由だが、本当はいつまでも先輩と密着することに照れてばかりなのはどうかと思っただけだった。

おかげで今では、ほとんど恥じらいもなく先輩と同じ布団で眠れている。

「ふふ、やつぱり二人で寝ると暖かいですね」

「ああ、桜があつたかいおかげだな」

先輩はそう言つてくしやりと私の髪を撫でてくれる。

「ん……ありがとうございます、先輩」

先輩は私の言葉を聞くと、満足そうに優しく笑つた。その、凜々しさの中に柔らかさを含んだ表情が、月明かりに照らされて思わず見惚れてしまった。

と。

「くしゅんっ」

ぼーつとしていたせいか、くしやみをしてしまった。そういえば、今日はいつもより冷え込む。先輩と一緒にいるおかげで心はあつたかいけれど、体の方の寒さはどうにもならない部分もある。

「あ、大丈夫か、桜？ もうちよつとこつちきてくつついたほうがいいんじゃないか？」

「い、いえ、大丈夫です。ちよつと——くしゅんっ」

「ほら、大丈夫じゃないじゃないか。我慢しないでこつちきな」

「は、はい……」

少し照れつつも、先輩と体をくつつける。

じんわりとした暖かさ。先輩は私があつたかいと言つてくれたけど先輩にはかなわ

ないと思う。身体の暖かさもちろんだけけれど、先輩が与えてくれる安心感は何物にも勝るものだから。

「あの、先輩」

「ん、どうした？ もしかしてまだ寒いかな？」

だから、今日はもう少しだけそれに甘えたくなった。

「はい、まだちよつと寒いです。——だから、その、抱きしめて欲しいな、って」

ちよつとわがままなお願いだったかな、と一瞬不安になったけれど、先輩はうん、とうなずいて優しく抱いてくれた。

「どうかな、桜。これで寒くないかな」

「はい、もう全然寒くないです。これでよく眠れそうです」

「ん。それじゃあ、おやすみ、桜」

「はい、おやすみなさい。先輩」

就寝の挨拶をして瞳を閉じる。先輩の温もりに包まれているからか、私は夢の中へとすつと入っていった。

「ん……」

不意に目が覚めた。ぼんやりとした頭で辺りを見ると、窓から月明かりが差し込んでるのが見えた。枕元の時計で時間を確認すると、まだまだ朝には遠い時間。下手に起

きて寝坊するのは良くないから、再び目を閉じる。

——と。

「あれ？」

そこで、自分が先輩に抱きしめられていることに気付いた。驚いて思わず声を上げようになつたが、先輩を起こすわけにはいかない、ぎりぎりで抑えた。

……ああ、そういえばこうしてほしいと言つたのは私だつた。寝起きだと頭がうまく働かなくて困る。

気持ちを落ち着かせるようにほう、と一つ息を吐く。それでひとまず心臓の高鳴りはおさまつた。

「……………」

あとは寝るだけなのに、目を開けたまま数秒停止してしまう。その原因は目の前で無防備に寝息を立てている先輩だ。

いつもはかつこよくて頼りがいがあるのに、今は可愛らしいその様子に思わず見入ってしまう。そして私の意識はだんだんと軽く開いた唇へと吸い寄せられていく。

「先輩……………」

恐る恐る声をかけるが返事は無い。ちゃんと眠っているのを確認すると、自然と私の顔はゆつくりとそこへと近づいていく。寝てる先輩へこんなことをするなんていけな

いとわかつているのに、その動きを止めることができない。

「――」

気付けばもう唇同士の距離は一センチも無くなっていた。規則正しい先輩の寝息が私の唇にかかつてどきどきする。

「んっ……」

そして思い切って自分のものを先輩へ押し当てた。

くちゅ、と僅かな水音とともに柔らかな唇の感触に受け止められる。唇の先だけの甘い接触。ただそれだけなのに、私が抱いていた躊躇いは、一瞬で崩れ落ちてしまった。

「ん……む、う……」

少しだけ口を開けて、下唇を先輩の唇の間に差し込む。そして甘噛みでもするようには、はむ、と啄んだ。ふにゅ、と少しだけ帰ってくる弾力が心地いい。

一度だけじゃ当然足りなくて、幾度となくそれを繰り返す。それを続けるほどに、その行為は熱を増していき、ぴちや、ぴちや、と弾けるような音が部屋に響く。

「んっ、は、む……っ、う、ん……っ」

先輩の意思を無視してこんな行為に耽っていることへの罪悪感、いつの間にか蠟細工のように溶けて無くなっていた。起こしてしまうかもという不安さえどこかへ吹き飛んで、愛しいこの感触をいつまでも味わっていたという気持ちで頭がいっぱいに

なつてしまつてゐる。

しかし、貪欲な私はさらに濃厚な感触をも欲しがつてしまふ。唇だけじゃなくて、その口のなかに眠る舌までも味わいたい。

「は——あ」

一度唇を離した。そこまで深い接吻でもなかつたのに、私と先輩の間を銀色の橋がかつてゐる。その様は言いようのないほどに扇情的で、私の興奮が煽られる。

それに導かれるまま、快楽を求めるように口を開けて先輩ににじり寄る。先輩の唇は私の唾液で湿つていて、より魅力的に見えてたまらない。

「せんばい……」

まるで磁石に引き寄せられるように、先輩に顔を近づけていく。そして再び私の唇は先輩のものへ——

「夜更かしは良くないな、桜」

「え——」

言葉の意味を理解する前に唇を塞がれた。そしてそのまま、先輩の方から私の口内に舌を侵入させてきた。突然のことに状況が飲み込めない私は、それを全く拒まずに受け入れてしまふ。

口内に突き入れられた先輩の舌は、驚いて硬直した私の口内をほぐすように、優しく

口腔を愛撫してきた。私の舌に挨拶でもするかのようになり、舌先でちよん、と触れられた後、奥の方から歯の一本一本まで丁寧な舐めとられる。

「ん……っ、あ、んん——う、は……んん……」

その優しく、濃厚な接吻に、背筋がぞくぞくと震える。さつきまで一方的に先輩を貪っていた私の唇は、だらしなく開いたまま先輩を受け入れている。それはまるで、快樂という餌をただ享受する雛鳥のよう。

でも、そんなの仕方がない。先輩と交わすキスは、私にとってこれ以上ない至福の味。まるでアルコールのように、私の理性を溶かしてゆく。

「っは——あ、……あ、先輩……」

でも、私の理性が溶けきる前に、先輩は私の口内から舌を引き抜いた。名残惜しさに、少し泣きそうになる。

でも、そんな私の目を見据えた先輩の顔を見て、一瞬でとろけた頭が覚醒した。

「あ……せ、先輩!? 起きてたんですか!？」

「いや……あのな、あんな激しいキスされて起きないほど俺は鈍感じゃないぞ」

恥ずかしさ半分、呆れ半分といった顔で先輩は答えた。

「え……。私そんなに、その……してたんですか?」

「ああ。途中で止めるのが申し訳なくてできないくらい夢中になってた」

「そつ……そつ、だつたんですか……」

そう謝るが、恥ずかしくて先輩の顔が直視できない。自分ではそんなに激しいキスをしていたつもりはなかったのに、先輩が止められないくらいにしていたなんて、羞恥と罪悪感で逃げ出したくなる。

「さて、桜」

自然な動作でごろん、と転がされて、先輩に容易く上を取られる。見上げた先輩の目は、いつも通りでいるようで、悪戯を思い付いた子供のような色があつた。

「寝てる俺にイタズラするなんて、桜はいけない子だな」

言葉では叱っている。でも、それとは不釣り合いに声色は優しい。

「だから、ちゃんとお仕置きしなきゃだ」

その言葉と表情に、ぞく、と背筋が震える。

「は、はい。なんでも、言ってください……」

「なんでも、か……。そうだな、それなら——」

軽い恐怖と、少しの期待。何をされるのかわからないという不安と、どんなことをしてくれるのだろうかという高揚感が、どくどくと心臓を鳴らす。

「じゃあ、今日は俺と一緒に夜更かしの刑だ」

しかし先輩は、私の予想とは違う、楽しそうな笑顔でそう言ったのだつた。

「……へ？」

拍子抜けして、思わず間抜けな声が漏れる。

「え、そ、それだけですか？」

「うん。それだけだ。桜はこれじゃ不満か？」

「い、いえ。そんなことはありません」

ぶんぶんと首を振って否定する。

お仕置きというには甘すぎる気もしたけれど、よく考えれば先輩はこれくらいのこと
でそこまでキツイことをする人じゃない。

……あれ。でも夜更かしと先輩は言っただけど、なぜだろうか。お仕置きというには
ちよつとヘンな気がする。

「桜」

と、そこで思考から引き戻される。

「は、はい」

「桜はどうしたい？ 夜更かしをして——俺と何がしたい？」

そう言う先輩の顔は、私の返答はもうわかつている様子だった。

当然だ。この状況でそんな聞き方されたら、私が答えることなんて一つしかない。と
いうか、先輩は私にこう言わせるために「夜更かし」と言ったのだろう。

だったら、私はちゃんとその期待に応えなくちゃだ。

「なら——さっきの続きがしたいです」

私の返答に先輩は満足そうに微笑むと、再び私の唇を塞いだ。

「桜、脱がすぞ……」

「ん……はい……」

向かい合つて座つた姿勢で、先輩はそつと私の寝巻のボタンに手をかけた。そして一つ目のボタンを外された瞬間、どくん、と私の心臓が跳ねる。

何度経験してもこの、服を脱がされている時間だけはどうも慣れなくて、妙な気恥ずかしさがある。キスしてる時とか、その、行為の最中とかなら夢中になつてるからいいのだけど、この時はまだいつも通りの気分が残つているから変に意識してしまふ。

そして、先輩にボタンを外されるたびに、これから行うことを想像してしまつて、心臓の鼓動がどくどくと速まつていく。それはさながらカウントダウンのようだった。

そして、寝巻のボタンが一番下まで外された。そして先輩は前立てに手をかけて、壞れ物を扱うようにそつとそれを脱がせた。ぱさりとそれが布団に落ちて、素肌が先輩の目に晒される。

「綺麗だな……桜」

先輩は愛おしむようにそう言うと、自身の上着も脱いで私の身体を抱き寄せた。

密着した身体から伝わる先輩の熱が心地いい。あたたかくて、私を優しく包み込んでくれるその熱は、今は燃えるような激しさも僅かに、でも確かに孕んでいた。

「桜——好きだ」

先輩は私の耳元でそつと囁くと、ちゅ、と首筋に口付けを落とした。

「ん…………つ」

ぶる、と身体が震える。肉体的な快感よりも、先輩の唇が私の身体に触れているという事実が、私の心に甘美な幸福感をもたらす。

そしてそれにゆつくりと浸るまもなく、まだ下着に覆われたままの両胸をそつと包まれた。

「あ…………ん、先輩…………」

直接触れられたわけでもないのに、気持ちよさに声が漏れる。そのまま軽い力でそつと揉まれると、痺れるような快感が走って心地いい。自分で触っても大した快感はないのに、先輩に触れると、たとえ下着ごしでもびつくりするくらいに感じてしまう。

そんな状態のまま、先輩は私への愛撫を続ける。その行為には激しさはあまりなく、代わりに私をすべて包み込むような優しさがあつた。ゆつたりとした手つきで両の胸を包まれると、全身が砂糖菓子のような甘い快感に浸される。そして、お互いの唾液で湿った唇で素肌に口付けられれば、その熱で心も身体もとろかされてしまいそうだ。

「んっ……は、あ……せん、ばい」

そして、先輩の愛撫に私が声を抑えきれなくなったころ、背中に手を回されて下着の留め具を外された。そのまま慣れた手つきで私の両肩から紐を外すと、私の胸を覆っていたものは重力にしたがってはらりと落ちた。

「桜、ハハハ」

ほんほん、と先輩は自身の膝を叩いて私を呼んだ。それに促されるまま、先輩の膝の上に腰を落とした。

私と先輩では先輩の方が背が高いから、こうして膝の上に座るとちやうど真正面に先輩の顔がくる。そして当然、お互いの視線は絡まりあう。

「桜」

再び、先輩が私を呼ぶ。そこには、私を受け止めてくれる柔らかさがこめられていた。それに導かれるように、私は自然と口を開いた。

「先輩——好きです」

そこに恥じらいはなく、ただ純粹に先輩へ好意を伝えた。すると先輩は、少しだけ照れたような表情をした後、優しい笑みとともに私の髪をそつと梳いた。そしてするりと頭の後ろに手を回すと、ゆっくりと私の顔を引き寄せて口付けた。

柔らかいもの同士が触れ合う感覚。まるで溶けているかのような錯覚がするほど。

でも、本当に一つになることはかなわない。それがもどかしくもあるけれど、だからこそこうして触れ合うことが愛しくてたまらない。

「ん——っ、ふ、あん……」

不意に胸に暖かい手の平の感触が触れる。今度は直接だから、その温もりが心臓まで届きそうなほど伝わってくる。

そうしてそのままゆつくりと手を動かされると、全身が震えるほどの快感が走る。その気持ちよさに声が漏れそうになるが、唇を先輩に塞がれているから恥ずかしい声が出ることはない。

「んっ………んん、う………」

しかし、その口からも快樂が流し込まれ始めた。僅かな水音とともに、先輩の舌でわたしのものがとらえられる。そして、撫でるように優しく舐められる。まだそこまで深くはない、挨拶のような接触だったけれど、こんな風に抱きしめられている状態だからそれだけでもぞくぞくする。

しばらくその甘い舌同士のアヒラが続けていたが、だんだんとその行為に熱が入り始めた。先輩がより強く求めてくれるのもそうだが、私が我慢できなくなってきたのも大きい。先輩の頬に手を添えて、私の方へと引き寄せ深く舌を絡ませる。

「ふ………ん、んっ………あ、は、んんっ………」

その濃厚なディープキスとともに、先輩の私への愛撫もより激しくなっていく。さつきまでは撫でまわすような動きだったのに対し、今は乳首をくりくりとこね回してきたりと、より快楽を与えるためだけの愛撫へと変わっている。

そんなことをされて平気でいられるはずもなく、快感を与えられるたびにびくびくといやらしく身体が痙攣してしまう。キスの端からは抑えきれないものが嬌声となってこぼれ出る。

そんな私の様子に先輩も興奮してきたのか、脚をももぞもぞと動かしているのがわかった。それを感じて、私は先輩のおなかに手を這わせた。そしてすると下へ滑らせてゆき、熱い膨らみへとたどり着いた。驚いたのか、先輩の体がびくりと跳ねる。

それに応えるように、さすさすとそれを撫でまわす。するともどかしそうにそれがびくびくするのが可愛らしい。さらに、私がそうやって先輩のを弄ぶと、先輩もそれに返事をするように私へのキスや愛撫を激しくしてくれる。

その反応がたまらなく嬉しい。私をそうして求めてくれることや、私でそんなに興奮してくれていることが。

それでどうとう我慢ができなくなった。

「んっ、は——あ……」

唇を離す。ちゅぽん、と音を立てて先輩の舌が引き抜かれた。

激しく求めあつていたから、互いに吐く息が荒い。むわりと漂うお互いの吐息で、酔つてしまふそうだ。

「先輩……私もう——したい、です」

「ああ、いいよ……俺も、もう我慢できない」

お互いの気持ちを確認するように浅い口付けをする。そして、いったん離れて下にまといつてゐるものを脱ぐ。寝巻も、下着もすべて取つ払つて、一糸まとわぬ姿になつた。

先輩の方に向き直ると、先輩も私と同じように衣服をすべて脱いだ姿だつた。

「桜——綺麗だ……すぐ」

先輩はその私の姿を見て言つた。

先輩はよく私のことを綺麗と言つてくれる。それも、一点の曇りもない真つすぐな言葉で。

好きじゃなかつた自分の身体だけれど、先輩がそう言つてくれるおかげで今は少しずつその気持ちも前向きなものへと変わり始めている。

「嬉しい、です——先輩」

その感謝の気持ちをこめて、再び先輩に軽く口付けた。そのまま、何度か啄みあつてから口を離した。

「今日は私がしてあげますね」

くるりと先輩に背を向ける。そして、座っている先輩のものにそつと触れた。急に触れられたことにびびくりしたのか、勢いよくそれがびくんと跳ねた。

「ん……元気ですね、先輩の……」

そこへゆつくりと腰をおろして、お互いの秘所を触れ合わせる。くちゅ、と小さな水音。そのまま、少しずつ腰を動かして先輩と繋がっていく。

「んっ、あ、ん……っ、おおきい……」

熱いもので割かれる感覚。だけれどそこに痛みはなく、あるのは好きな人とひとつになることへの喜び。

そして、あつという間に私の濡れた場所は、先輩のものをすべて受け入れた。一番奥をこつん、とノックされるような感覚と、臀部が先輩のたくましい身体に受け止められていることが心地いい。

「せん、ぱい……動き、ますね……っん、あ……」

緩い動作で腰を動かす。浅く引き抜いて、ゆつくりと再び奥まで挿入すると、ぐちゅりといやらしい音がする。さつきまでの前戯で私のは奥まで濡れているから、その動きに抵抗はほとんどない。

「あつ、んっ……あんっ、や、せん、ぱ……い」

まだ遅い動きなのにも関わらず、意識が飛んでしまいそうなほど気持ちがいい。先ほ

どの先輩の愛撫で感度が上がっているせいだ。でも動き始めてしまったから、今更止めることなんてできない。後は、二人で達してしまふまで求め合うだけだ。

布団に両手をつけて腰を振る。激しい動きではないけれど、少し動くだけで先輩のものが私の中の形を変えて快感が走る。さらに、先輩も気持ちがいいのか、時々びくびくと痙攣するのが、電流のような刺激を私に与えてきて恥ずかしい声が漏れてしまふ。

「つく、あ……桜っ……」

不意に、柔らかな熱が臀部に触れた。気付くと、先輩が両手で私の尻を包んでいた。そして、さわさわと撫でまわされる。

「ひあっ……あ、んっ、先輩……あ、だめ、あん……は、あっ……」

予想してなかった刺激に、鳥肌が立つほど感じてしまふ。その快感に、身体の内側から押し上げられるようにひとりで嬌声がこぼれ出る。ただでさえ先輩のもので気持ちよくなっているというのに、そんなことをされたらたまらない。

だというのに、私の腰はその動きを少しずつ激しくし始めた。当然快楽は膨れ上がり、身体の痙攣もいやらしい喘ぎ声もその熱を増してしまふ。でも、今更そんなことになんか構ってられない。今は、先輩ともっと深く愛し合うことのほうが大事だから。

「あ……っ、ん、先輩……は、あ、いい、ですっ……気持ち、いいです……っん、あ……」
ぱん、ぱん、とふたつの肉がぶつかり合う。その度に一番奥まで先輩の熱いものが届

いて、先端で脳天まで突き抜けるような快感が全身を襲う。優しく撫でるだけだった先輩の手は、いつの間にかぐにゅぐにゅと尻の肉を揉みほぐすような動きに変わっていた。

そうして中からも外からも先輩に弄ばれて、私が動いているにもかかわらず、まるで先輩に激しく求められているかのよう。その感覚が私の情欲の炎に油を注ぐ。その炎に焼かれて、理性なんか氷菓子ののように溶けていく。

「あつ……んっ、せん、ばい……っ、は、あ、あ、好き、です……っ、あん……」

もう、恥じらいすらもほとんど無くなっていた。繋がったところが擦れ合う度に、その快感に溺れるように声をあげる。そうしているうちに、先輩との性交で生み出される快感が身体の中にどんどん溜まっていく。それも、こうして求めあっているうちにぐつぐつと煮えたぎって、あと少しもしないうちに弾けて絶頂してしまいそうだ。

それは先輩も同じなのか、私の中でびくびくと震えるだけだった先輩のものが動き始めた。その動きが私の動きと重なって、私先輩に尻を押し付ける時に先輩のが奥深くに突き刺さる。そのせいで、快楽はゴム風船のように膨れ上がった。

「あ、あつ、ん……あ、先輩、ひゃ、あんっ……！ むね、さわつちや、あつ……わた、しっ、も、だめ……ですっ——」

ぎゅ、と後ろから抱きつかれて両の乳房を鷲掴みにされる。意識さえ溶けるほど交

わって敏感になった身体には、ただ触られるだけで快感。だというのに、先輩は容赦なく二つの柔らかいものを愛撫してくる。

それは、絶頂が迫っている私の体にとつて、最後の一押しになった。身体の奥から凝縮された快感の塊が、まるで火山のように湧き上がってくる。それにとどめを刺すように、私の身体に激しく先輩の腰が叩きつけられる。

「あ、先輩っ……わた、し……っ、もうっ——！」

「ああ……っ、桜、いっしょ、に——！」

どくん、と身体の芯まで壊れてしまいそうなほどの激しい衝撃が走る。その瞬間、快楽が全身を包んで、頭が真っ白になった。

「っあ——あ、は……っ……あ、でて、る……！」

どくどくとおなかの中に温かいものが注がれる感覚。その熱が全身に広がっていつて心地いい。

快感に侵されたせいか、身体に上手く力が入らない。でも、先輩が後ろからしつかり抱きしめてくれているから安心して余韻に浸れる。背中に感じる先輩の体温や、耳元に流し込まれる気持ちよさげな吐息を感じていると、いつまでもそうしていたいと思ってしまう。

「は、あ……せんぱい、すき、です……！」

「ああ、おれも……大好きだ、さくら……」

ぼやけた頭で言葉を交わす。だけれど、その気持ちはお互いに嘘偽りのない純粋な気持ち。まるで綿菓子のように柔らかくて甘い幸福感。その感覚を失いたくなくて、絶頂の余韻がさめた後も、しばらくの間ひとつになつていた。

「お、おい、桜……ちよつとくつきすぎじゃないか？」

「だつてこれくらいじゃないと寒いんです。……先輩はこうされるの、イヤですか？」
布団の中でぎゅつと先輩に抱きついたままそう聞き返す。

「いや、イヤなんてことはない。まあ、その……ちよつと照れるつていうか、なんというか……」

少し紅くなった頬をぼりぼりとかくその様子に、思わず笑みがこぼれる。先輩が私を抱きしめてくれる時は何でもないことのようなのに、どうやら私から抱きつかれるのは慣れないらしい。まあ、今はお互いに裸だから余計なのかもしれないが。

「うん、まあ、桜が風邪でもひいたりしたらしたら大変だし、今日はこのまま寝よう」
先輩は、そう言つて私の髪を撫でた。

「はい、ありがとうございます。先輩」

でも、結局こうして私を受け止めてくれる先輩は、やつぱりかっこいいと思う。

そんな先輩の頬に、感謝と親愛の気持ちをこめて口付ける。

「それじゃあ、おやすみなさい。先輩」
「ああ、おやすみ。桜」

慰めあい

深夜。みんなが床に就いた頃、私は月明かりでうつすらと照らされる廊下を歩いていった。行き先は誰であろう、先輩のところだ。

大した目的があるわけではない。ただ、先輩の顔を見て、「おやすみなさい」と一言言えればそれでいい。それ以外に望むことなんかない。

そう。決して、この前のように血を——魔力を分けてほしいなんてことはない。今日は蟲が身体を蝕んではいないのだから、その必要はどこにもないのだ。

ただ、先輩と——

「……私、なに考えて——」

一瞬、邪な考えが頭をよぎる。

だめだ、そんなこと。私なんかにあの人とそんなことをする資格なんかない。

だけれど、私の中にそういう欲望があることはどうしても消せなかった。私を守ると言ってくれたから。私を好きだと言ってくれたから。だから、私をあの人のものにしてほしいと、そう思ってしまうのだ。

「あ……」

そんなことを考えているうちに、私は先輩の部屋の前に立っていた。中からは僅かに布団が擦れる音がして、先輩がいることがわかった。

「あの、先輩」

控えめに呼びかける。もしかしたら先輩はもう眠っていて、今の声では気付かないかもしれない。

気付かないならそれでもいい。そうすれば、私の中のこの気持ちが少しでもおさまると思つたから。

「桜か。どうかしたか？」

だけれど先輩は答えてくれた。私の少しの躊躇を壊すように。

「入っても、いいですか？」

「ああ、構わないよ」

優しい先輩の返答。それに導かれるまま、障子を開けて中へ入った。先輩は布団から体を起こして私を見ていた。だけどその表情は、どこか疲れているような気もした。

「あ、起こしてしまいましたか？」

「いや、まだ眠ってなかったから問題ないよ。それよりどうしたんだ？」

「あ……その、まだ先輩におやすみなさいを言つてませんでしたから、それを言おうと思つて」

本来の目的を口にする。だけれどそれは本心じゃない。

「ん、そつか。わざわざありがとう、桜」

「いえ。あの、それではおやすみなさい、先輩」

その言葉とともにお辞儀をする。でも、私のその言葉に先輩からの返答はなかった。それを不思議に思つて顔をあげると、先輩はただ私のことを見ていた。

「あ、あの……先輩？　大丈夫、ですか？」

「桜」

先輩は私の言葉には答えず、こつち、と私を手招きした。それにしたがって、先輩の前に座る。

そこで気付いた。先輩の目にはどこか不安な色が映っていた。疲れているように見えていたのはこのせいだったのだと理解した。

私がそう思ったのとほぼ同時。私の身体は先輩に抱きしめられていた。

「あ……先、輩……」

ぎゅ、と強く抱きしめられる。それは、あの雨の夜のような優しい抱擁とは少しだけ違った。

あの時は、私のことを全て受け止めてくれるような、そんな感触だった。今の抱擁にそれが無いわけではない。ただ、それよりもっと先輩自身が私のことを求めてくれてい

るような感じがした。

それが私にはただ嬉しかった。理由が何であろうとも。

「桜」

私の名を呼ぶ声。だけどそれは私を呼んだのではなく、ただ私がここにいることを確かめるような声だった。そしてそれを証拠づけるように、もつと強く私の身体を抱きしめてくれる。

「先輩……」

それに応えるように——いや、縋るように、先輩の首元に頬擦りをする。まるで主人に甘える猫みたいだ。鳴き声を上げて、愛情という餌をただ欲しがらる雌猫。そんなことを頭の片隅で思った。

しばらくそうしていると、ふと先輩は腕の力をゆるめた。そして私と先輩の視線が絡まり合う。その時、お互いにどこかのスイッチがかちりと切り替わった。

そのまま、私たちの顔は磁石のように引き寄せ合った。私に意思とは無関係に、まるでそうすることが当たり前のように。

ダメだ。一瞬だけ、そんな警告が私の頭をよぎる。だけれど、この引力に抗うにはあまりにささいな力しかなかった。

「ん——」

唇から漏れたのは、そのくぐもった声だけ。他に言葉はない。

言葉の代わりに気持ちや伝え合うのは、交わした接吻。深くはない、だけれど決して浅くもないキスで甘く求めあう。

最初はただ触れ合うだけ。初めて触れるお互いの唇の感触を確かめるように、ほんの少しだけ擦り合わせる。それだけでも十分すぎるほどだった。私なんか、好きな人と——先輩とこんな風に唇を交わしているという事実だけでもユメみたいだったから。

ほんの少し擦れる唇の味も、ときたま触れる鼻の感触も、鼻腔をくすぐる先輩のにおいも、いつまでも感じていたいと思った。

「ん、は……」

でも、いつまでもそうしているわけにはいかない、と。唇を離れた。もうこれだけで十分すぎる。これ以上求めちゃダメだ。

だけれど、一度触れ合うことを知ってしまった私がそんな簡単にやめられるはずなどなかった。唇を離して僅か一瞬で全身を飢餓感が包んだ。

これじゃ足りない、もつと先輩に触れていたい、もつと深く愛してほしい、と。

「んっ、む——」

それはほとんど同時だったのだろう。私と先輩はお互いに唇を再び求め合った。私だけが一方的に欲しがったのではなく、先輩の方からも。

それがたまらなく嬉しかった。つい先ほどまで感じていた罪悪感も躊躇いも、一瞬で消え去ってしまうほどに。

その瞬間から、私の頭の中を埋め尽くしたのは先輩のことだけだった。軽く開けられたその上唇にはむ、と吸いついてさつきより深い接吻を味わう。そして先輩も私のその行為に応えるように私の下唇を啄んだ。

水音すらほとんどしなかつた最初のキスとは違って、少しだけ深く、情熱的な唇同士
の愛撫。雛鳥が戯れるようにお互いの唇を啄みあつて、その感覚を味わう。そしてとき
おり、唾液に濡れた部分が触れ合つてぴちゃん、と弾けるような音が響く。

そうして続けているうちに息苦しくなつて、仕方なく唇を離れた。だけれどお互いの
顔は零距离のまま。はあ、と口から漏れる吐息の感触さえ恐ろしいほど心地いい。

たまらず目をうつすらと開けると、先輩の綺麗な瞳と視線が合う。それが再び合図と
なつた。

「さくら」

ささやくような声色で私の名を呼ぶと、先輩は私の唇をそつと塞いだ。たつたそれだ
けのことなのに、全身をぞくぞくとした快感が走つた。でもそんなの当然だ。大好きな
先輩から、あんな優しい声で呼ばれてキスをされるなんて。こんな幸せ、いくら夢見た
だろうか。

だから私もそのお返しにと、先輩の唇に精一杯の奉仕をする。湿らせた唇で何度も先輩のを啄んで、私の感触をたくさん味わってもらおう。私なんかの唇で気持ちよくなってくれるかはわからなかったけれど、今の私にできることを精一杯した。

すると先輩の方からも私の唇をたくさん愛撫してくれた。私のはむ、と吸いつくと、まるでそれに返事をするようにちゅ、とキスを返してくれる。そして私たちのその愛撫はだんだんとタイミングが合ってきて、いつの間にか完全に同じになった。

触れて、吸って、啄んで、離して、また触れて。そして時折お互いの名前を呼ぶ。「さくら」「せんばい」と、お互いの気持ちを確かめ合うように。

部屋に響くのは、私たちのその声と雫のような静かな水音だけ。今この瞬間だけ、それだけが世界の全部のような気がした。

「んあ、ふ……せん、ば……好き……」

少しずつ、けれど確かに熱を増していくその行為に流されるまま、先輩への気持ちをただ口にする。そのせいだったのか、先輩が私の身体を抱きしめる力が強くなった。それと同時により深まる接吻。

静かだった水音はくちゅくちゅとした淫らな音に変わっていき、どちらのものがわからない唾液が口から垂れ始める。そんな刺激的な触れ合いに私の理性はアイスクリームみたいに溶けて、その唾液と共に流れ落ちていく。

だから、自分が抜け出せないほど深く深くまで入り込んでしまっていることに気付きもしなかった。全身を先輩の温もりで包まれて、唇の感触と吐息を交換し合う背徳的なまでに幸福なこの行為に。

あとはもう、どこまでも落ちていくだけだ。さながら食虫植物にとらわれた虫のように。

「ん……っ、んあ、ん——っ……」

そして、もう何十回目かの接触のとき、れる、と私の口内に先輩の舌が入ってきた。何か特別なきっかけがあったわけではない。当然のようにそうだった。

だから、私もその行為に大して驚きはなかった。あつたのは、震えるほどの喜びとぞっとするほどの快感。

唾液で濡れた先輩の舌が口腔内を少し動かだけで、背筋がぞくぞくとして気持ちがいい。そしてひとたび私の舌と触れあうと、びくん、と身体がいやらしく痙攣してしまう。その反応がきつかけになったのか、先輩はより深く私の舌に絡めてきた。喉に届くかと思うほど奥まで侵入されて、舌の隅々まで愛撫される。つう、と奥から先端まで舐められたり、びちやびちやと音を立てながら舌全体で擦り合ったりと、その行為はあまりに濃厚だった。

頭の中がぼうつとしてきて、まともな思考なんかまるでできない。夢心地というのは

こういうことをいうのだろう。

そんな私のことは構わず、先輩のキスはどんどん激しさを増していく。その快感で、うまく力が入れられない。私だって先輩にたくさん舌と唇で応えてあげたいけれど、好きに唇を貪られることが気持ちよくてたまらない。

口の中全部を蹂躪されて、征服されて、唾液までもすすられる。私の唇はとつくに先輩のものになっていた。

それが私を一層興奮させる。溶けていく理性とは反対に、情欲の炎はごうごうと燃え盛っていく。もつと私を求めて、唇だけじゃなくて私の身体も心もすべて先輩のものにしてほしかった。

私のその欲望が身体を動かす。控えめに先輩の背中に回していた両腕を首元まで滑らせ、ぎゅつと抱きしめた。離れたくない、ずっとこうしていたい、愛してほしい、と。「ん……………！」

その行為が引き金となったのだろう。先輩は私の身体を布団の上に押し倒した。唇は縫い付けたかのようにくっついたまま。どき、と背中への衝撃がやけに心地よかった。

そしてその勢いのまま、さらに激しく唇を求められる。無遠慮に突っ込まれた先輩の舌はもちろん歯列の一つ一つまでも犯されていく。

お互いの口の中は二人分の唾液が混ざりあってどろどろで、そのカクテルをこくん、と飲み干すと五臓六腑まで酔ってしまいそう。その味は私を中毒にさせるには十分すぎるほどで、情欲という名の酔いが身も心も侵していく。

そこから溢れてくる愛欲が、知らないうちに私の下着を濡らしていた。少し脚を動かすだけでも、ぬちやりとした感触が走る。そしてその事実を知ってしまうと、余計にこの気持ちは加速する。

だけど、そんな風に興奮しているのは私だけではなかった。気付くと、先輩は私のと絡めた脚をもどかしそうに動かしていた。その原因が私の太ももに当たる熱いふくらみであることは容易に理解できた。

それを先輩は意識的にかわからないが、私に擦りつけている様子だった。

——先輩が私で興奮してくれている。

そう思うだけで嬉しくて、他のことは何もかもどうでもよくなった。

歯止めなんかきかなくて、私も脚をくねらせてズボンのふくらみを優しく擦り上げる。そうすると先輩のそれは一度びくん、と可愛らしい反応をしてから、より一層強く私の身体に押し付け始めた。

擦れるたびにどくん、どくん、と跳ねるその膨らみは、暴れだす寸前の獣のよう。私の肌でいくらなだめても、その獣は一向に大人しくななってくれなくて、快楽を貪

ることを今か今と待ちわびているみたいだ。

そのあまりに野性的な本能を身体に感じて、私もいやらしい雌の欲望が抑えられなくなる。さつきよりも脚を開いて、その間の湿ったトコロを押し付けた。

「んっ——！ あ、はっ……ちゅ、んん……！」

興奮でてっぺんぎりぎりまで高められた感度のせいか、弾丸が突き抜けていったような快感が走る。それでどうとう我慢できなくなつて、先輩の熱いものに敏感なところを押し付けた。

どくん、と二人分の心臓が跳ねる音。それが合図となつて、私たちのいやらしい戯れが始まつた。

腰をぎゆう、とびつたりと押し付け合つて、互いの一番熱いところを擦り合う。先輩は下着の布を突き破つてしまいそうなほど腰を何度も振つて、私はそれをなんの抵抗もなく受け入れながら自分の気持ちいいように腰を動かす。私たちのその動きは、性行為と何ら変わりなかつた。

だけれど、私たちの性の象徴は一つになるどころか、直接触れあつてすらいない。すでに身体を突き抜ける快感は今まで体験したことのないほどだけれど、狂つてしまいうなもどかしさが胸の奥に蓄積していくだけだ。

それを紛らわすために二人で本能のまま腰を振る。そうするほど切なくなるこ

わかつていながらやめることができない。そのもどかしさですら気持ちがいい。それは、愛を確かめ合う行為のようで、その実、お互いの満たされない心と身体を慰め合う戯れでしかなかった。

「つ、はあつ……！　は、あ……あ、はあ……つ……」

不意に唇が離れた。私たちの意思ではない。あまりにその行為に夢中になりすぎて、呼吸を忘れていた。

はあ、はあ、と二人分の荒い吐息が混じり合う。濃い香水みたいなそれに、酔ってしまっそうだ。

肩で息をしながらようやく呼吸が整ってきたころ、ふと先輩と目が合う。その瞳の奥には、野生の獣が獲物を見据えた時のような激しい炎が宿っていた。だけれど、私のことを気遣ってくれているのだろう。その炎は、温かい毛布のようなベールで隠されていた。

私ことを大事に思ってくれるその優しさは本当に嬉しかった。でも今だけは、その瞳の奥の本能を私にさらけ出してほしい。

「いい、ですよ——先輩」

ただ一言、口にする。なにが、とまで言葉にする必要などなかった。それだけで先輩の瞳の色が変わった。

「桜——」

先輩は愛おしむようにそう言うと、もう言葉はいらないとばかりにもう一度私の唇を塞いだ。今度は優しいキス。舌まで絡め合う濃厚なものではなく、唇だけで愛を交わし合う甘い接触。

その甘美な快感に浸りながら、心の中で思った。

——ああ、いまから私、この人のものになるんだ。

しばらく口付けをした後、先輩は身体を起こして自らのベルトに手をかけてそれを外し始めた。それが立てるカチャカチャとした無機質な金属音が、やけに私の緊張を煽る。

そしてズボンを下着とともにずる、と下に落とすと、先輩の鉄の棒のように固くなったものが顔を出した。それが主張する先輩の興奮に、私の秘部がきゅん、と疼く。

先輩は私のその興奮をさらけ出すかの如く、スカートの下の下着へと手を伸ばした。そしてゆっくりとそれを脱がされる。あそこに触れていたところから、いやらしい粘液が糸を引いているのが自分でもわかった。

そして、する、とつま先からそれを抜き取られると、敏感なところが外気に晒されて恥ずかしさがこみあげてくる。スカートがあるからまだ先輩に濡れたトコロを見られることはないけれど、顔が熱くなることを止めることができない。

先輩はそんな私の両脚をそつと掴むと、花びらを開くように広げた。そしてそのまま私の身体を自らの方へ引き寄せた。すると必然的に私と先輩の陰部がぴと、と触れあう。

「ん……っ」

緊張と興奮で余計に敏感になったせいで、身体がびくん、と反応する。触れた先輩のものは先輩の情欲でどくどくと脈打っている。

肌に伝わるその感触と熱に侵されて、私の中の雌の本能が疼きだす。先輩とひとつになつて、意識まで混濁するほど愛し合いたい、と。

「桜——いれる、ぞ……」

その私の興奮が先輩にも伝わったのか、荒い吐息とともに先輩はそう言った。

「はい——どうぞ、そのまま……」

先輩は私の言葉にうん、と頷くと、先端を入口にぐつ、と押し付けた。十分すぎるほど濡れた私の秘所は、それを容易く受け入れる。まだほんの少ししか入っていないのに、私たちの身体は共鳴するように快感に震えてしまった。

びりびりと痺れるような感覚が全身に走って気持ちがいい。でも、まだ全然足りない。もつと先輩と深くまで繋がって快感を共有したい。

私のその気持ちを見透かしたかのように、先輩は腰をさらに突き出して挿入を深くし

始めた。

「あ……っ、ん、あ、あ、ああ、んっ……っ、せん、ぱ……おつき、い……っ」

少し奥に入れられる度に快感が何倍にも膨れ上がって、こみあげる嬌声をおさえることすらままならない。できるのは、与えられる快樂に身を震わせながら先輩の熱い男根を受け入れることだけ。

先輩はそんな私の腰を両手でがっちりと掴んで、雫が石を穿つように、ゆっくりと、でも確実に私の一番奥へと入ってくる。そして、私の中を征服せんばかりの先輩の生殖器は、快感に喘ぐようにびくびくと痙攣している。私の中で先輩がそんな風に可愛らしく反応してくれていることが、私をひどく興奮させた。

「は——あ、さくら……全部、入った……」

「は、い……んっ、先輩の、おくまで、きてます……っ」

そうして私たちの身体は結ばれた。繋がっている場所はほんの一部分だけなのに、身体のコまでひとつになったような幸福感があった。

それに浸りながら、乱れた呼吸を整える。その間、突き入れられた先輩のものが時々びくん、と跳ねるのが気持ちよかった。

「桜……動いても平気か？」

「はい……先輩の好きなようにシて、ください……」

先輩は返事の代わりにと、私に一つ軽いキスを落としてその腰を動かし始めた。ずん、とおなかの奥まで貫いてしまいそうな一突き。

その瞬間、電気ショックを受けたみたいなの激しい衝撃が走った。一歩間違えたら痛みと見まがうほど、その衝撃は気持ちよかった。

その快感は当然一回では終わらない。ずぶり、と私の子宮を突き刺した先輩のものが名残惜しさを私に与えながら引き抜かれて、再度ナカの壁を擦りながら一番奥にキスをされる。緊張や羞恥に邪魔されて動きはまだ速くないけれど、快感に慣れていない今、激しく腰を叩きつけられていたら一分も持たずに果てていただろう。

「あつ……つく、あ、は、んん……あ、せん、ぱい……つ、あん、はあつ……」

ずぶ、ずぶ、と振り子時計のように一定のリズムで熱いものを抜き差しされると、その度に快感で押し上げられたいやらしい声が漏れてしまう。

ごっごっしたカタチの生殖器が私の膣壁を擦り上げると、小さな突起のひとつひとつ、浮き上がった血管ですらもが私の快感を刺激する。そしてその行き止まりまで到達されると、子宮口と亀頭がぴったりと繋がって果ててしまいそう。願わくばそのまま精を注ぎ入れて欲しいとさえ思ってしまうほどだ。

でもそれはおあずけだといわんばかりにすぐに逃げて行ってしまう。その瞬間全身が切なさで染まって、引き抜かれていく先輩のものを無意識に締め付けてしまう。そう

すると、締まった隘路を切り裂くように熱いものが挿入されて、ぞくぞくとした震えが止まらない。

「は、あつ………桜——さく、ら………つ」

「んっ、せん、ぱい………あつ、う、あんっ、ん、あ、は、あんっ………」

二人で熱い吐息を漏らしながら、じつくりとお互いの躰を味わう。まるで、生温い快楽の海に下半身を浸しているよう。ぬちゃりぬちゃりと擦れる粘膜がどちらもものかまるとわからない。溶け合った感覚が伝えてくる快楽で骨の髄まで先輩への愛欲で染まっているみたいだ。

そんな状態の身体を絡め合って腰を振るうちに、だんだんとその揺れ返しが速まっていく。それは至極当然のことだった。

私の味を確かめるような先輩の動きは、両手で掴んだ私の腰に叩きつけるような激しい抽送に変わっていく。だけど、私の身体に一切の苦痛などなくて、ただただ焼けるような快楽が溜まっていくだけだ。

それが弾けて絶頂するところを自然と想像してしまう。そして願わくば先輩と一緒にそうになりたい。そう考えているだけでも身体の感度が上がって仕方がない。

「あう——っ！ あつ、んっ、あん、や、ひあつ………せん、ぱっ、い………っ、あ、んんっ………！」

ばん、ばん、と二人の躰が求めあう音が室内に響く。それが発情した私たちの心をさらに淫蕩な色に染めていく。

それは甘い毒のように幸福な味。先輩とひとつになって同じ快感に震えているなんて、その事実だけでも嬉しくて仕方がなかった。

その気持ちに拍車をかけるみたいに、私と先輩の淫らな交わりはより激しく、深くなっていく。まるで剣で貫かれるみたいな先輩の動きに、私の口から漏れるいやらしい声もどんどん止まらなくなっていく。自分がそんな痴態を先輩に晒していることが恥ずかしくて仕方がなかったけれど、私がそうして声を上げてよがる度に、私の中の先輩ものが悦ぶみたいにびくん、と反応していた。

「っ……っ……さくら——っ……っ……」

「ひゃっ、あ、せん、ぱ……っ！ あっ、や、ん、あ、そこ……っ、あ、きもち、いつ……あ、あんっ、んっ——！」

それでついに我慢できなくなったのか、先輩は片手を腰から離して、激しい性交でゆさゆさと揺れる私の胸を鷲掴みにした。すでに頂上まで押し上げられた感度のせいで、服を着ているのにも関わらずびくびくとはしたくない反応を晒してしまった。

それが先輩の興奮に油を注いでしまったのか、ついに両手で私の乳房を揉みしだき始めた。その感触を手のひら全体で味わうみたいに、目いっぱい広げられた五指で柔ら

かい丘を愛撫される。

自らの好きなカタチに歪まさんとするその愛撫に、全身がびくびくと小さく飛び跳ねる。撫でるみたいになんまり優しく揉まれている間は小さな痙攣を馬鹿みたいに繰り返して、ほんの少し強く驚掴みにされるとびくんつ、と跳ねてしまう身体。その私の姿は、底の見えない快樂の海に溺れてもがく鳥のようだった。

そのせいで凝縮されていく先輩への愛欲と情欲で、激しく出し入れされる生殖器をぎゆう、と締め付けてしまう。私のそのわがままに喘ぐみたいになんまり熱いそれがぶるぶると震えるのが心地いい。そしてその反応は熱い衝動が外に出たがっていることの証拠だった。

だけどそれは私も同じ。子宮の奥のところに、噴火寸前の火山みたいに快感の溶岩が溜まっているのがわかる。

「はあ、っあ、あ、せん、ぱい……っ、わた、私……っ、んっ……！ も、お……っ、んっ、あつ、いきそ……っ、う、あつ、あ……！」

「く、っは——ああ、俺も、でる……！」

絶頂に向かつて一層速くなる抜き差し。先輩の先走りと私の愛液で濡れた結合部分を立てる卑猥な音もそれを加速させているみたいだ。

燃え上がってしまいそうなほど激しく擦れ合う互いの一番気持ちいいところ。絶え

間ない津波のような快楽に、意識も身体でさえも飛んで行ってしまいそう。少しでも気を抜いたらすぐにでも果れてしまう。

でも果てるなら先輩と一緒にいい。二人で震えながら大きな快感を味わいたい。ぱん、と子宮口にキスをされるたびにその時を私の体と心が待ちわびている。

「つく——！ さく、ら——！」

「あつ……！ せん、ぱあい——！」

今まで一番深く挿入された瞬間。びくつ、と拳銃を撃つたときみたいに先輩のものが跳ねて、それと同時に子宮の入口に突き入れられた先端から熱いものが放出された。それで今まで溜め込んでいたものが一瞬で爆発して共に絶頂した。

「つあ……あ、あ……せん、ぱ、ふ、あ——あ、あん……」

どくん、どくん、と何度も一番奥を熱い精で撃ち抜かれる。それが子宮の壁に当たってたふたふとそこに溜まっていくのが死んでしまいそうなほど気持ちいい。

その間、余震が続くみたいに小刻みに身体が震える。先輩の射精を受け止めているのは子宮なのに、全身までその勢いが届いているみたいな感覚。

「う、あ……つさくら……まだ……っ」

「は、い……んっ、あつ、どう、ぞ……っ、好きな、だけ……」

止まらない絶頂。二人でふるふると身を震わせながら、快感しかないこの時間に浸

る。

射精の脈動でもたらされる快感できゅん、とあそこが締まると、それに反応してびゅくん、と精を吐き出される。無間地獄のような快楽。

飛びそうな意識をなんとか繋ぎとめようと、私の胸をぎゅつとつかんでいる先輩の腕を握りしめた。するとそれに反応して、思い出したように優しく両胸を弄ばれる。そこから伝わる羽のように柔らかな刺激が心地いい。

「は、あ——ん、あ……たくさん、できましたね……」

ふわふわと空を飛んでいるようなぼやけた意識のなか、気付くと先輩の精は止まっていた。

「ああ……。悪い、桜、こんなに……」

「いいえ、いいんです。わたし、とつても嬉しいです——」

そう。あんなに激しく求めてもらえて、その証をたくさん注いでくれたのだから。

私の言葉に先輩は、少し照れくさそうに笑ってからくしやりと頭を撫でてくれた。そして軽く挨拶するみたいに口付けを落とされる。それを優しく受け止めて、少しの間啄みあった。愛し合った後の余韻を楽しむように。

「ん……じゃあ、桜。抜くから……」

「あ………はい、——っん、あ………」

唇を離れた後、先輩は身体を起こしてゆつくりと繋がったトコロをほどき始めた。ぬる、と擦れ合う互いのものは私が思っていた以上にどろどろで、さっきまでの行為の激しさを物語っていた。

そしてほとんどが引き抜かれて、最後にぷくりと膨らんだ先端がずるん、と外気に晒される。さっきまでであった温もりが身体から出て行ってしまったことが少しだけ寂しかった。

脱力していた身体に力を入れて上体を起こしてみると、先輩のものを受け入れていたところからどろりと精液と愛液が混ざったものが流れ出ていた。

「あは……すごいです、こんなにあふれてきて……」

それを指ですくって口に含むと、まるで媚薬みたいに私を興奮させた。これが私と先輩が交わった味なんだ、と。

そんなことをしながらふと先輩をみると、私のその行為を見つめる瞳と目が合う。それで一気に冷静になった。

「あ……ごっつ、ごめんなさい！ はしたないですよね、こんな……」

「いいや。そんなことないよ、桜。——それより桜のそういうところ、俺はもつと見たい」

「え……？」

なにか言う前に先輩に抱きとめられた。背中に回された手でさすさすと撫でるように触られる。それがぞくぞくとした僅かな快感を私に与えて、消えかけたはずの情欲の残り火が再び燃え上がり始める。

「桜——まだ足りない。桜がもっと欲しい」

そこへ薪をくべるかのような先輩の言葉。それに抗う術も理由も私には無かった。

「はい……嬉しい、です。私もずっと先輩とこうしてたいです——」

そうして完全に火が付いた情に流されるまま、先輩の首筋にキスを一つ落とした。それと同時に、忍び寄るみたいに先輩のシャツの下に手を滑らせた。

そのまますると脱がせていく。先輩は私に身を任せて、じつとしてくれている。その行為が私の胸をどきどきと高鳴らせる。服をめくり上げるほど露になる鍛えられた先輩の逞しいカラダや、それが想起させるこれから行う秘め事がどうしようもなく私を興奮させた。

そうして、衣が擦れる音を立てながらそれを脱がし終わり、先輩の温もりが残るものをぱさりと落とした。すると先輩が私にひとこと。

「桜のは俺が脱がすよ」

柔らかなその言葉にはい、とうなずく。先輩はそれを確認すると、私の上着のボタンに手をかけた。ぶち、とほんの僅かな音が空気を揺らす。

先輩はそれをすべて外すと、さなぎを開くようにそれを脱がせた。布団にそれが落ちた後、その下に着ていた服にそつと手をかけられる。それをさつき私がしたように、ゆつくりと脱がせてくれる。

その間、素肌が外気に晒されていくたびに心臓の鼓動が速くなっていくのを感じた。

「桜——綺麗だ、すく……」

そしてそれさえも脱がし終えて、あと私の身体を覆っているのは白いブラジャーとスカートだけ。その姿を見て先輩はそう一言つぶやいた。

その一言が喜びで満たされたコップにぴちゃん、と落ちる。その一押しで、ついに入りきらなくなったものがあふれ出た。

「先輩……っ」

ぎゅっ、と今一度先輩の身体に抱きつく。覆うものが無くなった二つの躰が伝え合う体温が私をアルコールと見まがうほどの幸福で満たす。

その酩酊感に身を任せて、その硬い胸板に口付けた。そしてそれは一度だけじゃ止まらなくて、なんども場所を変えてキスを繰り返す。

先輩は欲望に飲まれた私の頭をそつと撫でてくれた。それが、私のこの行為を優しく受け止めてくれているみたいで嬉しかった。

「んっ……ちゅ、ふ、う……」

口付けする場所を少しずつ下へ下へと移動させていく。まるで絡みつく蛇のように。そうして、私の唇はついにそこに触れた。少し切なげな声とともに、それがびくん、と跳ねる。

「先輩……たくさん気持ちよくなってください——。ん……」

私と先輩の淫液でどろどろのそれをはむ、と口に含む。一度出したせいか、交わっていた時は硬いきり立っていた先輩の陰茎は少し小さくなっていった。だけど大きさは変わってもその活気は全く衰えていなくて、じゅる、と少しすすただけで大きく跳ねた。

それを舌と唇で優しく愛撫する。根元をはむ、はむと刺激を与えながら、口内では舌先で敏感な先端をぺろぺろと舐める。まだ大きくなっていないからなのか、その優しい刺激でも先輩は可愛らしい声を漏らしてくれた。

それがもつと聞きたくて、片手を陰囊に伸ばした。きゅ、と軽くつかむとずっしりとした重みがのしかかってくる。まだまだ先輩の欲望が溜まっていることを主張していた。

どく、どくと僅かに脈動するソレを優しく揉みながら口内のものを舐め上げると、その砲身は小刻みに痙攣しながら少しずつ大きくなっていく。そしてとどめとばかりに、口をすぼめてそれを吸い上げると一瞬で硬さと大きさを取り戻した。

「ん、はっ……、すごいです、もうこんなおつきくなつて……」

ちゆぼん、と口から男根を引き抜いて目の前にすると、よりそれを実感する。竿に浮き出た血管と先走りが少し出ている先端。それは、まぎれもなくさらなる快感を欲しがっている証拠だった。

「続き、しますね……先輩——んっ、ん……」

かぶ、と再び先輩のものを啜えこむ。さつきと違つて大きくなつていいるから、口に含むのは先端だけ。それを唇で挟み込んだまま、顔を前後に動かす。

ちゆぼ、ちゆぼ、と淫らな水音が響く。そしてそれに共鳴するように震える先輩のもの。先走りもところと流れ出てきて、それを余さずに飲み下す。

それをさらに促すように、両手で根元の部分をぎゅ、と掴んだ。そしてそのまましゅっ、しゅっ、と暴れだしそうな陰茎を抜く。

「は、あ……、桜、気持ち、いい……」

そうこぼした先輩の顔を見上げると、苦しさ半分、快感半分といった具合の表情をしていた。それを全て快楽で塗りつぶしてあげたくて、奉仕を激しくし始めた。

両手で包んでいた竿から片手を離して陰囊を優しく揉みほぐして、熱い白濁をもつと作つてと煽る。そして凝縮されたソレを気持ちよく出せるようにと、壊してしまいそうなほど激しい手淫をする。

その快感に涙するみたいに、口に含んだ鈴口からとぷと先走りがあふれ出てくる。その量は私の口に入りきらずにこぼれ出てしまうほどで、射精が近くまで迫っていることを露骨に表していた。

「桜……っ、もう、出るから……っ」

これ以上ないほど切なげな先輩の声に一度口を離す。でも片手で包んだ竿は強くしごき続けたまま。

「はい、いいですよ……全部飲みますから、このまま好きなきときに……ん、あむ……」

そして、熱い熱い精を受け止めるため暴発寸前の砲身を再度口に含む。舌でそつと受け止めた先輩のものはすでに限界ぎりぎりとはばかりに痙攣しつばなしで、ペろ、と舐めるだけで爆発してしまいそう。

でもそれをいたずらに焦らす必要なんてない。先輩に気持ちよくなつてほしかったし、私も早くその白い情欲をぶつけて欲しかった。

だから、最後に思いつきりじゆるる、とそれを吸い上げた。

「っ——！　桜っ、出る……！」

「んんっ!!」

びちゃん、と喉に走るどろどろに湿った衝撃。それが二度、三度ととめどなく続く。少しの苦しさと悦びに全身が震えてイってしまいそう。口の中はほんの一瞬で精香が

満ちて脳髓まで侵されているみたい。

そんな風に先輩の感覚で満たされたまま精液を受け止めるのが心地よくてたまらない。最初の大きな波がようやく去って勢いは少しだけ弱まったけれど、注がれる白濁の濃厚さは全く変わらない。

そして、ほんの戯れにと軽く竿に手を滑らせると、どくん、と獣が目覚めるみたいな脈動とともに勢いよく精を放出してくれる。

「は——あ、さへん……」

心地よさげな吐息とともに、とく、とく、と射精が続く。もうだいたい勢いも弱くなってきたけど、その最後の一滴までも私のものにしたくてこくこくと最後まで飲み込む。

「んっ、はあ……っ、あふ……」

そして先端からの白濁が完全に止まったころ、私はそつと口を離れた。少しだけ残っているねばついたものが唇と亀頭の間で糸を引いている。私の涎と混ざったそれは、やがてぶつりと切れて布団に落ちた。

「桜」

先輩に呼ばれて顔を上げる。その瞬間、待ち構えていたのだろう、有無を言わず唇を塞がれた。

「んっ……っ……」

そうして流れるように舌を挿入される。ぞくんとした快感に身体力が一気に奪われた。そして無防備な私の舌をするりと絡めとられると、口淫で昂った劣情が一気に燃え上がる。

そのまま唾液を混ぜ合わせるみたいに舌同士でキスをする。そのせいで、先ほど出された精液と先輩の唾液が混ざった味が私の味覚器官を淫蕩なもので染め上げる。

「んあ、は……せんば、あい……」

そして唇が離れるころには、私の頭の中は口内と同じようにとろとろにされてしまっていた。その状態のまま、そつと身体を抱かれて耳元で囁かれる。

「桜——もう一回したい」

たった一言だけなのに、神経を直接撫でられたみたいな感覚が走る。鳥肌まで立ってしまいそうなその声に、じゅん、とあそこから淫らかなものが染みだしたのがわかった。

「はい……何回だって、いいですよ——先輩の望むままに私の体、抱いてください——」
先輩はちゅ、と首筋にキスをすると、私に後ろを向くよう促した。それにしたがって、先輩のほうに臀部を向けて四つん這いになる。

すると先輩は私に合わせて膝立ちになると、さわ、とスカートの上から私のお尻を撫でまわしてきた。

「ん……っ……」

ぶる、と反応する身体。自分で触ったところで全く気持ちよくもないのに、先輩に触られるだけでこんなにも感じてしまう。それが普段触れられないトコロであればなおさら。

先輩は少しの間そうして撫でまわしたあと、太もものほうへと手を滑らせていく。そしてスカートの裾にたどり着くと、するりとその中へと入り込んできた。

今度は再びお尻の方へと手が昇っていく。そのままお尻を直接触られるのかと思っていたが、先輩の手は脚付け根あたりで止まった。

どうしたんだろうと思ったその瞬間、快感が全身を突き抜けた。

「ひあっ！ あっ、せんばい、そ、こ……っ、あつ、だ、め……っ、あ、あんっ……！」
液が滴るほどに濡れたあそこに先輩の指が突き入れられていた。それだけでも倒れてしまいそうなほど気持ちがいいのに、先輩はそれを抜き差しし始めた。

動きは大して速くはない。だけど、散々先輩と交わした淫らな行為で敏感になったソコは、過剰な快感を私に与えてくる。いや、それ以上にこんな格好で後ろから手であそこをいじられているという現実には、羞恥でおかしくなってしまうそうだった。

「桜、すごいな……こんなにとろとろになってる」

「だっ、あつ、ん……だっ、んっ……あつ、わた、しっ……もう、はあ、あ、ほし、くて……っ」

恥ずかしさと快樂で言葉がうまく紡げない。頭にあるのは先輩とひとつになって愛し合うことだけ。

でも先輩はその愛撫をやめてくれない。くちゆくちゆと淫らな音を立てて、先輩のものを欲しがる秘部を弄ばれる。そこから全身に波紋のようにに伝わる快感に、脳の細胞が焼き切れておかしくなってしまうそうだ。

「はっ——あ、あ、っはあ、あ、んっ、あ……は、あ……」

しばらくそうされた後、ようやくぐちゆ、と指を引き抜かれた。狂う一步手前の快樂を味わい続けた頭は白紙状態で、まともな思考はとてできない。身体はまだ余韻が抜けきらなくて、何度も痙攣してしまう。

そんな状態の私に、先輩は再び臀部に手を添えた。そしてする、とスカートをめくりあげられる。それが何を意味するのか、蕩けた私の頭でも理解できた。

その期待通り、ぴと、ときつきまで弄られていたところに熱いものが触れた。後ろからだから見えないけれど、その熱で硬く勃起していることは容易に想像できた。

そして、散々焦らされたことを全部忘れさせるように、ずぶん、と先端が押し入れられる。

「ん、んっ……あ、せん、ぱ……っ」

一回目の比じゃないくらい濡れているから、その動きには抵抗がない。だから、先輩

が私の奥にたどり着くまではあつという間だった。

「桜、このまま動く、から……」

「は、い……っ、いっばい、シてくださ……あっ！」

言い切る前にぱん、と一突き。それだけで軽くイった。焦らされて感度が上がっているせいだ。

でも先輩は構わずに抽送を続ける。その動きは既に野生の獣みたいな激しさで、私はなすすべなくよがってしまふ。

臀部の肉を跡がつきそうなほど驚掴みにされて、乾いた音とともに腰を打ち付けられる。その時にはじけ飛んだ汗と愛液が背中にまで届いて、その勢いの強さを物語っていた。

始めてから一分もたっていないのに、私たちの性交は本能むき出しのものになっていった。それをさらに加速させるように、先輩は身体を倒して私に覆いかぶさってきた。そして、まだ下着に包まれた乳房を掴まれる。

「ひやつ、あ、あ、おっぱい、あ、きもち、い、ですつ、んっ、あ……！　もっと、さわってつ、あんっ、あ、んっ……！」

ぐにゅん、と欲望のまま揉みしだかれると、それだけでいやらしい声があふれ出てしまふ。しかもそれと同時にあそこも激しく抜き差しされているのだからたまらない。

それがあまりにも気持ちよすぎて、先輩にもっと、とはしたなくねだつてしまう。すると先輩もそれに応えて強く私を求めてくれる。雄が雌に覆いかぶさつて激しく腰を振っているその私たちの姿は、まさしく獣の交尾同然だった。

その交尾の激しさはとどまることを知らず、部屋全体をいやらしい空間に変えていく。二人分の荒い吐息と嬌声が響いて、その吐息のむわりとした熱気で溶けてしまいう。さらに、結合部からは私たちの性徴から漏れ出すものに加えて、一度目の時の淫液までもがどろどろと私の脚をつたつていく。

「あつ、あんつ、あ、んつ……あ、先、輩……う？」

ふと、先輩は一度腰の動きを止めた。すると、先輩は一度自らの身体を起こすと、私のおなかに手を回してきた。そしてぎゅつと引き寄せられて、私も同じように身体を起こされる。

そのままばん、ばん、とピストン運動が再開される。でも、感じる快樂は先ほど以上だった。

さつきまでは両手を前についていたから快樂を受け流せていたけれど、それが宙ぶらりんになつているこの状況じゃそれができない。先輩から与えられる快樂が余すことなく伝わってきて、うまく呼吸すらできない。

「あつ——！ や、あんつ、せん、あつ、ぱい……っ！ それ、あ、すご——っ！」

さらにその状態のまま胸も愛撫される。ブラの下からするりと指を入れられて、一番敏感なところをいじられる。

きゅ、と少し強くつままれてころろと弄ばれると、刺すような快樂が背中まで届きそう。それを両胸から与えられているから、全身ががくがく震えるほど感じてしまつて、受け入れている先輩のものを無意識に締め付けてしまう。

それに抗うように子宮口を何度も突かれる。その度にきゅぽ、とパズルがはまるみたいに亀頭と最奥がくつ付いて、果ててしまいそうなほど気持ちがいい。

いや、実際は既に何度か軽い絶頂を迎えている。扶るような先輩の攻めに耐えきれなくなつて、全身の痙攣と一緒にイッてしまうのだ。

多分先輩も気付いているのだろうけど、その激しい腰振りにはまったく勢いを弱めない。でも私もそれで良かった。私だけ気持ちよくなつて終わりなんてイヤだ。先輩と一緒にやなきや満足なんてできない。

「はあつ、あつ、あん、あ、あは……つ、せん、ば、あつ、すご、いつ……！ わた、しつ、んつ、あつ、こわれ、ちやい、そう、んつ、あ……です……！」

「さくら……つ、は、あつ、俺も、おかしく、なりそう、だ——！」

そして、その時は刻一刻と近づいてくる。ぱん、と肌と肌がぶつかる音が響く度、カウントダウンのようにソレが迫ってくるのがわかった。

そしてそこへ一直線に向かうように、さらに激しく腰を打ち付けられる。抜き差しを絶え間なく繰り返されて、今にも終わってしまいそう。

そこへ至るまでの僅かな時間を噛みしめるように、私たちは互いの名前を呼び合う。でも、そうやって先輩に熱い声で呼ばれることが嬉しくて、ぎち、ぎち、と絞るみたいに男根を圧迫してしまう。それが最後に一押しになったようで、急に先輩のそれがびくびくと痙攣して、射精の訪れを教えた。

「っさくら——いく、出る……っ！」

「あつ、あ、ああっ!! わたし、もお……っ！」

どくん、と心臓が止まってしまいそうなほどの衝撃。それで二人とも果てた。

ぴったりと子宮口に亀頭を押し入れられたまま、びゆるびゆると精を注がれる。まともにも力を入らない身体をその鼓動が揺らす。

三度目の射精なのに、その勢いも量も一番だ。びゆく、と子宮の内側に精液が当たる快感で何度もイってしまう。絶頂が終わらないうちに次の噴火がくる、苦痛すれすれの恍惚の最果て。

「あ……あ、ああ、んっ、あ……す、ぐ……いっばい、せんばいの、でて……あつ、は、あ——っ」

視界がちかちかして、昼か夜かもうつろ。確かなのは先輩に抱きしめられて一緒に快

楽に震えていること。

壊れたポンプみたいな射精に、私も壊れたように恍惚の声を漏らすことしかできない。どぶ、どぶ、と子宮の中にずっしりと白濁が溜まっていくのをやけに鮮明に感じる。その重さですらも心地いい。

「はあつ、あ、さくら……もう、少し……」

うわごとのように先輩はつぶやくと、浅く腰を引いてぱちゅん、と再び深く挿入した。その瞬間、今までで一番大きな精液の塊がびゆる、と放出された。

「あつ——!!」

気絶しそうなほどの絶頂。それが最後だったみたいで、そのまま絶頂の波が止まるまで先輩の腕に抱かれていた。

「は、あ——せん、ぱい……あ、は、あ、つく、ん……」

絶頂の余韻も去っていき、ようやく頭がまともに働くようになったころ、先輩はゆっくりと私の身体を布団に寝かせてくれた。だけど性の象徴は繋がったままだから、満たされた感覚ははまだ全身を包んでいる。

「せん、ぱい……気持ち、良かったですか……?」

朦朧とした意識の中間いかける。

「ああ、すごく気持ちよかったよ……桜」

良かった、と言葉がこぼれる。ちゃんと私だけじゃなくて先輩も一緒に気持ちよくなれたのだから。

でも、私はちゃんと気付いていた。まだ中に入ったままの先輩のものがまったく萎えていないことに。

だから。

「あの、先輩……その、先輩が良ければ、なんですけど……わたし、もつとシたいです——」

今度は私から求めた。

「ん……ああ、構わないよ。……本当は俺ももう少ししたいから」

耳元で囁かれる。その声色の中には、既に小さく燃える炎があった。そしてそれは私の情欲にも燃え移って、またすぐに求め合い始めた。

——それからのことは、あまりよく覚えていない。ただひたすらに愛し合って、何度も果てた。

でもいくらそうしても、どうしてか私たちの心は満たされなかった。肉体的な快感だけじゃダメなんだと薄々わかっているながら、それをやめることはできなかった。

だから、そうしてただ慰め合った。どちらかの体力が尽きるまで、心の傷を身体で舐めあうような秘め事を交わし続けた。

「ん——先輩……私、もう……」

「ああ——俺、も……」

先に限界が来たのはどちらだったか。悪夢みたいに幸せな時間は、そうして終わった。